

---

結成五十周年記念

日蓮聖人門下連合会

五十年の歩み

日蓮聖人門下連合会編

---

## 目次

日蓮聖人門下連合会 50年の歩み

刊行の辞——2

日蓮聖人門下連合会理事長 渡邊照敏

五十年の歩みに寄せて——3

日蓮宗管長・内野日総 4 法華宗(本門流)管長・石田日信  
5 顕本法華宗管長・中村日玄 6 法華宗(陣門流)管長代  
務・佐古弘文 7 本門佛立宗講有・小山日誠 8 日蓮本  
宗管長・嘉儀日有 9 法華宗(真門流)管長・田中日生 10  
本門法華宗管長・松下日肆 11 国柱会賽主・田中壯谷 12  
日本山妙法寺首座・吉田行典 13 京都日蓮聖人門下連合会  
会長・菅原日桑 14

日蓮聖人門下連合会加盟教団紹介——15

日蓮宗 16 法華宗(本門流) 18 顕本法華宗 20 法華宗(陣  
門流) 22 本門佛立宗 24 日蓮本宗 26 法華宗(真門流)  
28 本門法華宗 30 国柱会 32 日本山妙法寺 34 京都日  
蓮聖人門下連合会 36 大阪日蓮聖人門下懇話会 38

日蓮聖人門下連合会五十年活動年譜——40

日蓮聖人門下連合会結成三十年以降の  
主な事業——81

「大日蓮展」——82

「日蓮と法華の名宝

——華心らく京都町衆文化」——95

従地ゆじゆつ——109

新旧編集委員座談会——128

京都門下連合会青年座談会——141

日蓮聖人門下連合会規約——144

日蓮聖人門下連合会加盟教団所在地・  
日蓮聖人門下連合会機関紙編集委員——149

あとがき——150

# 刊行の辞



日蓮聖人門下連合会理事長

日蓮宗宗務総長

渡邊 照敏

日蓮聖人門下連合会結成五十周年にあたり、日蓮聖人門下連合会理事長と致しましてこの様な年に理事長の重席を担うことが出来ました事は大きな喜びであると共に、その重みを肌で感じる次第であります。

歴史を顧みますと門下連合会は、昭和三十五年に日蓮聖人門下懇話会として発足、昭和四十六年に明治座にて日蓮聖人御降誕七百五十年慶讃「聖伝劇日蓮」、昭和五十六年に各会場にて百二回にも及ぶ「日蓮聖人劇」、更には昭和五十七年にサイパン・グアム島へ五百名が「青年の船」として参加、又同年新宿文化センター大ホールにて「オラトリオ日蓮聖人発表演奏会」を開催するなど様々な活動を展開し、無事円成出来たことは大きな喜びであります。

殊に、門下連合会三十周年以降は、バブル崩壊など日本経済の危機に遇う中で、平成十五年には東京国立博物館にて「大日蓮展」、又平成二十一年には京都国立博物館にて「日蓮と法華の名宝―華ひらく京都町衆文化―」を盛大開催できました事は、各派教団はもとより各御本山格護の靈宝の出展を賜ったからであり、衷心より感謝申し上げます。

現今の世情を顧みますと、親が子を、子が親を殺傷する事件が蔓延し、世界ではテロが一般市民の脅威となり、人の「命」を軽視する傾向が止むことはなく、日蓮聖人が述べられた末法の様相を呈しております。

宗祖日蓮大聖人がお示しになられた立正安国の「立正」とは正しい教えを広めることであり、「安国」とは日本国ないし全世界の人々を安穩にすることを目的としておりません。

日蓮聖人門下連合会と致しましては、日蓮聖人の意志を受け継ぎお題目を弘め、全世界の人々が安穩に過ごせる共存共生の世界を築き上げて行く事が使命であり、日蓮聖人の大願である、立正安国・仏国土顕現に向け私たち十一教団が異体同心して「祖廟中、心」とし、僧俗一体となり皆歸妙法の祖願達成へと邁進して行かなければなりません。

結びに、日蓮聖人門下連合会が今後益々発展し、当会がよりよい会となり、各派の皆様方が更なる隆昌をされますことを御祈念申し上げます。

# 五十年の歩みによせて

内野日総 日蓮宗管長

石田日信 法華宗（本門流）管長

中村日玄 顕本法華宗管長

佐古弘文 法華宗（陣門流）管長代務

小山日誠 本門佛立宗講有

嘉儀日有 日蓮本宗管長

田中日生 法華宗（真門流）管長

松下日肆 本門法華宗管長

田中壮谷 国柱会賽主

吉田行典 日本山妙法寺首座

菅原日桑 京都日蓮聖人門下連合会会長



日蓮宗管長

## 内野 日総

本年、日蓮聖人門下連合会結成五十周年をお迎えする秋に当たり、奇しくも、時を同じくして日蓮宗管長の重責を担うこととなりましたことは、祖廟を格護する身延山久遠寺法主として、誠に身の引き締まる思いであります。

ところで、門連三十周年以降の世情を顧みれば、宗教思想や伝統、習慣の著しい衰退や変革、宗教団体における犯罪や事件など、宗教そのものを揺るがす事象が重なりましたことは、誠に遺憾なものであります。

しかしながら、その様な時世にありながらも十一門下の結束は堅く、更なる展開へと足を踏み出して、立教開宗七百五十年記念の「大日蓮展」や立正安国論奏進七百五十年記念特別展「日蓮と法華の名宝―華ひらく京都町衆文化―」を見事に円成し、国内外にわたる多くの人々に立正安国の精神を伝弘いたしましたことは、祖意に叶うものであったと拝察するものであります。

謂わば、五十年を経た今も、門下連合会の目的である「日蓮聖人の理想を表現するため、祖廟を中心として門下各派及び教団並びに地方門下連合会の連絡、協力、団結を強化することを目的とする」は薄れることなく色づいているのであります。

然らば、昭和三十四年八月十九日に宣言された「我ら日蓮門下は、この記念すべき時にあたり、旧弊を去って思いを新たに、異体よく同心して信行の躍進を誓い、迷信邪見を排除して立正安国の洪願を堅持し、もって祖国日本をして理想の平和国土たらしめ、ひいて世界絶対平和の実現を期して、真に奮起せんとする」を今一度再確認し、更なる歩みを進めなければなりません。

今爰に、日蓮聖人の願いを我が使命とせる一門、日蓮聖人門下連合会をして、いよいよ世界平和、佛国土顕現の大願成就へ邁進されんことを共に祈念し、塵滴に謝する思いであります。

結びに、五十周年記念誌「五十年の歩み」刊行に際し、深甚なるご協力、ご苦勞を賜りました各派教団の機関誌編集委員会各聖各位に御礼申し上げ、日蓮聖人門下連合会の益々の飛躍発展をお祈りいたします。

合 掌



法華宗（本門流）管長  
石田 日信

日蓮聖人門下連合会発足五十年を迎える、先ずもってこの間、会の運営に当たられた大勢の先賢諸上人のご法勞に感謝の意をささげます。何事もそうですが周辺にいて評論することは少々知恵があればできるであろうが、組織を経営し運営することには深い知見と精力のいることです。時に当たり奉仕に参加された人々の勤勞とともに、篤く御礼を申し上げます。

ところで、五十年は長かったか短かったか、立場により関わりかたにより思いはいろいろあると思いますが、今の時点に立つて、これからの五十年を考えることが何よりも大事なことを考えます。

明治百年という言葉がさかんに使われたのはもうしばらく前のことになってしまいました。明治百年ということはキリスト教解禁百年と同じことです。そしてこの間、私たち日蓮聖人門下といわず全仏教界がキリスト教界に負けたことが一つある。それは「愛」という言葉です。いま「慈悲」という言葉をどれだけの人が日常常用しているか。愛と慈悲とは違う等々ということは、もの本になんぼでも書いてある、そんなことをいうのではありません。百年の間に慈悲という言葉は辞書のすみに押しやられてしまった感を禁じ得ません。

今、葬式不要論花盛りです。それでは「結婚式をやってくれますか」と問われ、OKと返事はするでしょうが、参考書を開かず式に臨む住職が何割あるでしょうか。結婚式の役僧のお布施は等々、足元を固めなければならぬ問題はいつぱいあります。

一つ「愛」と書き、結婚式と挙げましたが愛・結婚式だけではありません。そこで日蓮聖人に伺ってみましょう。「なるにまかせておけばよい」と仰せられるでしょうか、そんなことは考えられません。

問題は多々、我れ賢くしてみたいなことを云うつもりはありませんが、一つ反省することとは私達の現世対応の弱さ発信力の弱さです。発信が折伏ではないでしょうか。

わが日蓮聖人門下連合会は、社会の現象に対して速やかに対応発信する組織、先導的に発信する組織になれないものか、そうなれたら連合会の存在意義が愈高まるのだかと、しきりに思います。思うことを申し述べ五十年誌に寄せる言葉といたします。



頭本法華宗管長  
中村 日玄

今、私の手元に創立三十周年に発行された記念誌の記事がある。当時の管長古瀬日宇猊下が認められたものであるが、二十年を経た今も猶そのご提言は色褪せることなく私共に訴えかけ、また自省を促すものである。少々長くなるがこれを引用したい。

「門連というのは門下各教団の「懇親」もさる事乍ら、やはり法華経に依拠し大聖人の教えを奉じ、協力して一天四海皆歸妙法の理想に一步でも近づくべく努力する事であろう。因にわが頭本法華宗も、法華経に示された「統一佛釈迦牟尼佛」による大聖人の教旨を奉じ、それをそのまま相承せる日什大正師の法統を護持してきた教派である。それぞれの教派は何れも法華経と大聖人という同じ基盤の上であり乍らも、更に詳細な教義伝統宗風をもっているのである。従つてこの教義伝統風習を相互に理解を深める努力もせず形式上の連携をしても、それはいわゆる野合に等しい無力で形骸のみの集まりになってしまうのである。(中略)

今や全世界は政治経済学問教育あらゆる面で地球的規模で展開せんとしているのである。門連も大聖人の根本心にかえり、教派宗派の壁を大きくふまえて、全人類を正法救済の対告衆とした全地球的眼を開いて根本計画を進めるときにきているのではなからうか」

激動の昭和が終わり、平成という新しい時代を迎えて早や二十年が経過した。確かに政治経済はもとより、あらゆる面で世界はより密接な関係を持つようになった。科学技術の発達には目を見張るものがあり、地球の自然環境や犯罪までもが世界規模で語られる時代となった。その一方で、複雑多様化し悩み多き現代にあつて、宗教が世界中の人々の心を癒して豊かにする責任を果たし、尊ばれているとは必ずしも言い難い。殊に我が日本においては、より顕著に感じるものである。

親睦を旨としながらも、門連が五十年にわたり継続して来た意義は大きい。加盟各宗派関係者のご尽力、事務局を歴任された方々のご苦勞に対しては心より敬意を表し、感謝を申し述べたい。

しかしながら、この半世紀におよぶ門連の活動を無益なものとなせず更なる発展を望むとするならば、会員各聖がこれまでにも増して相互理解を深め、異体同心を志し、祖願達成の浄行に邁進することが肝心である。



法華宗（陣門流）  
管長代務  
佐古 弘文

日蓮聖人門下連合会結成五十周年を迎えられたことは慶祝の極みに存じ上げます。抑門連は、昭和三十四年「立正安国論献諫七百年」の門下共催に端を発し、宗祖に拝跪する十一教団が参集して、昭和三十五年に祖願達成と時代の要請に応えるべく、門下が大団結して発足致しました。

門連の創設は、近代門下教団史において誇るべき偉業であります。この偉業を成し遂げ、そして今日まで弛まぬ結束に尽瘁された先聖先師に対し、深い感慨と共に衷心より敬意を表するものであります。

顧みますと、平成十四年「立教開宗七百五十年」では、「大日蓮展」が東京国立博物館で開催され、又、一昨年の「立正安国論奏進七百五十年」には、「日蓮と法華の名玉」が京都国立博物館で開催されました。各派の所蔵する至宝が未だ嘗てない規模で全国より蒐集され、日蓮聖人門下の崇高にして豊麗な精神文化を世に展覽し、素晴らしい成果を収めたことは近年の快事でありました。

又、當門流では、昨年「伊豆御法難七百五十年大法要」が霊跡別院蓮着寺において挙行され、法華宗を中心に各派代表の御臨席を賜り、宗祖の御遺徳を偲ぶに相応しい法要が円成しましたことを心より感謝申し上げます。

門下の各派が先聖より受け継がれた宗風と法脈を夫々に宣揚しながらも、異体同心して歩んだ五十年の足跡は大いなる成果であります。これを踏まえて、伝統・歴史・教義の更なる相互理解を促進し、より深化した高い次元での関係強化が望まれています。又、門連の恒久的発展を願えば、次代を担う人材育成に力を注ぐことも必要でありましょう。

門連に内在する旧来の課題もさることながら、世界の情勢はまさに人類が経験したことのない未知の領域へと突入し、門下教団の真価が広く世に問われております。我々は宗祖の教えと精神を遺憾なく実社会に發揮して、衆望を担う責務が存することは言を俟ちません。現在日本に蔓延する閉塞感、対処せねばならない門下命脈を左右する今日的諸問題に対し、門連の存在は日々益々重きをなし、その果たすべき役割は極めて重要であると考えております。

危機の喧伝は世の常であります。その意識を如何に共有し、乗り越えて行くかが肝要であります。宗祖を軌範として門下が叡智を集結すれば、如何なる困難も克服できるものと信じて止みません。

結成五十周年の嘉節に際し、宗祖の御鴻恩に報いるべく、門連の更なる飛躍を心より祈念申し上げます。



本門佛立宗譜有  
小山 日誠

日蓮聖人門下の僧俗は、約七百五十年の間、宗祖の遺訓を守るべく、遺命を帯して御題目広宣流布の道を歩んでまいりました。

しかしながら、聖人門下僧俗の思いが純粹で熱いものであればあるほど、ややもすれば他への寛容性、協調性を欠き、結果、聖人門下の各教団が互いを排撃し合うという傾向が生じたことは否定できません。

そのような傾向にある中、聖人門下各教団間の風通しを良くし、互いに切磋琢磨し合える場として生まれたのが日蓮聖人門下連合会であると認識しております。実際、この五十年間、門下連合会はそのような役割を立派に果たしつつ今日に至りましたことは御同慶に存じます。

とりわけ、平成十五年に日蓮聖人立教開宗七百五十年を記念して、東京国立博物館において開催された「大日蓮展」、そして平成二十一年に聖人の『立正安国論』奏進七百五十年を記念して、京都国立博物館において開催された「日蓮と法華の名宝」展は日蓮聖人門下連合会の異体同心の協力、尽力なしには実現しえない一大展覧会でありました。

さて、五十年という節目を迎え、今後に向って門下連合会に携わる私共はなにを課題、目標として協力関係を一段と密にしていくべきでしょうか。愚見を呈させていただきます。くならば、少子高齢化の社会にあつて、また葬式無用論が唱えられ、直葬、家族葬の増加に象徴されるような人々の宗教的儀礼軽視の風潮の中にあつて、日蓮聖人の教えをいかに正しく現代の人々に伝え、認識させていくべきか、このようなより布教の現場に根ざした情報交換、議論の場としての役割を本会が果たしていくならば、本会の存在意義はさらに増すものと期待しております。

日蓮聖人門下連合会のさらなる発展をお祈りし所感の一端といたします。



日蓮本宗管長  
嘉儀 日有

日蓮聖人門下連合会が結成されて早半世紀の歳月が流れた。五十年間という歴史の中でこの連合会運営にご尽力いただいた役職の各聖に甚深な感謝を申し上げたい。

日蓮聖人門下連合会の活動は、同じ日蓮大聖人のご門下のご聖訓を旗印としてそこに集い、そのご聖訓を実現すべく活動していくことがこれからの門連活動にとって大事なところであろう。

弘安五年（二二八二）九月十九日の『波木井殿御報』に「いづくにて死に候とも、ほか（墓）をば、みのぶさわ（身延澤）にせさせ候べく候」という、当に大聖人御入滅直前の御遺言ともいふべきであろう。

大聖人御入滅後は六老僧の日興上人がこの御聖言に従い、身延の澤（現在の西の谷）に大聖人のご真骨を埋葬された。その後、日興上人が身延を離山されるときもお墓所を移転せず、師の御遺命に絶対的に従うという師厳道尊の精神をもっておられたからと言っても過言ではない。

先師である管長原日認上人の仰せに「門下全体が行学顕揚の一大根本道場であらねばならず、種々の事情があろうが御真骨の全てを『さわ西谷』の祖廟塔に奉遷することが祖意に従うことである」というご遺命を胸に深く刻み続けている。

門下連合会五十年を期して、日蓮大聖人のご遺命に従い、全ての御真骨がさわ西谷に奉遷される大きな目標を掲げる全国運動を展開することを切望する。



法華宗真門流管長  
田中 日生

日蓮門下連合会結成五十周年の佳節を迎え、心からお慶びを申し上げ、深甚の敬意を表します。

我が宗門では「高祖、開祖の御心にかえろう、合掌しあう友をつくろう」のスローガンのもと、合掌運動を展開しております。

開祖日真上人は、長享二年四月二十八日、立教改宗の聖日、京都六角西洞院に草庵を結ばれました。その後すぐに、四条大宮の地に本堂を建立し、「慧光無量山、本妙興隆寺」と号して「一部修行、本勝迹劣、唯寿量、本果実証、事の一念三千、是好良薬の南無妙法蓮華経」と声高らかに一宗の独立を宣言されました。今こそ、高祖の御心にかえり「但、法門をもつて邪正をただすべし、利根と通力とはよるべからず」の聖訓を肝に銘じ、誤れるを正すべしとのお考えからであります。以来、慧光無量山本妙興隆寺の法灯、いまに消ゆることなく、不断の灯明をかかげ、唯寿量、本果実証のお題目は、慧光山頭に高らかに、唱えつづけられています。

その後、日真上人の名声は高まり、ついに天聴に達し、文龜三年（一五〇三）、後柏原天皇の勅命により、三大部「科文」を天覧に供したところ、天皇御自ら、三大部の表題を料紙にお書きになって下賜されました。また「法華宗日像菩薩正統之一門開闢常不輕院日真者称大和尚也」との宸翰を賜わって、宮中参内の日真上人に法華経の御前講義を命じられたのであります。このように、我が法華宗真門流の発祥は、厳かに歴史の一頁をしるしたのであります。

また、日真上人の法脈は、日蓮大聖人から日像聖人を経て日真上人へと相承するものであります。日真上人は、日蓮大聖人、日像聖人の御遺訓に応えんとして、身を惜しまず、この法華経本門寿量品のお題目の広宣流布にはげまれ、一部修行、本勝迹劣、唯寿量の旗を一天四海に高く掲げるべく、勇猛精進なされました。

ここに門連五十周年を迎え、我々も、高祖日蓮大聖人の「異体同心なれば万事を成ず」の聖訓にお応えすべく精進奮起し、日像聖人の死身弘法の御艱難を忘却することなく、また「我、親しく祖訓を受けて弘宗四十九年、具さに勸持品を色読せり、汝等は法規を格護して敢て身を惜まざれ」との遺戒を体して、あやまりなきを期さねばなりません。いま、日蓮門下連合会として、広く檀信徒をも含め、全門下を動員し、破邪顕正、四海帰妙の理想実現に邁進することが肝要であると存じます。



本門法華宗管長  
松下 日肆

日蓮聖人門下連合会が誕生して五十年の歳月を迎えたこと大変有り難く、諸先達方の支援、各派諸兄師の事業参加協力と事務局ご一同の尽力に感謝致し、順次に発展したことに喜びを表します。

私は昭和三十三年以来京都門連のお手伝いが主でした。昭和六十二年当時の管長村日宣猊下の妙蓮寺貫首就任に伴い、妙蓮寺執事長拜命により全門連に本格的参加しました。

伊藤通明師が全門連理事長、身延山総務の任に就いていた時には、幾度となく身延山祖廟に参詣し、又全門連結成三十年に向けては京門連常任理事として各派教団と共に語り合ったことは、昨日の様な思いがいたします。

平成二年十一月全門連京都会議で、全門連主催の三十周年記念法要を、妙蓮寺にて奉修して、各山貫首猊下の色紙揮毫展を併催し、参加諸師に種々の懇談を頂きました。平成二十年十一月全門連京都会議が妙蓮寺にて、全門連主催、京門連後援の下に清浄の諸大徳上人が参集一結して、門連先師先哲上人に法味を捧げ、平成二十一年の立正安国論奏進七五〇年を眼前に全門下連合一致協力して、一天四海皆歸妙法の願業実現に精進する事を誓願したこと、二十一年十月に門連は京都十六本山の協力を得て「立正安国論」奏進七五〇年を記念し（日蓮と法華の名宝）華ひらく京都町衆文化展を京都国立博物館にて開催、大盛況裡に町衆文化の足跡を広く大衆に知らせ、国際シンポジウムを「法華の人と文化―その行動と思想」と題して開催するなど、祖師とその行跡、精神文化と教化実践の講話を拝聴し感激した次第です。

祖師のお言葉に「明らかなること日月に過ぎんや 淨きこと蓮華に勝るべしや 法華経は日月と蓮華となり 故に妙法蓮華経は日月と蓮華となり 故に妙法蓮華経と名づく 日蓮日月と蓮華の如くなり」とあります。

いま世界は濁世です。日本の国も安穩ではありません。政党間もネジレ国会として混沌としています。いまこそ世界の平和を祈り、立正安国の精神を門下の聖職は異体同心なれば万事を成し、同体異心なれば諸事叶うことなし（祖師の教化の如く）いま、団結を固め一意専心に祖師の教えを実行すべきであります。

今後は六十年、百年を目指し日蓮聖人門下連合会が各方面に結成されその活動を期待し、諸先輩諸師の努力の結晶が長く続き、門下連合会が益々発展隆昌することを祈り、共に生きる世の中へ五十年を期して、その第一歩を踏み出してほしいと念願します。五十年の間活躍された先師諸師に感謝申し私の五十年によせる思いと致します。有り難うございました。

南無妙法蓮華経



国柱会  
會長  
田中 壯谷

合掌

日蓮聖人門下連合会が発足して以来五〇年目を迎え、為法まことにご同慶に堪えません。

当連合会は、半世紀にわたって、各種の報恩事業に加え、様々な対外的な行事を開催し、日蓮聖人門下の歴史においてかつてない画期的な記録を残しました。私共の記憶に新しいところでは、平成十五年春立教開宗七百五十年記念事業「大日蓮展」を東京国立博物館で盛大に開催、さらに平成二十一年度において今上陛下御在位二十周年、御大婚五十周年を迎えるという誠におめでたい年に、京都国立博物館において日蓮大聖人展を開催できたことが思い起こされ、よき御因縁に恵まれたことを喜んでおります。これもひとえに、日蓮聖人門下各宗各派が、一致団結してことをすすめてきた結果の賜物であると思います。

日蓮門下にあつては、以前は多くの派に別れて、それぞれが独自の伝統を護つて互いに連携しあうことがなく、ときには張り合つて相争うといった状況でしたが、その伝統的体質を脱して門下連合会が結成されたのであります。その発足に当たっては、色々と困難な問題があつたことと思われませんが、それら乗り越えて「異体同心」の祖訓が実現したことを思うとき、ひとえに法の為にご尽力下さつた関係各位のご法労に対して心からの敬意と感謝の念を捧げるものであります。

世の中は五十年前に比べますと大きく様変わりしています。地球温暖化、多発するテロ、世界規模に涉つて関連し合う経済破綻等々、鎌倉時代を現代に移したような末法の様相を呈し、日に日に悪化し、またそのスピードも日に日に増しています。この様な時代にあつては、大聖人が叫ばれた「立正安国」を「立正安世界」と読み替えて、その理想を現代に実現していかなければなりません。その意味でも、日蓮聖人門下が未来に担う任は実に重大であります。この大理想の実現には、門下全体が一体となつてことに当たらなければなりません。門下連合会発足五十年目というこの節目の年にあつて、あらためて「祖廟中心」を旗印にして、全日蓮門下の結集を呼びかけたいと思います。大聖人の墓前において、世界の絶対平和を実現するという大聖人の願業を受け継ぎ、その成就の為に、仏祖の冥鑑を仰ぎ先師先亡同志の加被のもと、限らない躍進への誓いを固くしようではありませんか。

南無妙法蓮華經



日本山妙法寺首座  
吉田 行典

### 南無妙法蓮華經

日蓮聖人門下連合会発足五十周年を迎え、その和合による努力と成果に感謝申し上げます。記念出版に当たって一文の依頼を受けし日が、ちょうど藤井日達聖人の西天開教八十年にあたる八月二十五日でありました。

日蓮大聖人の『諫曉八幡鈔』に、「日本の仏法西天に還る」と大預言の法門があり、御祖師様滅後六百五十年にして、この法門が実現していない、ここに御師匠様は、言葉も判らない、知った人となない西天印度に、孤身鼓を撃ち、日本の仏法「南無妙法蓮華經」を西天に還すべく、身延山を基点として、お別れを告げ、発たれた日が八月二十五日であります。

西天開教とは、「若し西天に此の法還らずば、高祖の預言地に墮ちなん」「若し西天に此の法還らずば、我等が菩薩行立つ可からず」「若し西天に此の法還らずば、娑婆の衆生は永く火刀血の牢舎を出る期有る可からず」の三天誓願の許の御修行であり、「されば諸天善神王忝なくも高祖大士の本懐を援けて、我等が修行を衛らせ給え」との信念のみの身命を賭しての修行でありました。

困難の中での因縁と結果、独立運動の指導者ガンディー翁は、この正法を信受せらるるところとなり、朝夕の独立の祈りとして、手に鼓を撃ち、「南無妙法蓮華經」を唱え初められました。そして、西天行脚の功德で、真身御舍利を感得せられ、広供養舍利の仏事として、日本をはじめ、法華經を説かれし靈地王舎城靈鷲山に大宝塔が湧現し、法華經讚嘆の証となりました。

これは西天に止まらず、ヨーロッパ、アメリカ等への仏舍利塔建立の大仏事と発展し、当に御祖師様誓願預言の如く、一閻浮提広宣流布の仏事となつて、欧米の人々も宝塔の周りに、また平和行進の中で高らかに唱題の声を聞くことになりました。

御師匠様は、自ら滅せられるまで世界に足向けられ、御題目の結縁の道を開かれました。「衆生劫尽きて大火に焼かるる時」と、当に今日は、御祖師様の世を救い、人を救う大慈悲である『立正安国論』の諫言に違いない様相であり、天変地天は温暖化、洪水、地震、農作物不作等世界の到るところで起き、また、核保有国並びに新しく開発する国等四千発以上の核兵器が存在し、戦争は止むことなく、極悪兵器によって多くの人が犠牲となっております。「大火に焼かるる時」と人類滅亡がさげばれています。

この救いのため、是好良薬として留められ、「これを服しなさい。差えじと憂うる事勿れ」と唯一の救いの言葉、即ち法華經の結要を「南無妙法蓮華經」の一言に留めて、末法における人類滅亡を救う道が示されました。

御祖師様は、「一閻浮提の人皆この法門を仰がん」と仰せられました。

日蓮大聖人門下一門、「南無妙法蓮華經」を旗印に、平和の規範として説かれし不殺生を掲げて、戦争のない世界、尊敬と信頼による争いのない浄土を目指して、日蓮大聖人様の御誓願である日本乃至一閻浮提内広宣流布に精進いたしました。よう。

合掌



京都日蓮聖人門下連合  
会会長  
菅原 日桑

謹んで御挨拶申し上げます。

去る平成二十二年十月十三日、法華宗大本山本願寺第百三十九世として晋山して参りました菅原日桑であります。大阪府北摂方面の大本山本願寺末寺より華洛へと参りました故に、日々馴れぬまま右往左往いたしておられます。

今般、京都門連の会長職を拝命いたしました。門連結成五十年にあたり記念号を発売される由、会長として想いを原稿にしろということ。ペンを取った次第です。

しかしながら、五十年の想いとありますが丁度私が出家得度してから五十五年ということで「只、よくここまでこれたなあ……」と実感だけであります。私の人生すらくこの程度です。

門連結成五十年ですが、恥ずかしながら、門連というものについて、知識もなく目的すら認識しておりませんがコメントを一つ。

平成二十二年九月二十三日発行の「門連だより」に目的が掲載されておりました。「本会は日蓮聖人の理想を実現する為、祖廟を中心として門下各派及び教団並地方門下連合会の連絡、協力団結を強大することを目的とする」と更に、「大同団結の挙宗一致を目指し、五十年の永き年月を費やし、多くの御法勞を賜り今日に至ったのである」とあり、門連としての組織は地方門連を含め、拡大発展されたものと思います。

門連に加入することに依って何ができるのか、どのように変化し布教に役立つのか一人一人の立場にあつて考えてみますと、例えば門連が結成された当時は国柱会の田中香浦主幹先生による『立正安国論献諫』の意義の顕彰を以つて御報恩に資すべきであるとの提唱を受け結成された」との記事を精読するに、報恩行についても各派・各教団において異論があると思いますが、その壁を越えて結成され、五十年の永きに亘つて支えられた御尊聖に敬意を表するものであります。

我が法華宗(本門流)においては、真の報恩は本門八品上行所伝の唱題であると教えられているのでありますから大同団結は困難なことでもあります。故に教団の総意を以つて、加入か否かを選択しなければならぬわけで、時間と勞力を要したと考えると、結成当時の先人たちの努力に敬意を表する次第です。

この浄行に対する報恩は門連の発展を以つて奉行しなければなりません。その為にも、今一度現状を把握し、将来像を見据えましょう。その時期ではないでしょうか。

私のコメントの結論は、日蓮聖人の記念奉讃に対し、各派・各教団が「和して同せず」の意で協力出来る範囲内にての協力をし、それなりの報恩を行じていく姿勢では如何なものでしょうか。お叱り受ける所存でコメントいたしました。

合掌

# 日蓮聖人門下連合会 加盟教団紹介

日蓮宗

法華宗（本門流）

顕本法華宗

法華宗（陣門流）

本門佛立宗

日蓮本宗

法華宗（真門流）

本門法華宗

国柱会

日本山妙法寺

京都日蓮聖人門下連合会

地方門連

大阪日蓮聖人門下懇話会

# 日蓮宗



身延山久遠寺祖師堂

所在地

〒一四六一八五九九

東京都大田区池上一三三二一五

電話 〇三(三七五一)七二八一

管長 内野日総

総長 渡邊照敏

日蓮宗は法華経の行者・日蓮聖人を宗祖と仰ぎ、日蓮聖人によって信解体得された法華経の信仰と教えを唯一絶対のよりどころとする教団である。

日蓮宗の究極的な目標は、法華経ならびに仏教全体の肝要である法華経の題目、すなわち南無妙法蓮華経と唱えて、法華経に帰依し、その信仰をひろめることによって現世を仏の国土に浄め、生きとし生ける者を仏と等しくさせて、社会の平和と人間の幸福を実現することにある。

日蓮宗は開創以来今日に至るまで、多くの僧侶、檀信徒たちによって法華経信仰と日蓮聖人の教えを各地で伝道してきている。

明治政府の急激な変革と宗教政策の前に、日蓮宗も混乱をきわめたが新居日薩上人らは、こうした危機を乗り越え、新時代に対応した教団形成を試み、近代化を進めていった。

明治七年(一八七四)、一致派管長となった

日薩上人は、同九年一致派を「日蓮宗」と公称することを請願して許可され、身延山久遠寺を総本山とし、池上本門寺、京都本圀寺、京都妙顕寺、中山法華経寺を大本山とする一致派各門流の統合を成し遂げた。

現在、日蓮宗は約五千の寺院・教会・結社を有し、それらの中に総本山身延山久遠寺をはじめ霊跡十四カ寺、由緒寺院四十二カ寺を数える。身延山は日蓮聖人が九カ年の間、身をおいた留魂の聖地であり、日蓮聖人の遺言にしたがって墓所を建てられている法華経の道場である。

また霊跡・由緒寺院は誕生、修行、法難、弘通、そして入滅に至る日蓮聖人の霊跡に建立されたり、その遺命をうけて伝道活動に取り組んだ門弟の足跡をしるすゆかりの地に建てられた寺院である。

さらに北海道から沖縄に至る日本国内および海外寺院では、伝道の拠点として約八千名の僧侶が信仰をひろめ、教えを説き、数多くの檀信徒が法華経信仰と日蓮聖人の教えをもとに結集し、仏事供養に励んでいる。

同時に日蓮宗は、日蓮聖人が魂のしるしとして書きあらわした直筆の曼荼羅や御遺文などを格護し、教主釈尊ならびに日蓮聖人の聖日に行事を営み、その生身の姿を仰ぎながら



お会式



身延山御廟所



身延山五重塔

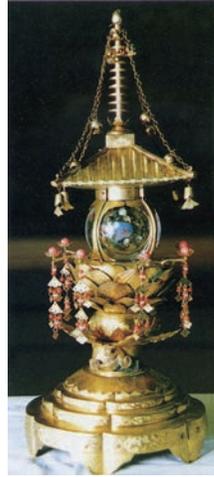


日蓮聖人像（清澄山旭が森）

教えに直参して信仰活動を展開している。  
日蓮宗はこのような伝統を背負った仏教正統の教団であるという自負に立っている。  
日蓮宗の行政機関は日蓮宗宗務院（東京都大田区池上）で、地方機関として全国を七十四の管区に分け、それぞれに宗務所が置かれて

いる。  
教育機関として立正大学、身延山大学などがあり、僧侶養成機関として僧風林、僧道林、信行道場、布教研修所、加行所（大荒行堂）などがある。

# 法華宗(本門流)



## 教団の構成

法華宗は、四大本山を中心として全国に約五百の寺院教会、千余名の僧侶を有する教団であり、宗祖大聖人の教えを广泛宣传するため昼夜努力している教団である。四大本山とは、創立年代順に、日春・日法兩聖人の開基による沼津・光長寺、日弁聖人の開基による茂原・鷲山寺、法華宗再興の唱導師と称される門祖日隆聖人によって開かれた京都・本能寺と尼崎・本興寺である。そして、それぞれの本山とその末寺が一体となつて法華宗(本門流)という教団をつくっており、さらに教団の事務を東京にある宗務院が執行している。法華宗の特徴は他の宗団と違って、一宗一山制や総本山制というものがなく、ことである。伝統の異なる四つの本山が唯「法」によつて、すなわち宗祖大聖人の本義たる「本門八品上行所伝本因下種の南無妙法蓮華經」を口唱信仰することだけによつて、宗門を形成しているのである。

## 四大本山と寺宝

法華宗の信仰の中心は四大本山、すなわち沼津の光長寺、茂原の鷲山寺、京都の本能寺、そして尼崎の本興寺である。

沼津の光長寺は建治二年(一二七六)、日蓮大聖人が身延隱栖三年目の時、中老日法聖人が岳南沼津の地の布教を命ぜられ、天台宗の寺院であった当寺を本門の道場に改宗されたのである。その時の住職空存は、大聖人のお弟子となり日春と名乗られ、日法聖人と共に法華經弘通に努力されたのである。光長寺の寺宝として、日蓮大聖人の御真蹟本尊を五幅保持し、その中に宗祖の御本尊としては最大のものである二十八紙の御本尊がある。また日春・日法・日隆・日朝等の御本尊、日法聖人作の宗祖御尊像、日法聖人

が宗祖の御書や講義を筆記写された「下山抄」「連々御聞書」「御法門御聞書」等の文書、日春聖人が写本された『宝物集』などが格護されている。さらに、日法聖人が日蓮大聖人の入滅の後、茶毘の場所から見出された大聖人の御舍利が靈宝として格護されている。

茂原の鷲山寺は文永年中に、日蓮大聖人が上総・茂原の地で当地の家臣小早川内記を教化されて法華堂を建立される。その後、中老日弁聖人が大聖人の命を奉じてこの地で布教教化され、当寺を中心として教線を張られた。鷲山寺の寺宝として、大聖人の御本尊、日弁聖人の御本尊等がある。また当寺には江戸時代において、法華宗の関東における檀林であった細草檀林の遺蹟が受け継がれている。

京都の本能寺は日隆聖人によつて、応永二十二年(一四一五)に創立されたが、その後妙顕寺月明のために破却、永享元年(一四一九)に再建される。当寺は帝都・京都の地にあるため、それ以後現代に到るまでの間、たびたび兵火等の災難に遭っているが、その都度立派に再建されている。特に戦国末期における武將織田信長との関わりは、世人のよく知ることであろう。本能寺の寺宝としては日蓮大聖人、日隆聖人の御本尊があり、また、茶器絵画等の種々の美術品や朱印状等の古文書類が格護されている。信長の御廟所も当寺内に在る。

尼崎の本興寺は、日隆聖人が応永二十七年(一四二〇)撰津尼崎の領主、細川右京大夫満元の帰依を受けて創建される。日隆聖人は当本興寺と京都本能寺を両山一寺として、本能寺を布教の中心、当寺を学問修行の中心の道場と定められた。日隆聖人は晩年に至り、後進の指導と自らの著述のため、ほとんど当寺に在つて、寛正五年(一四六四)に当寺で入滅された。法華宗の関西における檀林として日隆聖人が当寺に「勸学院」



上) 宗祖御所持「数珠丸」(重文・本興寺蔵) 銘一「恒次」  
右) 宗祖御舎利塔「銅製本渡金水晶玉壺」(光長寺蔵)



上) 信長公廟 (本能寺境内)  
左) 仁王門 (鷲山寺境内)

を創し、以後「尼崎学室」として続き、その伝統は今日ある「興隆学林専門学校」に受け継がれている。本興寺の寺宝として、日蓮大聖人・日隆聖人の御本尊はもちろんのこと、特に日隆聖人の著述・古来三千余帖と称された労作が、「御聖教」として格護されている。主なものに、『本門弘経抄』、『開迹顕本宗要集』、『三大部略大意抄』、『五時四教名目見聞』などがある。また、当寺の開山堂や三光堂は桃山時代の建造物として重要な文化財に指定されており、さらに美術品としての茶器や軸物、古文書類などが多数収蔵されているが、特記されるものとして日蓮大聖人が所持された「数珠丸」と称せられる銘刀が格護されている。

#### 教団の現況

前回『日蓮聖人門下連合会30年の歩み』が発行されて以後の宗門の動きを見ると、宗祖日蓮大聖人開宗七百五十年に向かつて「お題目総下種運動」が平成元年四月に始められた。平成三年六月には「昭和法難五十周年記念大法要」が、東京・妙寿寺において奉修されたが、これは昭和十六年に本宗の僧侶五名が国神不敬の罪で特高警察に検挙され、その中の荻谷・株橋二上人がその後戦争終結に到るまで国家権力に対して、本宗教義の正当性を裁判において表明し続けた事実があった。結局免訴となったが、本宗は宗祖御遺文の削除も認めず、宗祖・門祖の教義を守り通したのである。そして平成七年十月には、『昭和法難免訴五十周年法要』を京都・本願寺において行ったが、この年は一月十七日に阪神淡路大震災が起ころ、関西方面の宗門寺院にも甚大な被害が出たが、幸いにして僧侶の人的被害はなかった。

宗門行政の要は、法華宗宗務院であるが、平成十三年一月、宗務院の新庁舎が、東京日本橋人形

町に完成し、落慶法要が行われた。地上七階建の建物で、事務室以外に、御宝前を備えた仏間・会議室などがあり、宗内の諸会合が容易に開催出来るようになったのである。そして平成十四年には法華宗開宗七百五十年の記念大法要が四月に光長寺と鷲山寺で、五月に本願寺と本興寺で奉修され、全国各地からの団参でにぎわったことであつたが、前年には東京国際フォーラムで「開宗七百五十年報恩感謝の集い」が開かれ、光長寺の二十八紙大御本尊、鷲山寺の宗祖御像の出御があり、俳優の緒形拳氏が子息達に信仰の継続を話されたことは、まだ記憶に新しい所である。この間、宗門は常にお題目総下種運動を具体化するものとして「菩薩行の実践」をテーマに掲げて行動してきたが、この運動推進のために、宗門の僧侶養成機関である興隆学林専門学校、法華宗教学研究所、法華宗青年伝道隊、布教誌『無上道』や『法華宗信報』、教化センター、さらに菩薩行研究所といった諸機関が互いに協力してきたのである。

この他、平成十五年に開催された「大日蓮展」、平成二十一年開催の「日蓮と法華の名宝展」では、本宗寺院からも宝物が出品され、法華信仰の精華を示したのである。尚、平成二十一年七月には、「立正安国論進覧七百五十の集い」が、東京・獅子吼会本堂において開催され、参詣者に大きな感銘を与えた。

最近の宗門は、地球環境の悪化に伴う環境問題について発言しており、時の内局が有識者と対談して新聞紙上に掲載されることもあつた。

来る平成二十五年には門祖日隆聖人五百五十遠忌を迎えるが、既に平成二年の光長寺日法聖人六百五十遠忌、昨平成二十二年、鷲山寺日弁聖人七百遠忌と同じく、全宗門挙げての奉讃法要が予定されているのである。

# 顕本法華宗

顕本法華宗の開祖日什上人（一三二四～一三九三）は、会津の出身で玄妙と称し、天台宗の学僧となり、比叡山にあつて三千の学生の学頭となり玄妙能化と称された。その後、叡山を去り故郷会津に帰り、城主輩名氏の知遇を受け、その地にて多くの門弟を教化育成されていた。

仏縁の薰発するところ、日蓮聖人の『開目抄』及び『如説修行鈔』を拝読、永年の疑問一時に氷解し、六十七歳という高齢にもかかわらず、名を日什と改められ、日蓮聖人の門下に帰入されたが、感ずるところあつて「経巻相承直授日蓮」と称された。それは門下のどこにも従わず、仏祖及び宗祖の御意志に沿つて法華弘通の大願に邁進することである。

宗祖の生涯の悲願は帝都弘通にあることを想い、六十八歳の老軀をさげて再三都に上り、時の帝・後円融天皇に上奏、二位僧都の位



妙満寺境内

と「洛中弘経の繪旨」を賜わり、康応元年（一三八九）京都室町坊門に草庵を造り、「妙塔山妙満寺」を建立し根本道場とした。

その間、日什上人は鎌倉、千葉、品川、静岡等にも弘経法演を開き、それぞれに寺を建て門弟に後事を託し、自ら帝都弘経に専念された。またこの間、門弟日妙上人遷化され、その一周忌法要に「諷誦章」を作られた。これこそ日什上人唯一の文字で示された教義であり、現在の我々の師表となつている。それは短い文章の中に修行の方規、法華経の教判、仏陀の大悲を説かれて余さないと同時に、仏教書の名文でもある。

越えて明徳三年（一三九三）二月二十八日、故郷会津妙法寺において入滅せられた。時に世寿七十九歳であつた。

日什上人滅後、多くの先師上人は御遺誠を遵守し、不惜身命、死身弘法の大旆のもとそれぞれ弘通に邁進された。

日什上人の門弟日仁、日實の両師は、亡き師のご意志を継いで庭中訴訟（国家諫暁）を行われた。これを応永法難という。また、日遵上人は諸国に法演を開き、品川妙蓮寺を始め数十の寺を創建された。

中でも、心了院日泰上人（一四三二～一五〇六）は京都の生まれ、三十八歳の時、千葉浜野本行寺を建て、爾来千葉、東京を中心として教田を開拓した。ある日、品川より千葉に行く船中で暴風雨に遭い、その時、泰師は舷に立ち妙経を誦し唱題すると、さしもの嵐も静かになった。折しも船中に乗り合わせたのが、後の土

気城主酒井定隆主従であつた。彼は泰師の法力とその奇瑞に敬服し、即座に熱烈な信徒となつた。後年土気城主となつた酒井公は、その領内を全て法華宗に改宗させたのである。

かくして、酒井公の外護により「上総七里法華」は建設され、三百に及ぶ顕本法華宗の寺院が一夜にして建立された。

また、安土法難の日淵上人、慶長法難の日経上人等々は宗門史上余りにも有名である。

明治に至り、本多日生上人等により明治三十一年十一月十一日、従来の「日蓮宗妙満寺派」の称を改め「顕本法華宗」と宗名公認され、浅草統一閣を中心に帝都弘通を行つてきたが、戦時中の昭和十六年、思想統一を政府（軍部）より要求され、本宗は日蓮宗、本門宗と合同した。

しかしながら、戦争終了の翌々年、昭和二十二年四月に再び什門流は独立し、ここに新たな顕本法華宗が誕生した。

## ■総本山妙満寺

〒六〇六・〇〇一五

京都市左京区岩倉幡枝町九一

妙満寺は創立以来幾度かの兵火に遭い、その都度洛中に寺域を変えながら興隆をしてきたが、天文五年（一五三六）、いわゆる天文法難において焼き打ちに遭い、難を一時堺に逃れた。天文十一年（一五四二）元の地へ復興するも、豊臣秀吉の時代に寺町二条に移転され、以後約四百年にわたり「寺町二条の妙満寺」として京の人々の知るところとなる。明治維新

直前の元治元年（一八六四）、蛤御門の変により塔頭十数ヶ院と共に烏有に帰した。

明治以降、順次復興して来たが、戦後における喧騒日毎に増し、環境悪化が著しいものとなり、昭和四十三年、新たに洛北岩倉の清浄の地に移り今日に至る。



山門のツツジ

### ■仏舍利大塔

妙満寺仏舍利大塔は、日蓮聖人の御教えそのままに、法華経に明かされた久遠本仏の实在を信じ、そのご精神に帰れという妙満寺の信仰を象徴するものとして、インド・ブッダガヤ大塔を模って建立された。塔の最上階には妙満寺に古くから伝わる仏舍利をまつり、一階には御本尊大曼荼羅と釈迦牟尼仏のご尊像を奉安する。また、この塔は全国檀信徒の納骨堂となっており、豊田佐吉翁以来の豊田家一門を始めとする多くの篤信者の遺骨が納められている。

### ■本坊「雪の庭」

「雪月花の三名園」の一つ  
妙満寺本坊にある



雪の庭

「雪の庭」は、俳諧（俳句）の祖と仰がれる松永貞徳（一五七一〜一六五三）の造営である。清水にある成就院「月の庭」、北野にあった成就院「花の庭」（一説に祇園、現存せず）と共に「雪月花の三名園」並び称されていた。比叡山の峰を借景にした冠雪の眺望が最も美しく、これが「雪の庭」と称される由縁である。昭和四十三年、岩倉移転の際に成就院より本坊の庭へ移築した。

### ■紀州道成寺霊鐘「安珍清姫の鐘」

正平十四年（一二五九）、安珍清姫の伝説以来、永く失われていた道成寺の釣鐘が再鑄されるが、その鐘供養の席に一人の白拍子が現れて呪力で鐘を落下させると、蛇身に変わり日高川へと姿を消した。この霊話が後世に能や歌舞伎などの芸能に取り入れられ、いわゆる「道成寺物」として大成した。

その後も災厄続き、清姫のたたりと畏れた寺は鐘を裏の竹藪に埋めたが、後にこの話を聞いた「秀吉根来攻め」の大將仙石権兵衛秀久がこれを掘り起こし、京都に持ち帰った。この鐘が縁あって妙満寺へ納められ、時の貫首日殷大僧正の法華経誦誦の功力をもって宿年の怨念が解かれ、妙音美しき霊鐘となった。妙満寺では毎年鐘供養を奉行し、安珍清姫の霊を慰めており、道成寺を演じる人々はこの鐘に芸道精進を祈る。

その他、宗祖御真筆の大曼荼羅を始め、松永貞徳や土佐派中興の土佐光則による加藤清正公肖像画等も所蔵されている。



仏舍利大塔



安珍清姫の鐘

また、平成二十一年に京都国立博物館で開催された「日蓮と法華の名宝展」へ寺宝を出品すべく事前調査を行ったところ、十三世紀の高麗宮廷画家が描いた「弥勒下生変相図」が発見され反響を呼んだ。

近年は「ツツジのお寺」としても知られ、花の季節（四月下旬〜五月初旬頃）には多くの観光客が訪れ、他にも春のシダレザクラや秋の紅葉など、境内は四季折々の美しい姿を見せる。

## 法華宗（陣門流）

法華宗（陣門流）は、宗祖日蓮大聖人の末法救済の仏教の本質が本門法華教学に存すると見定めて、本勝迹劣（約説已今本迹法体勝劣）を宣揚し、以て宗祖教学の存立理念を順守せんとしてきた。常に各時代先端の学問水準で純粋日蓮教学を志向するという、誇るべき伝統



平成 22 年伊豆御法難七五〇年大法要が挙行された霊跡別院 組岩山蓮着寺

を有する。現宗務総長・佐古弘文聖人は「教学第一」の宗政方針を標榜され、今後、かかる宗風を現代の中で更に強化し、より精度の高い教学の確立に尽力していく考えである。

本宗の総本山本成寺は、今から約七百年前、永仁五年（一二九七）日印聖人によって創建された。日印聖人は、故国越後に宗祖の教えを弘めようと三十四歳の時、この地に至り、奇瑞を得、聖地に庵室をつくり布教の礎となされた。今もこの聖地は牛池と呼ばれ、霊跡とされている。当時の領主山吉定明は、日印聖人の高德を慕い伽藍を建立し寄進した。これが本成寺である。元応元年（一三一九）、日印聖人は執権北条高時の命により諸宗の碩学と問答しこれを論破。その報功により師の日朗聖人より宗祖付嘱の三箇靈宝を授かる。同二年、霊地松葉ヶ谷に本勝寺（後に京都に移り本国寺と改称される）を建立。嘉暦二年（一三三七）本成寺を根本道場、門下の棟梁と定め（本成寺置文）、まもなく遷化された。

門祖日陣聖人は、三十一歳で本成寺の法灯を継承したが、本迹論争を基に京都本国寺と決別することとなり、帝都布教の本拠地として光了山本禅寺を建立された。日陣聖人が獅子吼された本勝迹劣の法門、また、教学の純化を追求する研鑽態度は、以後、本宗最重要のあり方とされ、今日の本宗教学の礎となっているのである。

本成寺九世日覚聖人は、後奈良天皇のために宮中で法華経を講じて大僧正に任ぜられ、

本成寺は国家安泰の勅願寺と定められた。

また、現存の判物によって、上杉、徳川、溝口等の帰依を受けたことが知られる。

本成寺は過去四度、一山を焼失する程の火災に遇ったが、現在の本堂は、明治二十六年三月十六日未明の大火による焼失後、明治三十二年に起工、十五年の歳月を費やし完成したもので、入母屋造、十八間四面、高さ十間、唐破風付き向拝と丸柱総数三十四本を有する総樺造の大堂である。

近年では、本堂屋根（銅板葺）の深刻な老朽化に対処し、平成十四年、大規模な屋根葺替（本瓦葺）工事を完了した。加之、これと相前後して山門修理、本堂欄間新設、客殿・法城屋根葺替―等々の大工事が果たされ、総本山としての輪奐の美が見事に整えられた。以上の総工費は、締めて約十四億円にのぼる。偏に宗門僧俗一同の堅固な信仰のなせる業であり、近現代の宗門史に特筆されるべき快挙である。

次いで、本宗の法器育成の面について見ると、その軸をなすのは法華宗学林で、江戸時代に創建された三澤檀林（神奈川県三澤豊巖寺境内を源流とし、その教風を現在に伝えるものである。昭和十六〜二十七年の三宗統合の時期においては、法華宗興隆学林にその役割を委ねて本宗から教授数名を立てた時期もあったが、同二十四年には富山本法寺、同二十六年には東京妙行寺に学林が開かれるなど、本宗独自の僧侶養成機関を確保しようという宗門意識は強く、三派統合が解消された昭和二十



新潟県三条市 総本山本成寺

七年以降は、法華宗（陣門流）学林が毎年五月（六月にかけて総本山本成寺にて開講され、現在に至っている。現在、学林は別科・本科・研究科で構成され、学生は宗学、宗門史、宗学史各教科の学習を始め、練経、托鉢、法話実習と、期間中、行学二道の修行に励んでいる。本宗では、仏教大学及び一般大学、大学院の卒業生であっても、当学林を卒業しない限り、正規の僧階が免許されない制度である。

また、これとは別に、昭和五十九年から総

本山に研修所が設置され、数名の研修生が二年間研修する制度が発足し、より実践に踏み込んだ法器の養成もなされている。

講習会関係を紹介すると、宗内全教師を対象としたものに「法華宗中央行学講習会」があり、昭和三十四年、第一回講習会を開催して以来、一年に一回、必ず開催され、最近では、必ず仏教学界最高峰の学者を講師に招くなど、極めて充実した講習会が執り行われている。

また、各種講習会も昭和二十四年から開催され、各教区においても教学講習会が行われるようになった。檀信徒のための講習会は、昭和四十七年に北陸・関東教区で開催されてより、各教区で執り行われており、最近では各教区で工夫が加えられ、年一〜二回の檀信徒懇談会、講習会は各会場とも盛会である。他に、昭和四十八年より、初学、初心の者の育成を目的として新就職・学生・沙弥合同研修会が宗務院で開かれている（毎年二日間）。更に、教区によっては、青少年の夏期錬成会が精力的に行われ、寺院婦人の研修も催されている。

出版活動も盛んであり、布教誌『宝塔』の定期刊行（毎年四回）を始め、名著『法華宗読本』の出版、信徒向けの『信仰のしおり』『法華宗信徒の常識』『仏事のしきたり』『信徒入門』『法華宗おつとめ要典』『信仰へのいざない』等々、宗内教師を対象とした『法華宗法要式』『法華経概説』『法華宗教師入門』『宗宝霊跡指定写真集』『法華宗宗学提要（教義篇・宗門史篇）』『法華宗要義』等々を出版してきている。

宗内に設置される研究所としては、法華宗宗学研究所と法華宗布教研究所とがある。前者は昭和三十二年に設置され、現在までに『法華宗全書』を計十三巻（教義篇七巻、史料篇六巻）、同増補全二輯、『本有院日相聖人全集』全七巻を刊行し、また、『法華宗宗学研究所所報』を第二十四輯まで発行するなどの業績をあげている。後者は布教活動の実践的な研究を目指して昭和五十五年設置され、過去に『法華宗寺院名鑑』『聖訓解説』を作成、『法華宗布教研究所所報』を現在、第二十号まで公刊している。

本宗は、対外的には、日蓮門下連合会での他門との交流を重んじており、同時に、顕本法華宗、法華宗真門流とは昭和三十六年以来、三派統合協議会を設け親交を深めている。現在、三派では、統合学院を設けて、法器育成に資せんと学生講座を毎年、春秋二回、二日間ずつ開設しており、他方、三宗の輪番制で毎年、檀信徒向けの「日蓮大聖人御聖訓カレンダー」を編集作成している。尚、平成二十二年度開催の統合協議会において、今後、法華宗本門流が協議会と連繋していく方針が確認された。

本宗には、日蓮大聖人伊豆流罪の霊跡・娑岩を今日までお守りする霊跡別院・蓮着寺がある。平成二十二年五月、蓮着寺において、法華宗各派トップが一同に会し、宗門寺院・全国檀信徒参列のもと「日蓮大聖人伊豆御法難七五〇年大法要」が盛大に欽修された。

（文責 布施義高）

# 本門佛立宗

本門佛立宗は、高祖日蓮大士の「日蓮が法門は第三の法門なり」（稟権境界抄）の祖訓を護り、第三久遠下種の妙法を广泛宣传することを目的に、江戸末期の安政四年、長松清風日扇聖人によってご開講され、法規の上では昭和二十二



本山宥清寺御会式風景

年に当時の法華宗から独立した教団です。

その法脈は、高祖ご直弟の日朗菩薩、高祖ご臨滅の枕頭で帝都（京都）弘通を託された日像菩薩の流れを汲み、高祖日蓮大士のご本懐である本門八品上行要付の宗義を再興された日隆聖人を門流の祖と仰ぎます。

## 〔沿革〕

法華宗から独立した経緯は、江戸幕府の宗教政策によって弘通を忘れ、葬儀仏教と揶揄される状況の中で、長松清風日扇聖人（二八一七〜九〇）が「もとの清流に戻ろう」と運動を興され、幕末の安政四年（一八五七）に本門佛立講を法華宗内にご開講されたことにはじまります。

佛立開導日扇聖人のご教導は、末法の正機である凡夫庶民が生活の中で本因妙の菩薩行を実践し、妙法の功徳を得ることが主眼でした。そこで難解な経説や宗義を三千余首の和歌で表現され、その和歌（御教歌）を中心に信者宅を道場として教えを学ぶ「御講」を弘通の柱とされました。御講席では、「不専読誦經典」の不軽行を手本に経文の読誦を廃し、『妙講一座』による口唱中、心の法要を勤め、御教歌を学ぶ御法門では、謗法を廃した純粹な口唱行による「信」の確立を指導。以って妙法の現証を顕し、現証によって堅固な信心を育てること

を徹底されるのです。

ご開講当時、四人と記録された聴衆は、こうした佛立開導日扇聖人のご教導によって、高祖六百回御遠諱の明治十四年には三万余の信徒を数え、日扇聖人ご遷化前の明治二十年頃には六万と記されるまで急速に拡大します。

大正年間には北海道から九州に到る全国隅々へと教線を伸ばし、一方でブラジルや朝鮮、中国への下種もはじまりました。朝鮮では李王家の外護を得て釜山、京城、平壤等に弘通の拠点を築き、中国でも大連、台湾、上海等に支部を発足するなど独自の弘通を展開しますが、法制上は依然法華宗の中の内棲セクトという位置にありました。

第二次大戦後、従来の宗教団体に代わって宗教法人令が施行されたのを機に、法華宗からの独立を目指した折衝がはじまりますが、交渉は難航し、法華宗側との協定が円満に成立したのは昭和二十二年三月十五日でした。

以来、本門佛立宗は法規上も独立した教団として、高祖日蓮大士の示された法華経本門の信仰を門祖日隆聖人、佛立開導日扇聖人の御指南を通して実践し、今日に至ります。

## 〔宗名の由来〕

本門佛立宗の宗名は、高祖日蓮大士が「佛立



門祖 550 住職局長決起大会誓願書奉呈

宗とは釈迦独尊の所立の宗なる故なり」（法華宗内証仏法脈脈）等とご自選された「佛立宗」を根拠とし、その教えが法華経本門の御法門に依る意を「本門」と冠して表現しています。つまり、人師の説によって立てられた宗旨ではなく、法華経本門に顕れる「久遠本仏が建立された唯一の信行を実践する宗旨である」との意が、そこには込められているのです。

### 【本山宥清寺】

本門佛立宗の本山宥清寺（京都市上京区）は、法華宗妙蓮寺末だった同寺を、佛立開導日扇聖人が明治二年に佛立修学所として借り受けられたのを機縁に本宗の根本道場へと発展し

ます。

そもそも宥清寺御宝前は、高祖ご直弟の中老日弁師が延慶元年（三〇八）、京都の二条西ノ洞院に青柳厨子本門寺戒壇を建立されたことにはじまります。これは日像菩薩が帝都開教後二十七年目の元亨元年（三三二）に、門下最初の勅願寺・妙顕寺を創建されたのに十三年早く、帝都における門下最初の道場となりました。

この慶事を裏付けるように、同三年には上総鷲山寺から高祖手自開眼の御本尊と高祖御霊像（中老日法師、弘安二年謹刻）がご遷座されます。

ただ、本門寺はその後、応仁の乱の戦火を逃れるために丹波亀山に避難し、寺勢が衰微してなかなか洛中に復帰できずに百三十年余を経過します。お寺を亀山に残したまま、ようや



門祖 550 住職局長決起大会分科会

く御本尊と御霊像の帰洛を果たしたのは慶長四年（二五九九）のことで、以後も紆余曲折を経て元禄七年（二六九四）に妙蓮寺末の宥清寺に入り、宥清寺は青柳山と号することになるのです。

現在、帝都最初道場の御本尊と御霊像は宥清寺に格護され、特に高祖手自開眼の御霊像は国の重要文化財の指定を受けています。

### 【現在の活動】

現在、本門佛立宗は全国を十一の支庁、二十九の布教区に分けて三百余の弘通拠点を統括し、海外にも二十ヶ所の道場を構えて弘通活動を展開しています。

宗門的な運動としては、平成二十五年に門祖日隆聖人の五百五十回御遠諱を迎えることから、平成二十二年度からその報恩ご奉公の期間に入りました。今回の記念ご奉公のテーマ「佛立菩薩を育てる運動」は、未来の弘通を担う人づくりへの取り組みを表わしています。これは高祖日蓮大士や佛立開導日扇聖人はもちろん、門祖日隆聖人もまた尼崎に勧学院を創設して、そのご晩年は弘通の人づくりに精魂を傾けられた御意を学ぶものです。

佛立開導日扇聖人は「法は人に依って弘まると教えています。飛躍的な弘通を期すための人づくりが今の宗門の課題です。

# 日蓮本宗



要法寺南門



要法寺本堂



日蓮本宗事務総長  
岩崎 広義

日蓮聖人門下連合会五十年を迎え、門下連合会各宗のご隆昌と各聖ご法体のご健勝を祈念申し上げます。

門下連合会も早五十年の歴史を重ねてきたようですが、我が宗門は御開山日尊上人以来連綿として血脈を継承してきた歴史と伝統のある宗門であり、宗門史としては七百年を超えております。その中でも最も栄えた時代は江戸期頃で、当時はかなり隆盛を誇っていたものと思われまます。

その後、明治になってから日興上人の門下であった富士門流八本山が総結集して本門宗を創設し、初代管長には本山要法寺の貫首狛下が就任されるなど、その当時も要法寺が中心となって活動したことが伺えます。

昭和十六年には戦時中ということもあり三派合同をした時代もありますが、今日の日蓮本宗として歩み始めたのは昭和二十五年になってからのこと、日蓮本宗として独り立ちをしてやく六十年ほどになりました。

門下連合会の五十年の歴史とほぼ同じような年数を歩んできたことになりました。

門連の五十年の歴史を詳しく知る者が皆無というべき状況から、本宗の六十年の歴史について述べたいと思います。

昭和二十五年、三派合同の体制から脱却して、日蓮本宗として独立する活動が活発となり、教義委員会、行政委員会を設置して本宗教義のあり方や規則の制定など本宗の歩むべき道を模索していたようです。

それと平行して独立立案式典法要の準備を進めるため、式典委員会を設置して着々と独立立案に向けての準備が進められ、ついに昭和二十五年十月二十八日、日蓮本宗管長高橋日海猊下により高らかに「立案宣言」がご宝前に奉告され、この日より日蓮本宗の新たな歴史が始まったと言えます。

その後、昭和二十六年から二十七年にかけては本宗の内容を充実し、組織強化を目指すため、本宗規則、本山要法寺規則、末寺寺院規則の制定を目指して委員会が設けられる動きがあり本山境内建物の修理を行い、その傍らで末寺の新寺建立に向けてかなりの力が注がれた。

二十八年から三十年代前半に向けては要法寺教学財団設立準備を進めていたが、昭和三十四年には伊勢湾台風で本山要法寺境内建物



要法寺法要風景



要法寺鐘樓

が損傷する被害があり、昭和三十五年には客殿が焼失するなど様々な災難が立て続けに起こり、その復旧に宗門あげて取り組んだ時代でもありません。ただちに客殿復興を計画し、僧侶、檀信徒が総力を挙げて取り組んだ結果、ほどなくして新たな客殿建立を成し遂げることができたのです。

ちょうど五十年前というそのような時代であり、そのような苦難の時代にありながらも門下連合会の活動へ参加しはじめたようです。

門下連合会が立ち上がって組織運営を手がけ始めた時を同じくして、当宗門も本格的な組織作りと若手僧侶の人材育成とようやく宗門らしい運営を行えるようになってきたようです。

昭和五十年には、門下連合会で祖廟参拝法要があり、当時の管長原日認上人が全ての御真骨を西の谷祖廟へ奉還すべきと提言をされ、すべての御真骨が祖廟塔に奉還されていない現在もなお宗門としては公式に祖廟参拝することを頑なに控えてきた経緯があります。

昭和六十年代になって嘉儀日有上人が管長に就任されてまもなく「平成の大改修」と大号令されるや、僧侶、檀信徒が護持護法の念を強くして本山要法寺の表門（南門）修復、本堂大

屋根修復、客殿、大書院、方丈、庫裡新築、宝蔵新改築、鐘樓堂修復と二十年もの歳月をかけてそれらの大事業を成し遂げて参りました。

平成二十六年には、本山要法寺御開山日尊上人の御生誕七百五十年、平成三十三年には日蓮大聖人御生誕八百年をお迎えすることになりますので報恩感謝の大法要をどのようにすべきなのかをこれから宗内で話し合いを行う予定になっており、日蓮本宗・本山要法寺が百年千年と発展できるように、今すべきことを着々と進めているところです。

門下連合会の歴史も五十年ということを経目にしながら百年千年と積み重ねていけるよう心よりご祈念申し上げます。

## 法華宗(真門流)



本隆寺本堂



日真大和尚御絵像

日真大和尚の御一代に即して、当門流分派、  
拡張の端緒を記し、本宗の紹介としたい。

御開祖日真大和尚は、文安元年(一四四三)三月二十九日、今の兵庫県豊岡市九日市町に生まれ、父は権大納言正二位中山親通卿、母は山名伊予守時義の女。幼名を直磨といい、誕生にあたっては、降雹、涌泉の吉瑞があったという。その涌き出した井戸は、現在も九日市町に、誕生井として残されている。その後、六歳で妙境寺日全に投じ、十二歳の時に出家得度、名を慧光と改め、大経坊と号す。十八歳にして叡山に登り天台教学の研究に打ち込むこと五ヶ年、二十三歳の時、山を下りて妙本寺(今の妙顕寺)に入り、深く台当の異目を探り、日蓮教学の研究に励む。

その研究成果が「一部修行、本勝迹劣、唯壽量、本果実証」の教学である。

しかしこの教学は、本迹一致の立場をとる妙本寺の日具上人らと相容れなかったため、主張の受け入れられないことを知った日真大和尚は、敢然と妙本寺を退出するに至る。この時、大和尚の主張に共鳴し、行動を共にしたのが、本隆寺二世の大林坊日鎮上人である。

妙本寺を出た二人は、日鎮上人がかねてより築いていた六角西洞院の庵室に入り、一寺建立を計画する。そうして日像菩薩の旧跡を慕って京都四条大宮に建てられたのが「慧光

無量山本妙興隆寺」すなわち現在の本隆寺である。長享二年(一四八八)四月二十八日、立教開宗の聖日を期してのことであった。

こうして、布教の拠点を得た日真大和尚は、さらに近畿一円への広宣流布を果たすべく、地方遊化の旅へと出発する。

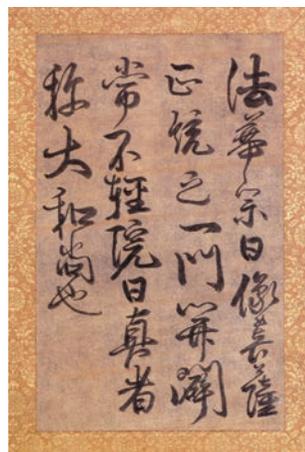
先ずは若狭へ向かい、妙興寺日因上人と本迹問答に及ぶ。結果、日因は一致を捨て勝劣に帰伏し、別に一寺を建立し、慧光山本境寺と名づけた。次いで、越前府中に至って、真言僧と問答に及ぶが、大和尚の高説に疑雲たちまち消散して、法華に改宗し、塔頭及び末寺を率いてその門下となった。また、近隣の平井村(今の鯖江市平井町)には妙法華経山平等大會寺という本山があったが、当時の住職であった顕本院日唱上人は、日真大和尚の高義を尊び、塔頭及び末寺十八ヶ寺を率いて、座下に来て受戒して門下となったという。

京都に戻られた日真大和尚は、門下育成のために文明元年(一四六九)より数年を費やし、『法華経開結』十巻の分科註釈(別名『文段経』)を、更に『法華論科註』六巻、『天台三大部科文』三十巻、『不二門科文』『観心本尊抄見聞』等を著述された。

文龜三年(一五〇三)、その名声は天聴に達し、後柏原天皇の勅を奉じて『天台三大部科文』を天覧に供したところ、天皇御自ら三大部



後柏原天皇 御真筆の表題



後柏原天皇宸翰

はなかつた。かくて、本隆寺開創以来、今日まで五百二十余年、その間、決して安穩に時が流れたわけはなかつた。

また、有馬温泉へ向かう途中、久代村（今の兵庫県川西市久代）で、説法の結縁により久成寺を興し、その説法の聴衆であった真言僧の令順は、播州龍野にある自坊を法華に改宗し、本行寺と改めた。こうして大和尚の地方遊化によつて、多くの寺院が創建、もしくは改宗され、平成の今日に至るまで布教の拠点となつて本果実証の御題目を世に流布せしめてきたわけである。

また、晩年の大永三年（一五三三）頃には、本能寺の日曦上人と論を戦わせている。いわゆる『護持此経論』がそれである。また、時期を同じくして山陰遊化の旅に出られ、城崎滞在の折には、高温で入湯できぬ温泉に、本尊一幅を図し、読経唱題をもつて投入したところ、忽ち適温となり、以来「曇荼羅湯」と称され、効験第一の名湯として今日まで尊ばれている。

の表題を御染筆、御下賜なされ、更には「法華宗日像菩薩正統之一門開闢常不輕院日真者称大和尚也」との宸翰を賜った。またこの時、徴されて天皇の御前に侍して法華経の講義をされ、御物の書見台を賜っている。以来、御開祖のことを「日真大和尚」と尊称するのはこのためである。

なお歴祖中、後七世普傳院日門上人は、安土問答における殉教者の一人、三十世唯妙院日東上人は東山未生流の派祖として特筆すべきである。

その後は、享保、天明と二度にわたり大火に見舞われるが、奇跡的に難を免れ、伝説によれば、堂内に安置する鬼子母神が姿を変えて火を消し止めたという。爾来「焼けずの寺」と呼ばれ現在に至る。今日では、大火を免れた本堂・祖師堂は京都十六本山中で最古のものとして府の文化財に指定され、他に番神堂・鐘楼・経蔵・宝蔵・霊宝館・方丈があり、また塔頭八ヶ院が境内を取り巻くように立ち並ぶ。

天文五年（一五三六）の天文法難では、日真大和尚創建の堂宇は悉く灰燼に帰し、泉州堺に避難、天文十一年（一五四三）杉若若狭守邸の現在地に再興。承応二年（一六五三）大火により再び諸堂を失うが、本尊及び文段経をはじめとする大和尚の著作、文書等は焼失を免る。第十世日遵上人、再興資金勸募のために全国を行脚し、わずか五年後の万治元年（一六五〇）七間四面の本堂を再建、これが現在に伝えられている。

その後は、享保、天明と二度にわたり大火に見舞われるが、奇跡的に難を免れ、伝説によれば、堂内に安置する鬼子母神が姿を変えて火を消し止めたという。爾来「焼けずの寺」と呼ばれ現在に至る。今日では、大火を免れた本堂・祖師堂は京都十六本山中で最古のものとして府の文化財に指定され、他に番神堂・鐘楼・経蔵・宝蔵・霊宝館・方丈があり、また塔頭八ヶ院が境内を取り巻くように立ち並ぶ。

# 本門法華宗



妙蓮寺山門

所在地

〒六〇二一八四一八

京都市上京区寺之内通大

宮東入妙蓮寺前町八七五番地

電話

〇七五一四五一一三五二七

管長

松下日肆

総長

藤井日靖

(沿革)

本門法華宗の根本道場である大本山妙蓮寺は鎌倉末期の永仁二年(一二九四)に日像聖人により創建された。宗祖より京の都へ法華経弘通を託された日像聖人は、鎌倉より宗祖の遺跡を巡拝し、佐渡から北陸路を経て京都へ上り、五条西洞院柳酒屋仲興の家に足を止め、そのご内室の帰依を得て、邸内に一字を建立した。この柳寺が、妙蓮寺のはじまりであり、日像菩薩華洛最初脱履の道場である。

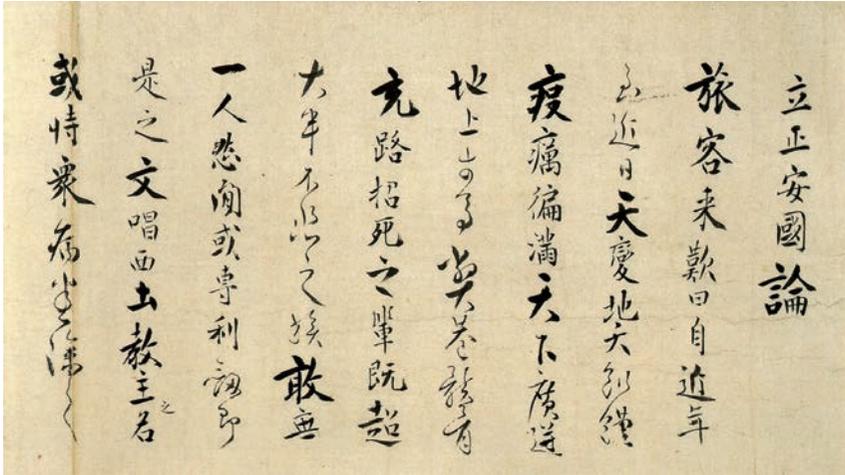
その後たびたびの法難にあつたが、応永年間(一四二〇年頃)に本迹勝劣、本迹一致の論争が起り、その論争を契機に妙顕寺を離れ日存・日道・日隆・日慶聖人らによつて、柳酒屋の旧地に卯木山妙法蓮華寺(柳の字を二つに分けて山号を卯木山という)を再興された。その後、寺域を堀川四条に移し、皇室ならびに伏見宮家と関係の深い日応僧正を迎えるにおよび、皇族をはじめ、足利將軍義尚等の顕要な

方々の参詣も多くなつた。また今出川菊亭公の親王である日忠聖人は三井園城寺の学僧であつたが、日隆聖人の教えに深く信を寄せ、当寺にはいつて日慶聖人と共に力を合せて再興に励まれ、学室道輪寺を創立して本宗教学の道場を開かれた。ここにおいて法運は一段と隆昌を極め、山門の様式もさらに格式の高いものとなつた。

天文五年(一五三六)には、法華宗の隆盛を妬む叡山諸宗の僧俗十万人の襲撃にあい、妙蓮寺をはじめとする日蓮聖人門下二十一本山は、ことごとく焼き払われ、一時難を堺にのがれた。

天文十一年(一五四〇)には、大宮西小路に復興され、天正十五年(一五八七)には、豊臣秀吉の聚楽第造営に際し、現在地に替え地を仰せ付けられた。当時は一キロ四方の境内に塔頭二十七坊を有する大寺院であつた。その後天明八年(一七八八)の大火に遭つたが、幸い宝蔵・鐘楼は火災を免れ、長谷川等伯一派の障壁画等の数多くの寺宝を所蔵している。寛政元年(一七八九)より漸次復興して、現在に至る。塔頭八ヶ院を有する。

現在地は応仁の乱のとき東軍の細川勝元に對する西軍の山名宗全が陣を組んだ西陣に位置する。



本阿弥光悦写筆の立正安国論

(宗名)

日蓮大聖人ご真筆大曼陀羅ご本尊、日像聖人祈雨のご本尊等の歴代ご本尊をはじめ伏見天皇御宸翰(重要文化財)、本阿弥光悦写筆の立正安国論・始聞仏乘義(重要文化財)、障壁画四十二面(松桜の図、鉾杉の図、柳の図等)、長谷川等伯筆(重要文化財)、妙蓮寺蔵松尾社一切経三千卷(重要文化財)その他数多くの寺宝を有する。

(宗名)

本宗の宗名は、大本山妙蓮寺が再興された当時の日隆聖人(門祖)の教義に依り、門祖が用いられていた『本門法華宗』を公称している。本門は、本迹勝劣の義より本門をとり、法華経涌出品第十五より囑累品第二十二までの八品を教学上重視する八品門流にあり、宗祖日蓮大聖人より受け継がれた法灯の真実義が八品正意であるとの立場に立つものである。

日蓮聖人門下連合会結成五十周年に寄せて平成二十五年には、大本山妙蓮寺第二世大覚僧正六五〇遠忌・日隆大聖人五五〇遠忌をお迎えします。当宗では記念出版として増田日紘猥下著『本門法華宗宗門史(上)改訂増補



方丈・十六羅漢石庭

版』の発行、記念事業として大本山妙蓮寺本堂大屋根葺き替え営繕を計画実施途中であります。このご報恩事業は門連各宗各派の取り組みも聞こえてまいります。門連は早くも五十周年を迎える運びとなりましたが、祖廟を中心として結成され、祖願達成の旗印のもと宗祖七〇〇遠忌・立教開宗七五〇年等の門連事業を通じて、先聖先師のご報恩に報いる幾多の事業に取り組み、末法末世の世情にお題目の燈を弘通し、未来に向かって益々の活動を祈念いたします。



妙宗大霊廟

国柱会は、聖祖本化上行菩薩日蓮聖人が建立された妙法蓮華經の宗旨「本化妙宗」を信奉し、聖祖を末法人類の根本救済のために出現された唯一の聖人「閻浮一聖」と仰ぎ、御教えを広宣流布して「立正安国・一天四海皆歸妙法」の実現を誓願として生きる同信同行の教会同盟「在家仏教」の教団である。

国柱会の名称は、日蓮聖人の三大誓願すなわち『開目鈔』の「われ日本の柱とならん、われ日本の眼目とならん、われ日本の大船とならん」に発している。日蓮主義の理想である閻浮同歸の本門戒壇事成「通一仏土」の実現を憶念し、ことに日本国は、「法華経本縁」の国であり、日本国体を開顯した「法華冥合」の教旨に基づき、日本の真性命の覚醒をうながすことを大きな使命としている。

国柱会は恩師田中智学先生によって創業された。先生は文久元年（一八六〇）、東京日本橋に生まれ幼くして両親を失い、日蓮宗の智境院日進師に隨身、その自坊妙覚寺（東京一之江）にて得度、智孚の名を授けられた。飯高檀林を経て二本榎の大教院に学んだが、宗義に疑問を抱き、妙覚寺に帰って独学研鑽に入り、御妙判によって開悟。明治十二年、十九歳の春、純正日蓮主義の対世間的唱導の志を立て還俗。翌年、横浜で「蓮華会」を起こし、同十七年、東京に進出して在家仏教主義の「立正安国会」を創業。宗風革新・祖道復古の大義を唱え、諫暁運動を展開された（大正三年、立正安国会は全国的に組織を統合し「国柱会」に発展し、国家諫暁

の教化活動はいよいよ盛んとなった）。

在家仏教は、人生の現実を開顯し正しい信仰の真価を発揮するものである。明治十九年に満月会頂経式、翌二十年には仏教史上最初の仏前結婚式「本化正婚式」が制定された。

佐渡始頭妙法曼荼羅を模範広式御本尊と定め、明治二十五年には御修行の規範「妙行正軌」が制定された。

明治三十五年、日蓮聖人の教学を組織体系化した『本化妙宗式目』を完成。翌年より一カ年、大阪で日蓮門下各教団の僧侶百余名をあつめて「本化宗学研究大会」を開催、本化妙宗式目を講じた（その講義録は後に『日蓮主義教学大観』として出版）。その研究大会の修学旅行中、神武天皇御陵前で、田中智学先生は「皇宗の建国と本化の大教」と題して講演。日本国体を開顯し学的創唱として、大正十年、『日本国体の研究』を発表された。

大正十一年には、教化芸術運動として『国性文芸会』、翌年には政治活動として「立憲養正会」が発足。同十五年には、「明治節」制定の誓願運動を提唱して『明治会』を創立した（帝國議會で貴・衆両院一致決議により昭和二年「明治節」制定なる）。

昭和三年には『妙宗大霊廟』が創建された。法華経の教えを形にあらわした理想の合葬墓である。全ての人々があらゆる差別を超越して平等に安住する「一塔合安」式で、常に供養がなされ、宗教的、倫理的、社会的に深い意義がある。



立正安国碑



本部講堂 (帝網道場)

聖祖六百五十遠忌の昭和六年、身延祖廟への「立正」の勅額下賜を期に、「祖廟中心・宗門統一」のスローガンのもと聖節佳例・身延登詣団が組織され毎年登詣を実施しており、平成二十二年で八十回目を迎えた。

恩師田中智学先生は、明治、大正、昭和の三代にわたり、言論、文書、芸術などを通じて多彩な活動を展開。著述は膨大でその数二百篇余、興学に布教に経営に驚くべき精進力を発揮された。護法護国に身をささげ尽した先生は昭和十四年、東京一之江の申孝園にて七十九歳で帰寂。その後、田中芳谷先生が総裁に就任、戦中戦後の激動の時代に護法活動を展開し昭和四十八年、九十歳で帰寂。願業を継承した田中香浦先生が会長に推戴された。

国際時代が訪れ、田中香浦会長（当時主幹）は、昭和三十一年、ネール首相の招きでインド政府主催の南方仏紀二千五百年記念国際シンポジウムに参加し「仏陀の遺訓」の題下に演説した。昭和四十年、日韓国交正常化するや、仏教伝来の歴史的意義を重視して、仏教伝来の恩誼を謝するため韓国の扶餘に全日本仏教徒による「仏教伝来謝恩碑」を贈る運動（明治三十六年、田中智学先生が提唱）が田中会長の発企により具体化し、全国に運動を展開。同四十七年扶餘の地に建立除幕された。日蓮主義宣揚運動も活発化し全国へ護法護国の宣伝隊が派遣された。

日蓮聖人門下連合会が結成され、祖廟輪番奉仕の道がひらけた昭和四十年、国柱会は第

一陣として輪番給仕を実施、昼夜不断至心の唱題給仕を捧げた（平成二十二年は第四十六回を実施）。以来国柱会は、「大日蓮展」（立教開宗七百五十年記念事業、平成十五年）の東京国立博物館での開催に尽力し、また「日蓮と法華の名宝展」（『立正安国論』奏進七百五十年記念事業、平成二十一年京都国立博物館）の成功のために、運動・講習会等を会員一丸となつて行つた。

布教活動の一つとして文書伝道があげられるが、機関誌・紙は時代に即応して多数発行普及施本され、平成二十二年九月には機関誌『真世界』は明治二十年以来通刊六千二百五十七号を発行（大正九年から約二十年、日刊新聞を発行）した。

平成の新時代を迎え、先帝陛下の御聖徳を伝えるべく『昭和天皇の御製』を謹刊。平成二年、新帝陛下の御大典奉祝記念として『日本の天皇』を、「教育勅語」渙発百年記念として『道徳教育のよりどころ―教育勅語を考える』を発刊、日本復正のために普及運動を展開している。

平成十七年には国柱会創立百二十年記念大会が内外多数の有縁者参加のもとで挙行された。また、『妙宗大靈廟』創建八十年記念事業（平成二十年）そして『立正安国論』奏進七百五十年記念事業（平成二十一年）を行った。

平成二十二年は『伊豆法難』七百五十年記念事業として、明治三十四年の復興以来国柱会で護持している『鎌倉小町辻説法靈蹟』の域内荘厳を実施する。

# 日本山妙法寺

山折 哲雄

藤井日達上人は百歳の長寿を全うした人である。その足跡はインドをはじめとして全世界に及び、平和運動と伝道活動に献身した稀にみる国際的な仏教者だった。

知られているように藤井上人は昭和六年に始めてインドに渡り、念願だった「西天開教」に着手した。それ以後昭和二十年までの十五年間は、日本を軸に中国、インド、朝鮮へと足をのばしたアジア伝道の時代といていいだろう。これにたいして敗戦の昭和二十年から逝去されるまでの四十年間は、中国、アメリカ、ソ連をはじめヨーロッパにまで平和行脚の足跡を印した世界伝道の時代だったといていい。

藤井日達における戦前の十五年は、日本国家の問題としていえば満洲事変以降の十八年戦争にそのまま重なっていた。この時代の上人の眼に日本の「国家」は興隆と滅亡のはざまに揺れる危機的な国家と映っていた。それはおそらく十三世紀の日蓮が鎌倉幕府の「国家」に抱いていた危機意識と類似したものだったにちがいない。日蓮の「立正安国」の理念が上人の脳裡によみがえったとしても不思議ではないであろう。以後、仏法の興隆と国家の安泰

がいわば不可分の関係としてとらえられ、それが上人の行動をつよく方向づけることになった。そのかぎりにおいて上人の情熱的な民族主義はエゴイステイックな国家主義の火の粉を浴びることもなったのである。

しかしながら、上人の日蓮信仰がそれによつていささかの曇りもみせなかったのはいうまでもない。上人が信仰の純粹性を保ちえたのは、法華経信仰に裏打ちされたはげしい修行体験があつたからだと思う。教団的権威や外部からの物質的支援に頼ることなく、単独者として修行に没頭する時間を他の誰よりも多くもつていたからである。

そしてこの点こそ、明治以降にあらわれる代表的な日蓮主義者の多くから藤井日達を分かつ重要な指標ではないだろうか。昭和二十年の敗戦以後、日本の仏教諸教団はこぞつて平和主義を宣揚し、そして例外なく平和運動の戦列についた。しかし、そのときから今日にいたるまでの半世紀をふり返るとき、その平和運動の持続性と徹底性において、藤井日達の日蓮山妙法寺に及ぶものは一つもなかったといつていいだろう。いったいどうして、そういうことになったのか。

その理由の第一は、平和への祈願がいつでも、どこでも、現世利益信仰への関心を上廻っていたということである。しかしそのかわり、



大本山清澄寺旭ヶ森に建つ清澄山仏舎利塔（千葉県鴨川市）



英国ロンドン仏舎利塔  
(市中心部パタシー公園内)



王舎城仏舎利塔 (印度国ビハール王舎城多宝山上)

日本山妙法寺の活動は一般信者大衆への浸透に失敗した。失敗したというより、信者大衆の獲得をはじめから問題にしていなかったというべきであろう。その意味では藤井日達とその一門は、仏教教団の一セクトというよりは、むしろ宗教思想集団を形成していたといった方がいかもしれないのである。藤井上人自身、その伝道開始の時点から一貫して「教団」形成への関心を放棄していたからである。

つぎに第二の理由として、「仏塔」至上主義が徹底的に追求されたことを挙げなければならぬ。「仏塔」はすなわち仏舎利塔のことで、その源流はインドにさかのぼる。仏の舍利(遺骨)を奉安して、仏法の永遠をそれによって象徴するものが「仏塔」にほかならない。そしてまたこの塔は、あくまでも礼拝の対象であって僧が定住すべき場所なのではない。

戦後になって藤井上人は、この仏法の永遠を象徴する「仏塔」を平和への祈念を象徴する「仏塔」へと昇華させることに全力を傾けた。妙法寺の一門はすべて法華経に説く「地湧の菩薩」であるが、現代の地湧の菩薩は平和の使徒として世界の各地に行脚し、そこに平和の仏塔を建てる菩薩でなければならない。上人はつねにそのように説き、みずからもそのように実践することをやめなかった。

第三に、「政治」の領域にかかわる問題に臆

せず身をのりだしていったということを挙げなければならない。藤井日達は、宗教の価値は政治を超越するが故に政治には触れず、というような事なかれ主義の態度をとることが一切なかった。昭和三十一年の砂川基地反対闘争、四十年代初頭の三里塚闘争などへの積極的な参加を指導したことなどがそれを物語っているし、それが昭和五十年代のアメリカインディアンとの協力・提携という問題にまで継承されていたことを、今あらためて思いおこさずにはいられないのである。

日本の宗教界は、藤井日達を一種の異端の領域に格づけして、いわば敬して遠ざけている。また日本の思想界は、上人の行動と思想に正当な評価を与えることができない状況にある。しかしこのような態度を、われわれは、そろそろ改めなければならないところにきているのではないだろうか。

(文責 酒迎)

※この論稿は、日本山に御縁の深い山折先生に新たに寄稿していただいたものです。

# 京都日蓮聖人 門下連合会



全門連京都理事会

今を去る七百十四年前、永仁五年（一二九七）四月二十八日、京都御所の東門に立って昇り来る旭日に向かい「南無妙法蓮華經」と声高らかに唱えた日像上人、これが京都開教である。

京都日蓮聖人門下連合会の歴史的开始は、日蓮聖人が経一磨磨（日像上人）に託した京都弘教である。以後法華弘道の実を挙げ、京都へ続々と日蓮聖人門下の僧侶が上洛目覚しい町衆の総大な支持と外護を受け、公家堂上家にも信者は増え、多くの法華寺院が建立、「洛中二十一箇本山」と称され全盛を極めていた。しかし、天文法華の乱で堺へ避難するも後契に力を注ぎ、十六本山中心の時代へ入っていく。

大正十三年四月十九日十六本山の協力により、比叡山横川定光院の大聖人の銅像が建立され、開眼法要が盛大に奉修された。

この年京都十六本代会は「京都立正会」を結成、教学の研修と布教に努めた。又、毎年十月十三日の御大会式正当には「連合御大会式万灯提灯行列」が行われ、市中を歩きお題目を声高らかに大行進を行った。

しかし、戦争と言う不幸な出来事により、社会の流れの中に宗教活動が難しくなっていくが、門連有志が日蓮大聖人の「立正安国」の精神を護り、力強く復興、再興をして新しい出発へ向かうのである。

釈尊御降誕花まつりが日蓮宗・法華宗派合同で営まれ、昭和三十二年（一九五七）十月九日聖祖門下連合会として復活第一回日蓮大聖人お会式万灯行列が盛況裏に奉行、円山公園音楽堂から大本山本能寺迄大行進をした。

聖祖門下連合会も盛大に運営されるが、各宗・各派・各教団の教学、組織等の問題があり、度重なる協議を行い、昭和三十八年（一九六三）「聖祖門下連合会規約」が成文化した。

そして時は経ち、機は熟し、昭和四十年（一九六五）三月十八日京都日蓮聖人門下連動会の名の下に、日蓮宗京都本山会、宗務所、法華宗陣門流本禅寺、法華宗本門流本能寺、法華宗真門流本隆寺、顕本法華宗妙満寺、本門法華宗妙蓮寺、日蓮正宗（現在の要法寺）、本門仏立宗宥清寺、日蓮法華宗（五十音順）は連名で「京都日蓮聖人門下連合会開催ご案内」が送付され、三月三十日顕本法華宗総本山妙満寺にて総会が開催された。これが、京都日蓮聖人門下連合会の組織的スタートであった。会則役員も決定し実質上の運営展開が始まった。以後今日に到るまで、京都日蓮聖人門下連合会は歴史と伝統をしっかりと認識し、年間行事として二月十六日は総会降誕会、四月二十八日立教開宗会（比叡山横川定光院、八月夏季大学（本能寺文化会館）、お会式（十月第一土曜）を始め、事務局会議理事会、お会式奉行委員会、全



御会式



立教開宗会



立教開宗会

門連京都理事会、十六本山主伴会等を行って  
いる。  
運営は当番制とし、表当番・裏当番に日蓮  
宗、法華門流懇話会が順次当たっている。  
今日までの歴史を振り返り、年を数えて幾

年月、昭和二十六年（一九五〇）「宗教法人法」  
が公布・施行、昭和二十七年（一九五二）「積尊  
御降誕花まつりを奉行、これらを正式な設立  
と考えれば、平成二十五年に設立六十周年を  
迎えるのである。

# 地方門下連合会

## 大阪日蓮聖人門下懇話会



理事長 中村日游

日蓮聖人門下連合会結成五十周年誠におめでとうございます。

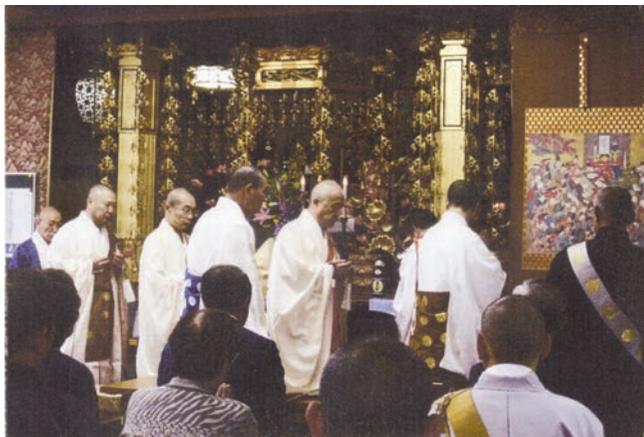
七百五十有余年前に宗祖日蓮大聖人が房総半島の一遇にお蒔きになった、御題目という種が芽吹き、大木に育ち日本列島はいうに及ばず世界に枝葉を茂らしています。しかしながら世界どの宗教でも同じこと、門下もいくつかの教団に分かれていきます。私が門下懇話会の理事になったのが八年前で理事長に推されて就任して一年半、まだ任期半ばですが昨年初めて門連身延理事会に参加をさせていただきます、祖廟で各門流の理事上人と異口同音に御題目を唱えさせていただいた時は、これまでの祖廟参拝とは全然違う感動をおぼえました。各門流それぞれに教義が違い、相容れないものがあるのはしかたなく、門流の統合は望むべきもない話ですが、宗祖大聖人『報恩抄』に「日蓮が慈悲廣大ならば、南無妙法蓮華経は万年の外未来までもながるべし」と述べられるが如く、宗祖の慈悲は不滅であり御題目は未来永劫に唱え続けられなければなりません。

せん。現代の我々に課せられた使命は小異を捨て（大異かもしれないが）大同団結し、宗祖大聖人の教義をねじ曲げ、他宗を誹謗中傷することしか出来ない教団を排除し、日蓮大聖人のご報恩に感謝し、『立正安国』を旗印に佛国土の建設をめざし門下連合会をますます発展させていきたいと念願する次第です。五十周年は佛国土建設の一里塚、ますますの発展をお祈りしお祝いの言葉とさせていただきます。

### 大阪日蓮聖人門下懇話会の紹介

昭和五十五年一月十八日に中央区谷町の雲雷寺に於て発起人会が開かれ、四月二十二日に八宗派一団体の有志が結成総会を開催するも時期いならず休会にいたる。六十三年十二月十一日、再度結成総会を開催し初代理事長に元日蓮宗大阪宗務所長、現京都大本山満寺御貫主、伊丹栄彰上人を選出し再発足する。

平成元年には研修会を開催し、以後昨年度にいたるまで宗教界は言うに及ばず、各界の講師を招き会員の研鑽に努めている。ちなみに今年度は、堺の沈香屋、梅栄堂の営業本部長中田恭三朗氏に講演を依頼し、お香の講義を受けた。また平成五年からは、大聖人のご報恩に感謝し御会式を厳修している。これは、各宗



派の法要の違いが学べる良い機会でもある。平成九年からは京都本山巡りがはじまり、十六本山はもとより由緒寺院を参拝しており、平成二十一年度は『立正安国論』奏進七百五十年記念特別展を鑑賞し、近江八幡水郷巡りを楽しんだ。今年度は淡路島に第四十七代淳仁天皇創建の大覚大僧正改宗の法華宗本門流の妙京寺を参拝し、線香工場でオリジナルのお香作りに挑戦した。

現在は七宗派一団体百六十五名と会員

数は少ないが、各宗選出の理事が平成二十四年の結成二十五周年に向け異体同心でがんばっています。

大阪日蓮聖人門下懇話会 理事長  
本門法華宗 上行寺住職 中村日游

# 日蓮聖人門下連合会五十年活動年譜

年次	主な動き	社会の動き
昭和34年 2月～6月	<p>国柱会田中香浦主幹、京都妙顕寺に日蓮宗管長山田日真師を訪問、立正安国論献諫七〇〇年記念大会を御門下共同して開催する件につき提唱、賛同を得る。</p> <p>〇年記念大会を御門下各派共催実施を目標とし、2月以来各派を歴訪して賛意を得、参加表明の各宗派は以下の11教団となった。</p> <p>日蓮宗、日蓮本宗、顕本法華宗、法華宗本門流、法華宗陣門流、法華宗真門流、本門法華宗、日蓮宗不受不施派、日蓮講門宗、日本山妙法寺（発生順）</p> <p>日蓮聖人立正安国論献諫七〇〇年記念大会 事務局を東京都台東区北清島町日蓮宗宗務院内に設置。</p> <p>於、東京・一ツ橋 神田共立講堂</p> <p>日蓮聖人門下各宗派共催</p> <p>日蓮聖人立正安国論献諫七〇〇年記念中央大会を開催。</p> <p>了って各派教団首脳懇談会を如水会館にて開催。本大会の成功により御門下結束の気運高まる。</p>	昭和34年 1月 キューバ革命 3月 チベット蜂起
昭和35年 1月17日 1月29日	<p>〈日蓮聖人門下懇話会〉の結成をめざして、日蓮宗及川真学師、陣門流村上恭学師、国柱会星野智融師により門下各派教団を歴訪。結成の趣旨に快諾の参加各派は、さきに関催した「日蓮聖人立正安国論献諫七〇〇年記念中央大会」参加の日蓮宗講門派を除く各派に加えて本門仏立宗が参加。1月29日に懇話会発足の会合を行うこととなった。</p> <p>於、日蓮宗宗務院</p> <p>日蓮聖人門下懇話会（発足第1回）開催。</p> <p>日蓮宗、日蓮本宗、顕本法華宗、法華宗本門流、法華宗陣門流、日蓮宗不受不施派</p>	昭和35年

昭和36年  
昭和37年

2月8日

本門仏立宗、国柱会、日本山妙法寺大僧伽の各派より代表者出席して懇話会の発足をみる。なお本会議において懇話会の充実発展を期すため、事業企画推進にあたる常任委員を選出、日蓮宗及川真学師、陣門流村上恭学師、真門流美崎智啓師、国柱会星野智融師の4師が選任された。

於、日蓮宗宗務院

日蓮聖人門下懇話会常任委員会開催。以下の企画要領をまとめ次回の懇話会で協議することとなった。

- 1、組織体の名称を日蓮聖人門下連合会とする。
- 2、その中に協議会、懇話会をもつ。
- 3、会規作成に星野智融常任委員があたる。
- 4、各教団の首脳者懇談会を京都で開催する。
- 5、将来連合会機関誌を設ける。

2月25日

6、伊豆法難七〇〇年記念行事を連合会で実施する。

7、伊豆法難会慶讃行事として、宗曲「船守」を国柱会の出演で伊東蓮着寺で上演する。

於、日蓮宗宗務院 日蓮聖人門下懇話会

常任委員会付託の企画要項を協議、合意決定。

懇話会を「日蓮聖人門下連合会」に改組。規約も新しく定め発足をみる。

日蓮聖人伊豆法難七〇〇年記念行事内容決定。各派通達。

日蓮聖人門下連合会主催

日蓮聖人伊豆法難七〇〇年記念行事開催。

伊東仏現寺にて御法難正当記念大法要。

篠か浦蓮着寺にて聖史劇「まないた岩」(野外劇)上演(国柱会芸術部出演)

伊東「大和館」にて各派教団首脳懇談会。

伊東市西小学校にて記念講演会(講師片山目幹師)と聖史劇「まないた岩」上演。

この2年間は門連としての公式の事業を行わず、各派常任理事によって相互に連絡を

6月 全学連が国会に突

入、樺美智子死亡

安保条約自然成立

8月 ローマオリンピック

開幕

12月 池田首相が所得倍増

計画を発表

昭和38年

とりつつ、私的な会口を重ねてもっぱら門下連合の組織強化、題目系新興教団への門連導入対策、対外教化活動の策定など研究調査が行われた。

5月30日

於、日蓮宗宗務院 日蓮聖人門下連合会

6月14日

門下連合の組織強化と規約改正について起草委員選出。

6月27日

右 同

規約既成案成る。

9月28日

於、日蓮宗宗務院 日蓮聖人門下連合会委員会

連合会規約 制定。理事長、副理事長、常任理事、理事制を敷く。

10月30日

(歴代理事長は日蓮宗宗務総長が就任することを申し合せる。なお各派より常任理事(宗務総長) 1名、理事2名を推薦就任)

11月28日

於、日蓮宗宗務院 門下連合会理事会(以下理事会)

新規約により理事長選出、日蓮宗宗務総長金子日威師を初代理事長に推す。今後の活動方針、祖廟参拝について各派への門戸開放問題、真連合組織体(連合会) 発足の祖廟奉告式参拝を協議。

12月5日

於、日蓮宗宗務院 門下連合会常任理事会(以下常任理事会)

祖廟奉告式参拝及び理事会を11月28日に行う件決定。

12月10日

於、身延山西谷 祖廟

日蓮聖人門下連合会祖廟奉告式

12月10日

連合会各派管長、常任理事(宗務総長)、理事参列、御廟前に奉告式を行う。式中、奉告文、宣言を奏上。

12月10日

於、身延 玉屋旅館 理事会

全日仏発行「創価学会の批判的解明」に関する、門下統一見解を草し、全日仏に抗議

12月10日

於、日蓮宗宗務院 常任理事会

全日仏発行「創価学会の批判的解明」に対する門下連合統一見解による抗議書作成。

12月10日

於、日蓮宗宗務院 常任理事会

12月10日、在京常任理事によって全日仏当局へ提出。

昭和37年

〈流行〉

無責任時代

「下町の太陽」 倍賞千恵子

7月 公明党結成

昭和38年

〈流行〉

「こんにちは赤ちゃん」 梓みちよ

「高校三年生」 舟木一夫

1月 「鉄腕アトム」 放映開始

4月 NHK大河ドラマ放送開始

8月 原水禁大会公分裂

11月 新千円札(伊藤博文の肖像) 発行

ケネディ大統領暗殺

昭和39年	昭和40年	昭和41年
2月3日	2月13日	12月14日
<p>於、日蓮宗宗務院 理事会</p> <p>全日仏に対する抗議の経過に基づき対策協議。1月31日に出された本件に関する全日仏の声明書は誠意が認められず、再度嚴重抗議を決定。</p> <p>於、日蓮宗宗務院 理事会</p> <p>再度行つた全日仏に対する抗議の経過報告。2月25日付全日仏の回答書を諒承受諾、ここに円満解決をみる。</p> <p>於、日蓮宗宗務院 常任理事会</p> <p>事業計画および祖廟輪番給仕について協議。</p> <p>於、身延山久遠寺 常任理事参加</p> <p>祖廟輪番給仕視察並びに懇話会。</p> <p>於、日蓮宗宗務院 理事会</p> <p>門下連合会各派の祖廟輪番給仕行法について、各派の自由とすることを確認決定。立正大学日蓮教学研究発表会に各派出講について協議。立正大学内日蓮教学研究所に各派から研究員派遣の件協議。</p>	<p>於、池上本門寺 常任理事会</p> <p>金子日威理事長退任に伴い日蓮宗宗務総長片山日幹師理事長就任。祖廟輪番給仕の件国柱会が門下連合会を代表して第1回祖廟輪番給仕奉行（4月29日から4日間実施、以来連年恒例奉行）。続いて日本山妙法寺も1日給仕。</p> <p>於、日蓮宗宗務院 理事会</p> <p>創価学会対策問題、日蓮聖人門下連合会大講演会開催の件協議。</p>	<p>於、日蓮宗宗務院 常任理事会</p> <p>立正大学内日蓮教学研究所分室に各派より研究員派遣の件。</p> <p>於、日蓮宗宗務院</p> <p>日蓮聖人門下連合会主催破邪顯正大講演会を5月21日、日比谷公会堂で開催を決定。</p>
昭和39年	昭和40年	昭和41年
<p>〈流行〉</p> <p>VAN、JUNなどアイビールック</p> <p>「幸せなら手をたたこう」坂本九</p>	<p>6月 新潟大地震</p> <p>10月 日本武道館開館</p> <p>東京オリンピック開催</p>	<p>「柔」美空ひばり</p> <p>6月 日韓基本条約調印</p> <p>10月 朝永振一郎がノーベル物理学賞受賞</p> <p>12月 国連安保理事会非常任理事国に当選</p>

5月21日

3月16日も理事会を開催し、大講演会の準備およびスケジュール等協議。  
於、日比谷公会堂

日蓮聖人門下連合会大講演会 開催

会場満席盛会を極む。

6月14日

於、日蓮宗宗務院 常任理事会

日比谷大講演会の反省と今後の教宣活動について懇談。

9月27日

於、日蓮宗宗務院 常任理事会

日蓮教学研究会報告。各派研究部員出揃う。韓国法華宗李法華師来日、歓迎会開催。

12月7日

於、日蓮宗宗務院 常任理事会

本多日生上人三十七回忌記念行事につき、本多上人顕彰会と門下連合会常任理事が合同して協議。門下連合会は協賛することを決定。

### 昭和42年

3月8日

於、日蓮宗宗務院 常任理事会

本多日生上人顕彰行事協賛の件、日蓮教学研究会五月開催の件、本年度事業計画として祖廟中心の推進、門下連合支部の結成問題について協議。

10月17日

於、日蓮宗宗務院 理事会

規約の一部改正を行う。本多上人顕彰行事の件。

於、身延 常任理事有志参列

本多日生上人銅像建立除幕式挙行。

### 昭和43年

4月26日

於、東京・台東区 藤田 常任理事会

来る昭和46年が聖誕七五〇年にあたり連合会として記念事業を計画することを申し合わせる。

6月10日

於、日蓮宗宗務院 理事会

聖誕七五〇年記念事業の計画について協議。記念講演会の開催、記念出版を計画する。事業推進のため各派より1名を選出し、記念事業専門委員会を設置して進展を図る。

昭和41年

〈流行〉

学園紛争（全学連）

「星影のワルツ」千昌夫

4月 第一回赤字国債発行

11月 国立劇場開場

昭和43年

〈流行〉

ハレンチ

「ゆうべの秘密」小川知子

6月 小笠原諸島返還される

11月 川端康成がノーベル

文学賞受賞

12月 三億円事件発生

昭和44年	昭和45年
3月5日	1月26日
<p>於、日蓮宗宗務院 理事会                      聖誕七五〇年記念慶讃事業の企画協議。聖伝劇の上演について明治座講演を計画。</p>	<p>於、浅草 草津亭 理事会                      聖伝劇の実現へ向け具体策会議、門下各派の観劇動員可能数などの検討。</p>
6月17日	
<p>於、日蓮宗宗務院 理事会                      明治座講演の件具体化に向け小委員会を設け専門的に検討する。</p>	
7月2日	
<p>於、湯ヶ原 富士屋旅館 常任理事会                      祖廟輪番給仕の円滑をはかるため身延山総務を交えて懇談。</p>	
7月31日	
<p>於、日蓮宗宗務院 企画委員会                      聖誕七五〇年記念慶讃事業聖伝劇明治座公演について企画検討。</p>	
8月8日	
<p>企画検討。</p>	
9月4日	
<p>於、東京・台東区 藤田 企画委員会                      聖伝劇明治座公演に関する明治座への交渉案まとまる。</p>	
10月1日	
<p>於、明治座 常任理事・企画委員                      聖伝劇明治座公演につき明治座側に趣旨を申し入れ第一段階の話し合いの合意をうる。</p>	
10月23日	
<p>於、日蓮宗宗務院 理事会                      明治座公演に関する交渉経過の説明報告。昭和46年4月、聖伝劇を明治座で公演する。門下連合会主催とし、脚本、脚色、俳優等について門下連合会の希望を尊重する。明治座側より観客動員について25日興行とし門下連合会に3万5千人動員の要請あり。昭和45年が龍口法難七〇〇年記念の年に相当するにより、45年中に記念行事を開催する件協議。</p>	
11月27日	
<p>於、日蓮宗宗務院 理事会</p>	
昭和44年	
〈流行〉	
ボウリングブーム	
あつと驚くタメゴロー	
「ブルーライトヨコハマ」	
マ」いしだあゆみ	
7月 アポロ十一号打ち上げ	
げ	
大学紛争激化	

龍口法難七〇〇年記念行事は国柱会幹施とし、連合会は協賛し動員に協力する。行事開催日を9月13日とする。

5月8日

於、明治座 常任理事・企画委員

聖伝劇公演、門下連合会協賛で46年4月実施きまる。脚本小幡欣治、出演松本幸四郎ほか高麗屋一門ときまる。

芸術伝道の場として各派観劇動員をはかる具体方針を協議。

8月20日

於、日蓮宗宗務院 理事会

龍口法難七〇〇年慶讃記念大会実施企画。

9月13日

日蓮聖人龍口法難七〇〇年記念大会開催

於、九段会館 門下連合会主催

挨拶・片山日幹理事長。講演・紀野一義、中野日裕、福島泰信の各師。琵琶「龍の口」柴田旭堂師。

聖史劇「土の牢」国柱会芸術部出演。

法華宗真門流 北海道日泰寺他 祖廟輪番給仕。

昭和46年

4月3日～27日

日蓮聖人降誕七五〇年慶讃「聖伝劇日蓮」明治座公演

於、明治座 門下連合会協賛各派観劇動員の件

於、熱海 玉の井旅館 理事会

渡部公允日蓮宗宗務総長、理事長に就任。45年度会務、明治座公演成果報告、及び利益金を門下連合会積立金とする件。規約一部改正。

於、東京・京橋 富士家 理事会

聖祖降誕七五〇年記念実施の諸行事を総括して憶年会。

昭和47年

6月9日

於、日蓮宗宗務院 理事会

日蓮宗主催「佐渡始願御本尊顕発七〇〇年記念慶讃法要」に協賛する件。

韓国に仏教伝来謝恩碑を建立する事業に門下連合会として5万円を賛助する件。その他、門下連合会事業計画を協議。

昭和45年

〈流行〉

歩行者天国が各地で実施

「港町ブルース」森進一

3月 日本万国博開催

11月 三島由紀夫自決

昭和47年

〈流行〉

パンダブーム

「せんせい」森昌子

4月 川端康成自殺

5月 沖繩祖国復帰実現

9月 田中角栄首相訪中、

日中共同声明（日中国交回復）

昭和48年	昭和49年
2月5日	8月8日
6月22日	9月3日
7月31日	11月27日
日本山妙法寺藤井日達師米寿祝賀へ表賀。	10月24日
於、品川パシフィックホテル 理事会	10月23日
新年懇親会を兼ね、祖廟輪番給仕問題、聖祖七〇〇遠忌事業の件等自由懇談。	於、日蓮宗宗務院 小委員会
於、京橋 富士家	於、京橋 富士家 理事会
聖祖七〇〇遠忌を期して題目系教団の門下連合会加入の呼びかけに関する件、この件の具体化につき小委員会を設置し推進する。その専門委員に斎藤龍尊師、蓮池東洋師、朝倉俊夫師、水本大岳師、木村日玄師、田中香浦師が推薦される。 門下連合会理事会を年に1回身延祖廟参拝理事会として実施する方針が打出され、明年より実行することを決定。	11月下旬に京都に於て理事会を開催する件。
於、日蓮宗宗務院 小委員会	於、日蓮宗宗務院 小委員会
題目系教団の連合問題について協議。来るべき聖祖七〇〇遠忌へむけて門連が共同して営む報恩記念事業に題目系諸教団の参加をよびかける。その世話人会を発足させる。	日蓮聖人七〇〇遠忌記念事業計画案協議。11月の理事会を京都妙満寺にて開催する件協議。
題目系教団へよびかけの問題協議。	於、京都 妙満寺 拡大理事会
於、京橋 富士家 常任理事会	京都門連との合同拡大理事会を開催。提携交流を深め七〇〇遠忌を期し大同団結を目指す。昭和50年度より春は身延祖廟参拝理事会、秋は京都に理事会開催を原則とする。
日蓮聖人七〇〇遠忌記念事業について自由懇談。	
昭和48年	昭和49年
〈流行〉	〈流行〉
オイルショック	セブンイレブンが東京都
「てんとう虫のサンバ」	江東区豊州にオープン
チェリッシュ	長嶋茂雄引退挨拶「わが
5月 東ドイツと国交樹立	巨人軍は永久に不滅です」
	3月 フィリピン・ルバン
	グ島から小野田元少尉帰還
	10月 佐藤栄作前首相にノ
	ーベル平和賞

昭和50年

2月24日

於、身延山 祖廟参拝・理事会  
祖廟参拝後久遠寺書院にて理事会、七〇〇遠忌事業の件協議。規約一部改正。七〇〇遠忌記念事業企画委員会を設置。

3月25日

於、東京・日本橋 あたりや 企画委員会

7月9日

七〇〇遠忌記念事業の具体化検討。計画の進展をみる。  
於、神田学士会館、常任理事会

10月2日

七〇〇遠忌記念事業の企画推進。聖人劇については前進座に依頼する方向。オラトリオ日蓮聖人については作曲黛敏郎、作詞西川満の2氏が有力候補としてあがる。聖人展については新聞社との共催の方向が打ち出された。  
於、京都 本徳寺文化会館 理事会  
本門法華宗本年度より正式加入。

昭和51年

4月7日

七〇〇遠忌記念事業①オラトリオ、②聖伝劇、③聖人展について具体化を協議。京都門連との懇談会。

6月7日

於、日蓮宗宗務院 常任理事会  
オラトリオ・作曲黛敏郎、作詞西川満の両氏にきまる。聖人展・日蓮教学研究所に企画依頼。共催新聞社を読売新聞社として交渉をすすめる。聖伝劇・前進座による全国興行、台本原案の検討。新教団へのよびかけ推進。  
於、身延山 祖廟参拝・理事会

7月10日

祖廟参拝、京都門連より御真骨奉遷実現の懇請書を身延山当局に手交した。  
於、山梨・石和 ホテル石和 理事会  
七〇〇遠忌記念事業の現況報告にもとづき各事業の具体化を協議。門連の地方組織と本部機構の整備を検討。

10月15日

於、日蓮宗宗務院 常任理事  
村松寿顕日蓮宗宗務総長、理事長に就任。規約改正審議。顧問、相談役を置く事を決定。  
於、日蓮宗宗務院 常任理事会

昭和50年

〈流行〉

アロエ、紅茶キノコ、赤ヘル軍団  
「シクラメンのかほり」

布施明

4月 ベトナム戦争終結

5月 エリザベス女王来日

7月 沖縄海洋博開催

昭和51年

〈流行〉

およげタイヤキくん

「津軽海峡冬景色」石川さゆり

7月 田中角栄前首相逮捕

11月24日	<p>日蓮聖人展企画。日教研、阪神百貨店中井健之課長の参加を得て専門的に協議。            於、京都 本隆寺 理事会</p> <p>七〇〇遠忌記念事業の実施内容各部門とも具体化する。京都門連と中央門連との有機的関連を確立するため京都門連の加盟なる。            祖廟御真骨奉遷の促進および祖廟輪番給仕の鼓吹あり。</p>	11月 天皇在位五十周年記念式典
昭和52年	<p>6月23日</p> <p>於、身延山 祖廟参拝・理事会            事業報告・決算報告・今年度予算承認。            門連共同事業、規約の改正など協議。            オラトリオ日蓮聖人展については昭和52年1月4日に作詞が完成。            聖人劇については中井氏案を中心にA班・B班に分かれて具体化を図る。            規約改正の件協議。</p>	<p>昭和52年</p> <p>〈流行〉            カラオケ            「愛の終着駅」八代亜紀            5月 大学入試センター試験発足            9月 日航機ハイジャック事件            9月 王貞治国民栄誉賞第一号受賞</p>
昭和53年	<p>11月18日</p> <p>於、京都 宥清寺 理事会・懇談会</p> <p>七〇〇遠忌記念事業の現況報告。事業成満をめざし懇談。            御真骨奉遷問題の取扱いについて協議。(身延山当局に対する決議文を採択)</p> <p>1月から6月の間、小委員会3回開催。</p> <p>於、京都 宥清寺 理事会・懇談会</p> <p>七〇〇遠忌記念事業聖人劇について細目協議。            聖人展の専門委員に古瀬堅徳師、蓮池東洋師を推し今後の推進をはかる。オラトリオ演奏会について基本計画協議。ライブレコード制作を内定。</p> <p>2月4日</p> <p>理事長、常任理事が久遠寺に於いて、京都理事会にて採択された「御真骨奉遷に関する要望書」を望月法主に手交。</p> <p>4月4日</p> <p>於、日蓮宗宗務院 常任理事会</p> <p>5月18日</p> <p>於、日蓮宗宗務院 常任理事会</p>	<p>昭和53年</p> <p>〈流行〉            窓ぎわ族            「みちづれ」牧村三枝子</p> <p>5月 成田(新東京国際)空港開港</p>

10月18日	昭和52年度門連事業報告、予算、決算承認。 共同事業中聖人劇については、昭和54年5月東京読売ホール興行を皮切りに自主興行4ヶ所、地方買取り巡回興行全国34ヶ所、70乃至80ステージの予定にて推進中（聖人劇―地方巡演、買取興行6月より11月、51ステージ、計82ステージ）。 聖人展については昭和56年東京、大阪、九州の各主要都市百貨店で行うべく推進中。 於、日蓮宗宗務院 常任理事会
11月14日	七〇〇遠忌記念事業各部門推進の件協議。 題目系新興教団への呼びかけに関して（仮称）日蓮聖人七〇〇遠忌報恩協議会結成の件協議。 七〇〇遠忌共同事業に加えて、日蓮聖人門下青年の集い、洋上研修の件につき提案がなされた。田中常任理事の提案。 於、京都 妙蓮寺西陣会館 理事会
12月2日	共同事業の推進、特に3本柱の共同事業に加えて御門下青年の結集（青年の船）洋上研修についての提案が正式になされ全員の賛同を得、企画の具体化については常任理事に一任された。 日蓮聖人劇全国公演に関する門連と前進座との合意なり、覚書を交し正式に契約締結。 於、日蓮宗宗務院 常任理事会
12月14日	日蓮聖人劇観劇券各派配分について協議。聖人展企画および新聞社と共催の条件内容の討議。新提案の青年洋上研修（青年の船）について本格的企画に入る。 於、日蓮宗宗務院 常任理事会
昭和54年 2月14日	日蓮聖人劇前進座全国公演の実施細目協議。聖人展につき読売新聞社と折衝。オラトリオ演奏発表会の企画とライブレコード制作方針決定。青年の船の推進に伴い企画推進委員を各派より選出。報恩協議会の推進協議。前進座、阪神デパートよりオプザーバーとして担当者出席。 於、日蓮宗宗務院 常任理事会
4月18日	

昭和54年

〈流行〉

インベーダーゲーム  
「贈る言葉」 海援隊

5月18日	<p>七〇〇遠忌記念事業各部門の進展状況にもとづく対策協議。前進座よりオブザーバーとして担当者出席。3月7日、日蓮聖人劇舞台稽古の報告。</p> <p>於、日蓮宗宗務院 常任理事会</p> <p>日蓮聖人劇公演開幕。会場にて各派刊行書籍販売方針決定。聖人展企画、実行予算、入場前売券各派分担と動員計画。オラトリオ演奏会場の検討。青年の船企画推進委員会の件協議。</p> <p>於、身延山 祖廟参拝・理事会</p>
6月27日	<p>日蓮聖人劇東京公演終了報告。聖人展読売新聞社と共催にむけ進展。オラトリオ発表演奏会の企画。青年の船は各派選出の企画推進委員会に細目企画を委嘱すでに推進中。聖人展は東京、大阪、福岡の3ヶ所で開催。総計10万人の観覧動員をはかる。</p> <p>於、日蓮宗宗務院 常任理事会</p>
7月27日	<p>日蓮聖人劇（第1次）円了精算協議。聖人展動員前売券分担、東京4万枚、大阪3万枚、福岡3万枚内定。読売新聞社および開催引受パートナーとの細部交渉について協議。オラトリオ演奏会実施予算の検討と会場選考協議。青年の船使用船に英国籍コーラルプリンセス号が有力候補にあがる。</p> <p>於、東京読売新聞本社</p>
9月22日	<p>日蓮聖人展について門連と読売新聞社の共同開催が正式決定し、東京、大阪、福岡の3会場で開催するため内容の具体化に入る。</p> <p>於、京都 要法寺 理事会</p>
11月21日	<p>事業報告、共同事業、報恩協議会の件協議。聖人劇については5月11日初演以来11月6日迄全国133ステージの興行を盛況裡に終了。主演の嵐圭史丈より挨拶。</p> <p>青年の船については、青年の船企画委員より正式企画書が提出され発表説明が行われた。</p>
12月21日	<p>於、日蓮宗宗務院 常任理事会</p> <p>日蓮聖人劇第2部公演計画協議。第1次公演精算の件、聖人展、オラトリオ、青年の船各部門とも推進にむけ積極意見交換。</p>
12月	<p>KDD事件問題化</p>
7月	<p>東名高速日本坂トンネル内で追突事故</p>

5月22日

於、日蓮宗宗務院 常任理事会

日蓮聖人第2部公演(昭和56年度公演)の会場および日程案を協議。日蓮聖人展は主催、日蓮聖人門下連合会・読売新聞社。後援、読売テレビ放送網、山口テレビ放送網。協力、立正大学。会期、昭和56年4月9日大阪阪神デパートを皮切りに東京、小倉と連続して各2週ずつ開催が内定。

オラトリオ日蓮聖人の作曲15楽章のうち14楽章出来、演奏会及びライブレコード制作について協議。青年の船参加動員についてアンケート調査。

6月25日

於、身延山 祖廟参拝・理事会

石和ホテルかげつにて 会議と懇談会。

御真骨奉遷問題は継続して要望していく。

七〇〇遠忌記念事業各部門の総合進展をはかる。

7月25日

於、日蓮宗宗務院 常任理事会

日蓮聖人劇第2部全国公演に関し自主公演、買取公演、地方公演の細部検討。オラトリオに関しては専門委員(大橋常任理事、富川、長の各師)が細目の渉にあたる。青年の船の企画推進に伴い、今後進展をはかるため実行委員会に主体性を委ねる。日蓮聖人展の実施に伴う「記念図録」の制作頒布を決定。

9月1日

於、日蓮宗宗務院 常任理事会

青年の船企画推進委員会を青年の船実行委員会とする。日蓮聖人展は、東京・上野松坂屋、小倉・井筒屋、大阪・阪神百貨店の3会場で開催を決定。

10月15日

於、日蓮宗宗務院 常任理事会

日蓮聖人劇第2部公演総合計画決定。オラトリオ発表演奏会、ライブレコード製作の件細目検討。日蓮聖人展の会期(3会場)と観覧前売券の割当配分を内定。青年の船実行委員会発足し実行へ向け推進。

10月30日

於、京都 本禅寺 理事会

日蓮聖人展開催各会場動員の件、東京5万、大阪3万、小倉2万の割合を努力目標とする。オラトリオの演奏は東京交響楽団を内定。日蓮聖人劇観劇券は第1部公演と同額

〈流行〉

学園ドラマ

竹の子族

「大阪しぐれ」都はるみ

5月 モスクワオリンピック

ク不参加決定

6月 初の衆参同時選挙

10月 山口百恵引退

昭和56年	11月25日	<p>とする。青年の船企画委員会が実行委員会に移行し、委員会提出の実行企画が常任理事会に於て承認され実動に入る。</p> <p>於、日蓮宗宗務院 常任理事会 塩田義朗日蓮宗宗務総長、理事長就任。</p> <p>七〇〇遠忌記念事業各部門の実行に向け確認討議。</p> <p>於、日蓮宗宗務院 常任理事会 日蓮聖人展動員各派割当数決定。青年の船参加趣意書出来、各派へ一斉配付。オラトリオレコードの予約普及体制づくりを検討。</p>	11月 国会開設九十周年記念式典
	12月19日	<p>於、日蓮宗宗務院 常任理事会 日蓮聖人展動員各派割当数決定。青年の船参加趣意書出来、各派へ一斉配付。オラトリオレコードの予約普及体制づくりを検討。</p>	
	3月16日	<p>於、日蓮宗宗務院 常任理事会 日蓮聖人七〇〇遠忌報恩記念正当年にあたり記念事業各部門実行に向け本格的体制を確立。各部門実行スケジュールに即して展開。</p> <p>於、身延山 祖廟参拝・理事会 各派管長、会長、総長出席のもと祖廟前に日蓮聖人七〇〇遠忌報恩法味言上。</p> <p>かねて京都門連より御真骨奉遷問題の懇請書が身延山当局に出されていたが、その正式回答書が京都門連宛送達された件披露。</p> <p>記念事業中、聖人展について古瀬堅徳常任理事より、大阪(阪神百貨店56・4・9)4・21)東京(上野松坂屋4・23)5・5)九州(小倉井筒屋5・8)5・19)が多大な成果をあげて無事円了。聖人劇について太田奠壤常任理事、オラトリオ日蓮聖人については大橋邦正常任理事、青年の船については木村光紹常任理事よりそれぞれ報告が行われた。</p> <p>於、京都 妙顕寺 理事会 日蓮聖人展、日蓮聖人劇の実施報告。</p>	昭和56年 〈流行〉 アニメ・アラレちゃん 「ルビーの指環」 寺尾あきら 2月 ローマ法王来日
	6月19日	<p>かねて京都門連より御真骨奉遷問題の懇請書が身延山当局に出されていたが、その正式回答書が京都門連宛送達された件披露。</p>	
	11月10日	<p>記念事業中、聖人展について古瀬堅徳常任理事より、大阪(阪神百貨店56・4・9)4・21)東京(上野松坂屋4・23)5・5)九州(小倉井筒屋5・8)5・19)が多大な成果をあげて無事円了。聖人劇について太田奠壤常任理事、オラトリオ日蓮聖人については大橋邦正常任理事、青年の船については木村光紹常任理事よりそれぞれ報告が行われた。</p> <p>於、京都 妙顕寺 理事会 日蓮聖人展、日蓮聖人劇の実施報告。</p>	10月 福井謙一がノーベル化学賞受賞
	日蓮聖人展	<p>大阪 阪神百貨店 昭和56年4月9日～4月21日 35000名動員 東京 上野松坂屋 昭和56年4月23日～5月5日 45000名動員 九州 小倉井筒屋 昭和56年5月8日～5月19日 20000名動員</p>	
	計	100000名動員	

日蓮聖人劇

東京 浅草公会堂	昭和56年9月2日～9月10日	18ステージ
東京 読売ホール	昭和56年9月11日～9月15日	10ステージ
大阪 朝日屋	昭和56年6月28日～7月5日	16ステージ
京都 南座	昭和56年7月22日～7月28日	14ステージ
名古屋 中日劇場	昭和56年8月21日～8月24日	8ステージ
合計		66ステージ
地方巡業	昭和56年7月7日～11月12日迄	31都市36ステージ
上記計		102ステージ

オラトリオ日蓮聖人

昭和57年4月、新宿文化センターで行われる可能性について発表。

青年の船

本年5月15日、コーラルプリンセス号の船主であるスワイヤー SHIPPING 社と日蓮聖人門下連合会との間で、正式に契約書を取り交わして実動に向け計画が進められている。

以上報告の他、オラトリオ日蓮聖人、青年の船の実行について討議。

於、日蓮宗宗務院 常任理事会

日蓮聖人展円了反省会の件、日蓮聖人劇公演終了精算事務の件、オラトリオ発表演奏会の具体的内容について、青年の船参加動員促進の件等協議。

於、日蓮宗宗務院、常任理事会

日蓮聖人劇事業決算報告。オラトリオ発表演奏会の実行計画併せてライブレコード制作を協議。青年の船参加者405名となりさらに目標人員達成へむけ努力する。

青年の船、サイパン・グアム島へ500名乗船して出航

於、東京・新宿文化センター大ホール 観客1800名

オラトリオ日蓮聖人発表演奏会開催。

於、日蓮宗宗務院 常任理事会

12月18日

昭和57年

2月1日

3月26日～4月5日

4月22日

5月4日

昭和57年

〈流行〉

心身症に逆噴射

「北酒場」細川たかし

「さぎさんの宿」大川栄

策

2月 ホテルニュージャパ

ン火災

6月18日

青年の船事業会計中間報告。青年の船「記録集」刊行の件、オラトリオライブレコード4千枚セット制作の件、青年の船実行委員会全員参加の円成式の件協議。  
於、身延山 祖廟参拝・理事会  
御廟前「七百遠忌報恩記念事業」円成式  
御廟前に共同事業円成報告並びに青年の船団長持田貫宣師「青年の船宣言」朗読（実行委員会全員参列）。

事業報告、4大事業円成に鑑み各担当理事より詳細報告。

青年の船記録集の制作承認、編集委員会構成の承認、門下青年の連帯について意見の交換があった。

予算・決算承認。

於、京都 妙満寺 理事会

七〇〇遠忌報恩記念事業円了の総括報告。

門下連合会の今後の事業活動について意見交換。田中香浦相談役より本件に関する意見書の披露あり、今後の検討課題とする。

日蓮宗制作の「青年の船記録映画」16ミリカラー作品の試写を行う。

昭和58年

5月24日

於、日蓮宗宗務院 常任理事会

遠藤日護日蓮宗宗務総長理事長に就任。

祖廟参拝理事会の件協議。

青年の船記録映画、記録集完成祝賀会を6月25日横浜大棧橋コーラルプリンセス船上で開催する件承認。

於、身延山 祖廟参拝・理事会

事業報告、予算、決算承認。

門連共同事業について協議。

青年の船祝賀会に30万円補助決定。

御門下青年組織化の問題は重要課題で、今後積極的に討議を重ね最善の方向を打ち出すべく検討する事を申し合わせた。

8月 参議院議員全国区比例代表制決定

12月 テレホンカード使用開始

昭和58年

〈流行〉

4月 東京デイズニードラン  
ド開園

6月7日

8月10日	於、日蓮宗宗務院 常任理事会 黛音楽事務所と今後オラトリオ日蓮聖人のレコード制作に関する新たな覚書を交す。御門下青年組織化の問題、各派出版図書の相互交換の提言等検討。	9月	三宅島大噴火
9月16日	於、日蓮宗宗務院 常任理事 御門下青年組織問題の検討成案ならず保留。京都理事会の準備討議。	10月	ロッキード事件で田中角栄に有罪判決
11月22日	於、京都 妙覚寺 理事会 事業全般報告。門下連合会の今後の活動について協議。京都門連との懇談。	昭和59年	昭和59年 〈流行〉 エリマキトカゲ 「娘よ」芦屋雁之助
6月6日	於、身延山 祖廟参拝・理事会 門連事業報告、昭和58年度事業報告、決算・予算承認。門連活動についてはなお常任理事会に於いて討議を重ね京都理事会に臨む事とした。	3月	グリコ事件
11月8日	於、日蓮宗宗務院 常任理事会 京都理事会に臨むための門連活動に関する諸問題を自由懇談。	7月	ロサンゼルスオリンピック開幕
11月21日	於、京都 要法寺 理事会 事業報告。門連事業について協議。前進方針で今後に処することを申し合わせる。	9月	金斗煥韓国大統領初来日
昭和60年	於、日蓮宗宗務院 常任理事会 身延山祖廟参拝理事会について協議。	12月	電々公社民営化
5月11日	門下連合結成満25周年に相当するので、それにふさわしい事業を行うべきだとの提案がなされ諒承され身延山理事会に提案することとなった。	昭和60年	昭和60年 〈流行〉 キン肉マン 「そしてめぐり逢い」五木ひろし
6月25日	於、身延山 祖廟参拝・理事会 事業報告、決算、予算承認。 門連結成25周年にあたり、来る京都理事会を記念大会とする。その為に事務局より各派へ先師（御遷化を含む）の名簿及び各派門連のあゆみを御提出頂いて御参加を頂き、先師追悼法要を行い門連の今後について共に語り合う場を持つ事を決定した。尚、門連のあゆみについては常任理事会でまとめることになった。	3月	科学万博つくば開催
10月21日	於、日蓮宗宗務院 常任理事会	8月	日航ジャンボ墜落

11月21日	<p>長瀬貞公日蓮宗宗務総長、理事長に就任。 身延理事会の決定に基づき門連結成25周年を記念する京都理事会とする事を決定した。 会場は妙顕寺とし、法要等については京都門連に一任を決定。 於、京都 妙顕寺 日蓮聖人門下連合会結成25周年記念大会開催。記念法要に併せて門連関係遷化先師三十一霊位の追悼法要厳修。 記念講演「門下連合会活動の回顧と今後の展望」が国柱会田中香浦会長により行われた。理事会は京都門連現況報告。門下連合青年代表報告、門下連合今後の展望について懇談。会議後「石長松菊園」にて結成25周年祝賀懇親会を開催。席上本大会声明を発表する議が提案され採択。 於、東京・大森海岸 円山 常任理事会 法華経文化国際会議へ参加の件、横川定光院護持顕彰の件、門下連合会檀信徒連繋強化の件、各派門祖の墳墓を祖廟近くに建立する件、門連各派より人材を結集しフォーラム開催の件。寺庭婦人団結の件が自由懇談された。門下連合会機関紙「門連だより」を明年より発刊する件決定。</p>	11月 阪神タイガース優勝
12月18日	<p>於、日蓮宗宗務院 常任理事会 機関紙「門連だより」創刊号を4月28日発刊として実現をはかる。編集実務は青年の船実行委員をベースとして各派より1名の編集委員を選任し制作を委任する。 門連規約一部改正案審議、正式決定は次回理事会にて。 於、日蓮宗宗務院 常任理事会 身延理事会提出議題の確認。機関紙の発行制作進行報告。比叡山献燈二二〇〇年記念行事に門連参加の件、地方門連組織拡大の件を協議。 於、身延山 祖廟参拝・理事会 機関紙「門連だより」創刊号発刊初配布。門下連合会務報告。今後年2回乃至3回発行の方針を諒承。門連規約一部改正決定。門連活動についてフリートークキング。当面「門</p>	昭和61年
2月18日	<p>於、日蓮宗宗務院 常任理事会</p>	〈流行〉
4月22日	<p>於、日蓮宗宗務院 常任理事会</p>	4月 天皇在位六十周年記念式典
5月14日	<p>於、身延山 祖廟参拝・理事会</p>	新人類 「命くれない」瀬川瑛子

6月19日

連だより」の充実発展を期す。  
於、日蓮宗宗務院 常任理事会

9月9日

機関紙「門連だより」第2号編集に関する件。編集、取材活動等について各派より1名の編集委員を推薦、編集委員会を設置し門連より正式に制作を委嘱する。  
於、日蓮宗宗務院「門連だより」編集委員会

10月9日

「門連だより」第2号編集に関する件。各派推薦の編集委員出揃い互選により編集長に富川孝恭師就任。第2号発行を11月1日、第3号発行は62年3月を予定、編集内容の細目検討。  
於、日蓮宗宗務院 常任理事会

11月6日

「門連だより」編集委員会報告。「門連だより」制作予算目論見。京都理事会の議題について。門連各派分担金の改定を決定。  
於、京都 妙満寺 理事会

12月18日

記念講演「顕本法華宗開祖日什上人について」と題し古瀬堅徳師講演。門下連合会会務報告。「門連だより」編集委員会報告。京都門連事業報告。地方門連組織の推進と連携の件。叡山開創一二〇〇年行事に門連としての対応策の件。門連相談役推薦の件。理事会終了後京都国際会議場にて懇談会。  
於、東京・蒲田 いろいろ 常任理事会

昭和62年

2月9日

「門連だより」第3号進展状況報告。比叡山開創一二〇〇年に際し、叡山当局より日蓮聖人御門下にて1日を御門下単独で大法要を営んで欲しい旨の要請に対し、門下連合会として参加奉行する方針を内定。恒例の憶年懇親会を行う。  
於、日蓮宗宗務院 常任理事会

3月26日

比叡山開創一二〇〇年法要参加の件。日蓮聖人門下連合会として参加奉行を決定。法要には御曼荼羅、御聖像を奉安する。各派より式衆奉行ならびに随喜参列者の動員をはかる。なお恒例の京都門連開宗会を横川定光院で同日開催する。法要日は5月23日と決定。  
於、日蓮宗宗務院 常任理事会

11月 伊豆大島三原山噴火

昭和62年

〈流行〉

ファミコン

「人生いろいろ」島倉千

代子

5月23日	比叡山開創一二〇〇年法要参加について実施細目の協議。 於、京都比叡山根本中堂	5月 朝日新聞阪神支局襲撃事件
6月10日	日蓮聖人門下連合会主宰 叡山開創一二〇〇記念法要を執行。各派随喜参加一千に及ぶ。続いて定光院参拝。 於、身延山 祖廟参拝・理事会	7月 石原裕次郎死去
10月14日	門下連合会会務報告。地方門連結成準備に関する件、大阪、北海道、福井に結成の動きあり、発足に協力するため常任理事より担当専門委員を定め、結成促進をはかる。事業予算措置の審議。 於、日蓮宗宗務院 常任理事会	
11月25日	渋谷直城日蓮宗宗務総長、理事長就任。 「門連だより」第5号刊行の件。11月京都理事会対策協議。 於、京都 本法寺 理事会	
12月8日	本法寺什宝拝観。講演「冠鑑日親上人の不惜身命の弘法」と題し金山寛成師講す。 会務全般報告。地方門連結成の件、「門連だより」第5号編集の件。第2回国際法華経学会に関する件を協議。 終わって嵐山「嵐亭」に移り懇親会開催。 於、東京・蒲田 いろいろ 常任理事会	
昭和63年	門下連合会事務局幹事の編成について。国際法華経学会の件、「門連だより」編集委員会 の件。 憶年懇親会開催。	昭和63年 〈流行〉 「酒よ」吉幾三
5月25日	於、日蓮宗宗務院 常任理事会 会務全般報告。身延理事会对策協議、「門連だより」編集委員会運営の件、および第4号紙発行促進の件。国柱会より「日蓮聖人門下連合会への提案」が出される。	4月 リクルート疑獄事件 表面化
6月10日	於、身延山 祖廟参拝・理事会 門連事業報告。地方門連結成に関する件、「門連だより」刊行について第5号刊行に向け活動中、紙面充実のため一層の協力要請。国柱会より要請の「田中智学の世界展」	9月 ソウルオリンピック開幕

11月29日

開催に対し門下連合会は後援することを諒承。  
於、京都 本隆寺 理事会

講演「本隆寺の沿革」と題し林日圓師講す。

門下連合会事業報告、京都門下連合会事業報告、地方門連（大阪・北海道）発足準備に関する件。昭和65年が門下連合会結成30年にあたるため記念事業企画案が提出され、趣旨諒承、事業内容について常任理事会で煮つめる。なお64年度1年を具体化の準備期間とする旨申し合せた。会議終了後会場を「しょうざん」に移し懇親会を開催。

12月12日

於、東京・蒲田 竹亭 常任理事会

12月11日、大阪市日蓮宗雲雷寺にて大阪日蓮聖人門下懇話会発足。京都門連より「法華文化史展」の企画が発表され開催の節は門下連合会の協力を要請、目下企画推進中。門下連合会結成30年記念事業について明年早々より協議検討に入る。会議後、恒例の憶年懇親会。

平成元年

5月15日

於、日蓮宗宗務院 常任理事会

日蓮聖人北海道門下連合会結成の動き進展し本年度内に正式発足をめざす。門下連合会結成30周年記念事業について提案の原案を3件にしぼり、成案して身延理事会で協議決定する。記念事業のひとつ、『門連30年の歩み』記念誌の刊行について討議、さらに検討する。「法華文化史展」の開催は数年後に延期されることとなった。

6月13日

於、身延山 祖廟参拝・理事会

門下連合会事業報告、地方門連結成について大阪について北海道門連が仮発足。「門連だより」第7号発行より門連結成30周年記念内容を重点とする。協賛広告の要請がなされた。門連結成30周年記念事業の事業内容を3件にしぼった案を協議検討、京都理事会で正式に決定する。

10月20日

於、日蓮宗宗務院 常任理事会

京都理事会対策協議。大阪、北海道両門連代表者の出席を招請する。門連30周年記念事業の内容ほぼ成案。『30年の歩み』記念誌の刊行予算、発行部数、編集方針等の討議がなされた。

昭和64年・平成元年

1月 昭和天皇崩御

平成と改元

3月 横浜博覧会開幕

4月 消費税実施

6月 美空ひばり死去

11月16日

於、京都 妙覚寺 理事会

講演「妙覚寺の沿革」と題し関根龍雄師講ず。「門連だより」第6号（1月15日）第7号（6月13日）それぞれ発行。京都門連事業報告。地方門連結成状況報告が大阪門連伊丹栄彰師、北海道門連飯登足について白部健順師より報告。日蓮聖人門下連合会結成30周年記念事業は①結成30周年記念祖廟奉告式、②京都妙蓮寺で記念法要、記念講演、祝賀会、③30年の歩み記念誌の刊行、を实行する。以上を決定した。会議後「伊勢長」にて懇親会。

平成2年

1月29日

於、日蓮宗宗務院 常任理事会

門下連合会結成30周年記念事業の实行の年にあたり、各事業の实行内容の具体的検討協議。6月実施の祖廟奉告式を6月13日と決定。京都記念法要、記念講演は11月28日会場は本門法華宗大本山妙蓮寺、記念法要に併せて門連関係物故先師追悼を行う、法要内容は妙蓮寺および京都門連に一任する。記念誌の刊行は11月20日までに制作を完了する。刊行費予算措置、各派配本原則等協議。

4月24日

於、日蓮宗宗務院 常任理事会

伊藤通明日蓮宗宗務総長、理事長就任。

身延理事会対策。記念事業の一つ、門連30周年記念祖廟奉告式ならびに理事会運営の諸件を協議。11月開催の京都における記念法要、物故者追悼、記念講演、祝賀会、記念誌刊行の諸件につき再確認実行を決定。

6月13日

於、身延山 祖廟参拝・理事会

日蓮聖人門下連合会結成30周年記念祖廟奉告式举行。

奉告式は、法華宗真門流上田日源管長、本門法華宗中村日宣管長臨席し、各派代表参集して伊藤通明理事長導師のもと、御廟前に報恩謝徳の至誠を捧げ、奉告文一章を奏上した。

於、久遠寺 新館会議室 理事会

今秋11月京都本門法華宗大本山妙蓮寺にて開催の、門下連合会結成30周年記念大会行事、記念大法要、記念講演、祝賀会等につき日程の確認と具体的行事内容の検討を行

12月 米ソ首脳会談で「東西冷戦終結」

平成2年

6月 礼宮文仁親王結婚、秋篠宮家創立

う。さらに記念誌『日蓮聖人門下連合会30年の歩み』の刊行を最終決定する。会議つて会場を下部温泉「守田ホテル」に移し懇親会を行った。

10月2日

於、日蓮宗宗務院 常任理事会

京都理事会对策協議。上半期事業報告、諒承。結成30周年記念事業について、記念法要及び門連関係遷化先師追悼法要の奉行、記念講演「門連30周年に想う」を本法寺貫首金山日龍師に依頼、機関紙編集委員会に記念誌作成に尽力したとして感謝状の贈呈等を行うことを協議した。『小川泰堂全文集』を門連推薦とする件につき諒承された。

11月28日

於、京都 妙蓮寺 理事会

日蓮聖人門下連合会結成30周年記念法要、並びに門連関係遷化先師47靈位の追悼法要を厳修。

記念講演「門連30周年に想う」と題し本法寺貫首金山日龍師講す。

講演「妙蓮寺の沿革」と題し妙蓮寺貫首中村日宣師講す。

門連上半期事業報告、承認。京門連事業報告。地方門連活動として、大阪懇話会伊丹栄彰師、北海道門連白部健順師より活動報告が行われた。会議終了後、「京都ブライトンホテル」に場所を移し、門連役員及び機関紙編集委員による懇親会を行った。

平成3年

5月23日

於、日蓮宗宗務院 常任理事会

身延理事会对策協議。会務全般報告、諒承。結成30周年記念誌『30年の歩み』を文化庁宗務課、全日本仏教会、マスコミ関係等に寄贈することとした。

6月13日

於、身延山 祖廟参拝・理事会

会務全般報告、承認。京門連事業報告。地方門連活動として、大阪懇話会吉永正晴師、北海道門連白部健順師より活動報告が行われた。国柱会田中香浦師より「日蓮聖人門下連合会の在り方についての所見」が提唱され、祖廟中心問題の検討を京都理事会にて協議することが決定した。会議終了後、「ホテル守田」に場所を移し懇親会を行った。

10月7日

於、日蓮宗宗務院 常任理事会

京都理事会对策協議。上半期事業報告、諒承。身延理事会で提唱された問題について、「門連の今後の活動に関する件」と題し検討することとした。

11月 即位の礼、大嘗祭

平成3年

4月 日ソ共同声明

6月 雲仙火砕流

11月26日	<p>於、京都 立本寺 理事会 講演「立本寺の沿革」と題し立本寺貫主藤田佳正師講ず。 門連上半期事業報告、承認。京門連事業報告。地方門連活動について、大阪懇話会三田村宗鳳師、北海道門連松井義昭師より活動報告が行われた。「門連の今後の活動に関する件」について、国柱会大橋邦正師より「御真骨奉遷問題の認識及び解決について」の提案がなされ、今後検討していくことが決定した。会議終了後、「嵐山辨慶」に場所を移し懇親会を行った。</p>	
12月10日	<p>於、六本木 八山 常任理事会 各派より、①現役員遷化の対応について、②日蓮宗管長就任祝賀会案内について、③比叡山横川定光院「日蓮聖人遊学七〇〇年式典」について、④立教開宗七五〇年事業準備について、⑤各派事業の案内について、⑥陣門流総本山本成寺開創七〇〇年について、⑦日蓮本宗本山要法寺開創六五〇年について等、各派より報告及び意見が出され協議が行われた。</p>	
平成4年	5月25日	<p>於、日蓮宗宗務院 常任理事会 身延理事会対策協議。会務全般報告、諒承。監査2名の欠員による協議。日蓮宗並びに日蓮宗以外の各派より1名を門連役員経験者より選出すべきとし、身延理事会にて諮ることとした。</p>
6月22日	<p>国柱会田中香浦師より「身延山御真骨問題」について提言。門連の理念に深く係わるため今後検討していくこととした。</p>	
10月2日	<p>於、身延山 祖廟参拝 理事会 会務全般報告、承認。監査2名欠員について日蓮宗肉倉貫義師を推薦、諒承。地方門連活動について、大阪懇話会三田村宗鳳師、北海道門連白部健順師より活動報告が行われた。北海道門連による「日持上人顕彰」は、門連でも協賛すべきとの提案が出され、今後検討することとした。会議終了後、「ホテル守田」に場所を移し懇親会を行った。</p> <p>於、日蓮宗宗務院 常任理事会</p>	
平成4年	5月 国家公務員完全週休二日制開始	
6月 国連平和維持活動(PKO)協力法成立	8月 松本清張死去	
9月 学校五日制開始		

11月4日

京都理事会对策協議。上半期事業報告、諒承。  
於、京都 本証寺 理事会  
講演「本証寺の沿革」と題し本能寺貫首和田日攝師講す。

監査欠員に伴い顕本法華宗山田信正師を推薦、承認。門連上半期事業報告、承認。京門連事業報告。地方門連活動として、大阪門下懇話会三田村宗鳳師、北海道門連白部健順師より活動報告が行われた。「開宗七五〇年」に向けた各派の取組について報告がなされ、門連事業も検討すべきとの意見が出された。会議終了後、「熊彦」に場所を移し懇親会を行った。

平成5年

1月18日

於、日蓮宗宗務院 常任理事会

「門連今後の在り方」について、①全門連と地方門連の意識、②地方門連設立問題、③身延山参拝形式問題、④宗派内引継問題等協議。今後検討していくこととした。

5月31日

於、日蓮宗宗務院 常任理事会

身延理事会対策協議。会務全般報告、諒承。創価学会が「日蓮世界宗」「日蓮世界宗創価学会」を商標登録する件について、日蓮宗が異議申立を行っていることを報告。門連でも他宗教教団に対する対外的な情報交換を綿密に行っていくこととした。

6月30日

於、身延山 祖廟参拝 理事会

会務全般報告、承認。地方門連活動として、大阪懇話会長鎌泰信師、北海道門連白部健順師より報告が行われた。「門連今後の活動」について、年始の常任理事会で協議の結果、①理事会開催の形態、②30周年記念誌に挙げられた門連の問題点、③門連と地方門連の意識、④各宗派の理解と後継者問題、⑤創価学会の商標登録申請等の意見を交わした。会議終了後、「ホテル守田」内にて懇親会を行った。

10月14日

於、日蓮宗宗務院 常任理事会

京都理事会对策協議。上半期事業報告、諒承。①門連規約の見直し、②各派の意識向上を求め常任理事会を持ち回りとする件、③共通諸問題の検討、④各派出版物の交換等を協議する専門委員会設置案が出され、今後検討することとした。

11月25日

於、京都 妙顯寺 理事会

平成5年

〈流行〉

Jリーグ

規制緩和

クレヨンしんちゃん

幽ゆう白書

1月 大相撲・曙が外国人

力士初の横綱に昇進

5月 サッカーJリーグ開

幕

6月 皇太子殿下、結婚の

儀

8月 非自民連立政権誕生

平成6年

5月24日

講演「妙顯寺の沿革」と題し妙顯寺貫首沖鳳龜師講ず。  
門下連合会上半期事業報告、承認。京門連事業報告。地方門連活動として、大阪懇話会長鎌泰信師、北海道門連白部健順師より活動報告が行われた。「門連今後の活動」について、①規約の見直し、②常任理事会会場持ち回し及び会議回数について、③各派共通課題への取組、④各派出版物の交換、⑤専門委員会設置等の検討がなされた。会議終了後、「伊勢長」に場所を移し懇親会を行った。

於、日蓮宗宗務院 常任理事会

身延理事会対策協議。会務全般報告、諒承。理事長退任及び監査欠員による推薦について協議、諒承。各派「立教開宗七五〇年に関する取組み」について意見交換し、門連事業の検討を行った。「創価学会と公明党の問題」について今後検討していくこととした。

於、身延山 祖廟参拝 理事会

6月17日

奥邸正寛日蓮宗宗務総長、理事長就任。

監査欠員に伴い顕本法華宗田島敏義師を推薦、承認。会務全般報告、承認。地方門連活動について、大阪懇話会三田村宗鳳師、北海道門連白部健順師より活動報告が行われた。「門連今後の活動」について、立教開宗七百五十年に係る各派事業の報告後、門連事業として、①創価学会対策、②講演会の開催、③芸術文化展開催が提唱され今後検討することとした。会議終了後、「ホテル守田」に場所を移し懇親会を行った。

於、日蓮宗宗務院 常任理事会

10月5日

京都理事会対策協議。上半期事業報告、諒承。「開宗七五〇年」について、「法華文化展」を記念事業として理事会に諮ることとした。「創価学会の商標登録」について、特許庁より、日蓮宗は宗教団体として営利を目的としない団体であり、学会が申請する商品の商標登録としての「日蓮」の使用に不利益を生じないと決定されたことを報告。和歌山県大照寺(創価学会系)より新たに「日蓮聖宗」の商標登録が申請されていることが報告された。

於、京都 妙満寺 理事会

11月24日

平成6年

〈流行〉

イチロー効果

新・新党

4月 中華航空機が名古屋空港で着陸に失敗し炎上

6月 松本サリン事件

9月 関西国際空港開港

平成7年

5月17日

講演「妙満寺の沿革」と題し妙満寺貫首吉永日晴師講ず。  
門連上半期事業報告、承認。京門連事業報告。地方門連活動について、大阪懇話会三田村宗鳳師、北海道門連白部健順師より活動報告が行われた。「門連今後の活動」について、「法華信仰者の芸能文化展」の提案が出され、七百遠忌時の「日蓮聖人展」に習い検討することとした。会議終了後、「京都全日空ホテル」に場所を移し懇親会を行った。

於、日蓮宗宗務院 常任理事会

身延理事会对策協議。会務全般報告、諒承。監査任期満了により日蓮宗は再任とし、もう1名は法華宗本門流芹沢泰謙師を推薦、諒承。比叡山より明年の天台大師一四〇〇御遠忌法要依頼の打診があり、趣旨が比叡山開創一二〇〇年記念法要とは異なることから各派にて検討することとした。

6月23日

於、身延山 祖廟参拝 理事会

監査任期満了による推薦について、日蓮宗肉倉貫義師再任、法華宗本門流芹沢泰謙師とし、承認。会務全般報告、承認。京門連事業報告。地方門連活動について、大阪懇話会長鎌泰信師、北海道門連白部健順師より活動報告が行われた。「開宗七五〇年」慶讃事業について、「法華文化展」開催の提案が出されたことを説明、今後検討することとした。阪神大震災被害状況及び対応について、青年部によるボランティア活動等の報告がなされ、対策本部設置の提案が出された。会議終了後、「ホテル守田」に場所を移し懇親会を行った。

9月27日

於、日蓮宗宗務院 常任理事会

京都理事会対策協議。上半期事業報告、諒承。「開宗七五〇年」慶讃事業について、「法華文化展」全国展開案が出され今後検討することとした。宗教法人法改正について、新進党のアンケートに関する件及び全日本仏教会を含めた各派の状況、長谷川正浩弁護士の見解が報告された。

11月27日

於、京都 本法寺 理事会

講演「本法寺の沿革」と題し本法寺貫首金山日龍師講ず。

平成7年

〈流行〉

官官接待

ああ言えば上祐

1月 阪神淡路大震災

3月 地下鉄サリン事件

11月 東京臨海副都心にゆ

りかもめ開業

平成8年

5月13日

門下連合会上半期事業報告、承認。京門連事業報告。地方門連活動について、大阪懇話会三田村宗鳳師、北海道門連白部健順師より活動報告が行われた。「開宗七五〇年」慶讃事業について、「法華信仰者の芸能文化展」開催に向けた宝物についての専門的な意見を立正大学講師寺尾英智師より説明。今後大学教授や国立博物館関係者等広く意見を求め検討することとした。  
会議終了後、「しよごん千寿閣」に場所を移し懇親会を行った。

於、日蓮宗宗務院 常任理事会

身延理事会对策協議。会務全般報告、諒承。理事長退任に伴う推薦について協議、諒承。

6月17日

於、身延山 祖廟参拝 理事会

永井祥文日蓮宗宗務総長、理事長就任。

会務全般報告、承認。京門連事業報告。地方門連活動について、大阪懇話会より三田村宗鳳師より活動報告が行われた。「開宗七五〇年」慶讃記念事業について、「法華文化展」における展覧会のテーマと伝え方、予算計上をどのようにするか今後検討することとした。

10月4日

於、日蓮宗宗務院 常任理事会

京都理事会对策協議。上半期事業報告、諒承。「開宗七五〇年」慶讃事業について、「法華文化展」が提案されているが、博物館との折衝や内容、資金等に問題があることから、博物館側と更に交渉し京都理事会にて報告することとした。

12月5日

於、京都 要法寺 常任理事会

「開宗七五〇年」慶讃事業について、「法華信仰者の芸能文化展」開催に向けた具体的な調査が大橋邦正師より報告された。

於、京都 要法寺 理事会

講演「要法寺の沿革」と題し要法寺貫首嘉儀日有師講ず。

門連上半期事業報告、承認。京門連事業報告。地方門連活動として、大阪懇話会山下通雄師、北海道門連佐藤光春師より活動報告が行われた。「開宗七五〇年」慶讃事業に

平成8年

〈流行〉

メロドラマ

援助交際

7月 大阪府堺市の学校給

食で「〇―一五七」による

食中毒発生

8月 俳優・渥美清が死

去、国民栄誉賞進呈

9月 米メジャーリーグで

野茂英雄投手が日本人初の

ノーヒットノーラン達成

12月 ペルー日本大使館公  
邸人質占拠事件

平成9年

5月9日

ついで、開催企画や費用、門連と国博の妥協点等が報告され、宝物を所有する本山及び各寺院、各派の事情を踏まえ検討することとした。会議終了後、「竹茂楼」に場所を移し懇親会を行った。

於、日蓮宗宗務院 常任理事会

身延理事会对策協議。会務全般報告、諒承。「法華信仰者の芸能文化展」について、各派の所有する宝物を精査し全体的リストを作成することとした。商標登録問題について、酒類の業者がお題目ラベル使用の商標登録を申請しており、日蓮宗では登録無効審判の手続きを申請している。これに対し、門連代表者名による連署を求め、登録取下げの訴えを起こしたい旨が報告された。

於、身延山 祖廟参拝 理事会

会務全般報告、承認。京門連事業報告。「法華信仰者の芸能文化展」について、進捗状況が報告された。

於、日蓮宗宗務院 常任理事会

京都理事会对策協議。上半期事業報告、諒承。「法華信仰者の芸能文化展」について、各派リストを作成し京都理事会までに取り纏めることとした。第50回日蓮宗教学研究発表大会開催に関する案内がなされ、各派の積極的な参加を呼びかけた。

於、京都 頂妙寺 理事会

講演「頂妙寺の沿革」と題し頂妙寺貫首土屋学周師講ず。

監査欠員に伴い日蓮宗持田貫宣師を推薦、承認。門連上半期事業報告、承認。京門連事業報告。

地方門連活動について、大阪懇話会木下恵温師より活動報告が行われた。「開宗七五〇年」慶讃事業について、「法華信仰者の芸能文化展」開催に向け、①調査への協力、②専門員会設置、③具体的対応は常任理事会へ付託することとした。「商標登録問題」について、特許庁は再度に亘って日蓮宗の申請を拒絶。平成八年二月九日付公告が行われ、平成九年三月十九日付日蓮宗の申立は「理由がないもの」と判断、同年五月二十三日付「南無妙法蓮華經」の指定商品酒類(薬用酒)が正式に商標登録された。この決定

平成9年

〈流行〉

たまごっち

もののけ姫

3月 秋田新幹線「こまち」が運行開始

4月 消費税三%から五%

に引き上げ

6月 神戸市須磨区連続児童殺傷事件(酒鬼薔薇事件)

10月 長野新幹線開業

12月 東京アクアライン開

通

12月 東京アクアライン開

12月 東京アクアライン開

12月 東京アクアライン開

12月 東京アクアライン開

通

12月 東京アクアライン開

平成10年

5月13日

於、日蓮宗宗務院 常任理事会  
身延理事会对策協議。会務全般報告、諒承。

6月11日

於、身延山 祖廟参拝 理事会

会務全般報告、承認。監査任期満了により法華宗陣門流牧野琢成師を推薦、承認。京門連事業報告。地方門連活動について、大阪懇話会木下恵温師、北海道門連佐藤光春師より活動報告が行われた。「開宗七五〇年」慶讃事業について、「法華信仰者の芸能文化展」企画推進書、展示目録を配布。二百六十七点に及ぶリストを提示。今後内容を検討し、推進を諮ることが諒承された。

12月2日

於、京都 本隆寺 理事会

講演「本隆寺の沿革」と題し本隆寺貫主真枝日世師講す。

門連上半期事業報告、承認。京門連事業報告。地方門連活動として、大阪懇話会木下恵温師より活動報告が行われた。「開宗七五〇年」慶讃事業について、大橋邦正師より東京国立博物館次長鷺塚氏と会談した事項につき、①公共機関なので信仰的より芸術的なもの、②二点程度の展示をしたいが、掛け替えを考慮し倍を用意、③一億五千万円から二億のコストがかかるためスポンサーを獲得する、④図録を販売し著作権及び販売手数料は国博に帰属、⑤出展品の責任は搬出から返還は輸送業者、展示中は国博とする、⑥宗教関係の作品は門連が強力をする等の報告がなされた。以上を受け、専門委員会設置、調査開始の要望がなされた。会議終了後、「萬重」に場所を移し懇親会を行った。

平成11年

2月26日

於、日蓮宗宗務院 常任理事会

「開宗七五〇年」慶讃事業について、「法華信仰者の芸能文化展」へ向けた専門委員会設置の検討がなされた。

5月25日

於、日蓮宗宗務院 常任理事会

平成10年

〈流行〉

ハマの大魔神

だっちゅーの

2月 郵便番号五桁から七

桁に

冬季長野オリンピック開

幕

7月 和歌山市園部地区毒

入りカレー事件

平成11年

〈流行〉

ブッチホン

学級崩壊

身延理事会对策協議。会務全般報告、諒承。「開宗七五〇年」慶讃事業について、専門委員会設置について検討された。

5月31日

於、身延山 祖廟参拝 理事会

会務全般報告、承認。京門連事業報告。地方門連活動について、大阪懇話会木下恵温師より活動報告が行われた。「開宗七五〇年」慶讃事業について、専門委員会が設置された。

10月20日

於、日蓮宗宗務院 常任理事会

京都理事会对策協議。上半期事業報告、諒承。「開宗七五〇年」慶讃事業について、立正大学教授坂輪宣敬師より提出された「法華文化展」展示リストの精査及び門連記念事業の検討を行った。

11月24日

於、京都 本満寺 常任理事会

「開宗七五〇年」慶讃事業について、門連記念事業に係る意見交換を行った。

於、京都 本満寺 理事会

講演「本満寺の沿革」と題し本満寺貫主伊丹栄彰師講ず。

門連上半期事業報告、承認。京門連事業報告。地方門連活動について、大阪懇話会より活動報告が行われた。「開宗七五〇年」慶讃事業について、「法華文化展」展示リストの精査及び門連記念事業の検討を行った。会議終了後、懇親会を行った。

平成12年

5月8日

於、日蓮宗宗務院 常任理事会

身延理事会对策協議。理事長退任に伴う推薦について協議、諒承。会務全般報告、諒承。「法華文化展」開催見送りの提案が出され諒承。本年度「結成40周年」を迎えるに当たり『門連だより』に特集号を掲載、その他記念法要を執り行うこととした。

於、身延山 祖廟参拝 理事会

渡邊清明日蓮宗宗務総長、理事長就任。

会務全般報告、承認。京門連活動報告。地方門連活動について、大阪懇話会藤村恵容師より活動報告が行われた。「開宗七五〇年」慶讃事業について、「法華文化展」開催見送りを報告。代案として「オラトリオ日蓮聖人」演奏会が提案された。「結成40周年」に

「だんご3兄弟」速水けんたろう、茂森あゆみ

4月 山口県光市母子殺害事件

10月 改正住民基本台帳法が成立

平成12年

〈流行〉

IT革命

パラパラ

2月 グリコ森永事件の時

効成立

7月 雪印乳業集団食中毒

事件

紫式部を肖像とした二千

円札発行

10月27日

ついで、京都理事会で先師先哲追善法要を厳修することとした。会議終了後、「下部ホテル」に場所を移し懇親会を行った。  
於、池上 朗峰会館 常任理事会

11月27日

京都理事会対策協議。上半期事業報告、諒承。「結成40周年」について、特別記念講演及び先師法要を厳修することとする。「開宗七五〇年」慶讃事業について、フジTVより新たな「日蓮展」の提案が出され、開催するか理事会に諮ることとした。全国日蓮宗青年会主催による千葉大会について、門下連合会青年層の参加を依頼された。各派にて検討し理事会に諮ることとした。  
於、京都 妙蓮寺 常任理事会

「開宗七五〇年」慶讃事業について、フジTVより提案された「日蓮展(仮称)」の進捗状況を報告、理事会に諮ることとした。  
於、京都 妙蓮寺 理事会

日蓮聖人門下連合会結成40周年記念大法要。  
記念講演「門下結成40周年を迎えて」と題し、日蓮宗本法師貫首金山日龍師講す。  
講演「妙蓮寺の沿革」と題し妙蓮寺貫首杉本日慈師講す。

門連上半期事業報告、承認。京門連事業報告。地方門連活動として、大阪懇話会藤村恵容師より活動報告が行われた。お題目の「商標登録無効審判申請」について、登録無効が決定したことを報告。「開宗七五〇年」慶讃事業について、①「オラトリオ日蓮聖人」演奏会及びCD化、②各派事業の冊子化、③門下青年会の発足、④記念法要奉行、⑤「日蓮展(仮称)」開催等を検討し、「日蓮展(仮称)」は各派の賛同が得られたことが報告された。これを受け、出展リスト、東京国立博物館が会場、フジTVにて開催告知や特別企画放映の期待度等の意見が述べられ、日蓮宗が窓口となって話を進め理事会に諮ることとした。会議終了後、「中村楼」に場所を移し懇親会を行った。

平成13年  
3月1日

於、日蓮宗宗務院 常任理事会

「日蓮展(仮称)」について、国博との協議の結果、開催日を15年1月頃に予定したいとの意向を報告、諒承。それを受け、準備期間、出展リストの作成、各派への説明、本

9月 高橋尚子選手が国民栄誉賞受賞

12月 都営地下鉄大江戸線が開通

平成13年

〈流行〉

ブロードバンド

「明日があるさ」ウルフ

5月11日	山への連絡、予算の確定等、種々の問題を順次進めていくこととした。立教開宗は門連各派の出発点ともいえることから門下青年会発足を試み、門連活性化を図るべきとの意見が出された。	ルズ 3月 ユニバーサル・スタ ジオ・ジャパンがオープン 5月 「さいたま市」が誕 生
5月13日	於、日蓮宗宗務院 常任理事会 身延理事会对策協議。会務全般報告、諒承。「開宗七五〇年」慶讃事業について、「日蓮展（仮称）」の進捗状況を報告。	6月 大阪教育大学付属池 田小学校児童殺傷事件
6月4日	第39回全国日蓮宗青年僧・全国日蓮門下青年僧清澄結集千葉大会開催。 於、身延山 祖廟参拝 理事会 会務全般報告、承認。京門連事業報告。地方門連活動報告。「開宗七五〇年」慶讃事業について、「日蓮展（仮称）」の進捗状況を報告。	9月 東京デイズニースー がオープン アメリカ同時多発テロ事 件（九・一一テロ事件）
10月23日	於、日蓮宗仮庁舎 朗峰会館 常任理事会 京都理事会对策協議。上半期事業報告、諒承。「日蓮展（仮称）」について、平成15年1月14日～2月23日を開催期間とし、東京国立博物館平成館を場所に定める。出展リストを174点、総予算2億3000万円と想定している旨が報告された。	
11月27日	於、京都 妙覺寺 常任理事会 「日蓮展（仮称）」について、産経新聞社が共催者に加わることが報告された。宣伝効果、予算面、動員予想数、出展依頼等の報告がなされ、各派一致団結の協力をする事が確認された。	
平成14年	於、京都 妙覺寺 理事会 門連上半期事業報告、承認。京門連活動報告。地方門連活動として、大阪懇話会藤村恵容師、北海道門連佐藤光春師より活動報告が行われた。「日蓮展（仮称）」について、①目的と内容、②総額予算、③出展リスト作成状況と依頼等の進捗状況を報告。各派とも事業推進に協力していくことを確認した。会議終了後、「竹茂楼」に場所を移し懇親会を行った。	
5月30日	於、日蓮宗宗務院 常任理事会	

6月24日	<p>身延理事会对策協議。監査欠員に伴う推薦について協議、諒承。「開宗七五〇年」慶讃事業について、「大日蓮展」の進捗状況を報告。</p> <p>於、身延山 祖廟参拝 理事会</p> <p>会務全般報告、承認。監査欠員に伴い本門佛立宗青木日斯斯を推薦、承認。京門連事業報告。</p>	平成14年
9月2日	<p>地方門連活動について、大阪懇話会藤村恵容師、北海道門連佐藤光春師より活動報告が行われた。「開宗七五〇年」慶讃事業について、「大日蓮展」進捗状況を報告。国柱会より「日蓮聖人ネットワーク」について紹介。「門下青年会結成」について、常任理事会に諮り検討することとした。会議終了後、「日本平ホテル」に場所を移し懇親会を行った。</p> <p>於、日蓮宗宗務院 常任理事会</p> <p>「開宗七五〇年」慶讃事業について、「大日蓮展」進捗状況を報告。10月中旬「日本プレスセンター」にて記者発表会を行う旨が説明された。東京国立博物館・産経新聞社・日蓮聖人門下連合会の三者協約締結。</p>	〈流行〉
10月18日	<p>於、日本プレスセンター</p> <p>立教開宗七五〇年記念「大日蓮展」記者発表会</p>	タマちゃん
11月27日	<p>於、京都 本証寺 常任理事会</p> <p>京都理事会对策協議。門連上半期事業報告、諒承。「大日蓮展」進捗状況を報告。</p>	ベッカム
平成15年	<p>於、京都 本証寺 理事会</p> <p>講演「本証寺の沿革」と題し本証寺貫首岡本日巨師講す。</p> <p>門連上半期事業報告、承認。京門連事業報告。地方門連活動について、大阪懇話会藤村恵容師より活動報告が行われた。会議終了後、「本証寺会館」に場所を移し懇親会を行った。</p>	1月 欧州単一通貨「ユーロ」が流通開始
1月14日	<p>於、東京国立博物館</p> <p>「大日蓮展」円成祈願法要厳修。並びに開会式・内覧会。</p>	5月 日本・韓国共同開催のサッカーW杯
1月15日	<p>於、東京国立博物館</p>	8月 住民基本台帳ネットワークが稼動
		10月 日本人拉致被害者五人が北朝鮮から帰国

2月18日

立教開宗七五〇年記念「大日蓮展」開催。  
於、日蓮宗宗務院 常任理事会

2月23日

理事長退任に伴う推薦について協議、諒承。「大日蓮展」中間報告。2月23日円成法要並びに閉会式について説明がなされた。  
於、京都国立博物館

5月15日

立教開宗七五〇年記念「大日蓮展」円成奉告法要厳修。並びに閉会式。懇親会開催。  
於、日蓮宗宗務院 常任理事会

6月12日

身延理事会对策協議。会務全般報告、諒承。「大日蓮展」報告、諒承。  
於、身延山 祖廟参拝 理事会  
岩間湛正日蓮宗宗務総長、理事長就任。

10月8日

会務全般報告、承認。京門連事業報告。地方門連活動について、大阪懇話会門谷光瑞師より活動報告が行われた。「大日蓮展」について収支報告。図録を図書館・公共施設等に寄贈することを決定した。会議終了後、「下部ホテル」に場所を移し懇親会を行った。

11月27日

於、日蓮宗宗務院 常任理事会  
京都理事会对策協議。上半期事業報告、諒承。監査欠員に伴う推薦について協議、諒承。  
於、京都 本圀寺 常任理事会  
監査欠員に伴う推薦について協議、諒承。  
於、京都 本圀寺 理事会

平成16年

4月23日

講演「本圀寺の沿革」と題し本圀寺貫首久村諦道師講ず。  
門連上半期事業報告、承認。監査欠員に伴い法華宗真門流斎藤隆彦師が推薦され、承認。京門連事業報告。地方門連活動について、大阪懇話会門谷光瑞師より活動報告が行われた。会議終了後、「菊水」に場所を移し懇親会を行った。  
於、日蓮宗宗務院 常任理事会  
身延理事会对策協議。会務全般報告、諒承。「降誕八〇〇年」について、編集委員会

平成15年

〈流行〉

なんでだろう

マニフェスト

3月 アメリカ・イラク戦争

争

4月 六本木ヒルズがオー

ブン

10月 東海道新幹線品川駅が開業

12月 アメリカ軍がイラクのフセイン元大統領を拘束

6月7日

等の若い人材を中心に準備委員会を設置することを検討することとなった。  
於、身延山 祖廟参拝 常任理事会

「降誕八〇〇年」について、門下共同事業を企画検討するための準備委員会設置を理事会へ諮ることとした。北海道門連について、休会又は散会を理事会に報告し、状況確認をすることとなった。

於、身延山 祖廟参拝 理事会

会務全般報告、承認。京門連事業報告。地方門連活動について、大阪懇話会門谷光瑞師より活動報告が行われた。北海道門連について休会又は散会の報告あり、現状調査後理事会にて報告することとした。「降誕八〇〇年」について、新事業の企画推進を図るため、機関紙編集委員会等の若い人材を中心として進めていくことが決定した。会議終了後、「下部ホテル」に場所を移し懇親会を行った。

10月7日

於、日蓮宗宗務院 常任理事会

京都理事会対策協議。上半期事業報告、諒承。「大日蓮展」全記録をビデオテープに保存することが提案された。「降誕八〇〇年」準備企画委員会設置について、名称・規則・構成人数等の具体案を今後検討していくこととした。

11月25日

於、京都 本隆寺 常任理事会

「降誕八〇〇年」について、企画委員会を設置する提案がなされ、各派にて検討しプロジェクトを進めていくべきとした。「大日蓮展」について、記録DVDを残すべきとした。

於、京都 本隆寺 理事会

講演「本隆寺の沿革」と題し本隆寺貫主上川日乾師講ず。

門連上半期事業報告、承認。京門連事業報告。地方門連活動について、大阪懇話会門谷光瑞師より活動報告が行われた。「降誕八〇〇年」について、企画委員会設置前に企画準備プロジェクトを発足し、各派2名の委員にて具体的な内容を企画していくこととした。会議終了後、「センチューリーホテル瑞鳳の間」に場所を移し懇親会を行った。

平成17年

5月18日

於、日蓮宗宗務院 常任理事会

平成16年

4月 東京都の営団地下鉄と成田空港が民営化

8月 アテネオリンピック開幕

10月 新潟県中越地震

11月 一万円札・福沢諭吉、五千円札・樋口一葉、千円札・野口英世を肖像とした新札発行

6月23日

身延理事会对策協議。会務全般報告、諒承。「降誕八〇〇年」について、機関紙編集委員を中心として準備委員会を設置することが検討された。

於、身延山 祖廟参拝 常任理事会

「降誕八〇〇年」について、準備費を経常会計として予算化することを理事会に諮ることとした。

於、身延山 祖廟参拝 理事会

会務全般報告、承認。京門連事業報告。地方門連活動について、大阪懇話会門谷光瑞師より活動報告が行われた。北海道門下連合会の解散が正式に報告された。「降誕八〇〇年」について、準備費を経常会計に予算化、機関紙編集委員会及び門連関係の若人材を中心に企画準備を進めることが決定した。会議終了後、「下部ホテル」に場所を移し懇親会を行った。

於、日蓮宗宗務院 常任理事会

京都理事会对策協議。門連上半期事業報告、諒承。「降誕八〇〇年」に向け準備委員会の人選を要請した。機関紙編集委員会より『門連だより』に『立正安国論』奏進七五〇年」に向けた各派の執筆を要請した。

於、京都 立本寺 常任理事会

於、京都 立本寺 理事会

講演「立本寺の沿革」と題し立本寺貫主上田日瑞師講ず。

門連上半期事業報告、承認。京門連事業報告。地方門連活動について、大阪懇話会門谷光瑞師より活動報告が行われた。「降誕八〇〇年」について、各派にて正式名称及び具体的な事業計画を検討することとした。会議終了後、「ホテル嵐亭」に場所を移し懇親会を行った。

平成18年

1月26日

於、日蓮宗宗務院 常任理事会

身延理事会对策協議。理事長退任に伴う推薦について協議、諒承。会務全般報告、諒承。

5月23日

於、身延山 祖廟参拝 理事会

平成17年

3月 愛知県で愛・地球博覧会が開幕

4月 J R福知山線脱線事故

5月 「昭和の日」制定

11月 耐震強度偽装問題

平成18年

1月 ライブドア事件

2月 冬季トリノオリンピック

ツク開幕

	<p>小松浄慎日蓮宗務総長、理事長就任。                      会務全般報告、承認。京門連事業報告。地方門連活動について、大阪懇話会和田龍昌師より活動報告が行われた。「降誕八〇〇年」について、平成二十一年に立正安国論奏進七五〇年事業があり、「門連だより」に「各派リレー提言」を掲載することが決定しているが、同様に機関紙編集委員会にて事業の企画立案をするよう要請することとした。会議終了後、「日本平ホテル」に場所を移し懇親会を行った。</p>	<p>7月 北朝鮮が日本海に七発のミサイルを発射</p>
9月27日	<p>於、日蓮宗宗務院 常任理事会                      京都理事会对策協議。門連上半期事業報告、諒承。日蓮宗張田珠潮師より立正安国論奏進七五〇年に加え、設立50周年に向けた展覧会を京都国立博物館にて開催したい旨が提案され、今後各派協力の下関係者と調整することとした。</p>	<p>9月 秋篠宮紀子妃殿下が男子・悠仁親王殿下をご出産。</p>
11月17日	<p>於、京都 妙満寺 理事会                      講演「妙満寺の沿革」と題し妙満寺貫主中村日玄師講ず。                      門連上半期事業報告、承認。『門連だより』カラー化を報告。京門連事業報告。地方門連活動について、大阪懇話会和田龍昌師より活動報告が行われた。「降誕八〇〇年」事業の一環として立正安国論奏進七五〇年事業として展覧会を開催したい旨を報告、展覧会担当を日蓮宗生駒雅幸師とし、承認。詳細について種々討議、今後検討していくこととした。会議終了後、「京都宝ヶ池プリンスホテル」に場所を移し懇親会を行った。</p>	
平成19年	<p>於、日蓮宗宗務院 常任理事会                      身延理事会对策協議。会務全般報告、諒承。監査欠員に伴う推薦を協議、諒承。</p>	<p>平成19年                      〈流行・時事〉                      赤ちゃんポスト</p>
5月29日	<p>於、身延山 祖廟参拝 理事会                      監査欠員に伴い本門法華宗別所日山師を推薦、承認。会務全般報告、承認。「降誕八〇〇年」事業について、「日蓮聖人展(仮称)」の進捗状況を報告、諒承。</p>	<p>5月 国民投票法が成立                      7月 新潟中越沖地震</p>
10月4日	<p>於、日蓮宗宗務院 常任理事会                      門連上半期事業報告、諒承。「降誕八〇〇年」事業について、「日蓮聖人展(仮称)」の進捗状況を報告、諒承。</p>	<p>10月 郵政民営化がスタート</p>
11月29日	<p>於、京都 頂妙寺 常任理事会</p>	

平成20年

4月25日

「降誕八〇〇年」事業について、「日蓮聖人展（仮称）」の進捗状況を報告、諒承。  
於、京都 頂妙寺 理事会  
門連上半期事業報告、承認。京門連事業報告。地方門連活動について、大阪懇話会和田龍昌師より活動報告が行われた。「降誕八〇〇年」事業について、「日蓮聖人展（仮称）」の進捗状況を報告、諒承。

於、日蓮宗宗務院 常任理事会

身延理事会对策会議。会務全般報告、諒承。「降誕八〇〇年」事業について、「日蓮聖人展（仮称）」の進捗状況を報告、諒承。

於、身延山 祖廟参拝 理事会

会務全般報告、承認。京門連事業報告。地方門連活動について、大阪懇話会和田龍昌師より活動報告が行われた。「降誕八〇〇年」事業について、京都国立博物館・日本経済新聞社との三者協議により、正式名称を立正安国論奏進七五〇年記念特別展「日蓮と法華の名宝―華ひらく京都町衆文化―」に決定したことを報告、承認。その他進捗状況を報告し、今後各本山調整、広報宣伝、共催者・後援者への対応等を検討することとした。会議終了後、「日本平ホテル」に場所を移し懇親会を行った。

於、日蓮宗宗務院 常任理事会

京都理事会对策協議。門連上半期事業報告、諒承。「日蓮と法華の名宝」展進捗状況報告。

於、京都 妙蓮寺 理事会

講演「妙蓮寺の沿革」と題し妙蓮寺貫首松下日肆師講す。

門連上半期事業報告、承認。京門連事業報告。地方門連活動について、和田龍昌師より活動報告が行われた。「日蓮と法華の名宝」展について、十六本山全ての出展を要請。その他進捗状況報告。会議終了後、「京都ブライトンホテル」に場所を移し懇親会を行った。

於、日蓮宗宗務院 常任理事会

平成21年

4月17日

平成20年

7月 主要国首脳会議（G8サミット）が北海道洞爺湖町で開催  
8月 北京オリンピック開幕

平成21年

〈流行・時事〉

5月25日	<p>身延理事会对策協議。会務全般報告、諒承。「日蓮と法華の名宝」展進捗状況報告。</p> <p>於、身延山 祖廟参拝 理事会</p> <p>会務全般報告、承認。京門連事業報告。地方門連活動について、大阪懇話会中村日遊師より活動報告が行われた。「日蓮と法華の名宝」展について進捗状況報告。6月30日京都国立博物館にて京博独自記者会見、7月2日東京日本外国特派員協会（プレスクラブ）にて記者発表会が決定し、10月9日内覧会では本展円成祈願法要を行うことが予定されていることを報告した。</p> <p>於、東京日本外国特派員協会（プレスクラブ）</p> <p>立正安国論奏進七五〇年記念特別展「日蓮と法華の名宝―華ひらく京都町衆文化―」記者発表会。</p> <p>於、京都国立博物館 常任理事会並びに立正安国論特別拝観法要を厳修。</p> <p>立正安国論奏進七五〇年記念特別展「日蓮と法華の名宝―華ひらく京都町衆文化―」開催。</p> <p>於、京都国立博物館 常任理事会並びに展覧会円成奉告法要を厳修。終了後、「からふね屋」にてスタッフ合同の打ち上げを行った。</p> <p>於、京都 妙覺寺 理事会</p> <p>門連上半期事業報告、承認。京門連事業報告、承認。地方門連活動について、中村日遊師より活動報告が行われた。「日蓮と法華の名宝」展について、入場者数等概要を報告。会議終了後、「全日空ホテル」に場所を移し懇親会を行った。</p>	<p>政權交代 事業仕分け</p> <p>〔Some day〕EXILE 1月 アメリカでオバマ政権誕生 5月 裁判員制度施行</p>
平成22年	<p>於、日蓮宗宗務院 常任理事会</p> <p>「日蓮と法華の名宝」展収支決算を報告、諒承。</p> <p>於、身延山 久遠寺 常任理事会</p> <p>身延理事会对策協議。会務全般報告、諒承。「結成50周年」記念事業について協議。『50年の歩み』を刊行することとし、身延理事会に諮ることとした。</p> <p>於、身延山 祖廟参拝 理事会</p> <p>渡邊照敏日蓮宗宗務総長、理事長就任。</p>	<p>平成22年 〈流行〉 〔I wish For You〕EXILE</p> <p>E</p>
5月31日		
4月27日		
2月24日		
11月24日		
11月23日		
10月10日		
10月9日		
7月2日		

10月8日

会務全般報告、承認。京門連事業報告。地方門連活動について、大阪懇話会中村日遊師より活動報告が行われた。「結成50周年」記念事業として、『50年の歩み』刊行を提案承認。会議終了後、「下部ホテル」に場所を移し懇親会を行った。  
於、日蓮宗宗務院 常任理事会

11月5日

京都理事会対策協議。門連上半期事業報告、諒承。相談役欠員に伴う推薦について諒承。「結成50周年」記念事業の進捗状況を報告。  
於、京都 本館寺 理事会

結成40周年記念法要及び門連関係遷化先師二十六霊位の追悼法要を厳修。

講演「本館寺の沿革」と題し本館寺貫首菅原日桑師講ず。

門連上半期事業報告、承認。相談役欠員に伴い法華宗陣門流土屋善敬師を推薦、承認。「結成50周年」記念事業について、『50年の歩み』を今年度中に刊行することが決定した。会議終了後、「ホテル本館寺」に場所を移し懇談会を行った。

6月 小惑星探査機はやぶさが帰還

8月 記録的な猛暑

10月 鈴木章・根岸英一の

二名がノーベル化学賞受賞

11月 APEC首脳会議が

神奈川県横浜市で開催

日蓮聖人門下連合会  
結成三十年以降の主な事業

平成十五年一月十五日～二月二十三日  
立教開宗七五〇年記念

「大日蓮展」

東京国立博物館

平成二十一年十月十日～十一月二十三日  
立正安国論奏進七五〇年記念特別展

「日蓮と法華の名宝」

——華ひらく京都町衆文化——

京都国立博物館

立教開宗七五〇年記念

# 「大日蓮展」

平成十五年一月十五日～二月二十三日  
東京国立博物館

## 「大日蓮展」開催決定

日蓮聖人門下連合会が、立教開宗七百五十年記念事業として進めてきた日蓮展（仮称）の開催について、その概要が左記の通り決定した。

- 一、名称 立教開宗七百五十年記念「大日蓮展」
- 二、会期 平成十五年一月十五日（水）～二月二十三日（日）
- 三、会場 東京国立博物館・平成館
- 四、主催 東京国立博物館・日蓮聖人門下連合会・産経新聞社
- 五、内容 日蓮聖人門下各派関係寺院等が守り伝えてきた霊宝、文化財を中心

### 六、構成

に展示。

#### 第一部「日蓮聖人とその門弟」

日蓮聖人の肖像、筆跡、伝絵及び門弟の肖像を出展。

#### 第二部「法華経の美術」

法華経絵及び本尊を絵画化した絵曼荼羅など法華経を主題にした霊宝、文化財を出展。

#### 第三部「外護者と信者」

日蓮聖人門下を支えた公家や武家の書状及び信者の画像を出展。

#### 第四部「法華文化の精粹」

日蓮聖人門下の信者には狩野家、長谷川等伯、英一蝶などの優れた絵師や金工で有名な後藤家、刀剣目利きで知られる本阿弥家、書や

諸工芸に卓越した本阿弥光悦など、各時代を代表する芸術家がいる。ここでは各寺に伝わる様々な文化財とともに彼らの代表作を出展する。

以上が決定した立教開宗七百五十年記念「大日蓮展」の概要であるが、前号にも報告したようにここに至るまでの道のりは決して平坦ではなかった。昨年九月に漸く東京国立博物館・日蓮聖人門下連合会・産経新聞社の三者主催が内定し、この展覧会の目的、内容、推定総額予算等について、門下各派に説明できるだけの、ある程度具体的な内容が整ったのは秋も深まる頃であった。

そして十一月の京都理事会と、それに先だって開催された常任理事会においてそれらの説明がなされ、席上活発な質疑応答がなされた。これについては、直接三者間の交渉に当たっている事務局より、推定総額予算は二億三千万円から四千万円であること、そのうち一億六千万円については日蓮宗が拠出すること、門下各派には、各寺院、檀信徒に対する動員について応分の協力を願い入場券の枚数割り当ては行わないこと、そして東京国立博物館が作成した展覧希望リストに基づき門下各派各本山にまず出展協力の依頼状を送付し、その上で説明に伺うことなどが述べられ、常任理事会、理事会ともに異論はなく、門下連合会と



東京国立博物館 平成館

して本事業の推進が確認されたのである。その後十二月から一月にかけて渡邊清明理事長名により門下各派各本山に出展協力の依頼状を送付し、事務局も要望により各所へ説明と協力依頼に伺っているが、これと並行して、東京国立博物館による出展希望リストに基づいた調査が行われている。

これはすべての所蔵寺院を対象としたものではないが、調査の過程では新たな発見もあり、担当の学芸員も驚きの声を上げている。こ

れは過去において、日蓮聖人と法華経を中心とした展覧会がこれほどの規模で開催されたことがなく、そうした調査もあまり行われていなかったことによるものと思われる。

また一月二十八日には、野崎弘東京国立博物館長より本展覧会についての書面による開催承諾があり、これより三者による立教開宗七百五十年記念「大日蓮展」プロジェクトムが立ち上げられいよいよ開催に向けての調査終了後リストを確定し、暦が夏を迎える頃から各所蔵寺院、または所蔵者に正式な出展依頼が行われることとなる。

三月十一日には、本展覧会の正式名称をはじめとした概要の了承を得べく常任理事会を開催し、現在の進捗状況も含めて報告を行っ

## 「大日蓮展」開催

既報の通り明年一月十五日から二月二十三日まで、東京国立博物館において立教開宗七五〇年記念「大日蓮展」が開催されるが、今般十月十八日午後三時三十分より東京日比谷の日本プレスセンターにおいて新聞・TV等約六十社を集めて記者発表が行われた。

当日、日蓮聖人門下連合会からは渡邊清明理

た。この中で、推定総額予算が約二億四千万円となること、経費負担と予算執行については日蓮聖人門下連合会と産経新聞社間で協約書を締結していくことなどが報告された。

本年、日蓮聖人が清澄山上から昇り来る旭日に向かいお題目を始唱されてより七百五十年を迎え、更に、新たな未来へ一歩を踏み出す平成十五年の新春に立教開宗七百五十年記念「大日蓮展」を開催することは、我々門下にとつてはもちろんのことだが、広く一般の方々にとつて日蓮聖人とその信仰に触れていたただく貴重な機会となる。

この展覧会の開催にあたり、門下僧俗はもちろん、多くの未信の方々の展覧がなされ、門下各派が更に異体同心、祖願達成に向けて邁進することが期待される。

事長、東京国立博物館からは宮島新一企画部長、産経新聞社からは齋藤繁取締役事業局長がそれぞれ主催者を代表して挨拶、その後、展覧会の概要説明及び質疑応答が行われ、午後五時閉会した。

その中でとくに注目を集めたのは、今回の事前調査で新たに発見された長谷川等伯作品「鬼子母神十羅刹女像」である。その説明は後述するが、この作品を始めとして四部門構成で行われる本展覧会のそれぞれを代表する作品につい

ても説明がなされた。

本展覧会の出品宝物・美術品については現在最終確定を急いでいるが、国宝・重文約五十件を含む百七十件程度になる見込みである。

現在門連加盟各派にポスター・チラシが配布され前売券の販売が行われているが、今後の団体の積極的な動員が期待される。

以下報道資料に基づき本展の概要と、その主要作品を示す。

〈以下報道資料〉

### 展覧会概要

鎌倉時代には、禅宗、浄土真宗、時宗など多くの宗派が興りましたが、我々日蓮門下各教団の祖である日蓮聖人もまた、鎌倉時代に教えを興されました。日蓮聖人の布教スタイルが、他宗派を激しく批判するものであったため、一門は鎌倉幕府などからの激しい弾圧にさらされませんが、ついに屈することはありませんでした。弘安五年（一二二二）、聖人は六十一歳の波乱に満ちた生涯を終えますが、その信仰は高弟たちによって広められ、今日の隆盛をみるにいたります。

今回の展覧会は、その日蓮門下のお寺に伝わる聖人ゆかりの品々、法華信仰にまつわる美術品、さらには、宗門に帰依した多くの芸術家たちの作品を取り上げ、一堂に展示しようとする

ものです。

教科書でおなじみの「立正安国論」（法華經寺 国宝）や、聖人の姿を忠実に写したとされる妙本寺の「日蓮聖人坐像」、今回新たに発見された長谷川等伯筆の仏画（鬼子母神十羅刹女像）などこれまで門外不出とされた品々が数多く陳列されます。日蓮聖人が法華經信仰の弘通（布教）を始めてから七五〇年を経た今、その歴史と文化をたどるこの展覧会を、ぜひ多くの方々に鑑賞していただきたいと思えます。

### 開催要項

名称 立教開宗七五〇年記念 大日蓮展

会期 二〇〇三年一月十五日（水）～二月二十三日（日）

会場 東京国立博物館 平成館（上野公園）

開館時間 午前九時三十分～午後五時（入館は

閉館の三十分前まで）

休館日 毎週月曜日

主催 東京国立博物館、日蓮聖人門下連合会、

産経新聞社

後援 文化庁、フジテレビジョン、ニッポン放送、サンケイリビング新聞社

観覧料 一般一三〇〇円（二一〇〇／九五〇

円）高校・大学生九〇〇円（八〇〇／五一

〇円）小・中学生四〇〇円（三〇〇／二三

〇円）

\*（ ）内は前売り／二〇名以上の団体料金。

\*障害者とその介助者一名は無料です。入館の際に、障害者手帳などをご提示ください。

\*前売り券は加盟各団体の事務局、各事務所より十一月月上旬取扱い開始。

交通 JR上野駅公園口・鶯谷駅より徒歩十分、営団地下鉄日比谷線・銀座線上野駅、

京成電鉄京成上野駅より徒歩十五分

お問い合わせ

【会場案内】ハローダイヤル

〇三（五七七七）八六〇〇

ホームページ

<http://www.sankei.co.jp/event/index.htm>

TEL

【広報案内】「大日蓮展」広報事務局 〇三

（三五七八）三七九〇

記念講演会

■一月二十五日（土）午後一時三十分～三時

「日蓮その人へ」

講師・立松和平氏（作家）

■二月十一日（火・祝）午後一時三十分～三時

「法華經のたび人 日蓮」講師・中尾堯氏

（立正大学名誉教授）

\*いずれも平成館大講堂にて。定員三八〇名

（当日先着順）

関連イベント

■二月十五日（土）午後二時～三時 雅楽公演  
橘雅友会

■二月十六日（日）午後二時～三時 聲明公演

「法華懺法」聲明研究会

\*いずれも平成館大講堂にて。定員三八〇名（事前申込制・お申し込み多数の場合は抽選）

\*お申し込み方法：往復ハガキにご希望の日にちと公演名（雅楽か聲明）、住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記の上、〒一〇五―〇〇〇一 東京都港区虎ノ門三―六―二 第2秋山ビル7F 大日蓮展広報事務局イベン ト係までご送付ください。一月三十一日（金）締切（当日消印有効）

### 展覧会四部門の構成と主な展示宝物解説

#### 一 日蓮聖人とその門弟

日蓮聖人は立教開宗以後、鎌倉幕府に「立正安国論」を上呈し、純粹な法華経信仰への帰帰を求めたが受けいれられず、かえって弾圧や妨害にあつた。しかしそれに屈することなく、着実に弟子や信者を増やしていった。日蓮聖人の肖像はいずれも骨太で、よくその人柄を伝えている。日蓮聖人の高弟である日昭、日朗、日興、日向、日頂、日持の六人は、現在の山梨、静岡、鎌倉、千葉、東京を拠点に布教し、

それぞれ教団を築いた。その後、日朗の門下である日像は京都に進出し、足利將軍家の後ろ盾を得て西国に勢力を拡大した。

ここでは、日蓮聖人と弟子たちの像や著者などをご覧いただく。

#### 主な展示作品

#### 日蓮聖人像 一幅

絹本着色

縦九五・五 横五五・〇

鎌倉時代 十四世紀

静岡・妙法華寺

かように覇気の漲る祖師像は他にない。太い眉尻をあげて目を見開いた壮年期の日蓮は、経机上に『法華経』巻第六如来寿命品をひらき、開口して説法する姿に描かれる。左方には釈迦及び四菩薩（二尊四土）の画像を懸け、手前の床上には俗人男女が描かれるが、この二人には「法名法蓮」と「蓮華比丘尼」という墨



日蓮聖人像

書がある。

法被をかけた状座に像主が坐すという本図の形式は、とくに栄時代の高僧像を受容した禅宗・律宗の祖師像に倣うものである。しかし日蓮在世時の鎌倉市中には、禅・律・真言という幕府の体制仏教以外の僧に對しては、その行動や身なりについて厳しい統制が敷かれていた。そうした中で、あえて公式な僧侶像の形式を採る本図には、日蓮こそを正統仏教の具現者として顕彰しようとする意図がうかがえる。

被授与者の法蓮は、建治三年（一二七七）に得度した下総の檀越曾谷教信（一二二四―九一）である可能性が指摘されている。曾谷教信は、富木常忍、太田乘明とともに佐渡から『観心本尊抄』を送られるなど、日蓮と緊密な師檀關係を有していた。文保元年（一一三一）の「日昭讓状」（妙法華寺所藏『玉沢手鑑草稿』所収）によると、本図は「生御影」と称され、その図様について「居子（椅子）ニテ御説法、曾谷夫妻聴問之体也」などと記されている。これにより制作年代の下限が知られるとともにNo.3の「水鏡御影」ともども、日蓮肖像画制作における曾谷氏の関与がうかがえて興味深い。

（行徳）

主な展示作品

日蓮聖人坐像 一 躯

木造、彩色、玉眼

像高七六・八

鎌倉時代 十三―十四世紀

神奈川・妙本寺

比企能本（大寺三郎）が日蓮に帰依して営んだ比企谷法華堂を六老僧の一人日朗が引き継いだのが妙本寺である。本像は『新編相模国風土記稿』には日蓮在世中に弟子日法が容貌を写して造立したものと伝え、日蓮の肖像の古い例として貴重である。

骨や皺がほとんどあらわれない肉つきの良い容貌、僧綱衣を着け、横袂を右肩から前方に懸けまわす独特の服制は、日蓮像に共通して



日蓮聖人坐像

みられる特徴である。正応元年（二二八八）作、

東京・本門寺像は実際の衣を着けるので、着衣の表し方はこの像が後世の規範となった可能性がある。両袖が強装束のように角張り、脚部前方で横袂の先端が畳座下方に垂れる点は、この像独自の特色である。特に袖の表現は鎌倉に所在する鎌倉時代の武将像に通ずるので、この地で造立された可能性が高い。

頭と体部は別材製。体部は前後に三列と正中で矧ぎ、体側材も前後三列とする。かなり細かい木寄せである。各材の像底を刳り残して内刳りする。（浅見）

二 法華経の美術

法華経では、造仏・造塔・写経などの功德が説かれ、また経の内容自体も豊かな芸術的イメージに富んでいる。このため、鎌倉時代に法華信仰を鼓吹した日蓮聖人の門流では、さまざまな美術工芸品が制作された。その本尊を絵画にした絵曼荼羅をはじめとして、霊鷲山で説法する釈迦如来像の彫刻、法華経守護神像の絵画、さらに経の内容を描く法華経絵や、きらびやかな装飾経・経箱など、多彩な法華経美術を概観する。

主な展示作品

鬼子母神十羅刹女像

絹本着色

縦一〇三・五 横三八・〇

桃山時代 元亀二年（一五七二）

富山・妙伝寺

長谷川等伯が信春と名のつた時代に描いた新発見の作品。画面上方に三光天子が浮かび、鬼子母神を中心に整然と十羅刹女が立ちならぶ。諸尊はみな、前方のやや下方向に視線を向け、産育を祈願する女性信者をみつめる。精妙で美麗な衣服の描写は、信春時代の仏画に共通してみられる表現である。鬼子母神の顔は気品に満ち、また羅刹女たちの手の表現は、自然な人体描写を旨指したかのようである。鬼子母神の顔の部分ごとくに磨耗しているが、これはご利益に与ろうとした信者の手が鬼子母神の顔にふれたことによるものだろう。

妙伝寺第三世の仏藏院日敬（一五八四年歿）



鬼子母神十羅刹女像

が、元龜二年十一月十九日と本作の開眼供養のなされたであろう期日を画面に記す。等伯は、元龜三年ころには、郷里の七尾から東京へ本拠を移していたはずで、本作の出現によって、上洛の下限が示されることになり、等伯の動向に重要な指標が示されることになった。

(松嶋)

### 三 外護者と信者

日蓮聖人の弟子とその門流によって広まっていた教えは、加藤清正や徳川家康の側室お万の方、そして水戸光圀といった熱心な信者の外護を受けて発展していった。ここでは日蓮聖人の教えを厚く信奉した人々の画像や、手紙、奉納品などゆかりの品々を展示する。「南無妙法蓮華經」の題目が記された肖像画などに、法華経信仰を軸とした生活がかがえる。

また、長谷川等伯などの信仰と結びついて制作された作品を展示する。

### 四 法華文化の精粹

日蓮門下の信者に、幕府お抱えの狩野家や、長谷川等伯、英一蝶などのすぐれた絵師がいたことはよく知られている。また、他の分野を

みても、稀世のアーティストレクター本阿弥光悦をはじめ、やきものの尾形乾山、蒔絵の五十嵐家、金工の後藤家など、その顔ぶれはまさに多士済々の感がある。このコーナーでは、彼らの代表的な作品を集め、日蓮門下の寺院に伝わるさまざまな文化財とあわせて展観する。

#### 主な展示作品

立正安国論 本阿弥光悦筆 一巻

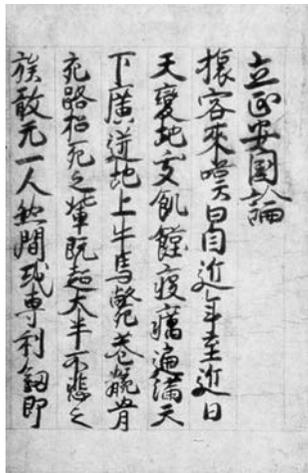
紙本墨書

縦三九・一 長三五一・四

江戸時代 元和五年（一六一九）

京都・妙蓮寺

『立正安国論』は、日蓮の撰述になるもので、『観心本尊抄』『開目抄』とともに日蓮諸宗の最も重要な教典である。熱心な法華信者であった本阿弥光悦が真摯な気持ちで筆を執つたものである。巻末の奥書「妙蓮寺 法印権大僧都 日源上人依御所望書之 元和五年七月五日大



国宝 立正安国論

虚庵光悦（花押）から、妙蓮寺の日源上人の求めに応じて、元和五年七月に書写した。この年、光悦は六十二歳。元和元年に徳川家康から洛北の鷹峯の地を与えられて移住して四年目であった。中国宗時代の能書・張則之（二一八六一―二六六）の書風の影響が強くみられる端正な楷書で書き始め、次第に行書・草書を交えながら、終始一貫して謹厳な書写態度で筆を進めている。巧みな筆法は、時代や書体などは異なるが、小野道風の「玉和帖」をも連想させ、能書光悦の魅力を遺憾なく發揮している。この作品は、書写年代および執筆の由来も明らかであり、光悦書跡研究の基準作として貴重である。

(島谷)

#### 主な展示作品

仏涅槃図 長谷川等伯筆 一幅

紙本着色

縦七九二・八 横五二一・七

桃山時代 慶長四年（一五九九）

京都・本法寺

長谷川等伯（一五三九―一六一〇）によって本法寺に寄進され、慶長四年四月二十六日に開眼供養された。六十一歳の等伯を中心に息子たちや一門が参加して制作されたものと思われる。洋犬を描き加えるのが珍しい。絵画の周囲は華麗な書表装で飾られている。



仏涅槃図

## 新発見

# 長谷川等伯の「鬼子母神」 —大日蓮展の調査で明らかに—

### 鬼子母神十羅刹女像

長谷川等伯筆、室町時代・元龜二年（一五七  
一）、絹本着色、掛幅総寸法 縦一八五・〇cm  
横五九・〇cm、画面寸法 縦一〇三・五cm横  
三八・〇cm、富山・妙伝寺蔵

### 作品について

桃山時代の代表的画家・長谷川等伯（二五  
三九〜一六一〇）の作品を新たに発見した。等  
伯が信春と称した時代に描いたものであるこ  
とが本展覧会の調査で判明した。

中央に鬼子母神が描かれ、そのまわりには  
十羅刹女が立ちならんでいる。鬼子母神は下  
の方をみつめているが、その視線の先には、女  
性信者が、わが子が無事に生まれ育つように  
と祈願している姿が想像できる。精妙で美麗  
な衣装の描写は、等伯がこの時期に制作した  
仏画に共通してみられる表現である。鬼子母  
神の顔の部分が特に磨耗しているが、これは  
御利益に与ろうとして信者が手で触れたため  
であろう。

画面に「元龜二年十一月十九日」とあるが、

これは妙伝寺第三代住職の仏藏院日敬（一五  
八四年没）が本作の開眼供養を行った日に記し  
たものである。等伯は、翌年元龜三年（一五七  
二）には、郷里の七尾から京へ本拠を移してい  
たはずで、本作の出現によって、彼が上洛した  
と考えうる最も遅い時期が示されることにな  
り、等伯の年譜に新たな一行が記されること  
になった。

### 作者について

長谷川等伯は能登（石川県）七尾の生まれ。  
能登在住時には仏画や肖像画を描き、その後  
上洛。四十歳代に等伯と改号するまで信春と  
称した。等伯が興した長谷川派は狩野永徳が  
率いる狩野派と拮抗するまでとなり、作品に  
「雪舟五代」と記して雪舟正系を標榜した。ま  
た千利休、本法寺日通上人との交わりも深く、  
彼らの肖像画も描いている。代表作品は、国宝  
の松林図屏風（東京国立博物館蔵）、知積院障壁  
画など。

釈迦の入滅を描いた仏涅槃図は、陰暦二月  
十五日の涅槃会ねはんえの供養に本尊として掛けられ  
る。宗派を問わずこの法会ほうえを行うところから、  
仏涅槃図の遺品は数多いが、東福寺の明兆筆  
の作品、大徳寺の狩野直信筆の作品とともに、  
この等伯筆の作品はすばぬけて大幅で、古来  
三大涅槃図として喧伝された。画面右端に「願  
主自雪舟五代長谷川藤原等伯六十一歳謹書」、  
左端に「叡昌山本法寺常住 慶長第四己亥年  
卯月廿六日吉辰 沙門日通（花押）」という銘  
が日通上人にとって書き付けられている。

（松原）

# 『大日蓮展』 出展リスト

## 日蓮聖人とその門弟

a=国産、◎=重要文化財、○=重要美術品

指定	名称	頁数	作者・伝来など	時代	世紀	地域	所蔵者	法量
	魂	1通	伝日蓮所用	鎌倉	13	千葉	清澄寺	
	念珠	1通	伝日蓮所用	鎌倉	13	千葉	法華経寺	
◎	日蓮聖人像	1幅		鎌倉	14	静岡	妙法蓮寺	各185×55.0
○	日蓮聖人像	1幅		鎌倉	13	千葉	浄光院	64.0×38.0
○	日蓮上人註画讃	4冊		桃山	16~17	千葉	観忍寺(鴨川)	
	日蓮聖人註画讃	3巻(5巻のうち巻1. 4. 5)		室町	16	京都	本因寺(京博寄託)	①33.2×170.8 ②33.1×1706.0 ③33.1×1795.0
	日蓮聖人龍口法難因	1幅	狩野探幽筆	江戸	17	京都	本法寺	49.2×128.0
a	観心本尊抄	1帖		鎌倉	13	千葉	法華経寺	
a	立正安国論	1巻	日蓮筆	鎌倉	13	千葉	法華経寺	
○	◎愛染不動感見記	2幅		鎌倉	13	千葉	妙本寺(麩南町)	
	御遺物配分帳	1幅	日興筆	鎌倉	13	東京	本門寺(池上)	28.6×43.1
	寿延山守香帳	1幅	日興筆	鎌倉	13	東京	本門寺(池上)	28.1×37.6
	日像上人像	1幅	長谷川信春(等伯)筆	桃山	16	石川	妙成寺	66.0×38.0
	日像上人像	1幅	大覚花押	南北朝	14	京都	妙顕寺	55.2×32.2
	白地蓮唐草模様錦襷被	1領	伝日像所用	南北朝	14	京都	妙顕寺	73.0×20.0
	日願上人像	1幅	狩野宗秀筆	桃山	16	京都	京都国立博物館	90.8×47.7
○	日堯上人像	1幅	長谷川等伯筆	室町	16	京都	本法寺	97.5×49.0
	日観上人像	1幅	伝狩野元信筆	室町	15	京都	本法寺	
	日願上人像	1幅	伝狩野元信筆	室町	16	京都	本隆寺	88.2×38.0
	日教上人像	1幅	信方筆	桃山	17	兵庫	青蓮寺	117.5×59.3
	弟子分帳	1冊	日興筆	鎌倉	13	静岡	本門寺(富士宮市北山)	30.1×21.4
	京都十六本山会合文書	2冊2通1箱		室町~明治	16~19	京都	頂妙寺	
○	妙顕寺文書	巻1幅		鎌倉~江戸	14~19	京都	妙顕寺	
	日蓮聖人坐像	1幅		13~14	13~14	神奈川	妙本寺(鎌倉市)	像高76.8 最大幅110.8 最大奥66.5
	活木日常坐像	1彫		室町	15	千葉	日本寺(多古町)	像高38.0 最大幅49.5 最大奥37.8
	日蓮聖人坐像	1彫		鎌倉	13~14	京都	本満寺	像高37.5 最大幅39.3 最大奥27.6
	日蓮聖人坐像	1彫		南北朝	14	千葉	日本寺(多古町)	像高39.5 最大幅50.3 最大奥33.3
	日蓮聖人像	1幅		室町	16	神奈川	浄永寺(鎌倉国史館寄託)	119.5×76.2
	日蓮聖人像(波木井御影)	1幅		室町	16	山梨	久遠寺	39.0×38.2
	日蓮聖人像	1幅	狩野元信筆	桃山	17	山梨	本遠寺	124.4×90.3
	佐渡奇壇之図	1幅	室町	16	山梨	久遠寺	100.8×44.1	
○	◎貞観政要巻第一	巻(2巻のうち)	日蓮筆	鎌倉	13	静岡	本門寺(富士宮市北山)	29.5×996.9
○	◎諸人御返事	1巻	日蓮筆	鎌倉	13	千葉	本土寺(千葉)	31.9×138.7
	五輪九字明秘密義釈	1巻	日蓮筆	鎌倉	13	千葉	法華経寺	24.6×15.8
○	◎天台肝要文集	1冊	日蓮筆	鎌倉	13	千葉	法華経寺	
	湘音草風風雨録三重箱	1冊		江戸	17	千葉	法華経寺	
	蓮池壽絵三重箱	1合		江戸	17	千葉	法華経寺	
	秘蔵宝軸	2冊	日蓮加筆	鎌倉	13	静岡	受法寺	
	老翁奇壇因絵馬	1冊	魚屋北談筆	江戸	19	東京	妙法寺(杉並区堀之内)	95.0×171.2

## 法華経の美術

指定	名称	頁数	作者・伝来など	時代	世紀	地域	所蔵者	法量
	曼荼羅本尊	1幅	日蓮筆	鎌倉	13	神奈川	妙本寺(鎌倉市)	158.5×101.8
○	◎十界勧誘大曼荼羅(絵受茶羅)	1幅		鎌倉	14	静岡	妙法蓮寺	156.0×83.7
○	◎細字法華経	1巻	日野資朝筆	鎌倉	14	新潟	妙法寺	5.8×1451.0
○	◎釈迦如来坐像	1彫	康俊作	南北朝	14	岡山	妙顕寺(備前市)	像高62.8 最大幅51.3 最大奥47.2
	◎観音経絵	2幅		鎌倉	13	石川	本土寺(石川)	各124.6×90.1
○	◎法華経曼荼羅因	6幅(21幅のうち)		鎌倉	14	富山	本法寺(富山)	各187.0~191.2×124.8~127.3
	絵受茶羅	1幅	応安元年	桃山	16	福井	本境寺(福井)	
○	◎法華経曼荼羅	2幅(4幅のうち)		鎌倉	14	静岡	本因寺(静岡)	各180.0×86.0
	宝塔絵受茶羅	1幅		南北朝	14	神奈川	本興寺(横浜)	100.2×42.8
○	◎釈迦多宝如来像・鬼子母神十羅刹女像・三十番神像・七字題目・日蓮聖人像	5幅	長谷川等伯筆	室町	16	富山	大法寺	釈迦86.0×40.0鬼子母神86.4×40.0三十番94.3×39.1七字99.0×39.5日蓮85.7×40.5
○	◎法華経曼文和歌儀紙	1巻	光厳天皇他筆	南北朝	14	京都	妙満寺	27.3×889.0
	法華経	1巻(7冊のうち)		元	14	京都	妙顕寺	68.0×111.5
○	◎金剛宝塔	1基	覚作性	南北朝	14	京都	本法寺	総高52.4
○	◎紫紙金字法華経	1巻(10巻のうち)	花唐草文経箱・光悦寄進状付	平安	11	京都	本法寺	26.5×798.5
	絵受茶羅	1幅	大覚花押	南北朝	14	京都	法華寺	97.4×51.9
○	◎一字宝塔法華経	1巻(9巻のうち)	平安	12	京都	本満寺	28.5×2398.0	
○	◎法華経宝塔曼荼羅因	4幅(8幅のうち)		鎌倉	13	京都	立本寺(奈良博寄託)	各110.5×58.5
	法華経	1巻(7冊のうち)		元	14	静岡	海長寺	65.0×111.0
○	◎釈迦八相図	1幅		鎌倉	13	山梨	久遠寺	115.8~117.5×80.5~82.7
	十羅刹女像	1幅		南北朝	14	千葉	浄光院	60.7×37.4
	1. 涅槃図	1彫	命尊筆	鎌倉	14	兵庫	妙法寺	109.2×80.4
	釈迦および多宝如来坐像(一塔両尊像のうち)	1彫		南北朝	14	神奈川	大明寺(横須賀市)	像高(釈迦)42.3(多宝)39.5 最大幅(釈)44.7(多)最大奥(釈)33.5(多)35.9
	一塔両尊四土像	6彫		南北朝	14	千葉	護国寺(茂原市)	最大幅(釈)45.3(多)45.2 最大幅(釈)41.2(多)44.3 最大奥(釈)38.1(多)37.2 像高(中尊)105.1(左脇侍)57.5(右脇侍)56.4 最大幅(中)71.5(左)40.1(右)40.1 最大奥(中)63.2(左)44.2(右)35.6
	一尊四土像	5彫		鎌倉	14	千葉	法華経寺	像高(釈)16.7(四土)9.2前後
	釈迦如来坐像	1彫		鎌倉	13	山梨	本因寺	像高54.5 最大幅54.9 最大奥29.4
	◎釈迦如来立像	1彫	覚慶作	鎌倉	13	山梨	本遠寺	総高約160 像高97.8 最大幅79.0 最大奥63.8
	金剛力士立像	2彫		鎌倉	13	山梨	久遠寺	総高約310 像高(阿)265.0(伴)266.0 最大幅(阿)115.0(伴)115.0 最大奥(阿)115.0
	鬼子母神十羅刹女像	1幅	長谷川等伯筆	桃山	16	富山	妙法寺	103.5×38.0
	染梅鉢散敷経経箱	1合		江戸	17	東京	本門寺(池上)	像高36.8横26.6高22.3
	九名神立像	1幅		南北朝	14	京都	本因寺	最大高77.5 像高55.0 最大幅39.0 最大奥28.0
	持国天・多聞天立像	2彫		鎌倉	14	京都	頂妙寺	(持国天)総高約300 像高213.5 最大幅137.0 最大奥102.9
	釈迦如来坐像	1彫		鎌倉	12~13	京都	本法寺	像高52.8 最大幅43.9 最大奥36.7
	妙見菩薩像	1彫		鎌倉	13	千葉	妙光寺(多古町)	像高49.4
	釈迦および多宝如来坐像(一塔両尊像のうち)	1彫	覚慶作	南北朝	14	京都	本因寺	像高(釈)69.5(多)68.2 最大幅(釈)60.0(多)59.1 最大奥(釈)56.1(多)55.2
	門流法度	1巻	日親加判	室町	15	京都	本法寺	33.7×261.0
	指袴字	1巻	日親筆	室町	15	京都	本法寺	19.1×356.2

外護者と信者

指定	名称	員数	作者・伝来など	時代	世紀	地域	所蔵者	法量
	栴檀折敷散母絵調度	1具	加藤清正奉納	桃山	16	熊本	本妙寺(熊本)	一の櫛径37.6横38.0高13.6 一の柄径12.8高6.2
	栴檀折敷散母絵調度	1具	加藤光正遺品	桃山	16	岐阜	法華寺	一の櫛径36.3横36.3高16.0 一の柄径14.0高9.8
	細目文字模倣紙衣陣羽織	1着		桃山	16	東京	東京国立博物館	
	加藤清正像	1幅	中川寿林筆	桃山	17	東京	大東急記念文庫	63.0×33.7
	遺言状	1幅	芥藤道三筆	室町	16	京都	妙覚寺	18.0×79.0
	渡辺浄庵妙庵夫妻像	1幅		室町	16	京都	妙蓮寺(京博寄託)	57.7×47.8
	後藤徳業夫人像	1幅		桃山	17	東京	個人	68.0×34.2
	玉塔絵巻茶籠	1幅		室町	16	広島	妙政寺(広島)	119.3×64.5
	お万の方像	1幅		江戸	17	静岡	妙法華寺	74.7×39.6
	徳賢一孝夫人像(夫人所持法華経) 組紙金字法華経	1幅(8巻)		桃山(平安)	17(12)	石川	妙法寺(石川県立美術館寄託)	61.0×35.8(各縦25.9)
	木戸光圀座像(陶製)	1彫		江戸	18	茨城	久昌寺(常陸太田)	総高28.6 像高26.8 最大幅27.6 最大奥24.3
○	書状	2幅	後小松天皇筆	室町	15	京都	妙顕寺(京博寄託)	
	織田信長屏風状	1幅		桃山	16	京都	本能寺	25.9×40.6
	織田信孝書状	1幅	織田信孝筆	桃山	16	京都	本能寺	
	大過去帳	2冊(3冊のうち)		桃山	16	千葉	本土寺(千葉)	28.1×18.8
	金銅蓮華塔草透彫華籠	3枚(12枚のうち)		室町	16	千葉	本土寺(千葉)	各径27.4~27.9高3.7~4.3
○	花鏡	1口		鎌倉	13	千葉	本土寺(千葉)	総高130.4口径70.0
	色絵紫雲花園透彫反鉢	1口	乾山	江戸	18	京都	個人	高11.2 口径20.6~20.8 底径11.2
	加藤清正忠人像	1幅		桃山	17	東京	大東急記念文庫	99.0×48.5
	刀「壹条政経」祝懸間長巻上之 本 (広指)	1口	本阿弥光室象嵌	鎌倉	13	東京	個人	刃長70.4
	山上不白座像	1彫		江戸	19	東京	安立寺	
	本阿弥折敷	3枚	光温・光忠・光秀筆	江戸	17~18	東京	東京国立博物館	
	仮名題目・細字法華経	各1巻	白鳥院筆	江戸	17	広島	宗教法人・國前寺	

法華文化の精粹

指定	名称	員数	作者・伝来など	時代	世紀	地域	所蔵者	法量
	彌孔雀文盤	1面		南北朝	14	山梨	本国寺(東博寄託)	高12.3 縦径20.5
○	獅子牡丹透腰刀	1口	金具・後藤祐兼作	室町	15	東京	前田育徳会	総長60.0
	俱利伽羅文三所物	1組	後藤祐兼作	室町	15	東京	前田育徳会	弁長21.7
	獅子香炉因三所物	1具	後藤祐兼作	桃山	16~17	東京	東京国立博物館	弁長21.1
○	刀絵因	1具	本阿弥光徳作	桃山	16	山口	毛利博物館	38.3×2686.0
	刀 壹条政経 江磨上(名物 北野江)	1口	本阿弥光徳象嵌	南北朝	14	東京	東京国立博物館	刃長69.7
a	栴檀母絵箱	1合	本阿弥光悦作	桃山	17	東京	東京国立博物館	縦24.2横22.0高11.8
○	花唐草螺鈿経箱	1合	本阿弥光悦作	桃山	17	京都	本法寺	縦32.8横28.5高12.5
	鹿下絵新古今和歌集和歌巻	1巻	本阿弥光悦筆	桃山	17	静岡	MOA美術館	
	花卉摺絵新古今和歌集和歌巻	1巻	本阿弥光悦筆	桃山	17	静岡	MOA美術館	
	蓮下絵和歌巻簡冊	1冊	本阿弥光悦筆	桃山	17	東京	東京国立博物館	
	摺絵蓮文鉢	1巻	本阿弥光悦作	江戸	17	東京	個人	86.7×272.2
○	立正安国論	1巻	本阿弥光悦筆	江戸	17	京都	妙蓮寺	89.1×85.14
	黒茶碗銘 銘 南宗	1口	本阿弥光悦作	江戸	17	東京	三井文庫	高9.1口径12.4 高台径6.1
○	後藤祐兼像	1幅		室町	16	東京	個人	83.7×44.3
	蓮池母絵合利野子	1基	五十嵐道甫・後藤祐兼作	江戸	17	京都	個人	幅9.3奥行9.6高17.7
	春日山母絵箱	1合	五十嵐道甫 前田家寄進 「観心本尊抄」を納める	江戸	17	千葉	法華経寺	
○	透絵観音内角皿	1枚	尾形光琳・深谷合作	江戸	18	東京	東京国立博物館	高2.9 縦22.2 横22.2
	色絵藤原定家詠十二ヶ月和歌角皿	12枚	乾山	江戸	18	静岡	MOA美術館	各 高12.0 縦16.8 横16.8
	色絵紅葉回透彫反鉢	1口	乾山	江戸	18	京都	個人	高12.0 口径20.0 底径9.8
○	州浜梅樹双燈籠	1面		鎌倉	13	京都	本能寺	径24.7
	五彩龍鳳花卉文大瓶	1対	景 鎮密	明	16	京都	本能寺	
	花伝書	1巻(2巻のうち)	日南甫	江戸	17	京都	本能寺	
	十六羅漢図	4幅	狩野元信筆	室町	16	京都	本法寺(京博寄託)	114.0×174.5
○	貝尺くし図	1幅	伝昌昌筆	明	16	京都	本法寺	19.5×35.7
○	日通上人像	1幅	長谷川等伯筆	桃山	17	京都	本法寺	106.7×51.6
	瑞雲花園	1幅	伝鉄斎筆	明	15~16	京都	本法寺(京博寄託)	26.0×41.5
○	広母繁図	1幅	長谷川等伯筆	桃山	16	京都	本法寺	792.8×521.7
○	等伯画説	1冊	日通筆	桃山	16	京都	本法寺	27.3×20.0
○	牛図	2幅	俵屋宗達筆	江戸	17	京都	頂妙寺(京博寄託)	各96.5×44.3
	黒漆葡萄果文流金衣籠	1合	瑞秋	桃山	17	京都	本満寺	総高38.0径33.4
	牡丹唐草螺鈿経箱	1合	朝鮮	桃山	17	京都	妙顕寺	基台縦35.3横24.1総高18.3 蓋縦34.3横23.0
○	松栴図襖	4面(4枚)		桃山	17	京都	妙蓮寺	各176.5×115.8
○	法華経	1巻(8巻のうち)	伏見天皇筆	鎌倉	14	京都	妙蓮寺(京博寄託)	
○	本朝文粋	1巻(13巻のうち)		鎌倉	13	山梨	久遠寺	28.7×190.5
○	礼記正義	2冊		南宋	12	山梨	久遠寺	27.2×18.5
a	夏京山水図	1幅	伝胡丈夫筆	南宋	12~13	山梨	久遠寺(東博寄託)	118.5×52.7
○	釈迦如来像	1幅	菜一 鎌筆	江戸	18	東京	淨教寺(東京)	103.2×56.6
○	十六羅漢図	8曲1双	畑端筆	元	13~14	千葉	法華経寺(東博寄託)	各幅87.6×47.9
	七面大明神応現図	1面	葛藤北斎筆	江戸	19	茨城	妙光寺(古河)	132.4×59.3
	仏涅槃図	1幅	長谷川等伯筆	室町	17	石川	妙成寺	156.0×111.5
	洛中洛外図屏風	6曲1双	安南	江戸	17	新潟	妙法寺(佐渡)	153.0×69.2
○	宝物集巻第一	1巻	日春筆	鎌倉	13	静岡	光長寺(沼津)	28.1×1097.0
○	日本紀略宴和歌	2巻		鎌倉	13	熊本	本妙寺(熊本)	
○	安南国書	2冊	安南	江戸	17	熊本	本妙寺(熊本)	
	鯛鯛口	1口		室町	15	千葉	鎌原寺(茂原市)	径約50
	釈迦涅槃図織仏	1幅	戸塚七兵衛作	江戸	17	東京	法養寺	194×222.4
○	刀 村正	1口	銘が日蓮の命日	室町	16	東京	個人	刃長66.4
	釈迦三尊像	1幅	狩野派	室町	16	山梨	久遠寺	152.7×53.1
	洛中洛外図屏風	6曲1双		江戸	17	新潟	妙照寺	155.0×111.5
	彌孔雀文盤	1面		室町	15	三重	寿量寺	高約15 縦横約20
○	大般若経巻第246	1巻		奈良	8	京都	瑞光寺(奈良博寄託)	155.0×351.8
	三人歌舞図給馬	1面	二代鳥居清満筆	江戸	19	東京	法明寺(雑司が谷)	205.7×120.3
○	日通上人像	1幅	長谷川等伯筆	桃山	17	京都	本法寺	106.7×51.6
	二十番神像	1幅	日親筆	室町	15	京都	本法寺	92.9×37.8



### 発見の経緯

本作は、制作当初から妙伝寺で寺宝として保管されていたが、近代以降長らく、掛けられる事もなく、また筆者など広く知られることはなかった。

「大日蓮展」開催にあたり、展覧会出品候補の調査のため、東京国立博物館の列品課・松嶋雅人研究員が平成十四年六月二十日に妙伝寺を訪問した。当日は、別の宝物を調査する予定だったが、同行の日蓮聖人門下連合会の関戸堯海師がたまたま本図を拝見したところ、「長谷

川信春」の署名を確認することができた。これまで寺外で公開されたことは一切な

## 遂に開幕「大日蓮展」内覧会を開催

く、本展覧会が一般にお披露目される初の機会となる。

平成十五年一月十五日、いよいよ立教開宗七五〇年記念「大日蓮展」が開幕した。

これに先立ち前日の十四日午前十時から、千葉県藻原寺から出展された一塔両尊四士像の前で日蓮聖人門下連合会渡邊清明理事長導師のもと、小松淨慎(日蓮宗)、佐藤義賢(法華宗本門流)、中村通義(顕本法華宗)、土屋善敬(法華宗陣門流)、斎藤隆彦(法華宗真門流)、山下通雄(本門法華宗)、大橋邦正(国社系)の各常任理事出仕にて大日蓮展円成祈願の法味言上が奉修された。

午前十一時からは、各種報道機関に向け内覧会が行われ、三十五社五十五名の報道関係者が訪れ、本展に対する関心の高さがうかがわれた。午後二時からは平成館一階ロビーにて約八〇〇名の来賓と共に開会式が執り行われ、主催者挨拶の中で渡邊理事長が「立教開宗七五〇年記念事業のしめくくりとしてこの大日蓮展が開催されます。この機会に多くの方々に観覧していただきたいと思えます。」と述べた。引き続きテープカットを行い内覧会

へと進んだ。

第一室に入つてすぐ正面には、本展ボスターの祖師像、鎌倉妙本寺の日蓮聖人坐像が安置され、その凛としたお姿が人々を惹きつけていた。また第四室には長谷川等伯が描いた仏涅槃図の巨幅が展示され、森喜朗前首相らも所蔵寺院である京都本法寺大塚泰詮眞首の説明に熱心に耳を傾け、壮大なスケールの描写に多くの人々が目をみはっていた。

明けて会期初日の十五日は、前日の暖かい日和とはうってかわり寒い日であったが、開催前から何名かの入場者が列をつくるなど一般の方々にとつてもこの「大日蓮展」は高い関心がもたれていると言えよう。

展覧会の中には祖師像をはじめとした仏像の前で手を合わせてから拝観される人も多く、この展覧会が単なる美術展ではなく、まさに日蓮聖人の御生涯とその信仰を一所に再現した一つの道場であるとの感があった。会期限定の道場に、多くの方々が参集されることを期待するものである。

# 大日蓮展を終えて

開幕の時よりも幾分か陽が延びたとは言え未だ寒さ厳しい中、東京国立博物館平成館の外壁に描かれた大きな蓮華に、冬の夕日が静かな光を注いでいる。平成十五年二月二十三日午後五時、最後の来場者を送り出して大日蓮展が幕を降ろした。

一月十五日から開催され三十六日間で十五万人を超える入場者を数えたこの展覧会は、まさに宗祖立教開宗七百五十年慶讃の掉尾を飾るにふさわしい記念の浄業であった。

最終日の八七六三名を含め、最後の一週間では四万数千人の入場者を数えたが、印象に残るのは、出展されている祖師像や御本尊の前で立ち止まり頭を垂れる多くの人々の姿であった。そうした姿を見るにつけ「これは単なる展覧会ではなく日蓮聖人の御生涯を一所に再現した法華経の道場なんだな」と実感し、門下僧俗のみならず広く一般社会の人々にとつても此処が日蓮聖人そして法華経信仰の機縁となることの喜びを感じたのである。まさに日蓮聖人とその信仰に巡り遇う珠玉の三十六日間であった。

私はこれまで二十年に亘り日蓮宗宗務院に奉職してきたが、その中の何年かは門下連合

会の幹事としてまた門連だよりの編集長としての仕事をさせていただいた。現在はその職を離れたが、今回の大日蓮展円成を思うとき、受け難き人身を受け、遇い難き法華経に遇い、更にこの立教開宗七百五十年という佳節に巡り会わせていただいた幸せに深く感謝するものである。

今回この紙面についての原稿依頼を受けた折りに担当の方から「何か隠れた苦労話でもあれば」といった趣旨を伺ったが、自身の中では様々なことについて苦労と感じたことは一度としてなかったというのが正直なところである。むしろ多くの難しい課題を一つ一つ解決していくことが、より質の高い展覧会の開催につながる道であり、そうすることが宗祖の誓願にも叶うものであると考えたからである。もちろんその過程では多くの方々に助けられながら事を進めてきたのは今更申し上げるまでもない。

さて、無事円成した本展覧会だが、そこに至るまでの道のりは必ずしも平坦ではなかった。第二十五号にも記したが、この企画が実際門連として緒に就いたのは平成八年秋を迎えてからのことであった。当時門下教団の信者が東京国立博物館の次長(副館長)を勧められていたこともあり、本展の実現に向け何が必要なのか初めて具体的な要件が示されたのである。

これを受けて門連常任理事会において検討が始まったのである。しかしながら全門連としても大事業であり、その規模から考えて照らすべき経験もないため計画当初に於いては議論も作業も遅々として進まなかったのが実情であった。

まず二百六十点上る出展内容リストの作成に取りかかったが、すべての宝物は宗派や教団として所蔵しているものではなく門下の各寺院や個人が所蔵しているものであり、そうした宝物を出展することが出来るかどうかについて門連常任理事会及び理事会の場ですぐに判断・了承出来るものではなかったこと、また億単位の開催経費については共催のマスコミがすべて負担し門連には一切費用負担が生じないというものの、チケットの割り当て等最終的な費用負担が生じてくるのではないかと云った費用面での懸念があるなど、それぞれの内部事情が異なる教団の連合組織であるが故の難しい課題が浮上してきたのである。

こうした中で積極的に会議を重ねたが、平成十二年五月の常任理事会において「御正當の平成十四年まで二年を切った現状を鑑みた場合開催の実現は不可能」として、ついに本展企画を中止にするとの決定がなされたのである。これが大日蓮展開催実現に向けた中でもっとも大きな危機であった。

ところが不思議なもので計画が白紙に戻った直後、フジTVから日蓮宗に日蓮展開催の企画が持ち込まれたのである。内容的には中止となった門連の企画案をスライドできるようなものであったので、これを以て再度日蓮宗より門下連合会へ門連事業として行うべく提案、了承されたのが平成十二年十一月二十七日のことであった。

前回中止の状況と異なる点は、フジTVという共催マスコミが明確となっていること（後に共催は産経新聞社となる）。東京国立博物館の内諾を既に得ていること。日蓮宗からの発議でもありこの案が門連として了承されるならば、その運営及び予算については日蓮宗がある程度考えているなどの点があった。

私はこれが大日蓮展開催を実現する最後のチャンスであろうと思った。と同時に今までも様々なアクシデントによって幾度も頓挫したこの企画が、今回またも新たにスタートしたことで、「これで必ず実現できる」との確信がこのとき生まれたのもまた事実である。そして平成十三年十一月に開催された京都における常任理事会・理事会において本展の開催推進が確認されたのを機に、愈開催に向けた具体的な作業へと入っていったのである。

今回の浄業達成に至るまでの道のりを思い返してみると、目標をしっかりと見据え、信念をも

つて事に当たれば、まさに異体同心にして万事を成ずる事が出来ると感じた次第である。

今回もう一つ感じたことは、こうした催しに一般社会の未聞の方々々が接していただくことは、私たち伝統教団にとり日蓮聖人そして法華経信仰を弘めていく布教手段として有効なものではないかということである。私たちは、日常的には法務を通じて檀信徒と接しているが、公の場所における一般の方々に対する効果的な布教という点では満足に出来ていないと思える。

であるならば、法務を中心とした僧侶としての直接的な布教を行うことは別に、異なる観点、例えばこうした展覧会のように美術的な観点から一般社会にアプローチしていく中で、日蓮聖人そして法華経信仰への機縁を作ることが出来るのではないかと考える。展覧会に限らず様々な手法があると思うが、私たちも一旦宗教家としての視点を離れ日常生活の中の、一見宗教と無関係の部分で、自然な形で多くの人々に関わり、そこで人々の心に安らぎを生み出す様な方途を新たな布教として考えていっても良いのではないだろうか。

私たちには七百五十年の歴史と伝統がある。その礎があればこそ今回の大日蓮展も円成することが出来たのである。そしてそれは日蓮聖人門下連合会という形で門下が結束

したからこそ出来たのだと思う。

## 大日蓮展決算報告

この決算報告書は、平成十五年六月十二日に開催された身延理事会、そして平成十五年十一月二十七日に開催された京都理事会に於いて承認された決算報告であります。また本展の企画趣旨を御理解の上、御所蔵の御宝物を出展賜りました各御寺院、そして期間中に多くの法華経有縁の方々をお誘いの上、来場して頂きました門下各御寺院には甚深より感謝申し上げますと共に、紙面をお借りしまして盛大且つ成功裡に終えました事を御報告させていただきます。

さて、この展覧会は、東京国立博物館・日蓮聖人門下連合会・産経新聞社の主催にて、立教開宗七五〇年記念事業として平成十五年一月十五日より二月二十三日まで、三十五日間に亘り東京国立博物館において開催されました。

本展は日蓮門下各派に格護される宗教遺産とともに信者による様々な美術工芸品を広く紹介し、法華経と日蓮聖人の文化的影響を検証しようとするものであり、日蓮門下に関わる霊宝がこれまで一堂に公開されたことはなく、多くの人々にとりまして千載一遇の機会となりました。

(H15.11.27)

## 収入の部

項目	決算額	備考
入場料	160,214,029	当日券 75,278人・門下販売分 81,725人・その他
図録販売	45,520,970	販売総数 25,105冊
音声ガイド貸出	6,509,100	貸出総数 25,067台
グッズ販売	29,852,055	館内記念品販売
搬出金(日蓮宗負担)	160,000,000	80,000,000を2回に分けて
合計(A)	402,096,154	

## 支出の部

項目	決算額	備考
調査・交渉費	5,041,182	調査出張交通費等
作品拝借料	685,391	拝借謝礼 8件(門連寺院以外の美術館・個人所有等に)
作品修復費	2,542,940	修理・修復8件
作品保険料	6,944,200	保険評価額 67億470万円
輸送費	36,750,000	集荷・梱包・展示・撤去・返却一式
映像制作費	2,100,000	会場内ビデオルーム放映用テープ制作費
出張費	6,493,534	東博学芸員・門連事務局員・産経職員
レセプション費	4,921,614	H15.1.14.前日オープニング・パーティ代
イベント費	1,468,333	立松和平氏講演料・雅楽声明出演料
会場付帯設備	6,044,917	会場内電気・水道代、トイレ清掃費
会場運営・警備費	12,274,827	会場内事務局費、券売・監視人件費
会場運営・展示雑費	46,200,000	展示ケース・看板・パネル等
印刷費	13,000,000	ポスター・チラシ・チケット
媒体費	50,676,105	新聞・テレビ・雑誌・交通広告etc
媒体制作費	1,129,328	記者発表会場費・取材費を含む
図録制作費	42,000,000	28,000冊
グッズ製作・運営費	24,779,246	展示会グッズ製作費と物品販売の人件費
通信費	1,623,411	ポスター・内覧会案内状・発送費
社外者旅費	2,574,630	大塚工芸・美術出版・その他
雑費	948,159	ハローダイヤル通信・運営費・スタッフ会議費
業務委託費	2,100,000	ティーコムへPR事務局委託経費10月～2月(5ヶ月)
ビデオ撮影・編集費	8,400,000	展示会準備～終了までの撮影・編集・制作費
東京国立博物館への支払い	44,854,440	
産経新聞社手数料	17,844,445	
合計(B)	341,396,702	

## 収益配分

収支(A)(B)	60,699,452	
産経新聞社の収益配分	12,139,890	収支の2割分
日蓮聖人門下連合会の収益配分	48,559,562	収支の8割分 ……①

## 門連収益から使用した経費

贈呈図録及びVTR	18,727,071	図録・ビデオ制作費
物販制作費	1,181,250	携帯deミラー
送料	3,332,491	約8,000ヶ寺への図録・ビデオ配送費
大日蓮展事務局費	500,000	残務処理に関する経費
合計	23,740,812	……②

剰余金 ①-②	24,818,750	2,000,000円を門連経常会計「750事業費」へ、 22,818,750円を特別会計「日蓮聖人降誕800年事業資金(仮題)」へ
---------	------------	--

お蔭様をもちまして開催期間三十五日間で延べ一五一、六六〇人の入場者を数えました。収支報告は左表の通りです。  
尚、剰余金のうち、二〇〇万円を記念事業残務

処理での使用を目的として門連経常会計の「七五〇事業費」へ、残りの二二、八一八、七五〇円を特別会計「日蓮聖人降誕八〇〇年事業資金(仮題)」として門下連合会の今後の事業にあてるこ

ととなりました。

「立正安国論」 奏進七五〇年記念特別展

# 「日蓮と法華の名宝」

—華ひらく京都町衆文化—

平成二十一年十月十日～十一月二十三日

京都国立博物館

## 日蓮と法華の名宝展開催決定

文応元年（一二六〇）、三十九歳の日蓮聖人は、度重なる災難と国家の危機を憂え、『立正安国論』を著し、鎌倉幕府前執権北条時頼に献じる。その行動は、蒙古襲来の前にした社会に反響をよび、後世にも大きな影響を与えた。平成二十一年は、それから七百五十年の節目の年に当たる。

本展覧会はそれを記念し、『立正安国論』を軸に、京都十六本山を中心とした諸寺伝来の多くの文化財を一堂に集めることで、鎌倉新仏教の一翼を担った日蓮聖人の足跡を理解する機会にするとともに、その門下の活躍、特に孫弟子にあたる日像上人の京都開教以降、町

衆文化の支柱として、公家文化と並んで、京都文化の形成に果たした日蓮上人の大きな役割を紹介する。

日本絵画の一大派閥となった狩野家が、法華信者であったことはよく知られているが、それと並び立った長谷川派の祖、長谷川等伯も能登七尾の出身であり、敬虔な法華信者だった。能登は、日像上人の弟子であった日乗ゆかりの地であり、この頃は京都の法華教団と深い関わりをもっており、それが彼の上洛後の活躍を生む素地となった。

また、江戸時代初期の京都文化をリードした本阿弥光悦も、熱心な法華信者であり、縁戚

関係にあり同じく法華信者であった俵屋宗達、尾形光琳、尾形乾山へと連なる絵画の流れは、琳派を形成する。

こうした近世日本美術の二大潮流を築いた名家の優品を通じて、町衆による京都文化の興行きの深さとそれに果たした日蓮諸宗の役割を全国に伝え、京都にある国立博物館ならではの展覧会としたい。

### 開催概要

一、名称 特別展「日蓮と法華の名宝—華ひらく京都町衆文化—」

二、会期 平成二十一年十月十日（土）～十一月二十三日（月・祝）

三、会場 京都国立博物館

四、主催 京都国立博物館・日蓮聖人門下連合会・日本経済新聞社・京都新聞社

五、後援 京都府、京都市、京都市教育委員会

六、構成

第一部 「法華文化の展開」

第二部 「日蓮とその時代」

第三部 「京都開教と西国への日蓮諸宗の展開と隆盛を追う」

第四部 「京都受難の時代」

第五部 「復興と近世文化の開花」

七、観覧料金

一般一三〇〇円（二二〇〇円／一一〇〇円／一〇〇〇円／九五〇円）  
 高校・大学生 九〇〇円（八〇〇円／七〇〇円／六〇〇円／五七〇円）  
 小学・中学生 四〇〇円（三五〇円／三〇〇円／二〇〇円／一九〇円）

（ ）内は割引／前売券／団体／特別観覧権（門連前売）

当日券：当日、博物館に個人一人が入場するチケット。

割引券：チラシに付けて配券するチケットと考えると良い。タクシーなどに載せてあるチケット。

前売券：会期前に頒布するチケット。

団体券：責任者に引率される二十人以上の者での同時入館が条件。

特別観覧券：門下連合会が窓口となって販売する入場券。会期前、会期中を通じて頒布。

## 展示会五部構成と主な展示物解説

### 第一部「法華文化の展開」

天台と並んで伝統的法華文化を継承するとともに、日蓮諸宗独自の宗教文化を形成する過程を通観。

主な展示作品  
 弥勒下生变相図 李晟筆 一幅

絹本着色  
 縦二七・二 横二二九・〇  
 高麗時代 至元三十一年／忠烈王二十年（二二九四）  
 妙満寺

本図は、釈迦滅後五十六億七千万年後、龍華樹下で成道し、説法する弥勒如来の下生の場面を描く。『高麗史』卷三十二忠烈王二十七年（二二〇二）九月戊申条に「親設龍華会于広明寺」、同二十八年二月辛卯条に「幸広明寺設龍華会」とあり、忠烈王時代の弥勒信仰が制作背景にあるのであろう。

この画題は、基本的に『弥勒下生経』か『弥勒大成仏経』かに基づく。『大成仏経』の方が遅れて成立し中国に流入したため、後者の方がより複雑で整備された図像となる。この両者における最大の相違は、弥勒の父母の扱い



弥勒下生变相図

である。前者では弥勒仏前での出家の主体はこの父母であるのに対し、後者では転輪聖王夫妻となり弥勒の父母の役割が退化している。本来、本図は、中国・唐代以降の弥勒大成仏経变相図の流れに位置づけ得るものだから。しかし、出家人物像には、「慈氏父修梵摩」「慈氏母摩訶提」と金泥書されており、『弥勒下生経』に基づいて題記されている（なお、父母の名前の翻訳から『下生経』は法護訳によると思われる）。この点に、中国と朝鮮との隔たりをうかがい得る。また、如来の左右には短冊形尊名金泥書を伴う十種の供養菩薩が描かれる。如来左脇（向かって右）の五菩薩は、新羅以来盛んであった華嚴教学の影響を受けて『華嚴経』卷十三（T9-481-a）等に説く諸菩薩を採っているが、右脇五菩薩はその典拠がないので題記の統一がとれていない。『法華経』法師品に説く十種供養（華・香・瓔珞・抹香・塗香・焼香・繪蓋・幢幡・衣服・伎楽）に影響を受けたのであろうか。「茶供養」などとはあるのは時代相を示しており興味深い。

さて、本図で重要なのは、画面下金泥書題記銘から至元三十一年に宮廷画家の李晟が描いたものと判明する点である。高麗は元の藩王国となったために、元の年号を使用しており、至元三十一年は忠烈王二十年に相当する。高麗仏画で十三世紀に遡る紀年銘のある作品

は、従来一点しか知られていなかった。即ち、大和文華館他六箇所に文蔵される一二三五六六年の金義仁発願五百羅漢図、島津家旧蔵の至元二十三年（一二八六）銘阿弥陀如来図である。本作はそれに次ぐ三番目の作であるゆえ、宮廷画家が描いた最古作になる。

この李晟の官職は、文翰待詔である。題記内では「畫文翰待詔李晟」とあるが、これは「畫文翰待詔李晟」と読むべきである。なぜならば画面右下隅の海浜の松樹の左脇に「文翰待詔臣李晟畫」なる墨書款記が存在するからである。題記以外の画家自筆款記も仏画では他に例がなく、極めて重要なものである。

待詔とは、所謂「画院」に属する画家の官職名である。中国では、科挙により選抜された文官のエリートを集めた翰林院に対して、選抜した宮廷御用絵師を抱えておく翰林院画院（画院）という機構制度が設置され、北宋時代に完備していた。一方、高麗朝も、中国に倣って科挙制度が実施されており、翰林院に相当する官署の変遷については『高麗史』巻七十六・百官志に記されている。ところが、画院については、史料がほとんど存在せず、その実態は極めて不明朗であった。

そこで本図の記す文翰待詔の位置を確認するため、翰林院相当官署の変遷を概観しておく。太祖王権の時、泰封（後高句麗）の制度に

倣って元風省を置き、その下部組織に学士院が置かれ、顕宗の時、翰林院と改称され、国王の詔勅の起草に当たった。その後、何度か改名を経た後、忠烈王元年（二七五）に文翰署、同二十四年（二九八）に詞林院、同三十四年（一三〇八）に藝文春秋館と変遷をたどっている。

この藝文春秋館は「文翰」と「史官」とを合併して設置されたものであるが、忠肅王十二年（一三三五）には分離され、恭愍王五年（一三五六）に翰林院と再び改称された。しかし、同十一年（一三六二）には藝文館と改められ、恭讓王元年（一三八九）には再度史官と合併されて藝文春秋館となつている。

本図の「文翰待詔」とは、文翰署と並置されていた画院と推測され、その名称は忠烈王時代の文翰署（二七五―九八）と矛盾ない。この文翰署に対して画院がどのような形態で存在していたのかは興味ある問題だが、そのヒントになるのが佐賀県唐津市の鏡神社に所蔵される水月観音像である。

現在は失われているが、鏡神社本にはもと題記が存在していた。幸いにも、江戸時代に全国地図作製のため当地を訪れた伊能忠敬（一七四五―一八一八）がそれを隅目し、自身の『測量日記』文化三年九月七日条の割注に書きとどめており、「画成至大三年五月日 願主王叔妃 画師内班從事金裕／文翰画直待詔季桂同

林順同宋連色員外中郎崔昇等四人」とする。至大三年は忠宣王二年（一三一〇）、季は李の誤記であるが、問題は割注文末である。従来これを「画師内班從事金裕文、輪画直待詔季桂」と読んでいたが、本来は「画師内班從事金裕、文翰画直待詔」と読むべきことも判明した。但し、鏡神社本は文翰署が藝文春秋館に改組された後の作であるにもかかわらず、「文翰」の名を留めている。そこから、忠烈王時代に画院制度が整備され、それが翰林院機構改革に取り残されて旧名を存したことを予想させる。

なお、本図は、江戸時代末期には日本に伝来していたことが箱書からわかる。「龍華會之図李晟筆」との箱蓋表書は、「古昔庵好齋謹記との蓋裏書から、古筆鑑定家の大倉好齋（二七九五―一八六二）の手になる。蓋裏張紙には「至元三十一年申午／本朝永仁二年申午二当ル／文久三年癸亥迄五百七拾年二成」とあり、貼紙は大倉好齋歿後に附せられたものである。また、箱包裂に京都町衆の某家所蔵の旨も記されている。おそらく李朝の廃仏政策によって日本にもたらされ、町衆の手に渡り、後に檀那寺に施入されたのである。

以上、本図は、史料的に重要であるばかりか、質的にも希有のものであり、高麗仏画史を塗り替える重要文化財級の新発見といつて過言でない。施主比丘の慈航や希忍の履歴につ

いては、目下不詳であり、向後の研究が望まれる。  
(大原)

主な展示作品

絵曼荼羅 長谷川等伯筆 一幅

絹本着色

縦七七・五 横一一三・〇

室町時代 永祿十一年(一五六八)

妙傳寺



絵曼荼羅

絵曼荼羅としては最も構成諸尊数が多く完成された形態を示す。下部中央には、日蓮を中心に、日朗、日像、日惠、日承、老尼の兆桂、法体の惠祐とくゆうが描かれている。

現在判読が困難であるが描表具上下縁の墨書銘から、越中国新川郡金山谷の本願寺の日惠が願主となつて描かれたものであることが判明する。

本図は、もと愛知県岡崎市・円頓寺に伝来していたが、現在は失われているものの、表具に裏書がかつて存在し、そこから永祿十一年(一五六八)に日惠が描かせたものとする。ここから制作年代が判明し、筆者についても落款はないが、日惠との関係や画風から長谷川等伯の筆と推断される。本図は、仏画としては正統的で等伯の力量をよくうかがえるが、構成については、富山・大法寺蔵の連幅を考えると願主日惠の指導に拠るところが大きかつたと思われる。

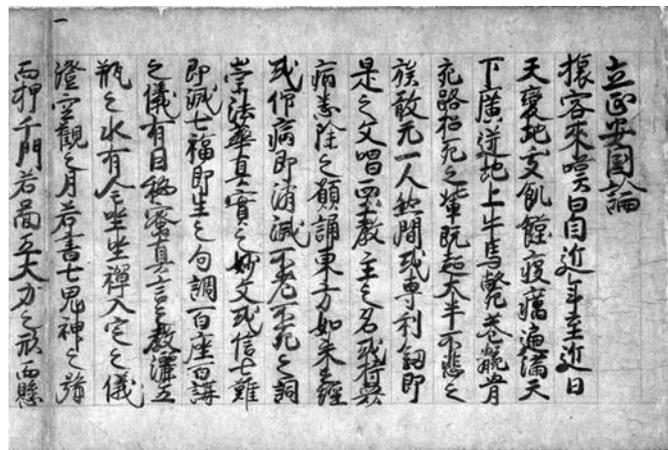
更に、惠祐とは畠山義統(？—一五九〇)の法号であつて、兆桂はその妻女で、施主檀越と思われる。畠山義統は、能登国守護畠山氏八代の当主であるが、永祿九年(一五六八)の政変で国外に追放され、結局失地回復を果たせぬまま歿している。高野山成慶院所蔵の有名な長谷川等伯筆の伝武田信玄像の眞の像主は義統ではないかという説もある。

制作の事情がこれほど明白なのは貴重であるが、本図はのちに能登国羽咋滝谷の妙成寺にあつ

たようで、享保十六年(一七三一)に妙成寺二十四世を勤めた妙傳寺三十一世日竟によつて妙傳寺に移入されている。また、文化四年(一八〇七)の同四十六世日速の代に修理され、その後円頓寺の什宝となつている。これら縁由をもつて、近年円頓寺よりかつての所蔵であつた本山妙傳寺に納められたものである。  
(大原)

第二部 「日蓮とその時代」

『立正安国論』を軸とした御書・絵画類を



立正安国論

通じて日蓮聖人の生涯をしのぶと共に、その門下の六老僧をはじめとする直弟子を紹介。

第三部「京都開教と西国への日蓮諸宗の展開と隆盛を追う」

主な展示作品  
りっしょうあんこくろん

立正安国論 日蓮筆 一巻

紙本墨書

縦二九・四 横一五九八・〇

鎌倉時代 文永六年（一二六九）

千葉・法華経寺

中山法華経寺に伝来する、日蓮真蹟の『立正安国論』で、文永六年（一二六九）十二月八日に、八木式部太夫胤家の要請に応じて写筆した。三十六紙の継紙を料紙として、三十五紙に本文を書写し、第三十六紙を加えて跋文を記している。紙背には『本朝文粹』巻第十三が筆写されていたが、近世になって全文が擦り消された。

日蓮は、鎌倉に進出して間もなく、正嘉元年（一二五七）八月二十三日の夜、未曾有の大地震に見舞われ、多大な被害を生んだ。このような災難の根源を知り、解決の方法を仏教經典に求め、その答えをまとめて『立正安国論』一巻として著した。文応元年（一二六〇）七月十六日、日蓮はこの書を宿谷入道最信を通じて、前執権北条時頼に呈上して、『法華経』の信仰による善政を進言し

た。このなかで、『法華経』の信仰を退転すると、「日界叛逆の難」と「他国侵逼の難」が起こり、国家は破滅に瀕すると預言した。文永五年（一二六八）閏正月、蒙古の国書が幕府に届き、『立正安国論』での預言が現実のものとなった。

下総国（千葉県）の守護を勤める千葉介の一族、八木式部太夫胤家が、日蓮に『立正安国論』の書写を要請したのは、このような状況下でのことであった。この『立正安国論』が中山法華経寺に伝来するのは、遠藤右衛門入道道正の寄進によるもので、嘉元四年（一一三〇）正月十三日「沙弥道正授与状」が中山法華経寺にある。現在の卷子



日蓮坐像

本に成巻されたのは、正保三年（二六四六）に行われた「正保修理」によってである。（中尾）

主な展示作品

日蓮坐像 院興作 一軀

木造彩色

像高一・〇

鎌倉—南北朝時代 十四世紀

妙覚寺

京都市上京区の妙覚寺は、妙顕寺を創始した日像（一二六九—一三四〇）の法孫である日実（一一八一—七八）によって、永和四年（一二七八）に開かれたという。京都の日蓮法華宗寺院のうちでも、古い由緒を誇る大本山のひとつである。

本像はそこに祀られる日蓮の肖像である。後方の襟を山形に表わした僧綱領の法衣を身にまとい、『法華経』と扇を手にする、日蓮像に典型的の姿をしている。作風からみてもかなりの古像とみられるが、像内の銘文から、作者が法印院興であることが判明し、製作年代もおおよそ推測できる貴重な作例である。

院興は十四世紀前半に活躍した仏師で、元享二年（一一三二）に製作された神奈川・覚園寺の阿闍如来像などにも名をのこしている。同像の銘文にも法印という位が記されており、法印位時代の作例である本像の製作年代もそれから大きく隔たらないころ、すなわち鎌倉時代末から南北朝時代

最初期にかけてか、と考えられよう。したがって、本像の製作時期は妙覚寺の創建よりもさかのぼり、ちょうど日像によって妙顕寺が開かれた頃にあたる。本像が妙顕寺から移されたという確たる証拠はないが、伝承では日像ゆかりの像ともいわれている。それらを勘案すれば、建武元年（一二三三）に後醍醐天皇によって妙顕寺が勅願寺となったころ、すなわち日蓮法華宗が京都において公認されたときに、その記念碑的な像として、日像によって発願されたという可能性も考えられるのではないだろうか。京都府指定文化財。



日蓮坐像

主な展示作品  
日蓮坐像にっしんざざう 一 軀

木造彩色  
像高三五・九  
鎌倉時代 元弘元年（一二三二）  
北海道・法華寺

本造を祀る法華寺は北海道松前町にあり、伝説の僧である日持（一二五〇—？）所縁の地に再興されたとの伝承をもつ、北海道有数の古刹である。日持は、日蓮の直弟子のうちでも、六老僧と呼ばれる主要な弟子のひとりであったが、永仁三年（一二九五）にみずからの寺を後進にゆずり、東北から北海道を経て大陸へと渡つたという。中国への布教をめざしての旅であった。

そこに祀られる本像もまた、数奇な運命をたどつた像といえるであろう。像を納めている厨子に刻まれた銘によると、本来は大阪・高槻市の正覚寺に安置されていたことが判明する。正覚寺は高槻の上牧にあつたが、明治の廃仏の流れのなかで廃絶したらしい。法華寺の記録によると、同寺に移坐されたのは明治十九年（一八八六）のことで、今回はそれ以来久々の、関西への里帰りということになる。

本像も内部に銘文があり、元弘元年（一二三二）に、日像と大覚妙実の関与のもとで造立されたことが記されている。作風的にも鎌倉末から南北朝にかけてのものと思われ、全国的にみても数少な

い日蓮の古像として貴重である。また、はるか津軽海峡を越えて旅をしたという経緯は、当寺ゆかりの日持の人生を連想させ、たいへん興味深い。北海道指定文化財。（浅湫）

第四部「京都受難の時代」

比叡山により引き起こされた天文元年（一五三二）天文法華の乱による京都日蓮諸宗寺院の壊滅的打撃との堺での雌伏、天正七年（一五七九）の織田信長の裁定による安土宗論での敗北、文禄四年（一五九〇）の豊臣秀吉の方広寺大仏殿千僧供養への参加強制をめぐつておこつた不受不施派の弾圧という、政治と信仰との対立により被つた受難の時代を振り返る。

第五部「復興と近世文化の開花」

京都の日蓮諸宗は、町衆といわれる上層町人階級によって支えられますが、そこから日本の美術をリードする文化が生み出された。狩野元信、長谷川等伯、本阿弥光悦、俵屋宗達、尾形光琳、尾形乾山と名前をあげると「えっ、これらの人がみな法華の信者!？」と驚かれる人も多い。信仰とは無関係なようである、これを生み出した精神は深い奥底で繋がっている。名品を通じて、京都町衆と法華と京都文化のつながりを再認識する機会を設ける。

# 日蓮と法華の名宝展開催

本年十月十日より京都国立博物館において「日蓮と法華の名宝」展が開催されるのは既報の通りだが、このたび京都と東京において記者発表会が行われ、広く一般への広報が始められた。京都では、六月三十日午後二時より京都国立博物館に二十三社、三十六名の記者を集めて発表が行われた。まず担当学芸員より、報道資料に基づいて本展概要及び資料掲載の出版資料についての説明があり、それを受けて記者から何点かの質問がなされた。その後、展示室に移動し、実際に展示されている数点について拝観しながら各社による取材が進められた。中でも注目を集めたのは本展覧会の事前調査中新たに発見された高麗仏画「弥勒下生変相図」（顕本法華宗妙満寺蔵）である。報道資料等によると、釈尊の御入滅後五十六億七千万年を経て龍華樹の下で悟りを開かれる弥勒仏と、両親である王と王妃がその説法を聴聞して出家をされる場面が描いてあり、現存する高麗仏画の中では世界で三番目に古く更に宮廷画家の作とわかるものでは最古のものであるとのことである。

特に今まで存在が知られていなかった「画文翰署」という宮廷画家の組織に所属する最

高級画家である李晟が画いた点について京博の大原嘉豊学芸員は「高麗の宮廷画家組織の存在を明らかにし、高麗仏画史を塗り替える重要文化財級の発見」としている。

その他「餓鬼腹茶入」（日蓮宗本圀寺蔵）は、足利尊氏から本圀寺第四世日静上人に送られたと伝えられる中国製の名物茶入れである。

また、「絵曼荼羅」（日蓮宗妙傳寺蔵）は、長谷川等伯がまだ能登にあり信春と称していた頃の作であり、これは越中本願寺の日恵上人の需めに応じて画かれたものとされるが日蓮聖人のもとに日朗上人と日像上人が描かれていたのが興味深い。

記者発表の翌日には、共催の日本経済新聞全国版を始めとして、各紙の関西版には新発見を中心に報道がなされ、反響の大きさを物語っていた。

一方東京での記者発表は、七月二日午後二時より有楽町の日本外国特派員協会を会場に行われた。当日は雨模様様の天気にもかかわらず五十社、六十六名の媒体が出席し、本展が関東においても大きな関心を持たれていることが伺えた。

門下連合会からは小松浄慎理事長、京都国

立博物館からは大原嘉豊学芸員、尾野善裕工芸室長の両名、日本経済新聞社からは山脇晴子文化事業局長が出席し、小松理事長挨拶の後両学芸員からの概要説明が行われた。東京では実物を展示することは出来ないためプロジェクターを使つての説明であったが多くの記者が熱心に耳を傾けていた。

さて、今回新発見の高麗仏画「弥勒下生変相図」が画かれたのは、元を建国したフビライ・ハンの最晩年にあたる一二九四年だが、日像上人が京都で布教を始めたのも同じ一二九四年。恰も日像上人の帝都弘通にあわせるかのように画かれた弥勒仏が、立正安国論奏進七五〇年の記念の年に同じ京都の地で見出されたことは、単なる偶然なのだろうか。

釈尊出世の本懐である法華経を「最第一」と弘教された日蓮聖人と日像上人の魂魄が、七〇〇年の時を超えて京都に法華の道場を涌出される為の必然だったのではないかと思えてならない。であるならば門下僧俗は勿論のこと、出来るだけ多くの未聞の方々に京都国立博物館という道場にお出で頂き、法華経信仰への結縁を願うものである。

平成十五年初頭に東京国立博物館において開催された「大日蓮展」では、厳冬期でありながら十五万人を超える人々が来場されたが、それは、日常生活の中にあつて葬儀や法要と



平成 21 年 7 月 2 日「記者会見」・日本外国特派員協会にて

いった場面でしたか仏教と接し得ない多くの現代人にとり、「大日蓮展」が法華経美術や文化を通して真の仏教とふれあい、自身の心を安らぎで満たしていく貴重な機会であったからに他ならない。

本展が再び多くの方々に取りその機会となることを期待するものである。

## 日蓮と法華の名宝展報告

平成二十一年十一月二十三日午後六時、最後の来場者を見送り「日蓮と法華の名宝」展が幕を降ろした。会場となった特別展示館は静けさを取り戻し、ライトアップの中、レンガ色の美しい姿で佇んでいる。十月十日の開会の日にはまだ色づきはじめてばかりの紅葉が、日を追って、広く深く京都の町を染めていったように、拝観された人々の心が安らぎと感動に彩られた四十五日間であった。

期間中多くの方々には日蓮聖人とその門弟ゆかりの御霊宝、法華信仰と京都町衆文化の精粹にふれて頂いた本展の総入場者数は、当初目標の七五〇〇〇人を大きく上回り八八一八七人を数えた。

全ての来場者が帰られた後、小松浄慎日蓮聖人門下連合会理事長導師のもと大本山法華経寺新井日湛貫首猊下をはじめ関係者約三〇名が参席し、本館中央室において「日蓮と法華の名宝」展円成奉告法要が執り行われた。静謐な館内の隅々にまで読経の声が広がると、四十五日間に亘り多くの方が訪れたこの博物館が、今は結縁の道場としての荘厳さを具えたようにも感じられる。

この展覧会は、今から四年前の平成十八年十一月の京都における門下連合会理事会でその企画が示されスタートしたのだが、当初は様々な課題を抱えて必ずしも順調なすべり出しではなかった。しかし日蓮聖人門下連合会、京都日蓮聖人門下連合会、十六本山会などが幾度となく前向きな検討を重ねた結果、広く一般社会に向けた本展遂行は記念の年にふさわしく意義深きこととの考えに至り、異体同心にして進捗を見せたのは平成十九年の夏頃からであった。

実際の準備を進める中で大きなポイントは二点。一つは本展のコンセプトに基づく出展構成。もう一つは広報である。出展構成については主として京都国立博物館の本展担当学芸員が企画を行い、それについて門連側と協議しながら内容を作成していった。しかし当然のことながら出展構成が作成されても所蔵者の了解を頂かなければ出展の確定には至らない。

大切な宝物を門外に遷すということは所蔵者にとっては勿論依頼する主催者にとっても大きな覚悟を必要とするが、立正安国論奏進



七五〇年という意義をご理解いただき所蔵の方々の快諾を頂けたことは誠にありがたいことであった。そのようにして全ての宝物が展示された会場はまさに法華の道場であり、初めて会場を訪れた時の感動は本当に大きなものであった。

次に広報であるが我々門下にとつてはこれを一つの大きな布教の機会と捉え、出来るだけ広く一般社会に伝えることを目指した。直接的な布教ではないが、「日蓮聖人」「法華信仰」「京都町衆文化」といったキーワードが未聞の人々の目にとまり記憶に残る事、そして来場した方々が展覧会を機縁としてその内容を深く理解していただくことが重要であると考え京都、大阪をはじめとした近畿圏だけでなく東京の主要駅や空港、全国の郵便局など、またテレ

ビ、ラジオ等を含め様々な広報を行った。

こうして日蓮聖人門下連合会各団体、京都十六本山が歩を共に進め本展覧会の円成となつたわけだが、多くの方々が本展の展観だけではなく併せて十六本山に参拝されたことにもう一つの大きな意義がある。十六本山は、京都に於ける他の観光主体の寺院とは異なる信仰の寺院であり、それだけに一般の方や檀信徒でも訪れることが少なかった感がある。しかしながら今回の展覧会を機に博物館で御霊宝にふれつつ各本山で帝都弘通の歴史を体感出来たことは、多くの檀信徒にとつて貴重な機会になつたのではないだろうか。

また会期中は、博物館に門連事務局より二名が常駐し美術的、学術的内容以外の来場者の様々な質問に対応した。その中では宗教的

な疑問、質問ばかりでなく自身の信仰に疑問を持つ不安の中で僧侶と話がしたいというような方々も多くおり、一般の方々にとつては博物館という公共の場で気軽に話が出来るというメリットもあつたように感ずる。これについては博物館側からも「これだけの人数が入つた展覧会としては、過去の例と比較して学芸員に回ってくる質問が驚くほど少なかった」とその対応に感謝されている。

いずれにしてもこうした催しは、法事や葬儀などの宗教行事とは異なる環境の中で宗教とふれあうことが出来る貴重な機会であり、宗教者の立場からするとこれからの布教の一つの形として捉えることもできよう。

平成十五年初頭に東京国立博物館において開催された「大日蓮展」、そして今般京都国立博物館に於いて円成した「日蓮と法華の名宝」展。この二つの展覧会が物語ることは、伝統教団はただ宗教団体としてあるだけではなく文化の継承者として大きな役割を担っているということ。そしてその文化を「目で見」「心で感じる」ことを求める人が多くいるということの二点である。

時には時代の荒波に翻弄されてきた信仰とそれに支えられてきた仏教文化ではあるが、現在では普遍の価値を有するものであり様々な形で次代へと伝えていかなければならない

大切なものであろう。

大聖人の意を体された日像上人が帝都弘通の大きな一歩を標された京都。その地に於いて円成した「日蓮と法華の名宝」展は、今を生きる人々に「一筋の光明となり四海帰妙への大きな道標になり得たと感じる。そしてそうなり得たのは日蓮聖人門下が異体同心にして本展円成を目指したからであらう。

願わくば門下連合会であるからこそ出来る様々な形での布教活動が、日本のみならず世界各地で展開されることを期待するものである。

## 『日蓮と法華の名宝』展 出品リスト

種別No.	展示テーマ	指定	作品名	制作年代	世紀	作者	員数	所蔵者	展示		
									前期	後期	備考
1	法華文化の展開	重文	紫紙金字法華経并開結 巻第八	平安時代	11		一卷 十巻のうち	本法寺	●		
2	法華文化の展開	重文	法華経并観音賢経 (藍紙本) 巻第一	平安時代 寛治元年(1087) 移点 墨書	11		一卷 七巻のうち	立本寺		●	
3	法華文化の展開	重宝	法華経并開結 巻第六・観音賢経	平安時代 久寿三年(1156)	12		二巻 十巻のうち	霊友会妙一記念館	●	●	
4	法華文化の展開	重文	一字宝塔法華経并観音賢経 巻第六	平安時代	12		一卷 九巻のうち	本満寺	●		
5	法華文化の展開	重文	法華経開結共 巻第一	平安・鎌倉時代	12-13		一卷 十巻のうち	本隆寺		●	
6	法華文化の展開	重文	法華経 巻第一 伏見天皇宸翰、紙背後深草天皇宸翰消息	鎌倉時代	14		一卷 八巻のうち	妙蓮寺	●		
7	法華文化の展開	重文	金字法華経 巻第五 巻首伏見天皇宸翰	鎌倉時代	14		一卷	妙願寺		●	
8	法華文化の展開	法華経	巻第一 伏見天皇宸翰	室町時代	14-15		一卷 八巻のうち	本興寺	●		
9	法華文化の展開	重文	法華経 巻第六 紙背寛性法親王消息	鎌倉時代	14		一卷 八巻のうち	本祥寺		●	
10	法華文化の展開	重宝	法華経 巻第一・第二・第六・第八	鎌倉時代 正応五年(1292) 刊記	13		四巻 八巻のうち	霊友会妙一記念館	●	●	
11	法華文化の展開	重文	法華玄論 巻第十	奈良-平安時代	8-9		一卷 十巻のうち	本隆寺	●		
12	法華文化の展開	重文	花園天皇宸翰消息	南北朝時代 暦応二年(1329)	14		一卷 十巻のうち	本能寺	●	●	
13	法華文化の展開	重文	法華経要文和歌紙文	南北朝時代 文和三年(1354)	14	光厳天皇宸翰地	一卷	立本寺		●	
14	法華文化の展開	重文	法華経宝塔曼荼羅図 第一・第二・第三・第八幅	鎌倉時代	13		四幅 八幅のうち	妙満寺	●	●	
15	法華文化の展開	重文	金剛蓮華唐草文透彫経箱	室町時代 天文二十四年(1555)	16		一合	要法寺	●	●	
16	法華文化の展開	重文	蓮地輪宝衣鉢箱	室町時代	16		一合	長源寺	●	●	
17	法華文化の展開	重文	法華経曼荼羅図 第三幅(寶輪品) 第五幅(薬草輪品) 第十一幅(見宝塔品) 第十七幅(不転品・神力)	鎌倉時代 嘉禄元年(1326-28)	14		四幅 二十一幅のうち	本法寺	●	●	
18	法華文化の展開	重宝	仏涅槃図	室町時代	14	足利持氏に割	一幅	妙立寺	●		
19	法華文化の展開	重宝	十六羅漢図 第六跋陀羅尊者・第十一囉怛囉尊者	南北朝時代	14		二幅 十六幅のうち	本満寺	●	●	
20	法華文化の展開	重宝	十六羅漢図	南北朝時代	14		四幅 十六幅のうち	本隆寺	●	●	
21	法華文化の展開	重宝	釈迦三尊・羅漢図	南北朝-室町時代	14	詫間宗賢筆	二幅	京都国立博物館	●	●	
22	法華文化の展開	重宝	天台大師像	南宋時代	13	張思本筆	一幅	本願寺	●		
23	法華文化の展開	重宝	山釈迦図	元時代	14	伝張思恭筆	一幅	本願寺	●		
24	法華文化の展開	重宝	華嚴説相図	朝鮮時代	16		一幅	本願寺	●		
25	法華文化の展開	重宝	弥勒下生變相図	高麗時代 至元三十一年/忠烈王二十年(1294)	13	李咸筆	一幅	妙満寺	●	●	
26	法華文化の展開	重文	釈迦如来坐像	南北朝時代 延文三年(1358)	14	康俊作	一軀	妙願寺	●	●	
27	法華文化の展開	重文	釈迦如来坐像	鎌倉時代	12-13		一軀	本法寺	●	●	
28	法華文化の展開	重文	聖観音立像	平安時代	12		一軀	瑞光寺	●	●	
29	法華文化の展開	重文	釈迦・多宝如来坐像	南北朝時代 貞治五年(1366)	14	定職作	二軀	本願寺	●	●	
30	法華文化の展開	重文	釈迦如来立像	鎌倉時代	13		一軀	本法寺	●	●	
31	法華文化の展開	重文	九名神立像	南北朝時代	14		一軀	本願寺	●	●	
32	法華文化の展開	重文	三十番神像	室町時代	15		一軀	談山神社	●	●	
33	法華文化の展開	重文	三十番神像	室町時代	15	日親賢	一幅	本法寺	●	●	
34	法華文化の展開	重文	三十番神像	室町時代	15	日親賢	一幅	妙満寺	●		
35	法華文化の展開	重文	三十番神像	桃山時代	16		一幅	頂妙寺	●		
36	法華文化の展開	重文	三十番神像	桃山時代 天正四年(1576)	16	日重賢	一幅	本満寺	●		
37	法華文化の展開	重文	三十番神像	桃山時代	16		一幅	本願寺	●		
38	法華文化の展開	重文	神遊深縁伝	室町時代 永禄三年(1560)	16	吉田兼右筆	一卷	頂妙寺	●	●	
39	法華文化の展開	重文	吉田兼右書状	室町時代	16		一幅	頂妙寺	●	●	
40	法華文化の展開	重文	神遊私抄	江戸時代	17		一冊	頂妙寺	●		
41	法華文化の展開	重文	日弁起請文(「妙願寺文書」のうち)	南北朝時代 暦応三年(1340)	14		一通 一巻のうち	妙願寺	●		
42	法華文化の展開	重文	番神問答(「妙願寺文書」のうち)	桃山-江戸時代	17		一卷	妙願寺	●	●	
43	法華文化の展開	重文	日蓮曼荼羅本尊	鎌倉時代 弘安元年(1278)	13		一幅	本願寺	●		
44	法華文化の展開	重文	日蓮曼荼羅本尊	鎌倉時代 弘安元年(1278)	13		一幅	本願寺	●		
45	日蓮とその時代	重文	日蓮曼荼羅本尊	鎌倉時代 建治元年(1275)	13		一幅	妙願寺	●	●	
46	法華文化の展開	重文	日蓮曼荼羅本尊	鎌倉時代 建治二年(1276)	13		一幅	本満寺	●	●	
47	法華文化の展開	重文	日輪曼荼羅本尊	南北朝時代 康永三年(1344)	14		一幅	妙光寺	●		
48	法華文化の展開	重文	日像曼荼羅本尊	南北朝時代	14		一幅	妙願寺	●		
49	法華文化の展開	重文	十界勅大曼荼羅 (繪曼荼羅)	鎌倉時代	14		一幅	妙法華寺	●		
50	法華文化の展開	重文	繪曼荼羅	南北朝時代 延文二年(1357)	14	大覚妙実書割	一幅	法華寺	●	●	
51	法華文化の展開	重文	宝塔繪曼荼羅	鎌倉時代	14		一幅	本法寺	●		
52	法華文化の展開	重文	宝塔繪曼荼羅 (法華曼荼羅)	室町時代	14		一幅	奈良国立博物館	●		
53	法華文化の展開	重文	釈迦三尊十羅刹女像	室町時代	15		一幅	立本寺	●	●	

日蓮聖人門下連合会 結成 30 年以降の主な事業

種別 No.	展示テーマ	指定	作品名	制作年代	世紀	作者 筆	具数	所蔵者	展 示	
									前期	後期
54	法華文化の展開		本成寺本尊供養日記	鎌倉時代 永仁六年 (1298)	13	日印筆	一巻	本成寺	●	●
55	法華文化の展開		絵曼荼羅	室町時代	15-16			本成寺	●	●
56	法華文化の展開		絵曼荼羅	桃山時代 永祿十一年 (1568)	16	長谷川等伯	一巻	妙傳寺	●	●
57	法華文化の展開		一遍首題	室町時代	16		一巻	大法寺	●	●
58	法華文化の展開	重文	武田定宝如来像	室町時代 永祿七年 (1564)	16	長谷川等伯筆	一巻	大法寺	●	●
59	法華文化の展開	重文	兜子母神十羅刹女像	室町時代 永祿七年 (1564)	16	長谷川等伯筆	一巻	大法寺	●	●
60	法華文化の展開	重文	三十番神像	室町時代 永祿九年 (1566)	16	長谷川等伯筆	一巻	大法寺	●	●
61	法華文化の展開	重文	日蓮像	室町時代 永祿七年 (1564)	16	長谷川等伯筆	一巻	大法寺	●	●
62	法華文化の展開		日経曼荼羅本尊及上闕同乳母追善供養像	江戸時代 慶長十七年 (1612)	17		一巻	妙法寺	●	●
63	日蓮とその時代	重文	日蓮像	鎌倉時代	14			妙法華寺	●	●
64	日蓮とその時代		天台大師・伝教大師・日蓮聖人像	江戸時代	17	狩野永納筆 元政・慧明賛	三幅	妙顕寺	●	●
65	日蓮とその時代		日蓮曼荼羅本尊	鎌倉時代 弘安三年 (1280)	13		一巻	妙法華寺	●	●
66	日蓮とその時代		日蓮曼荼羅本尊	鎌倉時代 文永十一年 (1274)	13		一巻	妙法寺	●	●
67	日蓮とその時代		日蓮曼荼羅本尊	鎌倉時代 建治元年 (1275)	13		一巻	妙顕寺	●	●
68	日蓮とその時代		五輪九字明秘密義釈	鎌倉時代 建長三年 (1251)	13	日蓮筆	一帖	法華経寺	●	●
69	日蓮とその時代		三教指帰注抄 巻上	平安・鎌倉時代	12-13		一帖	法華経寺	●	●
70	日蓮とその時代	国宝	立正安国論	鎌倉時代 文永六年 (1269)	13	日蓮筆	一巻	法華経寺	●	●
71	日蓮とその時代		灌漑尚経三重箱	正保三年 (1646)	17		一合	法華経寺	●	●
72	日蓮とその時代		日蓮消息断簡	鎌倉時代	13		一巻	頂妙寺	●	●
73	日蓮とその時代	重文	神国王書 天巻	鎌倉時代	13	日蓮筆	一巻	妙顕寺	●	●
74	日蓮とその時代	重文	法蘭盆御書	鎌倉時代	13	日蓮筆	一巻	妙覚寺	●	●
75	日蓮とその時代		一代五時図	鎌倉時代	13	日蓮筆	一巻	本願寺	●	●
76	日蓮とその時代		守護国家論 奥書後土御門天皇宸翰	室町時代	15		一巻	長源寺	●	●
77	日蓮とその時代		日蓮坐像	鎌倉時代	13-14		一巻	本満寺	●	●
78	日蓮とその時代		日蓮坐像	鎌倉・南北朝時代	14	院興作	一巻	妙覚寺	●	●
79	日蓮とその時代		日蓮坐像	鎌倉時代 元弘元年 (1331)	14		一巻	法華寺	●	●
80	日蓮とその時代		日蓮坐像	室町時代 文明五年 (1473)	15		一巻	十生寺	●	●
81	日蓮とその時代		日蓮聖人法華講 巻第一・第四・第五	室町時代 天文五年 (1536)	16	窪田統兼筆	三巻 五巻のうち	本願寺	●	●
82	日蓮とその時代		日蓮上人龍の口法蘭図	江戸時代 寛文十三年 (1673)	17	狩野探幽筆	一巻	本法寺	●	●
83	日蓮とその時代		日蓮入滅図	江戸時代	18		一巻	ハートランド大学 東京図書蔵	●	●
84	日蓮とその時代	重文	日朗書状 (「妙顕寺文書」のうち)	鎌倉・南北朝時代	14		一巻	妙顕寺	●	●
85	京都開教と西国への展開	重文	日朗書状分号状并一味同心清書起請文 (「妙顕寺文書」のうち)	鎌倉時代 元応二年 (1320)	14		一巻	妙顕寺	●	●
86	京都開教と西国への展開	重文	日像書状 (「妙顕寺文書」のうち)	鎌倉時代	14		一通 一巻のうち	妙顕寺	●	●
87	京都開教と西国への展開	重文	日像書状 (「妙顕寺文書」のうち)	鎌倉時代	14		一通 一巻のうち	妙顕寺	●	●
88	京都開教と西国への展開	重文	後醍醐天皇宸翰 (「妙顕寺文書」のうち)	南北朝時代 建武元年 (1334)	14		一巻	妙顕寺	●	●
89	京都開教と西国への展開	重文	後光厳天皇宸翰 (「妙顕寺文書」のうち)	南北朝時代 延文二年 (1357)	14		一巻	妙顕寺	●	●
90	京都開教と西国への展開	重文	足利直義御判御教書 (「妙顕寺文書」のうち)	南北朝時代 建武三年 (1336)	14		一通 一巻のうち	妙顕寺	●	●
91	京都開教と西国への展開	重文	足利義隆御判御教書 (「妙顕寺文書」のうち)	南北朝時代 貞和六年 (1356)	14		一通 一巻のうち	妙顕寺	●	●
92	京都開教と西国への展開		日像像	南北朝時代	14	大覚妙実在判	一巻	妙顕寺	●	●
93	京都開教と西国への展開		日地蓮社丹唐草文様横巻	南北朝時代	14	伝日像所用	一屏	妙顕寺	●	●
94	京都開教と西国への展開	重文	日輪書状 (「妙顕寺文書」のうち)	鎌倉時代	14		一通 一巻のうち	妙顕寺	●	●
95	京都開教と西国への展開		伝釈迦如来立像 (阿弥陀如来立像)	鎌倉時代	13		一巻	南真経寺	●	●
96	京都開教と西国への展開		日像坐像	鎌倉・南北朝時代	14		一巻	北真経寺	●	●
97	京都開教と西国への展開		日像曼荼羅本尊 (「御霊宝」のうち)	南北朝時代 元徳四年 (1332)	14		一巻	南真経寺・北真経寺	●	●
98	京都開教と西国への展開		秘藏集 (「御霊宝」のうち)	鎌倉時代	13-14	日像筆	三帖	南真経寺・北真経寺	●	●
99	京都開教と西国への展開		伝日朗像 (「御霊宝」のうち)	南北朝時代	14		一巻	南真経寺・北真経寺	●	●
100	京都開教と西国への展開		伝日蓮像 (「御霊宝」のうち)	南北朝時代	14		一巻	南真経寺・北真経寺	●	●
101	京都開教と西国への展開	重文	法華経 紙背尊性法親王消息 (「御霊宝」のうち)	鎌倉時代	13		十巻	南真経寺・北真経寺	●	●
102	京都開教と西国への展開		板倉勝重利物 (「御霊宝」のうち)	江戸時代 慶長十年 (1605)	17		一巻	南真経寺・北真経寺	●	●
103	京都開教と西国への展開		駒形并南真経寺法式 (「御霊宝」のうち)	江戸時代 寛文元年 (1661)	17		一巻	南真経寺・北真経寺	●	●
104	京都開教と西国への展開		日像坐像	室町・江戸時代	16-17		一巻	妙泉寺	●	●
105	京都開教と西国への展開		大覚妙実坐像	室町・江戸時代	16-17		一巻	妙光寺	●	●
106	京都開教と西国への展開	重文	洛中洛外園屏風 (原博甲本)	室町時代	16		六曲一双	国立歴史民俗 博物館	●	● 10/10- 10/25
107	京都開教と西国への展開		洛中洛外園屏風	江戸時代	17		六曲一双	大阪市立美術館	●	● 10/27- 11/23
108	日蓮とその時代		宝塔	江戸時代	17		一基	京都国立博物館	●	●
109	京都開教と西国への展開		大覚妙実曼荼羅本尊	南北朝時代 延文四年 (1359)	14		一巻	妙顕寺	●	●
110	京都開教と西国への展開	重文	妙顕寺禁制 (「妙顕寺文書」のうち)	南北朝時代 暦応四年 (1341)	14	日像筆	一通 一巻のうち	妙顕寺	●	●
111	京都開教と西国への展開	重文	日像・大覚妙実講状 (「妙顕寺文書」のうち)	南北朝時代 建永元年 (1342) 延文元年 (1356)	14		一巻	妙顕寺	●	●
112	京都開教と西国への展開	重文	後小松天皇宸翰消息	室町時代 応永二十年 (1413)	14		二幅	妙顕寺	●	●
113	京都開教と西国への展開		日乘像	室町～桃山時代	16	長谷川等伯筆	一巻	妙成寺	●	●
114	京都開教と西国への展開		日蓮像	桃山時代 天正十七年 (1589)	16	伝長谷川等伯筆	一巻	妙成寺	●	●
115	京都開教と西国への展開		得田版法華経木 巻第八巻末後跋	室町時代 応永二十二年 (1415)	15	願主得田尊光	一枚 六十四枚のうち	妙成寺	●	●
116	京都開教と西国への展開		絵曼荼羅	南北朝時代 応永元年 (1368)	14	朗原署判	一巻	本地寺	●	●
117	京都開教と西国への展開		絵曼荼羅	南北朝時代	14	朗原署判	一巻	本地寺	●	●
118	京都開教と西国への展開		銀葉梵入	南宋～元時代	14		一口	本願寺	●	●
119	京都開教と西国への展開		本願寺楠本社額字原字	江戸時代 文政十二年 (1829)	19	一条忠良筆	二幅	本願寺	●	●
120	京都開教と西国への展開		加藤清正像	江戸時代	18-19		一巻	本願寺	●	●
121	京都開教と西国への展開		大覚妙実書状	南北朝時代	14		一巻	蓮昌寺	●	●
122	京都開教と西国への展開		市村隼人奇進状	室町時代 宝徳二年 (1450)	15		一通	岡山県立博物館	●	●
123	京都開教と西国への展開		日蓮等一遍首題本尊	桃山時代 天正十八年 (1590)	16		一巻	●	●	
124	京都開教と西国への展開		日親像	室町時代	15	狩野正信筆	一巻	本法寺	●	●
125	京都開教と西国への展開		立正治国論	室町時代 永享十二年 (1440)	15	日親筆	一巻	本法寺	●	●
126	京都開教と西国への展開		日親修行図	江戸時代	17	片山尚景筆	一巻	本法寺	●	●
127	京都受難の時代		山門決議関連文書 (田中頼氏自蔵古文書のうち) (1) 山門三院執行代進業状 (2) 山門三院大衆議案 (3) 山門三院大衆議案 (4) 山門三院大衆議案 (5) 山門三院大衆議案々々 (6) 山門三院大衆議案 (7) 寺門三院大衆議案	室町時代 天文五年 (1536)	16		一巻	国立歴史民俗 博物館	●	●
128	京都受難の時代		本国寺跡出土品	鎌倉～室町時代	14-16		壺瓦：一編 墨書土師器皿：一枚 骨：一由 土師器皿：三九枚	京都市考古 資料館	●	●
129	京都受難の時代		本能寺跡出土品	室町時代	16		壺瓦：一編 軒瓦瓦：一編 赤塔礎：七本 輪礎：一編	京都市	●	●

確定 No.	展示テーマ	指定	作品名	制作年代	世紀	作 者 筆 者	異数	所蔵者	展 示	
									前期	後期
130	京都受継の時代		長延 本能寺跡南出土	室町時代	16		一点	京都市考古資料館	●	●
131	京都受継の時代		鉄水盤	桃山時代 天正五年(1577)	16	与二郎作	一口	本能寺	●	●
132	京都受継の時代		弘法外典抄	平安時代	12		二帖	久遠寺	●	●
133	京都受継の時代		三好長慶書状	室町時代	16		一幅	頂妙寺	●	●
134	京都受継の時代		斎藤基連像	室町時代 永祿三年(1560)	16	惟高妙安賛	一幅	頂妙寺	●	●
135	京都受継の時代		日珥像	江戸時代	18-19		一幅	本法寺	●	●
136	京都受継の時代		三好義賢像	室町時代	16		一幅	妙國寺	●	●
137	京都受継の時代		日珥僧正伝	江戸時代 文化十二年(1815)	19	日蓮筆	一巻	頂妙寺	●	●
138	京都受継の時代		日珥書状	室町時代 永祿四年(1561)	16		一幅	妙國寺	●	●
139	京都受継の時代		曜爰天目 油屋天目	金時代	12-13		一口	徳川美術館	●	●
140	京都受継の時代	重文	信長公記 巻第十二	江戸時代	17	太田牛一筆	一冊 十五冊のうち	建礼神社	●	●
141	京都受継の時代		己行記	室町・桃山時代	16	日珥筆	一冊	妙國寺	●	●
142	京都受継の時代		聖善堂安書状 (「西福寺文書」のうち)	桃山時代 天正七年(1579)	16		一巻	西福寺	●	●
143	京都受継の時代		堀地亀甲に裏着文様五条袷袋	桃山時代	16	伝日珥所用	一屏	頂妙寺	●	●
144	京都受継の時代		前田玄以判物	桃山時代 天正八年(1580)	16		三巻	頂妙寺	●	●
145	京都受継の時代		京都諸寺定条々々(「京都十六本山会合文書」のうち)	桃山時代 天正七年(1579)	16		一通	頂妙寺	●	●
146	京都受継の時代		京都十六本山会合文書籍	桃山・江戸時代	16-17		一合	頂妙寺	●	●
147	京都受継の時代		日奥煎茶羅本	江戸時代 寛永三年(1626)	17		一幅	幸福寺	●	●
148	京都受継の時代		妙正物論	江戸時代 寛文二年(1662) 刊	17		二冊	京大文学部研究	●	●
149	京都受継の時代		日珥像	桃山時代 文祿五年(1596)	16	狩野宗秀筆	一幅	京都国立博物館	●	●
150	京都受継の時代		日珥書状	桃山時代	16		一幅	岡山県立博物館	●	●
151	京都受継の時代		日珥書状	桃山時代	16		一幅	岡山県立博物館	●	●
152	京都受継の時代	重文	金剛宝塔	南北朝時代 応安三年(1370)	14	覺性作	一基	本法寺	●	●
153	復興と近世文化の開花		日潤自賛考像	慶長十二年(1607)	17		一幅	寂光寺	●	●
154	復興と近世文化の開花		本因坊算砂白画像	江戸時代	17		一幅	寂光寺	●	●
155	復興と近世文化の開花		元政自賛考像	江戸時代	17		一幅	瑞光寺	●	●
156	復興と近世文化の開花		定家御遠忌和歌	江戸時代 寛永十八年(1641)	17		一冊	瑞光寺	●	●
157	復興と近世文化の開花		身延のみちの記断簡	江戸時代 万治二年(1659)	17	元政筆	一幅	瑞光寺	●	●
158	復興と近世文化の開花		片玉集	江戸時代	17	元政筆	一冊	瑞光寺	●	●
159	復興と近世文化の開花		建礼門院石京大夫集	江戸時代	17	元政筆	二冊	瑞光寺	●	●
160	復興と近世文化の開花	重文	立正安国論	江戸時代 元和五年(1619)	17	本阿弥光悦筆	一巻	妙蓮寺	●	●
161	復興と近世文化の開花	重文	始聞弘乘巻	江戸時代 元和五年(1619)	17	本阿弥光悦筆	一巻	妙蓮寺	●	●
162	復興と近世文化の開花	重文	法華題目抄	江戸時代	17	本阿弥光悦筆	一巻	本法寺	●	●
163	復興と近世文化の開花	国宝	書巻(本能寺切)	平安時代	11	藤原行成筆	一巻	本能寺	●	●
164	復興と近世文化の開花	重文	鶴下絵三十六歌仙和歌巻	江戸時代	17	本阿弥光悦書 依屋宗達画	一巻	京都国立博物館	●	●
165	復興と近世文化の開花	重文	赤染茶碗 加賀光悦	江戸時代	17	本阿弥光悦作	一口	相国寺	●	●
166	復興と近世文化の開花	重文	黒染茶碗 銘「時雨」	江戸時代	17	本阿弥光悦作	一口	名古屋市博物館	●	●
167	復興と近世文化の開花	重文	赤染茶碗 銘「亀」	江戸時代	17	樂道入作	一口	三井記念美術館	●	●
168	復興と近世文化の開花	重文	黒染茶碗 銘「残雪」	江戸時代	17	樂道入作	一口	樂美術館	●	●
169	復興と近世文化の開花	重文	本阿弥光悦消息	江戸時代	17		一幅	京都国立博物館	●	●
170	復興と近世文化の開花	重文	黒染茶碗 銘「亀毛」	江戸時代	17	樂宗入作	一口	樂美術館	●	●
171	復興と近世文化の開花	重文	色絵木製文角皿	江戸時代	17-18	足形乾山作	五枚	京都国立博物館	●	●
172	復興と近世文化の開花	重文	色絵花唐草文水注	江戸時代	17-18	足形乾山作	一口	妙法寺	●	●
173	復興と近世文化の開花	重文	五彩花卉雲龍風文尊式瓶 五彩蓮華唐草雲龍文角香炉	明時代	16-17		一対一合	本能寺	●	●
174	復興と近世文化の開花	重文	瓢箪入 銘「玉津島」	南宋-元時代	13-14		一口	徳川美術館	●	●
175	復興と近世文化の開花	重文	茶屋四郎次郎坐像	江戸時代	17		一軀	本能寺	●	●
176	復興と近世文化の開花	重文	異国渡海御朱印帳	江戸時代	17	以心伝伝筆	一冊	南禅寺金地院	●	●
177	復興と近世文化の開花	重文	蓮紙織画	朝鮮時代	19		一幅	頂妙寺	●	●
178	復興と近世文化の開花	重文	刀装具製作関係遺物 同志社大学今出川校地遺跡出土 (図書館地点出土) 目貫・小柄型 4個 (蔵庫館地点出土) 金銅板片 2片 青銅素材 1本 砥石 1個 刀子端 1個 増埴 4口	江戸時代	17-18	後藤家工房か	一括	同志社大学 歴史資料館	●	●
179	復興と近世文化の開花	重文	後藤祐乗像	桃山時代	16		一幅		●	●
180	復興と近世文化の開花	重文	獅子図三所物	室町時代	15	銘: 杖祐兼/光美 (花押)	一揃	徳川美術館	●	●
181	復興と近世文化の開花	重文	刀	南北朝時代	14	金傘峯銘: 本多美 達守所持/義弘本阿 (花押)	一口	京都国立博物館	●	●
182	復興と近世文化の開花	重文	金梨地木紋紋袴絵巻大刀	江戸時代 承応三年(1654)	17	銘: 出羽大権藤原 山路 御大工轉阿 弥 飛騨屋御太刀 承応三年甲午年九 月吉日	一口	八坂神社	●	●
183	復興と近世文化の開花	国宝	舟橋時絵祝儀	江戸時代	17	本阿弥光悦作	一合	東京国立博物館	●	●
184	復興と近世文化の開花	重文	舞臺時絵祝儀	江戸時代	17	本阿弥光悦作	一合	東京国立博物館	●	●
185	復興と近世文化の開花	重文	花唐草螺鈿縁箱	江戸時代	17	本阿弥光悦作	一合	本法寺	●	●
186	復興と近世文化の開花	重文	青花芙蓉手懸櫛文大皿	明時代	16-17		一枚	本法寺	●	●
187	復興と近世文化の開花	重文	古今和歌集巻十八断簡 (本阿弥切)	平安時代	11-12		一幅	京都国立博物館	●	●
188	復興と近世文化の開花	重文	蓮池時絵舍利罌子	寛文十二年(1672)	17	五十嵐道甫 後藤継作	一基	京都国立博物館	●	●
189	復興と近世文化の開花	国宝	蓮池水禽図	江戸時代	17	依屋宗達筆	一幅	京都国立博物館	●	●
190	復興と近世文化の開花	重文	牛図	江戸時代	17	依屋宗達筆	一幅	頂妙寺	●	●
191	復興と近世文化の開花	重文	十六景園屏風	江戸時代 大空院屏風	17-18	足形光康筆	二曲一雙	京都国立博物館	●	●
192	復興と近世文化の開花	重文	八幡図	江戸時代	17	足形乾山筆	一幅	文化庁	●	●
193	復興と近世文化の開花	重文	観世音菩薩像	江戸時代 文化十二年(1815)	19	酒井抱一筆	一幅	妙願寺	●	●
194	復興と近世文化の開花	重文	松根図巻	桃山時代	16-17	長谷川派	四冊	妙蓮寺	●	●
195	復興と近世文化の開花	重文	楓図屏風	桃山時代	16-17		二曲一雙	本願寺	●	●
196	復興と近世文化の開花	重文	十六歳漢圖	室町時代 天文二十年(1551)	16	狩野元信落款	四幅	本法寺	●	●
197	復興と近世文化の開花	重文	権山園水図屏風	江戸時代	17	狩野山楽筆	六曲一雙	妙願寺	●	●
198	復興と近世文化の開花	重文	唐獅子図屏風	桃山時代	16-17	狩野山楽筆	四曲一雙	本法寺	●	●
199	復興と近世文化の開花	重文	四季竹園屏風	江戸時代	17	伝狩野山楽筆	六曲一雙	寂光寺	●	●
200	復興と近世文化の開花	重文	諸寺勸進帳(「京都十六本山会合文書」のうち)	桃山時代 天正四年(1576)	16		一冊	頂妙寺	●	●
201	復興と近世文化の開花	重文	日鏡像	桃山時代	16	元信印	一幅	本隆寺		10/10- 10/26
202	復興と近世文化の開花	重文	日澄像	室町時代	16	狩野派	一幅	本法寺		10/27- 11/28
203	復興と近世文化の開花	重文	日淳像	室町時代	16	狩野派	一幅	本法寺		11/10- 11/23

日蓮と法華の名宝展 収支決算書 (税込み)

[開催日数 41 日、入場者数 88,187 人(有料 60,144 人のうち一般 30,294 人、特別観覧 29,850 人) (招・障・優 28,043 人)]

収入の部

部門	科目	決算	内訳
入場料収入	入場料収入	79,905,496	一般30294枚・特47966枚
図録他収入	図録売上げ	19,753,508	8,812冊
	グッズ・音声ガイド	7,700,000	音声ガイド17087台
その他収入	日蓮聖人門下連合会	100,000,000	
	日本写真印刷	4,000,000	協賛金
収入合計		211,359,004	

支出の部

部門	科目	決算	内訳
一般宣伝費	交通広告	30,725,146	JR.私鉄車内・駅張り他
	紙(誌)面媒体広告費	18,186,000	JR時刻表
	ポスター・ちらし印刷費	6,160,455	ウインダム 日本写真印刷
	映像制作費	1,340,000	会場ビデオ
	HP制作費	210,000	日経NET関連
会場関係費	会場装飾費	17,656,065	伏見芸芸 ひかり装飾 フジヤ
	パネル・キャプション・看板制作費	2,047,500	〃
	もぎり・看視等人件費	9,348,700	日本パナコーズ(会場内)
	臨時警備費・会場費	2,097,605	ピーイング(会場外)
	清掃費	482,790	サンククリーンサービス
	光熱水費	1,063,765	京博支払い 10,11月分
企画運営費	入場券(招待券含む)制作費	2,474,010	日本写真印刷 丹輪アート
	デザイン料	1,433,833	西岡氏
	関係者旅費	4,660,000	京博・学芸員
	監修・翻訳協力費	1,575,000	中尾先生他
	関連イベント費	550,000	御即位20周年記念切手
	広報業務委託費	3,640,708	ウインダム業務委託費、実費ほか
	写真・デュープ代	1,933,702	フォトミハラ
	通信連絡費	0	
	事務局関係費	4,882,347	ポスター発送、梱包費
	レセプション経費	338,300	からふね屋珈琲
図録他制作費	図録制作費	15,078,000	12000部制作 正誤表
	撮影・現像・使用料	68,150	
	原稿料	854,666	翻訳、校正、謝礼含む
グッズ製作費		1,953,000	
出品関係費	作品輸送・陳列・撤収費	21,100,000	日本通運(ハーバード含む)、作品修理費
	展示一貫保険料	2,860,625	
	出品謝礼	5,775,000	借用料(出品寺社、美術館)
郵便料	郵便料	1,050,000	DM費
交際費	打合せ会議費 手土産代	380,000	出品願い、返却時挨拶用手土産
交通費、出張旅費		1,415,714	
販売委託手数料	入場券、図録	0	
入場料 京博	京都国立博物館分	18,359,350	京博支払い
グッズ販売手数料	京都国立博物館分	2,211,855	〃
日経収入分	入場料の15%	11,985,824	79,905,496円の15%
雑費		0	
支出合計		193,898,110	

差益	割合	17,460,894
日蓮聖人門下連合会	70%	12,222,626
日本経済新聞社	30%	5,238,268

・・・①

門連収益から使用した経費	いのちのコンサート	1,575,840
	会場内ビデオDVD	1,743,000
	事務局費	700,000
合計		4,018,840
剰余金	①-②	8,203,786

・・・②

# 日蓮と法華の名宝展決算報告

日蓮聖人門下連合会は、京都国立博物館におきまして京都国立博物館・日本経済新聞社・京都新聞社と共催し、平成二十一年十月十日より十一月二十三日の四十五日間、立正安国論奏進七五〇年記念特別展「日蓮と法華の名宝―華ひらく京都町衆文化―」を開催いたしました。

今日まで京都において日蓮聖人門下各教団が格護する御霊宝、御宝物が一堂に展観されたことは無く、この度の催しは日蓮聖人、そして日像上人を始めとする帝都弘通先師への報恩事業であると同時に、多くの方々が法華経信仰とその美術に接する貴重な機会でありました。門下各御寺院、関係各位には甚深の感謝を申し上げます。

さて、左記の決算報告は、平成二十二年五月三十一日に開催された身延理事会にて承認された決算報告です。

お陰様をもちまして開催期間四十五日間で延べ八八、一八七人の入場者を数え、剰余金も八、二〇三、七八六円となり、特別会計「日蓮

聖人降誕八〇〇年事業資金」として門下連合会の今後の事業にあてることになりました。皆様には、決算報告と共に改めて御礼申し上げ、日蓮聖人門下連合会の更なる発展に御協力賜ります様お願い申し上げます。

## 二回の展覧会を終えて



展覧会担当（日蓮宗）  
生駒雅幸

今あらためて考えている。宗教とは何だろう。人を救うもの。人の心に安らぎを与えてくれるもの。一般論としてはそうした表現が出来るであろう。しかし現実世界に目を向けると残念ながらそれとは正反対の状況を作り出

しているのもまた宗教である。人類の多くが何らかの宗教を信じ生きている世界で、キリスト教徒は約二十億人、イスラム教徒が約十三億人、ヒンズー教徒が約九億人、無宗教は約八億五千万人そして仏教徒は約三億六千万人という数字がある。もし全人類が仏教徒となり法華経に帰依すれば世界は釈迦一仏の浄仏国土となり、宗教が異なることによる争いはなくなるのだろうか。日蓮聖人は上行自覚に立たれ迷われることなく一天四海皆歸妙法を祈られた。それから七百五十年、門下各派が異体同心に奉行し成功へと導かれた両展覧会が、多くの方々の信仰を深める場となり法華信仰への機縁となる場であったことは紛れもない事実であるが、時が流れ世界に眼を転じるとその事実があまりにも小さな光に感じってしまうことがある。しかし我々は立ち止まってはならないのである。日蓮大聖人の意を体するすべての門下は、縋素を問わず一人一人が光となつて無明の闇を照らし続ける使命があり、それが一天四海皆歸妙法へ続く道であると信じている。

その使命を今あらためて考えている。

従

地

ゆ

じ

ゆ

つ

〔門連だより〕第3号〜第42号抜粋

昭和六十二年二月十六日

\*人間にとり、精神世界を大きく意義あるものにするため欠かせないもの、それが信仰である。信仰ある人生とただ欲望充足のためはのんびんだらりと生を送るのでは、同じ一生でも天地雲泥の差がある。

\*人間にとり必要な信仰だが、これは他でもない、簡単に神仏を信ずるといふ行為であり、別に難しい理屈はいらない。ただ信じつつけることに意義があるとすれば、たんに信ずるといふ出発点から、次の持続の世界に入るわけで、その道中過程にはさまざまな障害が起きてくる。その障害をのりこえるため、簡単に信ずる行為から、複雑な理屈も必要とされてくる。

\*複雑な理屈とは、学問をすることによりもたらされる。学問の裏づけが確立され、徹底して信解された状態の信は、何物にもまして強固なものとなる。信と学とは、このような相関関係をもち、たがいに影響し合っているのである。

\*日蓮聖人の宗教も、やはり同様の構造をもつ。聖人が信じられた法華経本門の世界、久遠実成の釈尊を信ずるため、出発は信に発するが、それを徹底させるため、学問の必要性が要求されている。したがって聖人門下たるもの、自己にむかい信の持続を命ずるためにも

日夜の精進が求められる。

\*しかし、外典にもある通り、「少年老い易く学成り難し」(宋朱熹)である。「少壮努力せず老大徒に憂悲す」ともあるが、とにかく時の流れは早く、学問の道は遠く、かつ深い。万人に共通した世の常に囚われず、一日一日を進歩発展する生活を送らなければならない、その決意が強く求められる。日蓮聖人に同化し奉るためにも、地道な努力と精進を肝に銘じたい。

昭和六十三年八月十五日

\*昨年、五百遠忌をお迎えした日親上人の、あの壮絶な法難を耐えぬいての弘法のご生涯をお偲びするとき、自らを反省し襟を正さねばと痛切に思う。そして、改めて多くの先師方の〈不惜身命〉の護法活動が憶われる。

……我れ身命をおしまず但無上道を惜む  
……一心に仏を見たてまつらんと欲して自ら身命を惜まず……、成仏のために身命を惜まない、法華経信仰の安心は、これよりほかはない。

人間が命を惜むことは、ほとんど本能的である。不信の人々はいたすらに死を恐れ、愚痴そのままに臨終にあたり醜い形相を示すことが多い。〈命を惜む〉ことからいろいろな失態が生じる。邪見になれば馬鹿にもなる。横着・

臆病・詐欺などの罪悪はこの愚痴から出てくる。生活・金銭・我欲・名利などのためには人々は必死になる。これを打ち破らねばならぬ。

たしかに命は人間の財産中第一に貴重な宝だ。その宝を正法のために惜まずに捧げ使用する〈不惜身命護持正法〉することによって成仏できるのである。

正法を護持するには、末法の大導師日蓮聖人のみ教のままに〈如説修行〉することであり、祖願成就をめざして精進していくことである。

……異体同心にして、南無妙法蓮華経と唱うるところを、生死一大事の血脈とはいふなり。しかも今日蓮が弘通するところの所詮これなり。もし然れば広宣流布の大願も協うべきものなり……

正法護持の要は、必ず異体同心の祖訓を体現しなければならぬ。そして、同心とは、宗徒相互の同心ではなく、日蓮聖人に同心することであることを銘肝しなければならない。

平成元年一月十五日

歴史的に戊辰の年は、社会大乱激動の年であると言われるが、正しく前年一八三三年は、日本社会世相全般にわたりその様相顕著であつ

た。

そして新春早々、昭和天皇裕仁陛下が崩御され、日本国民にとって悲しい年の幕開けとなった。元号も「昭和」から「平成」へと改元され、新たな時代の一步が記された。

昭和の六十余年は、日本史上稀にみる激動の日々で大事件、戦争、波瀾の数々は枚挙にいとまがない。

その「昭和」も終焉を迎え、見直しが必然的に求められている。

しかし、その時の流れに常に、我々日本人の支柱として、社会国家の安泰と人々の幸福を願ひ、終始無私公平を心がけ、産業文化の発展と国際親善に務められ、平和の保持を熱望されたのが、天皇陛下である。

天皇制、戦争責任のあり方など、諸々の立場に多少論議の余地はあろうが、その間、長期にわたる在位年数の過程、平和国家の建設と社会復興に尽され、日本の安定に大きく寄与された陛下の存在と、そのお人柄と事績を通じて「昭和」という時代を見つめ直すことは我々にとり大切であろう。

戦後の日本は経済的発展の面においては他の追随を許さず、繁栄の極に達し、我々はその恩恵を満喫している。

反面、家庭の崩壊、教育の荒廃、政治の腐敗、宗教界の混濁、自然破壊等々山積する課題は

多い。

これらの諸問題を克服せねば、未来は開かれない。今こそ日蓮聖人の「立正安国」の本願を問い直す時であろう。(A記)

平成元年六月十三日

□いまお隣の国中国では、民主化と平等へ目覚めた、純な学生と一般市民の改革運動で、大きく揺れ動いている。5月21日付・日経では『老害・批判高まる』という小見出しで『中国の指導者で、はつきりした哲学のある人はいない：古い先短い人に、この国の将来を決められては適わない。』という中国・精華大 学学生の声を載せていた。□老害とはなかなか厳しい批判である。これから社会は、とくに日本は高齢化社会に向かおうとしているのに！しかしこの長寿ということが確かにいろいろの分野で問題を生んでいることも事実だろう。様々な組織の世代交替の面で、特に多く聞くようだ。発展している組織と低迷している組織、この差がどこにあるかはここで論ずるまでもない。□ところで門連各派内ではどうであろうか？『妙法お題目』の総弘通・世界に向けての一大施策はなされているだろうか。来るべき21世紀という未知の社会に向けての対応を、次代を担う若手を育てて、真剣に改良実践に取り組んでいるだろうか。そこに

は旧態依然とした『壁』が立ちはだかつていないだろうか。老驥千里を思ふとは言っても、駿馬も老いては駄馬に劣るという面もあるわけ

で、長年積み重ねて来られた徳や功績が、執着という醜さの為に、最後で総てを否定されてしまうことのないように念じたい。□こんな内側の小さな問題や隣の国の問題にうつつを抜かしているのではなく、生命倫理の問題・環境汚染の問題・四箇格言批判などの宗義問題等々、門下弟子檀那一統が立ち向かわなくてはならない『外側からの問題』は山積みして迫っている事実を目を向けなければならぬ。そして、この点こそが経験深い老聖方が、責任もって解答し、指標を示すべき役どころであると思う『万事を聞いて謗法を責むべし』『身をば死すとも法をば弘めよ』と仰せの御妙判を身にしみて考えなければならない。(F記)

平成二年一月十五日

□平成二年の新春を迎えた。本年は午年である。□馬という動物は、野生のままでは性質が粗暴で行動が荒く、いかにも自分の意欲を満たさんがために、そのすぐれた体力にまかせてあちらこちら所かまわず駆け出し、疾走してやまないものだ。□しかしこの野生の馬を飼育し、調教するならば、もともと判断力も

記憶力もある利口な動物だから、従順になつて人によくつき、人間の言葉や態度も理解するようにするので、人間にとつてはたいへん便利な動物である。□日蓮大聖人の御遺文の中にも馬についての観察があり、とくに大

聖人が身延より召された栗鹿毛の馬に対する愛情が綿々と記されているが、馬は、昔から交通機関や軍用の騎馬として、また輸送や農耕に、あるいは競馬などに利用されてきたことはだれもがよく知るところである。□仏典の中でも、四天下統一の理想的名君である転輪聖王が出現するときに掲げる七種の国宝の中に、馬宝といつて馬が入れられているほど、馬は人間の生活にとつて重要至極な家畜であることはいままでもない。□さて、人間も、野生のままの凡人の心は、意馬心猿といつて、馬や猿の心のように落ち着きがなく、常に食欲、愛欲等の欲望に乱され、心外の世界を駆けめぐつていろいろなものを追ひ求めている。□だからこそ、私たち野馬のごとき凡人としては、心馬の調教に勤め、心の煩惱を調御し、強盛の信心をもつて精進しなければいけないのである。(丈)

## 平成二年八月十五日

◆遠く奈良朝の昔より護国の經典として篤く尊信された仁王護国経には「国土乱れん時

は先ず鬼神乱る、鬼神乱るるが故に萬民乱る」と説く。国土の乱れる時には、先ず以て鬼神が跳梁する。鬼神が跋扈するから人々の行動が乱れ、人々の行動が常規を逸する結果として国土が荒乱する、というのである。

◆今、この「鬼神」の二字に「思想」の二字を置きかえてみるなら、国家が思想的に惑乱することにより国民の行動が狂乱に陥り、人々の行動が狂乱に陥るから国土が荒廢することは否定できない。ならば、国土の不祥事を払う根本は、国家を思想的に更生せしめることの外にない。

◆日蓮聖人が「立正安国論」を時の鎌倉幕府に建白された御主張もここにある。安国を願うならば明教を国家に樹立することが第一であると法華信仰の大事を叫ばれたのである。正に「立正」であり、立正であつてこそ始めて「安国」は自ら来ることになる。

◆国家が思想的に更生しないで国土の災害をのがれんとしてもそれは上流を濁していて下流を清めんとするが如きもの、いわゆる百年河清を待つ愚であらう。

◆たとえ台風豪雨地震の如き自然の災害であっても、国民の心の持ち方によつてその被害を最小限に防止出来るものである。数多ある社会問題の多くもまた然りである。

◆災起り、難起るの如き痛ましい報道の、日

日余りに多きことは、人々の思想の惑乱であり、人の世の災禍の根本である。今こそ聖祖の御主張「立正安国」の実践を忘れてはならない時である。(和)

## 平成三年二月十六日

☆「日蓮がたましいは南無妙法蓮華経にすぎたるはなし」(経王殿御返事)経文に「我れ身命ヲ愛セズ但無上道ヲ惜シム」と示されているように大聖人は「無上道たる法華経を我が身体に顕されていかれた」と主張された。

☆「汝早く信仰の寸心を改めて速に実乗の一善に帰せよ」(立正安国論)大聖人の御在世の七百年前の鎌倉に於いて、色々の宗教があつたが、世の中は良くなならない。大聖人は「正しい法華経の教えに照らされて、信仰の心を正しく改めて、真実の法華経(善)に帰依せよ。そうすれば三界／この世の中は仏国となりみな幸福になる。」

☆「信の弱きは濁るがごとし信心のいさぎよきは澄めるがごとし」(日嚴尼御前御返事)心がいらいらしている時は、丁度水に小波の立つているようで、月は映りにくく、積尊の心に触れることはできない。しかし信仰心が深い時は、丁度水が澄んでいて月が映る。本仏積尊の心が我々の心に映り、色々の苦悩が除かれる。

☆最近の世界情勢はめまぐるしく急変している。新しい宗教も色々起り、世の中を乱しているものもある。本化の大法を信ずる我々は、法華經の鏡に照らされて寸心を改め大聖人の御誓願を受け継ぎたい。

☆「如日月光明、能除諸幽冥、斯人行世間、能滅衆生闇」例へ小事であれ南無妙法蓮華經の心を以て一人一人が実践することによって、祖願は実現されていく。(鈴)

平成四年八月十五日

☆平成六年四月、海外開教の先駆者、日持上人の第七百遠忌法要が日蓮宗総本山身延山久遠寺で奉行される。日持上人は、建長二年(一二五〇)、駿河国(静岡県)庵原郡松野の地に生まれ、幼名を松千代と称されたと伝えられている。上人は「月は西より東に向へり。月氏(印度)の仏法の東へ流るべき相也。日は東より出づ。日本の仏法の月氏へかへるべき瑞相なり」(諫嘆八幡抄)という日蓮聖人の宿願であった本化の妙法を漢土、月氏へ帰すという海外への伝道に命をかけたのであった。

☆本化別頭仏祖統紀には次のように書かれている。「国内の布教は日昭、日朗両師以下、法将雲の如くであるから、それ等の人に依つて充分である。われは異域に法を弘めて宗祖の素願にこたえ奉らん。たとえ海路に台風大魚

の難にあうとも、むしろわが願う所」。この言葉を残し単身で北をめざしたという。(松村寿庵「日持上人」玉成十四号)

☆日蓮宗では本年平成四年八月三十日、ハワイ開教九十周年記念法要が、岩間日勇管長猊下大導師に、日本からも多くの信者が参加し、盛大に厳修される。日持上人を始めとする、多くの海外布教の先駆者が心血を注ぎ弘めてきた、その法勲をたたえる宗門を挙げての慶事だ。法華經日蓮聖人の精神が、世界に弘まることを目指して布教を行なってきた日蓮聖人門下にとつて、ひとつの区切りとなり、また新たな一ページとなる。

☆日持上人第七百遠忌を平成六年に迎えるとき、門連各派がどのように開教布教に取組んでいるのか、「門連だより」でとり上げたらどうかと思うが、いかが。(月)

平成五年二月十六日

平成十四年、「立教開宗七百五十年」誠に有難い。有難い大事にあえることに今から心のうずきを感じる。「門連だより」第十号までは七百遠忌のまとめという色あいが濃かったが、「第十一号」いよいよ立教開宗七百五十年にむかつて出発進行。喜びが湧き上がってくる。伊藤理事長より、立教開宗七百五十年を迎えるにあたってのご提言を頂いた。これから

各門流よりご提言が頂ける。第十二号が待ち遠しい。

立教開宗を迎えるにあたって、まず、「原点」をとだれも思うし、自分に問いかける。この「原点」という文字を目にし耳にする時、いつも心に浮ぶことは「住職の原点」は何んであるかということである。毎日、法務におわれている。一般社会通念の家庭生活をと思う時もある。いつも自問し、自戒する一点は「法華經の行者」として、どれだけの「行」をなしているかという事につきる。生涯教育というが、私ども僧侶は生涯修行と心にきめての毎日と思いたい続けたいと念じてやまない。

ところで「和して同せず」のことがあある。手前味噌的な考え方をすれば、物理的な関係では「和」がない。各々の長所や生い立ちを尊重するところから「和」が生まれ、善き関係になると思っている。

門下連合という協団体もこの事が大切と思われる。各門流の伝統と格式等を尊敬し合つてこそ異体同心になれるし、これなくして大成はないと言いつ切る。ご聖訓を信じてやまない。(K・Y)

平成八年二月十六日

◆昨年一月十七日未明の阪神大震災に続く

て、三月二十五日には東京で戦後最悪のテロ事件、オウム真理教による地下鉄サリン事件が発生した。この二つの大きな出来事は、数々の教訓を残すことになる。◆就中オウム教団によるサリン事件は、宗教界にとつて衝撃的であった。新興宗教とはいえ、一宗教団体が警察・国家に対して、テロ行為を犯していたからだ。◆それにしても将来有望な若者をそこまで暴走させてしまった原因は何であろう。

一口に学歴偏重による「ひずみ」と、簡単に結論つけて良いであろうか。教育機関にのみ責任転嫁させる訳にはいかない。今こそ既成宗教がこの機に立ち上がるべきではないか。◆残念な事は、オウム教団のこの一連の事件に対して、門連としての統一見解が未だに発表されていないことだ。一教祖のカリスマ性があれだけ多くの若者を魅きつけたということは、潜在的に誰でもオウムの信者に成り得るのである。◆宗教の本質とは愛と慈悲の実践である。生きとし生ける者への哀れみを注ぐことにある。宗教本来の目的を忘れてしまえば、今後既成宗教に対して風当たりが強くなるだろう。◆元検事の堀田力氏は、人間の心には元来「助け合う遺伝子が組みこまれている」と、平素から話されていた。阪神大震災では、全国から延べ二十万人の人がボランティアに駆けつけた事でそれが証明された。心の底

に眠っていた慈悲の心が、今回の大震災で甦つたのである。◆平成十四年には立教開宗七百五十年を迎える。この大事業を名実共に成就するには、日蓮大聖人の御意志に恥じぬ決意が門下全体の急務であり、僧俗が異体同心する機会でもある。(柳)

#### 平成八年七月一日

◆昔から「嘘(ウソ)つきは泥棒の始まり」などといわれてきた。しかし人間はウソつきの動物である。生き物の中で一番ウソつきのようである。かくいう小生も今までに多くのウソをついてきた。またたくさんウソもつかれてきた。殊のほか日本人はその癖を持っているらしい。◆現在放映中のNHK朝の連続テレビ小説「ひまわり」の舞台である南田家もウソをつかないことを庭訓としているが、今さらと思うこともある。しかし、今こそウソをつかない人間作りをアツピールことが急務なのかも知れない。◆麻原彰晃をはじめとする一部のオウム教の被告たち、高速増殖炉もんじゅ事件、HIV薬害エイズ訴訟、TB S「坂本ビデオ」問題、住専国会参考人答弁、どれをとつても最近の話題はウソで固めた話ばかりであり、ウソの上塗り心痛むことばかりである。◆我が胸に手をあてて考えてみるに、稀薄な信心を強盛なものに、未信者を篤

信者に、同信の信徒誘引にと、布教化活動に従事する私どもは、決してその轍を踏んではいけない。◆俗には「嘘も方便」という言葉もある。(方便)とは、衆生を教え導く巧みな手段(手だて)であり、真実の教法に誘い入れるために仮に設けた教えであつて、一般には目的のために利用する便宜の手段をいう。しかし決して望ましいことではないだろう。なぜならば、我々が高祖日蓮大聖人は「正直に方便を捨てて、但法華経を信じ、南無妙法蓮華経と唱うる人は、煩惱・業・苦の三道は法身・般若・解脱の三徳と転じ、三観三諦即一心に顕れ、其の人所住の処は常寂光土なり…」と指南されているではないか。今一度乞御拝読。(丈)

#### 平成九年一月一日

十五ツに十六、十七、…妙法蓮華経ジュウワチツコフ涌出品第十五、『御義口伝に云く此の品は述門流通の後、本門開顕の序分なり、』云々。▼本紙も第十五号を数えて、迹をツ発し本を顕わす時期が到来した。世間に於ては隠蔽し続けて来た事は全て露見して真相究明の活動が各方面に展開され、立替え、立て直しが急務とされている。▼日蓮聖人門下の組織活動「祖廟を中心」とともに「妙法を第一」に立替え、立て直しする事も大事。在家の本家初代の墓所を各分家

の要として墓を第一とする事から先祖崇拜は親子兄弟姉妹等の「縦の順位と横の区別」をマモリ真釣りあうことが親族の絆を保ち異体同心の調和のココロ『本心』に還元する道である。▼涅槃経に法の四依『依法不依人／依義不依語／依智不依識／依了義経不依不了義経』云々。佛道は師弟法類の「縦の順位と横の区別」が大事である。「妙法を第一」とする佛道本来の弟子の道に還る事が日蓮聖人門下ホウオンの直道である。▼日蓮聖人滅後門下は地涌菩薩として広宣流布の為、種々の本尊・化儀を展開した教義を開(廢)会して一同に座する時は娑婆世界は差別世界であるとの理を受

持し「順位と区別」をマモリ「妙法を第一」とした座配で真釣りあうことが本門開頭の如説修行である。自由と平等は本来無いと覚悟し『善悪不二・邪正一如』の妙法を世間に顕現する事が法華経の意とすれば本会の目的と事業達成には僧俗(相統)の人材交流と派遣が無住の道場を開(廢)く事……道理。▼「法華経を讀すと雖も還つて法華の心を死」順逆次第して意得可きなり。(意)

平成九年八月一日

◆合掌する姿は仏教徒の基本的な信仰の姿。拝む人は拜まれる人。その心は「拜む姿はきれいに咲いた心の花である。」人間のこのい

のちは地球より重いとよくいわれる。◆いたましい殺人や自殺幼児虐待等が新聞に書き立てられる。また青少年犯罪事件が低年齢化し社会問題となつている。生命軽視の風潮は楽しいはずの人生に黒い影をなげかける。

便利な時代になり、しあわせが増す筈なのに、どこか心の片隅に不安が潜む。明るく住みよ、潤いのある世の中にするためにいろいろと思案する。

拜む心で生活したならばそこに解決の一端が見いだせるのではないだろうか。合掌はお互いの人格を尊敬し合い、愛し合い、助け合うという仏様の教えを表した姿でもある。

◆先頃放送されたTVドラマ「いいひと」の主人公が自分の信念を主張する台詞の中で「まわりの人の幸せが自分の幸せです」と生き生きとして言い切る様に、宮沢賢治の「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」という法華経を命とし不軽菩薩のように生きた精神を彷彿とさせるようなドラマであった。

◆この常不軽菩薩は「我深く汝等を敬い決して軽くみたり、あなどつたりはしない。あなた方は皆菩薩の道を行じて仏様になられる方であるから」と誉め称え丁寧な礼拝した。この行為にたいし心不浄な人々は怒りを生

じ、悪口をいったり、杖や棒、瓦石を以て打ちすえるとも菩薩は合掌礼拝を続ける。

◆日蓮大聖人も「一代の肝心は法華経、法華経の肝心は不軽品にて候なり。不軽菩薩の人を敬いしはいかなる事ぞ。教主釈尊の出世の本懐は人の振る舞いにて候けるぞ。(崇峻天皇御書)」とお示し下さつている。

◆この不軽菩薩は、人はみな仏の種を宿しているから、その尊い仏性を磨いてゆくようにと人々に仏性に対する自覚と開発を促されてやまないのである。(俊)

平成十年一月一日

◆創刊以来、十年以上たった現在でも、「門連だより」は続いている。川の水は止まる事なく流れている。物事は続けていく事に意義があるのでは、信心も又同じ事ではないのだろうか。(或は火のごとく信する人もあり、或は水の如く信する人もあり、……水のごとくと申すはいつも退せず信するなり) 蹲鴟御書(上野殿御返事)◆編集委員の方々の、たえまざる努力により、今まで続いていたのではないだろうか。

◆開宗七百五十年に向かつて、我々、日蓮聖人の弟子として何が出来るのであろう。また何をしなければいけないのか。

◆(異躰同心なれば万事を成じ、同躰異心なれば諸事叶うことなし) 異躰同心事各宗派一丸とな

り「一天四海皆歸妙法」となる様に、日蓮聖人が初めて、御題目を口唱され我々凡夫に授けて下さった様に、我々も努力していかなくてはならないのでは。日蓮聖人が唱えられた御題目をそのまま信じて、そのままに他の人を教化しなくては、開宗七百五十年は何時までも来ないのではないだろうか。

◆末法は、摂受の修行ではなく折伏の修行の時代だと言う事は私が言うよりも、皆様の方が御存知の事であろうと思います。

◆（万民一同に南無妙法蓮華經と唱えたまつらば吹くかぜ枝をならさず、あめつちくれを砕かず代は……）如説修行抄この様な時代になすべく、私は精進いたしたく思っております。

◆開宗七百五十年に向かつての、私の思いです。（秀慈）

### 平成十年八月一日

◆世界は未曾有の危機に瀕している。21世紀を目前に地球規模での温暖化、環境汚染が警告されてから久しい。一方、冷戦終了後も湾岸戦争やボスニアに見られる様に民族紛争の種は尽きぬ。日本一国を顧みても政治不信、大蔵日銀官僚役人による汚職。バブル経済崩壊による付けが、平成大不況となり、経済状況には暗雲が垂れ込めたままである。人心の荒廃は役人のみならず、家庭崩壊、犯罪の低年齢

化、援助交際等不正腐敗、倫理道德の欠如、戦後の教育問題を含め、日本の土台そのものが揺らいでいる。権利自由を錯誤して解釈し我が儘、好き勝手が罷り通る。剩え「君が代」「日の丸」を認めない奇妙な日本人すら未だ大手を振っている。科学文明の限界、心の時代と叫ばれてもオウムの如く邪教が蔓延する。世は正に末世。「如何なる世の乱れにも、各々をば法華經、十羅刹助け給えと、湿れる木より火を出し、乾けるくさより水を儲けんが如く、強盛に申すなり」（呵責謗法滅罪抄）。鎌倉時代日蓮聖人が末法の時機を認識され、但惜無上道のご決意の下、お題目を唱え始められて、七百五十年の聖年を平成十四年に迎えるに当り、この時を意識しての門下各聖の更なる精進を期待するもの大である。

◆昨年の神戸児童殺害事件、今年に入っても黒磯中教師刺殺事件等いささか旧聞に属するが、生命を余りにも軽視しているとしか理解できない残酷な事件が多発している。キレてかけがえのない生命を奪うなど何人にも許されないことである。生命の尊厳とは何か、心の教育以前の人間として最低の心得である。またこれらを報道するマスコミも興味本位ばかりで、生死について深くコメントする批評家も少ない。日々、多くの人々の死が報ぜられているが、感傷も無く芸能ネタと同等に事務

的に報じている。人間の死をこんなに軽い扱いでいいのだろうか。日蓮聖人は「命と申す物は一身第一の珍宝」（可延定業御書）と示されている。人の生命、七百年前の日蓮聖人と何ら変わらぬものである。葬儀を通じ生死に接する機会の多い、僧侶として否、一個の人間として自戒を込めて、雑感を記した。（光）

### 平成十一年一月一日

◆日蓮聖人は、多年の修学成り、諸宗は無得道、法華經のみ成仏の大法であることを悟られた。末法万年の闇を破るべく、衆生救済、下剋上さかまき天変地異続発、支離滅裂の日本の根本解決のため、聖人は不惜身命、法難迫害を覚悟の上で、法華經弘通の大業開始を決意された。

◆建長五年三月、叡山を後にした日蓮聖人は、故郷房州清澄における立教開宗に先だち、伊勢神宮に参拝すべく、間の山浄明寺に参籠、太廟に大法開宣を奏上された。間の山に誓の井戸が伝えられているが、  
われ日本の柱とならむ  
われ日本の眼目とならむ  
われ日本の大船とならむ

の三大誓願を奏されたという。

◆日蓮聖人の事業は、活きた法華經の実践、  
〈一天四海皆歸妙法〉、社会・国家・世界の法

華経化である。なぜ「世界の柱」ではなく日本なのか。「一閻浮提第一の本尊この国に建つべし」。日本は法華経本縁の国であり、日本が一国同帰中心確立し、模範国となって法華経の真理を発信していくのである。日本の語の中に当然「世界」が含まれているとみるべきで、日本の柱はただちに世界の柱なのだ。

◆二十一世紀を眼前に、世界人類は平和を希求しながら、争いは増加し難問題が山積し混乱は深まるばかりである。日蓮聖人は「閻浮第一の聖人」であられる。真の平和は、三大秘法を成就して人類一同に本門の妙戒を持つ暁でなければ実現しない。

◆三大誓願は、われらに〈今宣流布〉護法願業の相続と処生の根本安心を教示されたものであろう。「異体同心なれば万事を成す」、同心とは日蓮聖人に同心することだから、なかなか容易なことではない。まさに不惜身命、聖人に絶対如法の信順を捧げ、唱導に浴して、大願業の中に生きるのみである。(秋)

平成十一年八月一日

◆今、私たちが生きて行く上において、自分の考え、気持ちを相手に伝えるものは、言葉しかない。しかし、言葉というものは非常に難しい存在である。自分の気持ちを、言葉を通して相手に百パーセント伝える事は中々大変な事

である。相手側の聞き方にも左右される。

◆古い昔の伝説に「指月の譬え」というお話がある。満月の夜、お寺の縁側で、師匠と弟子が語り合っていた。師匠は、満月に指を指し、弟子に「あれを見る」と言えば、弟子は、月を見ずに指を見たそうである。このお話は、言葉と言うものは大変難しい、指から月の計り知れない長さほど難しさがある。

◆私は、以前から疑問を抱いていた言葉の中に「卒業」という言葉がある。言葉には必ずアンチテーゼがあり、相対論理の世界がある。卒業の相対語は、入学である。入の相対語は出である。それならば、入学に対して出でなければならぬのに、何故卒業なのか。素朴な疑問であった。

◆先日、漢和辞典で「卒」という字を調べてみた。「卒」とは集大成である。疑問が解けた。入るに対しては出るであるが、学校「学ぶところ」を総合的にとらえた時、ただ、入って出ていくのではなく、その間、学んで来たひとつひとつの蓄積が集約された事を「卒」と言うのである。だから、出学ではなく「卒業」と言うのである。言葉は、確かに、重く、深く、含蓄のあるものである。

◆「大智度論」第九には、法の四依として、「依法不依人」「依義不依語」「依智不依識」「依了義経不依不了義経」と書かれている。日蓮大

聖人がお示しになった妙法蓮華経は、まさしくこの心である。立教開宗七百五十年に向けて、何にも動かない法華経の真実の心をひとりでも多くの人々に伝えて行かなければならない。(源)

平成十二年二月十六日

◆一九九九年七月の月、恐怖の大王が舞い降りることもなく、めでたく西暦二〇〇〇年が明けた。平成十一年十一月十一日には、語呂合わせの乗車券や、郵便消印目当てに駅や郵便局にマニアが押し寄せた。そして西暦二〇〇〇年を「ミレニアム」と称して、マスコミを通じて商業活動も盛んである。◆古より人類は数字を霊的なものと考え、宗教の中にも取り込んできた。東洋では「四」を「死」と読み、西洋ではイエスの命日である「十三」を忌み嫌う。「八」は末広がり縁起がいい。その反面「四苦八苦」と言う。「七」はラッキーセブンだが、「七転八倒」「七転び八起き」とも言う。「三」は仏教でも「三宝」「三界」「一念三千」など、大変重要な語句を意味する数だ。◆来る平成十四年の宗祖日蓮大聖人立教開宗七五〇年を西暦二〇〇〇年同様のお祭り騒ぎで終わらせてしまつてはいけない。昭和五十六年の宗祖七〇〇遠忌の「青年の船」「日蓮聖人劇」「オラトリオ」等の成功は、宗派を超えた青年層の中

心にした情熱の結集がなければ語ることはできない。「燃え立つ計り思えども遠ざかりぬれば捨る心あり水の如くと申はいつも退せず信ずるなり」(上野殿御返事) 立教開宗七五〇年は、門下連合公会を結成した意義を、もう一度再確認する機会にしなければならぬ。◆「一致・勝劣」「摂受・折伏」「祖師信仰の是非」……。一口に日蓮聖人門下と言つても、各宗の教義は様々。それぞれの歴史の中で培つてきたものがある。我々の共通項はただ一つ。「日蓮が慈悲廣大ならば南無妙法蓮華経は万年の外未來迄も流布るべし」(報恩抄) 日蓮聖人の慈悲のお心にすがり、お題目を信じ持ち広めること。「異體同心なれば萬事を成ず」(異體同心事)もう一度七〇〇遠忘の原点に返り、青年層の結束と行動を。(顯)

#### 平成十二年八月一日

◆先日、小学校三年生になる子供の同級生の父親が急逝した。三十七歳、三人の子供を残しての突然死であった。「諸行無常・老少不定」という言葉は、頭の中では理解しているつもりでも、いざ突然の悲報に接しては、ただ戸惑うばかりであった。

◆誕生が人生の幕開け、死が閉幕とするならば、閉幕の時には、周りの人から惜しまれながらの幕引きでありたい。それには舞台の上

で、いかに人間らしく演じられるかが問題ではないであろうか。

◆左記の遺書は、日航ジャンボ機が御巢鷹山に墜落した事故現場から発見されたものである。

マリコ、津慶、知代子 どうか仲良くがんばってママを助けてください。パパは本当に残念だ。きつと助かるまい。原因は分からないどうか神様 たすけて下さい。きのうみんなと食事したのは 最後とは 何か機内で爆発したような形で 煙が出て 降下しましたどこでどうなるのか 津慶 しつかりたのんだ ママこんな事になるとは残念だ さようなら 子供達のことをよろしくたのむ 今六時半だ 飛行機はまわりながら急速に降下中だ 本当に今までは 幸せな人生だったと感謝している

◆迫り来る死の恐怖と闘いながら、家族に感謝の言葉を遺して散つて逝つたこの男性は、素晴らしい人生を送り、不幸な事ながら素晴らしい幕引きであったのではないだろうか。

◆花は咲き、必ず散る。だからこそ、人は花を美しいと思う。同様に人間は必ず死ぬ。しかし死があるからこそ、限りある生もまた輝くものである。素晴らしい幕引きのために、輝く人生を送りたいものである。(和)

#### 平成十三年二月十六日

◆時は今から七四九年前の四月二十八日、場所は房州安房の国清澄において、日蓮聖人は立教開宗された。『法華経』に説かれた地涌の菩薩のご自覚を、日本国の中においてただお一人と信解され、昇りくる旭日に向かつての大法開宣であった。

先日、日蓮聖人のご生誕の地を訪れたが、壮大な太平洋から昇りくる旭日、周りに広がる房州の山々は、まさに虚空会の会座そのものであった。「日蓮は太陽の子」と聖人みずから仰有つた。ならば、太陽は父・釈尊であり、そこから出る光は、大慈悲の光明であろう。その光明を毎日体に浴びながら、多くの人々は有り難いという感謝の気持ちや仏子としての自覚を持ってないのが現実である。

◆我々門下にしても「一天四海皆歸妙法」という大誓願をかざし、護法活動を続けている気になつてはいないか。何事も言うは易しで、自らの欲や我にとらわれて、誓願も机上の言葉にかわつてきてしまいか。誓願とともに必要なことは、感ずることと行ずることである。日蓮聖人は、まさに「法華経の行者」であられた。ならばその弟子に連なる我らの行うことは一つ。日蓮聖人の意と同じお題目を身に読み、それを一人でも多くの人に伝えるこ

とが行ずることの第一歩である。自らが感ずることなく、人に伝えることはできない。日蓮聖人を師と仰ぎ異体同心するならば、我ら門下結集して報恩感謝の気持ちを持ち、二十一世紀に通用する行を實踐していくべきであると思う。法華経に基づく「自行化他」。これが今世紀においての必要なキーワードであると感ずる。簡単なことばに表すのでなくまずは自分で行ずる。立教開宗七五〇を迎えるにあたり、全門下等しく心構えを一つにして実践すべきことであろう。(石)

平成十三年八月十五日

◆これは大事だと思ふことを、形にはめて子供を育てることを「しつけ」だと考えるのが一般的である。

ろくに挨拶もできない、老人に席を譲らない、といった事象を指して、「まるでしつけが出来ていない」と評される。「しつけ」ということをこの様にとらえるから、世の中全体の乱れがひどくなつたと思われるのだろう。語源的には「し続ける」ことが、「し慣れ」て「しつける」ととらえるべきである。「し続ける」「し慣れる」とやがて身に付いて、別に意識せずとも、身に付いた形で行動する、それを「しつけ」が身に付いていることだと理解すると、世の中の乱れの意味がわかつてくる。

◆挨拶もできない子を「しつけができていない」と考えずに、いわば、マイナスの「しつけ」ができていると考えてみるのだ。習慣、つまり「し慣れ」てしつかり身に付いていることが、「しつけ」の成果である。

昔なりの押し付けることが「しつけ」と考え「しつけ」を實踐すると、それが元々納得できる子に効果があつても、それができないことを批難され続ける子は、「また言われた、くどいよ、もうわかつたよ」と、うんざりして反発し、いわばマイナスの「しつけ」が、段々と身に付いてしまう。ここに今の子供の難しさがある。

◆身に付いてしまったマイナスの「しつけ」をプラスの「しつけ」に変えていくためには、一々やり直し続けるという「しつけ」を實踐することにほかならない。今は、プラスの「しつけ」が本当に必要なときである。(浩)

平成十四年四月二十八日

◆三年連続で自殺者が三万人を越えたとのニュース報道を耳にした。先の見えない平成不況下、失業・倒産と経済的事由で自らの命を絶つ中高年の方が多いらしいが、愕然とすべき数字である。カウンセリング機関の設置等識者からの指摘も出始めたが、これらの人々には心の抛り所がなかったのかと考え

る。命というものの大切さは、日蓮聖人『事理供養御書』に「いのちと申す物は一切の財の中に等一の財なり」のお示しの通りである。信仰の自由は憲法で保障されているし、各人の人生観死生観は多様であるが、人として生きていく上で最低の守るべきものがあるはずだ。戦後教育において宗教教育が否定された結果である。宗教心(この言葉は使いたくないが)の欠如である。◆開宗七五〇年の聖年を迎え門下各聖においては、慶讃事業が多く計画奉行されていることとは思うが、種々の現実的問題に即応すべきことは言うまでもないことである。昨年の米同時多発テロ。イスラム原理主義者タリバンによるものとされ、米国はアフガンを制裁。パレスチナ問題は未だくすぶり続けている。世界平和はほど遠いと言えよう。いずれの事例も根強い宗教的対立が背景に有る。しかし、無関係の市民が多数死傷し犠牲となつている。殺人を是認するような宗教は宗教ではない、許されるわけがない。だが、世界に戦火が止む日はない、悲しい現実である。◆これに対し、我ら日蓮聖人門下に連なるものは何をなすべきか。開宗七五〇年のこの時改めて、門下連合会結成の出発点に戻り日蓮聖人の理想を實現するためにも、門下各聖の活躍を祈念するものである。宗祖七百遠忌の門下連合会の成し遂げた諸浄業の成果を知るも

のとして、この聖年を機会に再び門下各聖の心を結集していただきたい。◆『異体同心事』『異体同心なれば万事を成じ、同体異心なれば諸事叶うことなし……日蓮が「類は異体同心なれば、人人すくなく候へども、大事を成じて、一定法華経ひろまりなんと覚え候」の日蓮聖人のお言葉を肝に銘じ、「二天四海皆帰妙法」の実現に向つて再スタートの開宗七五〇年としたいものである。(光)

#### 平成十四年十一月二十八日

◆「文永十一年十月に蒙古国より筑紫よせて、対馬の者……百姓等は男をば或は殺し、或は生取りにし、女をば或は取集めて手をして船に結付、或は生取にす。一人も助かる者なし」(二谷入道御書)。戦争とは、いつの世でも、女性や子供そしてお年寄りが一番被害を受ける。悲しいことに、宗祖の鎌倉時代と現代とは、時代は離れていても同じ末法であり、その様相において異なるところはない。◆平成十三年度の漢字コンテストで、一年を象徴する字として一番になったのは「戦」。平成十三年九月十一日のニューヨークの同時多発テロは世界を驚愕させた。三千人近い尊い人命を奪った犯人はウサマ・ビンラディンとして、米政府は報復のため、これをかくまうたりバンが支配するアフガニスタンを爆撃し、政

権を崩壊させた。しかし、未だ犯人の生死も確認できず、爆撃は逆に一般市民数千人の死傷者をもたらした。◆このテロの背景には、イスラム教の過激派が存在する。イスラム教は六世紀にマホメットが教えを説いたことに始まり、彼は戦いをしながら布教したことが特色であり、スペインからインドまで支配した時代もある。アラブを唯一の神と崇め、偶像崇拜を禁止しているため、タリバンはバミヤンの大仏を破壊する暴挙を行った。イスラム教徒は、一日五回の礼拝、喜捨、巡礼を行い、日常的にも禁酒、豚肉を食わず、女性のベールや一夫多妻などの習慣があり、斬首、手足切断などの刑罰を行うことも認められている。これを過激に実行したのがタリバンである。◆しかし、世界の平和は報復では決して訪れない。「恨みは恨みによつて止まず、恨みは恨みなきによつてのみ止む」もし争いをもつて争いを止めんと欲せば、ついに止まることを得ず」という釈尊のお言葉が示している。「命と申すは一切の財の中の第一の財なり」仏教の慈悲の教えにより、世界の一人ひとりの生命を大切にし、真の平和・立正安国が訪れることを念願する。(正雄)

#### 平成十五年二月十六日

◆本年一月十五日より立教開宗七五〇年記

念「大日蓮展」が開催される。この開催にご尽力下さった本紙初代編集長の富川孝恭上人が、昨年十月に遷化された。ある酒席でこの「大日蓮展」について熱く語っていた師の姿が思い起こされる。この催しが盛会に無事終了することが、富川上人への最高のご供養になると思う。

◆上人本葬儀のお返しに「日蓮聖人とはいかなる人か」という本を頂戴した。これを読み、門下連合が組織された目的が「宗門の統合」「宗門の合同」であることを恥ずかしながら初めて知った次第である。

◆同じ法華経とお題目を唱えながら宗派が分裂していることは、僧侶から見ればそれぞれに言い分があるが、俗人には「法論はどちらが負けても釈迦の恥」の如く理解し難いのではないだろうか。例えば、同じ地涌の菩薩でありながら「私は上行菩薩派」「私は無辺行菩薩派」と片意地を張っているようなものであり、そのような状態に対して、世尊は「善哉善哉、善男子、汝等よく如来において随喜の心を発せり」とは決して仰らないであろう。世界に目を転じるとキリスト教・イスラム教が二大宗教に成りつつある現代において、仏教徒としてつまらないセクト主義に固執することなく、如何にあるべきかを考えていかななくてはいけないと思う。

◆日本漢字能力検定協会が、六万通の応募をもとに選んだ平成十四年の「今年の漢字」は「帰」であった。拉致被害者五人が北朝鮮から二十四年ぶりに帰国した「帰」であることは言うまでもないが、門下連合もこの「大日蓮展」を契機に「皆帰妙法」の「帰」を念頭におき、世界に目を向けていくべきであろう。

◆平成十五年は羊年である。「羊」の字は「善」や「美」など良きものを表す言葉に多くついているそうである。今年こそ世界にとって美しく善い年になるよう、そして門下連合各派が一匹狼にならず、羊のように一群をなすことを念願する。  
(金子和正)

平成十五年八月三十一日

◆今年もただひたすら予定をこなすだけの「お盆」のシーズンが終わった。もう二十年以上同じ事を繰返しているような気がする。私の地方では棚経は時間との勝負、一日五十軒、六十軒と廻らなければならない。それが終わると自坊と、近隣寺院の施餓鬼の手伝い。気が付くと秋の気配。

◆そんなある日、あるお婆さんからの電話。「御前さん、施餓鬼の日は○○教の集まりがあるのです。お寺にはいけません。塔婆もいりません」と。申し訳ないと詫びるお婆さんに、「私に詫びてもらっても仕様がな。ご先祖様は

それでいいのですか」と尋ねると困惑の様子。お盆の棚経には来て欲しいとの事。このお婆さんは若い時からあまり近所付き合ひもなく、寺墓地に墓もないからお寺に来た事もない。お寺に馴染みがないのだ。このお婆さんに限らず大方の新興宗教に入信している人にとつて、先祖供養としての宗教と、個人の心の糧となる宗教は全く別なのだ。伴侶を数年前に亡くし、同居している家族とも疎遠なお婆さんにとって、○○教の集まりで友人等と過ごすひとは楽しいに違いない。『妙法広布正法興隆』『一天四海皆帰妙法』などと口では唱えていても、一人のお婆さんをお寺に呼ぶ事もできない自らの無力さを情けなく思う。

◆日蓮聖人は、末法に法華経を広めるために『折伏』という手段を用いた事が強調される。日蓮聖人がどれだけ強い信念と、熱い情熱を持って衆生救済に全精力を傾注されたか、そのお姿の象徴であろう。しかし、『折伏』によつて多くの敵を作った日蓮聖人には、多くの熱心な外護者や信者、そして、多くの優秀で忠実なお弟子がおられたのも事実である。

日蓮聖人の温かく細やかで、大きくて包容力に富んだお人柄「人徳」がなかったなら、教理教学だけで人は従つて来なかつたはずである。

◆お盆の棚経は、一軒あたり時間にして十

分にもならない。そこで人と触れ合うのには限界がある。だからせめて法事や葬儀の時位は、「布教」とはほど遠いかもしいないが、出来るだけ時間を作り人と触れ合い、喜怒哀楽を共有できるように人間関係を作ることを中心にかけている。  
(顕)

平成十六年二月十六日

▼立教開宗七五〇慶讃事業が滞りなく円成した。門連の記念事業により、多くの日本人が日蓮聖人に接したことは疑いない。たぐさんの宝物が、東京国立博物館の展示スペースに所狭しと並んだ。それらは日蓮聖人を師と仰ぎ、後世の人に何らかの正しきことを伝えたという先人先師の、限らない努力と汗の結晶である。▼しかし、今の我々は果たしてどれだけのものを次の世代に遺せるのだろうか？別に形あるものをのこせと提言しているのではない。無形のものでも、例えば教育を施すことにより、多くの日蓮聖人門下を誕生させることができる。これとて今の私たちがなせばできる無形財産の創造である。▼教育はいうまでもなく、一朝一夕で貫徹するものではない。良き環境と長い時間が必要である。それも絶え間なく継続させなければ、まったく意味がない。ということは、強い意志をもって教育を施す覚悟がそこに必要となってくる。それ

も、日蓮聖人の教えに基づくものであれば、天下無敵の門下生が誕生する。地から湧き出る菩薩の出現を待つのではなく、我々が湧き出させなければならぬのである。▼そこで七五〇を過ぎた今、きたる聖祖ご生誕八百年の佳年に向かって、次なる行動をおこす時機を迎えている。何も考えずに、ただ時の経過を待つのか。それとも明確なる指針のもと、行動するのか。ひとえに私たちの覚悟一つで未来は決まるのである。さてさて、どちららを選ぶか。

▼日蓮聖人は弟子に次のように語られた。「諸仏の眼目たる妙法蓮華經の五字、末法の始に一圓浮提にひろまらせ給へき瑞相に日蓮さがけししたり。わたうども二陣三陣つづきて、迦葉・阿難にも勝ぐれ、天台・伝教にもこへよかし」

なんと勇気づけられる言葉であろうか。今まさしく私たちは、日蓮聖人の教えを、現代版「立正安国」運動として、それも自行としておこなわなければいけないのである。その意味では今年、門連の役割がなんと大きいことか。▼世はまさにぼんやりとはしてはいけない世の中である。(石)

#### 平成十六年八月十五日

私は毎年群馬県内のある酒造会社の酒造り始め(九月・洗いつけ)・造り納め(六月・皆造)

の儀式に参加します。その社長は日本酒造りについて、「ワインは葡萄を作り上げる天の恵み、いわゆる神(ゴッド)が造る酒である。対し日本酒は天の恵み+魂で造る酒である」と語られます。また杜氏の方々も自然の恵み(水)に感謝し、酒という生き物に対し真心と愛情を注ぐことが信念であると言います。

私達の体には、眼(視覚)、耳(聴覚)、鼻(嗅覚)、舌(味覚)、意(心)など人間の知覚を構成する六つの感覚器官があり、その中で五感機能と意(心)が認識し思考することによって身心が功德を満たすと言います。この六根という言葉の六番目の意(心)について次のような著述があります。

「日蓮大聖人は心は器なりと仰せになっております。器とは身体の中に心があるとすればその身体は心の器であります。次に心が器であると仰せられたのは心は魂の器であるということです。法華經では魂は心の中に入っているのだと説いてあります。(中略)魂が生きておれば何事も出来ず。日蓮大聖人も我が魂は南無妙法蓮華經にすぎたるはなしということですからその魂を現す為に、神力を現すために、お題目を唱えましたならば、私達の心の中の魂はいきいきしてくるのであります」(荻谷日任『心と魂の話』)。

「心の時代」。これは仏教諸宗派が二十一世

紀に入る前から掲げられたスローガンで、ふたを開けたらどうであろう、現代の世論に人々に我々の魂は届いているのでしょうか。

大聖人の「日蓮がたましひ(魂)を墨にそめながしてかきて候ぞ、信じさせ給へ。日蓮がたましひ(魂)は南無妙法蓮華經にすぎたるはなし」、この魂という言葉こそが我らが日蓮聖人門下の特許ではないでしょうか。仕事でも勉強でも何事に対しても一生懸命尽くす事によって何かが見えてくるはずです。世の中には命がけで仕事をしている人も数多くいます。その人々を救うということはそれ以上の情熱と魂がなければ人を導く事はできません。であるからこそ今一度、五感(身体)と心(魂)を二つに合せた「南無妙法蓮華經」を現代の人々の心に届かせたいものです。(善信)

#### 平成十七年一月一日

◆平成十七年乙酉の歳を迎えた。そこで西について話してみよう。

◆ちよつとその前に今年は二月九日が旧暦の元旦だが今は新暦が主流だ。中国から日本に伝えられて一四〇〇年。旧暦は繊細な季節の変化と寄り添いながら、徐々に姿形を調べ、日本仕様のカレンダーとして定着した。明治六年に西洋歴が採用されてからも、旧暦は、農

業・漁業・伝統芸の世界では、必要不可欠な自然暦として継承されている。勿論、宗教Ⅱ仏教の世界においてもそうに違いない。自然とともに生きる知恵に満ち、七十二もの季節をこまやかに味わい暮らすことができる旧暦は、まさにエコカレンダー。「日本人はみな昔から知っていたはず。月の力、太陽の動き、眼に見えない風のそよぎを感じ、暮らしに役立てることを……」（『旧暦と暮らす』松村賢二著。旧暦愛好者の筆者としてはザンネン！日本人の暮らしの知恵を忘れさせた、心のかよわぬ「西洋暦」斬り！

◆さて話は本題にもどして、酉の話を。「おとりさま」ってご存じ？ 東京・浅草において毎年十一月の酉の日に行われる「酉の市」。その舞台が、日蓮聖人門下の鷲在山長国寺（法華宗本門流。門前に「鷲妙見大菩薩」の立て札があり、浅草田圃「酉の寺」と称されている。寺伝によると「文永二年（一二六六）日蓮大聖人が上総国鷲巢（千葉県茂原市）の小早川家（大本山鷲山寺）に滞留の折、国家平穩の祈願をこめたところ、十一月の酉の日に妙見さまが鷲に乗って示現したのがはじまり」。この「鷲妙見大菩薩」は〈鷲大明神〉〈おとりさま〉とも呼ばれ、たいへん靈験があり、江戸に出開帳したところ、市がたつほどの信仰を集めてこのお寺が出来たという。となりの鷲（おほと

り）神社は、明治政府の神仏分離令によりお寺と神社に分割されてできたもので、「鷲妙見大菩薩」は今尚、長国寺に安置されている。

（丈）

### 平成十七年九月二十三日

今年の夏は、戦後六十年の節目にあたり、例年以上に反戦・平和の八月になるはずが、衆院の郵政サプライズ解散総選挙になり、個人的には、中途半端な印象が多少あります。八月六日広島原爆忌・九日長崎原爆忌・ソ連の参戦・十五日終戦と、マスコミは終戦記念として特集を組みます。またお盆の先祖供養と重なり、毎年、戦没者追悼の時期でした。総選挙のあたりで中韓注目の小泉総理の靖国神社参拜も中止となり、マスコミもワイドショー以下選挙中心の報道となりました。戦没者追悼儀礼を中韓が政治問題化し干渉し続けることも未解決のままです。小泉総理の「先の大戦で犠牲になった人々を追悼し、平和を祈念する」の答弁だけでは説明不足なのでしょうか。日本が加害者であったことは理解できますが、複雑な国際間の政治問題は私にはわかりません。このことに関しては、去る六月に天皇皇后両陛下がサイパン島への慰霊の行幸の際のお言葉「海外の地において、改めて先の大戦によって命を失ったすべての人々を追悼し、遺族

の歩んできた苦難の道をしのび、世界の平和を祈りたいと思います」と述べられたお気持ちを銘記したいものです。先の大戦は我々に平和の尊さを教えました。戦後六十年間の平和と今日の繁栄は、何百万人という尊き命の犠牲の上にあることを忘れてはいけません。犠牲になった人々への追悼と感謝の念を八月だけでなく常に心に刻んでおく必要があります。日蓮聖人『立正安国論』に「汝須く一心の安堵を思はば、先ず四表の静謐を祈るべきか」とお示しなっております。四表の静謐すなわち国家社会世界平和を祈りなさいと。宮沢賢治はこれを「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」と解説しています。世界の現状を見ると、世界を暗躍する国際テロ、地球規模での異常気象、天変地異、環境汚染、難民問題。日本では三万人超の自殺者、凶悪犯罪、倫理道徳喪失等混迷が続いています。今まさに「速やかに実乗の一善に帰せよ」のご意志を心すべき時である。（光）

### 平成十八年二月十六日

平成十七年の十二月は、観測史上五十年ぶりの寒さだった。そんな十一月のある日、凍てつく道を歩いていたらこんな言葉が目飛び込んできた。「寒い日があるから、暖かい日があるがたい」。うん、そうだな、と思った。気

温の変化があまりなく、同じような暖かな気が一年中続く、土地に住んでいたことがあつた小生にとっては、日本の冬の寒さは特に厳しく感じられる。ポケットに手をつつこんで冷たい空を恨めしそうに眺めつつ、暖かな陽が照る小春日和に和む自分を連想した。そして、歩きながら気づいた。気候になぞられたこの言葉は、人生の真髓をついているな、と。「寒い日」つらいことがあつた日、「暖かい日」うれしいことがあつた日」と置き換えてみるとびつたりとくる。人生には山あり谷あり、苦あれば楽あり、なのである。病気になって初めて健康のありがたさがわかる、というのも同じこと。ちよつとした風邪で寝込んだ時さえ、そのように痛感するから、健康の大切さや、ふだん元気に生活できていることが実はどれほどありがたいことであるのか、を常に忘れずにいたいものだ。そうやって考えてみると、「暖かい日」はとりたててうれしいハプニングがなくてもよい、ただ何事もなく無事に過ごせた日と解釈してもよいのである。また、人はともすると、「寒い日」ばかりを嘆いて過ごしてはしていないか？ 何事もなく無事に過ごせた日であっても、過去に起きたつらいことを引きずって暗い気持ちで過ごしたりしていないか？ 今日の新しい一日を、自分で「寒い日」にしてしまふなんて、なんともつ

たいたいことなのだろう。ふだんの何気なく過ぎていく平凡な日々、そんな日常を「ありがたい」と感じられる心を持つことができれば、自分にとつての今日この日を「暖かい日」にすることができるとはではないか。四季がはつきりして変化の激しい日本の気候は、ある意味、身体的にはきついかもしれないが、別の意味では寒い日に感謝の念を思い起こさせてくれる風土であり、心の持ちようで寒い日さえも暖かく過ごせる感性を育む土地なのである。ふと見上げた空が、少し明るく見えた。

(尚)

#### 平成十九年三月二十一日

現在、世間を騒がせている少年犯罪。その中でも特に目立つ殺傷事件。「キレル」事から取り返しのつかない行動をしてしまう。その言葉がマスコミで取り上げられてから、子供による残虐な事件が目立つて仕方ない。子供というのは非常に素直な心を持ち、人と同じ事をしてみたいという欲望も強い。そんな中、お手本となるべき大人達が平気で罪を犯す。そういったマスコミの報道を毎日のように聞いていく中で、何事も吸収していく子供達にどういう結果をもたらすか想像がつくであろう。もう一つ言える事は、子供達の間で流行っているTVゲーム。非常にリアルな映像の中

で、普通に敵を殺し、自分がやられた場合リセットを押す事で生き返る。つまり命のやり直しがきくのである。人間には錯覚という知覚があるが、成長段階である子供達の知覚の中には確実に人は死んでも生き返るといふありえない錯覚が知らないうちに埋め込まれているように思えて仕方ない。日蓮聖人が示された末法の時代。人心が乱れ、仏の教えが正しく伝わらない困惑の時代。まさに今、その真つ只中なのである。日蓮聖人の御教えを受け継いだ我々僧侶はじめ檀信徒が、それを後世に正しく伝えて行く事で、子供達は命の尊さというものに初めて気付くのではないか。祖願達成の決意を新たにしたい。

(祐)

#### 平成十九年九月二十三日

今年の夏はとても暑かった。猛暑、酷暑の夏であった。

お盆の帰省は交通機関がマヒする。特に高速道路は停滞の連続である。何キロメートルの停滞と予測されるが、便利な車社会である。高速道路での事故は常に起こり得ることであるが、特にお盆帰省の事故は普段より多いと感じるのは私だけだろうか。

事故のニュースを見ると、私は色々な角度からその事故をとらえてしまう。事故を起こした車、その数秒前を走っていた車、事故車

の数秒後を走っていた車、この三つの場所にいる車の動きは命をも動かす命運がある。

生かされている私たちの人生に命が表わされている大切な言葉が三つある。「寿命」「運命」「宿命」である。

「寿命」は、いのち、生命。「運命」は、吉凶などが人の命を超越して、人に廻ってくる現象、すなわちめぐりあわせ。「宿命」は、変えることのできない運命と辞書に書いてある。

生れてから亡くなるまでの命は寿命である。自分の人生が動いたり選ばれたり、命運をかけるその命を運命というのであろう。そして、宿命は前世から決まっている運命である。

日蓮聖人は、「人の寿命は無常なり。先臨終の事を習ふて後に他事を習ふべし」とお説きになられている。

だからこそ一日一日命のあることの喜びを、感謝せねばならない。(照)

平成二十年二月十六日

昨年十二月、法務省は、三人の死刑囚の刑執行を発表した。今回の死刑執行では、死刑が適正に執行されていることについて国民の理解を得るためという理由で、三人の氏名等を初めて公表し、その事が新聞・テレビで大きく報道された。国内では、死刑廃止よりも死刑存

続をのぞむ声のほうが大きいようだが、この話題が出るたびに必ず思い出すのが日蓮聖人の、「浅き罪ならば、我よりゆるして功德を得さすべし。重きあやまちならば、信心をばげまして消滅さすべし。」という御遺文と、国柱会

創始者田中智学の、「死刑を廃止せよ、ということとは、法律上の議論でなくて、法律以上の人生道義観から来るもので、世に殺人が公認されない如く、国家も人を殺してはならぬ、ということ

を原則とする。せつかく世に生まれ出たものを、国家としてこれを殺すということは、天然理法に対する一種の反逆であつて：死刑には悔悟の余地が残されない。極刑は殺さずともいくらかでも課し得る。しかして悔悟の余地が与えられる。罪を憎んで人を憎まずと、けだし国家司直の精神である。」という言葉である。この意見自体には反論も出るだろう。しかし刑罰の問題に関わらず、現代の諸問題について考え、積極的に発言していくことは、これからの日蓮聖人門下には必要ではないだろうか。

（真）

平成二十年九月二十三日

最近の話題といえば、原油価格の高騰とそれに連動した物価高。他方では食品の偽装が発覚し食品の安全性が問われている。相変わらず殺人など凶悪な事件も多い。なかなか「平

穏な毎日」というわけにはいかない。不安が募る……。

しかし、今ここに挙げた不安は全て人によって作られるもの。つまり人間様に問題があるのだ。その根源は自己中心な考え方、いわゆる「ジコチュウ」ではないだろうか。私も人間のはしくれなので認めたくはないが……。

食品の偽装や殺人は、その最たるものであることは言うまでもない。思えば、昨年の「今年の漢字」には「偽」という字が選ばれていた。そんな状況は恥ずべきことであるのに。

例えば、ある人が自分の利益のことだけを考へて行動すると、多くの場合それは他人の損害、迷惑になる。人間は一人で生きているわけではないので他人に損害を与えると、抵抗を受けたり、嫌われたりする。そしてそれは回り回って自分に還ってくる。自業自得ということだ。最初は自分の得になると思っていたことなのに……。

他人のことは見えても、自分の姿は見えないもの。しかし我々には唯一自分の姿を知る方法がある。経文に照らして自己を見つめるのだ。日蓮聖人は法華経を「明鏡」と仰せである。鏡は姿を映すもの。まずは、明鏡たる法華経の信心によって自己を見つめ、自己中心の考え方をやめて、みんなの幸せを願うことが立正安国への第一歩であろう。(哲)

平成二十一年二月十六日

昨年米国発の金融危機は、日本経済に大打撃を与え、円高、雇用難民、景気低迷は長期化している。政治は混迷を続けるのみで、景気回復への有効な政策は未だ見出されない。昨年の漢字は「変」であったが、プラス方向への変化なら良いが、マイナス方向では、日本のみならず世界中が大変である。米国のオバマ大統領は「チェンジ」と叫んで当選したが、世界経済の安定、温暖化等の地球環境問題、新型インフルエンザの出現、続発する民族紛争、国際テロ等、早くプラス方向にチェンジを要するものばかりである。他人まかせで、為政者のみに、危機克服を依拠期待するだけでは何も解決していかない。今この時こそ、我々一人一人が何ができるか、何をすべきか、自問自答する必要がある。本年は『立正安国論』奏進七五〇年に当る。「汝、早く信仰の寸心を改めて、速かに実乗の一善に帰せよ。」今こそ宗祖のこの一節を胸に銘記し、我々自身がチェンジする時である。

「変」続きで述べると仏教の命題の一つ、「諸行無常」がある。「この世のあらゆる全ての現象、存在は移ろい変わりゆくもので、生滅変化を繰り返す常ならずにある」とされる。有名な平家物語の冒頭、「祇園精舎の鐘の声 諸行無常の響あり 沙羅双樹の花の色 盛者必衰の

理をあらはす」とあるせいか、諸行無常が盛者必衰の理として受け取られることが多い。マイナス方向のイメージが強く、文字通り、諸行が、滅びる、衰えると解釈される。現実には、アメリカンドリームを宣揚し、巨額の富を手に入れた米経済のリーダー達、日本でもヒルズ族IT長者、勝ち組といわれた人々が、今回の金融危機によって、身を以って実感していることだろうが、諸行無常を消極、悲観的なマイナス思考ではなく、積極的、樂觀的な変化と考える、プラス思考も必要ではないか。危機のピンチを、変化のチャンスととらえることもできるのではないか。雑感を述べさせていた。合掌 (光)

平成二十一年九月二十三日

◆わが日本列島では一年間に三万人余の人が自殺しているという。鳥やけものや樹木や花が、自らで自らの命を殺つとは聞かないから、人という種では考ええるというはたらきが悪くも悪しくも大きなはたらきをしているのだと思う。

◆明治維新の時、日本は仏教を棄てて西洋文明を受け入れた。以来、科学文明は急速に発展したが、諸法無我を説く仏教文化を失ったとはいえないか？

◆オバマ大統領が誕生する少し前に小子は

アメリカにいた。自国の武力一辺倒の国策に反対していた人々は熱狂的に新大統領の誕生を喜んだ。

◆が、その大統領もアフガニスタンに増兵してテロリストをせん滅するという。一方「アメリカこそが世界最大のテロ国家だ」と侵略され、虐殺された人々は怒る。

◆もし人間ばかりか鳥やけものや山川草木までもが、縁に由って結ばれあつて共存共生しているとするならば、人間(国家)至上主義の哲学宗教国家は自から亡びの道を歩まねばならない。

◆お釈迦さまの前世の物語には一切衆生を救わんが為に捨身供養した説話が累々とつづられている。暴力、武力からの解脱。

◆われらもまた大音声に南無妙法蓮華經とお唱え申し上げて、怨親平等にお互いの仏さまを拝み合うこと。これが絶対平和を創造する如来秘密神通の力ではないのでしょうか。(暉)

平成二十二年二月十六日

◆「日蓮聖人門下連合会」が本年発足五十年を迎える。宗派は違えども、日蓮大聖人を宗祖と仰ぎ、南無妙法蓮華經の御題目を唱える我等。一天四海、皆歸妙法の祖願成就のために、更なる結束を果たさねばならない。

◆古代ギリシャより続く「昔は良かった」との懐古思想。紀元前から少しずつ悪くなっているならば現代は如何なる時代なのか？

◆民主党への政権交代。新政権への多くの国民の希望と期待の現れであったが、実際の施策と変わらない政治家の姿勢。どこまで政治不信は進むのか？

◆世界的な金融危機はまだ続く。紛争と内戦は止まらない。環境問題への有効な解決策は見えてこない。慢性的な不安と恐怖が人々を支配する。

◆世紀末のノストラダムスに続いて、二〇一二年のマヤ文明の世界滅亡の流行。神の元の終末論では、世界の終わりの時に、信じる者のみの救済を解く。世界の滅亡は、神を信じる人々にとっては待ち遠しいものなのか？

◆仏教の説く末法思想とは、世界の終わりではない。末法とは、お釈迦様の滅後より二千年から始まり、現代へ、そして未来永劫続く時代。その時代には、正しい仏の教えさえも廢れること。

◆その末法であるからこそ、宗祖は、正しい仏の教えである法華経へと、南無妙法蓮華経へと人々を導かねばならないと言われた。混乱の時代だからこそ、今を生きる人々への「未来は良くなる」との希望の灯りを示さねばならない。  
(正)

平成二十二年九月二十三日

「坊主丸儲け」と言われると、私は「坊主丸禿げ」と答える。なぜなら多くの僧侶がそのような生活とは無縁だからだ。情けないことだが、世間一般から我々僧侶はこのように見られている。

いつから、どうして、こうなってしまったのだろうか。社会での我々の役割を考えた時、非常に悩んでしまう。

宗教は今や地域活動に容易に入っていくことができないう。小学校でも地域活動でも、宗教と名があるだけで戸惑われてしまう。関係ないと思う僧侶も一部いるだろうが、私は大きな問題であると考えている。なぜなら、このような仏教離れという課題が上がってきて十数年、これといった解決策が見つからないからだ。安易に解決できるものではないことは承知しているが、問題は僧侶一人一人の自覚である。

言うのは簡単であるが行うことは難しい。地域活動・地域貢献をすべきという者、一方で僧侶として朝夕のお勤めをして給仕だけやればよいという者、さらに何か収入をという者もある。たしかに生活の厳しいお寺はお勤めだけではとうてい成り立たない。しかし、何か収入をといっても失敗すれば大きな痛手を被ってしまう。

このような現実の中で、多くの僧侶はいろいろと模索しながら必死に取り組んでいる。当然のことながら金があるから偉いわけではないのだが、余りにも偉そうにしている僧侶が多い。偉そうに見せるよりも、偉く見られるようにしたいものだ。

今もどこかで必死に取り組んでいる僧侶のためにも「坊主丸儲け」と言われるような行動は慎んでいただきたいと願う。それが仏教離れの最大の原因かもしれないからだ。(吉)

# 新旧編集委員座談会

## 今、残したいこと、伝えたいこと

## 門連の過去と将来を語る

発言者 \*旧編集委員

生駒雅幸 (日蓮宗) \*

大澤宏明 (日蓮宗)

矢吹慈英 (法華宗本門流) \*

平田義生 (法華宗本門流)

朝倉俊幸 (顕本法華宗) \*

吉本栄昶 (顕本法華宗)

竹内敬雅 (法華宗陣門流)

柳下真敬 (日蓮本宗)

木村光正 (本門法華宗)

藤本坦孝 (国柱会) \*

森山真治 (国柱会)

木津博充 (日本山妙法寺)

相澤宏明 (展転社) \*

太田順祥 (日蓮宗・事務局)

司会

藤井照源 (日蓮宗・京都門下連合会)

七百遠忌記念事業における結束の思い出



司会(藤井)五十年を振り返るとさまざまな出来事がありますけれども、やはり一番大きいのは昭和五十六年にお迎えした七百遠忌ではなからうかと思えます。門下一同がまとまり一所懸命になったわけです。まず、その時の苦勞や思い出話をまとめていただければと思います。相澤さんからお願ひします。



相澤 門下連合会のそもそものは、対外的な視点があり出発したと思います。外に向けて門下が結束し

ているのだということを示さなければいけない。その流れの中にあつて昭和三十四年に、立

正安国論献諫七百年記念をお迎えし、連合の機運がもりあがつた。それから以後、門下が結束していこうという力の結果がはかられてきました。

その中でも大事業として取り組まれたのが七百遠忌の折だったわけで、報恩記念事業として「日蓮聖人展」「日蓮聖人劇」「オラトリオ日蓮聖人」の三本柱の企画があつたわけですが、それだけで終わってしまうのは物足





りないのではないか、将来に直接的に繋がっていくという発想で青年の結集を凶らなければいけない。これを四番目の大きな柱としようというのが「日蓮聖人門下青年の船」の実施にいたる直接的な契機でした。詳しくは『日蓮聖人門下連合会30年の歩み』に譲りますが、かいつまんで申し上げますと、昭和五十三年に国柱会の田中香浦先生が理事会で提案し、企画委員会ができました。しかしその後は苦心の

連続でしたが、委員の粘り強い活動が効を奏し、昭和五十五年にゴーサインが出ました。そして、遠慮正当の翌昭和五十七年四月に門下青年五百名が洋上に結集して実施されました。この企画は億単位の予算が必要で、簡単にできないという事でしたから、門下連合会の真価が問われるという問題意識で、各派代表の青年二名が企画推進委員として参画して企画立案、のちに実行委員会に格上げされて実施にこぎつけました。決定に当たり日蓮宗事務総長松村壽顕上人、当時の門連理事長ですが、決断をくだされたことをなつかしく思い返しています。大変意義のある事業でした。

**司会** ただいまの「青年の船」に関しまして、朝倉さんお願いします。



**朝倉** 昭和五十四年に企画段階から門下連合会の交流の場に席をいただき、各派のいろいろな方との

直接的な交流が始まりました。「青年の船」をはじめとした四大事業はその時の主要な事業だったのです。私が直接関係したのは「青年の船」で、初期の段階からずっと従事しました。未知のことでしたし、一宗派でできるような事業ではありませんし、毎月のように日蓮宗宗務院を会場に会議を重ねました。富川孝恭

さんが事務局の中心のお一人としておられ、賢明なリーダーシップを発揮していただきました。今思えば当時の若い私達の熱意もありましたし、またなにか冒険的な新しい事業に取り組むという夢やロマンもありましたし、青年僧の連帯を図る意味では「青年の船」の事業はお互いが協調連帯する大きなターニングポイントになったと思っております。準備段階に関わり合ったなかでの人間交流は非常に深まりましたし、その縁による交流は自分の僧侶生活を振り返りましても非常に貴重なものだと思っております。

そして、昭和五十八年に青年の船の記録集を発行しました。その記録集の最後の段にある、未来の願望としては「青年の船」を単発事業で終わらせるのではなく、継続的な青年の交流をいかに具体化していけるか、継続性を持った活動を門連の中に位置づける事はできないかというのが最終的な結論でした。

『30年の歩み』の年譜を確認しますと、昭和五十八年の六月七日に常任理事会で「門下青年組織化の問題は重要課題で今後積極的に討議を重ね最善の方向を打ち出すべく検討する事を申し合わせました」と出ております。ただし、そののち九月十六日の常任理事会で「門下青年組織問題の検討成案ならず保留」ということで、盛り上がった機運にブレーキがかか

り、なかなか実現し得なかったわけです。

そうした苦心がありました。昭和六十一年五月に至り「門連だより」の創刊号がタブロイド版六ページで発行されます。この編集委員会に「青年の船」関係のかたがたが再度結集して交流を継続いたしました。そして、五十年という節目を迎え、門下の各末寺にも門連事業あるいは門連活動がどこまで認識されているかということも含めて見直し、一般社会全体に日蓮聖人門下連合会の存在とか活動とかがどこまで認識されているか、つよくアピールをしていく機会を得ましたことは、まさしく時のしからしむるところではないかと思っております。

**司会** 「青年の船」の企画は多事多難でした。何年にもわたる会議を重ねてゴーサインが出た。その「青年の船」に参加された現編集委員でもある木村さん、思い出がありましたらお話し下さい。



**木村** 私の祖父の弟が硫黄島で玉砕している。硫黄島洋上慰霊祭が大変感動的でした。船内ではパ

トルール隊に属し、皆さんが船内生活を楽しんでいる間、事故がないようにと縁の下のご奉公をしていましたので、あまり皆さんと懇

親できなかったことが今も心残りです。しかし、それにもまして宗派を越えて皆さんと知り合えたことは大変良かったと思っております。そういう面では戦友意識のようなものがあります。

**司会** 「日蓮聖人劇」が前半、後半とありました。昭和五十四年が前期で昭和五十六年の初頭が後期、その後「オラトリオ日蓮」ができましたし、「日蓮聖人展」もありました。それらを踏まえて生駒さん、いかがですか。



**生駒** 四つの大きな行事が行われたわけですが、どれ一つをとっても大変な事業ではないかと思いま

す。現代にこうした四大事業を一挙に実行するととなると、おそらく困難なのではと予想されます。とくに「青年の船」に関して申し上げますと、各派から二名の青年委員が集まり企画しました。未だかつてない青年たちで企画した事業が見事成功した事例ではなかったでしょうか。今の時代にこうした行事を踏まえて青少年の連帯について少し考え、何ができるのか、何をアピールしていくのかなど、いろいろな方々が日常的に門連と関われるように、企画し行動していったら「青年の船」の体験が生かされ、有意義ではないかと思えます。

**司会** 確かに七百遠忌の難しさはあったと思います。各宗派、各門流の中で門連との係わり合いという点で反省すべきことがあったかも知れません。矢吹さん、いかがですか。



**矢吹** 私は七百遠忌の時は学生で、直接門下連合会にはつながっていません。船のあの青年の組織

化から参加しています。七百遠忌当時、劇を見たりとか展覧会を見たりとか聴衆の立場では参加しましたけども、実際に運営とかは存じ上げませんでした。その後、宗務院に出仕して当時の事情を伺うと、わが教団は積極な協力姿勢を布いたとはいえないようでした。ですからもう少し積極参加できたならば良かったのかなという思いを持っております。

### 結成三十年その後の主な活動——ふたつの宝物展

**司会** 七百遠忌は昭和五十六年ですから、その七年後の平成二年に門連結成三十年を迎え、このとき記録誌『30年の歩み』ができあがったわけです。京都門連の理事会が日蓮宗の本山妙覚寺で開催されたおり披露され、法要と刊行祝賀会がありました。そして本年は結

成五十年です。三十年以降の二十年間で特筆すべき事業として先般の「立正安国論奏進七百五十年」にあたる平成二十一年に、京都の国立博物館で開催された「日蓮と法華の名宝展」、その前の「立教開宗七百五十年」にあたる平成十五年に東京の国立博物館で開催された「大日蓮展」のふたつがあります。

**生駒**

「大日蓮展」につきましては、国柱会会員の鷲塚泰光さんが東京国立博物館の次長でおられて、国柱会の常任理事大橋邦正先生を通じてお話をいただきました。たしか平成八年ぐらいいから検討が開始されているはずですが、そのうちに鷲塚さんは奈良県の方へ転勤され企画そのものは消えてしまいました。しかし、奇跡的にその話が復活したのは平成十二、三年ごろです。ですから僅か三年ぐらいいの時期で門連として決定し、産経新聞社が後援について、東京国立博物館も首を縦にふり開催にこぎつけたわけです。

**司会**



「大日蓮展」に関しての感想を大澤さんから苦勞話を聞いていました。その苦勞があったからこそ成功があったのではと思います。「大日蓮展」の会場で、檀信徒のかたが御本尊や聖人像の前で手を合わせてい

る、あの姿を見て、皆さんの苦勞がああいう形で大輪の花が咲いたのだなあというのが、一参観者として見学に行った者としての率直な感想です。

**司会**

展示宝物を出すに当たって各本山の連携がうまくいかないと、些細なことで揉める難しさがあります。日蓮本宗本山要法寺に



柳下 その時はまだ宗務所におりませんでした。ただ「大日蓮展」に関わる思い出としては、自分がお手伝いしていたお寺が出品者にも当たっており、御宝物を博物館に寄託していた関係で、それを展示担当のかたに引き渡すさいの打ち合わせがありました。関係者一同厳肅な態度で立ち会いが行われていたのが思い出です。そういつた作業が全国で行われていたことを想像すると感一人です。私も何回か足を運びましたけども都内のJRや私鉄の駅舎に、また電車の中に大きな広告が出ていて、そのほかにもマスコミを通じての宣伝など、正直ここまで運動をする力が日蓮門下にはあるのだと感動しました。

司会 「大日蓮展」の次に、京都国立博物館で「日蓮と法華の名宝展」が開催されました。

この話のそもそもは京都理事会で顕本法華宗総本山妙満寺から日蓮聖人展をやったらかと意見が出ました。しかし、その時は九九・九パーセント反対でした。反対理由のひとつに「大日蓮展が終わってまだ年月も経ってないのにまた日蓮聖人展か」ということがありましたが、よく話し合い門連の基本的な進み方をお互いが理解し、そういう中で開催が決まり、結果的には成功したわけです。平田さん、京都の方はいかがでしたか。



平田 私の中で印象が強いのは「大日蓮展」です。その時は僧侶になって三年目でした。出身が葛飾区

です。上野は近いところであり三回参観にいききました。私一人、両親、そして、高校の友人が「今、日蓮展をやっているけどお前は日蓮系のお坊さんになつたんだろ。もし機会があったら連れていってくれないか」ということで、合計三回です。友人は真言宗関係でしたが、宗派意識を離れたところで日蓮聖人が語り合えて、盛り上がり上げていったのかなという感じがしています。

それと関係しているかわからないのですが最近「お会式」という言葉を調べてみました。そうしたら俳句の秋の季語となつていま

した。日蓮聖人のお会式が十月にある関係で、秋の季語。他の宗派でも「お会式」という法要はあるようなのですが、それはあまり世間で承知されていない。俳句の季語の「お会式」は日蓮聖人のことで、日蓮聖人の人物像が親しみやすいからではないでしょうか。そういうことから「大日蓮展」という名前が出た時、友人が「見にくい」となったのではないか、展示会を通して日蓮聖人をもっともっとアピールしていった方がいいのかなと思いました。京都の宝物展の時もやはり同じようなことを感じました。

**司会** 門連としての進み方、在り方、動き方が今のお話に出ているような気がします。「日蓮と法華の名宝展」はそもそも顕本法華宗の妙満寺の発案でした。



**吉本** 私もいかせていただき熱狂が伝わりました。他宗の展示に比べればやはり大きな差を感じると

いうのはあります。日蓮聖人展に入場された人びとの熱気は、興福寺の寺宝の阿修羅像を展示したものよりあったと感じました。阿修羅像展にもいききましたが、多くの方が来ている。有名だから見てみようという感じの方が多かつたようです。それにくらべ日蓮聖人展

を見させていただいた時に、拝みたいという信仰者が多かつたと凄く感じました。ですから一つの宗派ではなく門連として成功させたという事に、意義があるのだと思います。私も門下連合会というのは耳にした事はあっても、どういふ活動をしているか知らなかつた。しかし、手を取り合つてやっていることがよくわかり、相当インパクトがあつたと思うのです。まとまつて何か大きな事業ができるのだと衝撃を受けました。真言宗や、浄土真宗よりももつと大きなことができるのだという期待感を持つ事ができました。

**司会** 博物館と後援の新聞社と門連の三者が相談して、「日蓮と法華の名宝―華ひらく京都町衆文化」とし、総合してこれを「日蓮聖人展」にしようとしたのも日蓮聖人門下連合会でした。そして成果を得たあと「こんな素晴らしい日蓮聖人展は初めてだ。成功だ」という事でこれを門下連合会の慣例にしようと思つたことはとても良かったと思つています。国柱会の藤本さん、森山さん、この点いかがですか。



**藤本** それぞれの日

蓮聖人展を一般参観者として拝見させていただきました。いろいろな宝物を一堂に会して見せてもらえるという事で非常に感

動しました。やはり正しい日蓮聖人像を一般の皆さんに持つていただきたいので、効果はあつたのではないかと感じて帰つてきました。展示宝物はそれぞれの寺院で秘蔵されているのを出してもらえるといったことで、各寺院の協力があつて初めて可能だつたわけです。これからも大きな目的を捉えて各派一体となれる企画を進めていただきたい。われわれも気持ちを入れて努力しなければならぬという感想を持ちました。



**森山** 「大日蓮展」とちがつて、「日蓮と法華の名宝展」は「門連だより」の編集委員として企画はしまし

たが、中世京都の法華教団というテーマから国柱会は完全に離れていました。今回の展示や企画に国柱会として協力できる事はなかつたものですから、こういう会が成功裡に終わった事を見まして、個人的な感想にもなりますけれども国柱会としては今回は残念だつたかなと思つています。今後は門連としての活動をつづけていく上で国柱会として積極的にならなければならないと考えなければいけません。次

**司会** 次に日本山妙法寺の木津さん、お願いします。



木津 いろいろな立

場の人たちが一緒になれるというのがやはりありがたい。日本山という教団は日本に他にないほど小さなものですから、皆様のお役に立てなく、せめて異体異心にならないように気を付けていきたいなと思っております。

### 門連の精神支柱は祖廟に帰一すること

司会 門連がスタートした時の勢い、七百遠忌のりの団結力からすると、だんだんと緊張感と危機感が薄れているのではないかと気がします。最初は門下懇話会から始まっていますけども、やはり一致団結、異体同心の力がなければ駄目だという事で連合会組織ができた。そののち五十年経った節目の中で、今後の門連のあり方、動き方についてのどのような考えを持っていくべきか、相澤さんお願いします。

相澤 門連のよって来る精神的な支柱は祖廟中心です。門下懇話会を組織化しようという趣旨が議に上るその背景には、分派してきた過去の歴史を日蓮聖人にお託びする、すなわち祖廟を中心として異体同心してそこから

出発しなければ将来に向けての聖人への帰一はできないという共通した考えが存在していたわけです。ところが共通しているはずの祖廟帰一の問題にしてから議論があった。たとえば、御真骨奉遷の問題です。日蓮本宗の原日認猊下が門下連合会に意見書を出され、「御真骨の奉遷が実現しないような門下連合会には参加できない」と非常に強硬な筋の通った正論を主張された。それに対して「全骨ではないけれども一部の御真骨は祖廟にお納めしてございませう」という返答をし、そこで門下連合会として合意を見たわけです。ですから、今この問題を蒸し返して門下連合会に参加するとかしないという態度は絶対に取ってはいけないと思います。しかし、そうした議論が過去に存在したことを忘却するのではなく、その議論の内容、すなわちそれぞれが日蓮聖人にいかに帰一するのかという方法論の存在を認識し、その方法論は聖人を唯一の聖境とすることに依拠しているのだと認め合い、そして、将来の問題も踏まえて祖廟中心を確認する、これがなければ門下連合会の存続の意義はないと私自身は思っております。

これは私どもの後に続いていただける方々に肝に銘じていただきたいと思えます。日蓮聖人というお名前を中心に対外的な運動をやっていく、これは祖廟中心で各派が一体とな

ってやっていこうという対外的な姿勢として表れてこなければなりません。他宗でも遠忌事業は行いますが、むしろ他宗の方が歴史的な経過からいっても、その宝物類の確保からいっても、日蓮門下より規模は上回るかもしれない、たんなる物の力で勝負しようとしても意味がないわけです。日蓮聖人門下連合会の進むべき方向は、まず祖廟中心を認めるといふ精神の支柱を確立させてから対外的なものを考えていくべきです。『30年の歩み』の編集をお手伝いした折、そうした問題点は出たつもりです。よく読んでいただければ問題点があたりにあるかがご理解いただけると思います。

ただ、あの当時のことを思い起こしてみますと、編集委員全員が一所懸命考えていたことは、常任理事会と編集委員会との意思疎通をどう図るか、これが大きなテーマだったような気がします。

ただいま司会者が指摘された七百遠忌以降、青年の結集とか門連としての対外的な活動が停滞しているのではという面は、そのように捉えられることは可能だと思っております。しかし、自虐的になって後ろ向きに発想しない方がいい。「門連だより」が継続して発行されていることは何より前向きなあかしです。これを武器にして門下連合会の対外的な運動

をやるべきではという合意が成立する気がし  
ております。

**司会** 今の問題をもう一度振り返ってみた  
いと思います。確かに祖廟中心が門連のスタ  
ートです。相澤さんがおっしゃった御真骨奉  
遷が問題になったとき「門連の身延理事會を  
どの会場で行うのか、久遠寺で行うなら参加  
しない」という問題まで出たくらいです。そこ  
で、老婆心ながら、これは皆さんに伝えてお  
いた方がいいかも知れませんが、申上げます  
が、御真骨をどこへ奉遷するかというのは、現  
在身延山久遠寺の御真骨堂にある御真骨すべ  
てを身延山西谷にある日蓮聖人の祖廟へお遷  
ししていただきたいということです。しかし、  
その問題は解決している、だから門連の原点  
は何か、心、精神は何かということについて、  
祖廟中心を再確認して取り組むべしというご  
意見です。身延の傘下に入るために集まると  
いうことではありません。まして久遠寺にお  
参りするということもちがいます。朝倉さ  
ん補足するべきことがあればどうぞ。

**朝倉** 五十年の歩みを振り返ると、遠忌な  
ど佳節に一連の事業が展開されてきていま  
す。日蓮聖人に関係する貴重な霊宝とか什物  
を一般の檀信徒あるいは社会一般に対して紹  
介する展示会は、大きな成果を上げてきたと  
思っております。

しかし、誤解をおそれずに率直に申上げま  
すと、共通の事業に関してはスローガン倒れ  
してはいないかということがあります。祖廟  
中心は大前提ですが、教育事業の提携とか、布  
教の連合強化が謳われているのですが、五十  
年の歩みの中で門連全体の活動として継続し  
てやれたかという点と非常に曖昧なのです。掲  
げる事業目標は明確に出ているのですが、そ  
れが一步踏み出せていない。青年組織の連携  
が各派の立場もあつて難しいかも知れませ  
んが、それ故に事業目的と実践推進等が形骸化  
しているのではないか。それをどのように日  
常的に門連の全体事業としてできることから  
着手していくかを今一度振り返っていかないと、  
何となく布教の目的だけがきれいに立派  
なものが掲げられているような危惧をいだき  
ます。門連全体が社会にアピールするスロー  
ガンすらないのです。

スローガンといえば、例えば日蓮宗では「お  
題目総弘通」とか「結縁運動」とか具体的にや  
っています。浄土宗でも「法然共生」。浄土真  
宗は「安穩」などがあります。インパクトのあ  
るスローガンを掲げて社会に訴えているので  
す。その中で日蓮聖人門下はどうか、お互いの  
中では宗門向け、信徒向けにはメッセージを  
発信しているのですけど、門下連合会という  
大きな組織がありながら、門下全体としての

お互い結集したエネルギーが一つのスローガ  
ンにも結集していない。それが現状ではない  
かと思われま。

門連全体が、日蓮聖人の祖願成就、祖願顕現  
ということを言い、一天四海皆帰妙法という  
大きな理念もあるわけです。そういう大きな  
理念をより今の言葉で今の社会大衆にどのよ  
うな形でアプローチ、アピールしていくか  
ということからスタートして、その次にお互  
いの勉強会をしましょう、情報を交換しましょ  
うとか、アピールするためのポスターとかり  
ーフレットを作ろうとか、進化していくべき  
ではないかと思うのです。門下連合会として  
は一步踏み込んで具体化していくというアク  
ションが足りないような気が致します。そう  
いう面では青年の方たちの情熱とか活力とか能  
力とかが結集されれば自ずから新しい運動、  
新しい方向性が導きだされるのではないかと  
期待しています。

**司会** 貴重なご意見をいただきました。編  
集委員会は若者が集まり、ある意味で門連を  
越えて実践していこうという意欲がありま  
す。門連には常任理事がおられて、理事がおら  
れて、そして編集委員がいる。その中の繋が  
りが難しい。例えばこの間の京都理事会でも  
「五十年の歩みを作ります」というと、「うち  
は編集委員に誰が出てますか」という感じで

す。やはりそういった理事クラスとの意思疎通が難しい。縦や横の繋がりも含めてどうすべきか、矢吹さんいかがですか。

**矢吹** 各派の青年僧の皆さんが集まって五十年の記念誌を作る時、あるいはいろいろな機会に臨まれる時に先人先師はどうされたかを常に自分自身が把握をした上で作業に当たっていたのだのがとても大切ではないか。今、一般社会では改革とかチェンジという流行語がありますけども、改革やチェンジがあってもそれはそれで結構ですが、そのためには先人・先師がどう取り組まれたかをよく理解をした上で改革をしたりチェンジをしたりということが大事なのですが、そういうことを弁えないで時流に流されてしまっただけではないと思います。門下連合会の発足に至る経緯、五十年間の歩みを踏まえて理解すれば五十一年目からさらに有意義な活動ができるのではないかと思います。

さきの名宝展ですが、門下連合会が掲げた「立正安国論奏進」という「奏進」の二文字も、宗祖の御遺文の中にある文字ですが、聖人の弟子として、門連として対外的に出す場合は何か甘さがあるのではないかと指摘がありました。記録誌を見ますと、五十年前の結成時には「立正安国論献諫」とあります。「献諫」だと力強いという感じ、聖人の行動を追体験

するという響きがあります。今から五十年前「安国論献諫七百年」が門連の発足の経緯になった事も踏まえながら、異体同心するのは当然です。

最近、ある宗学者が「安国論」は摂受だというような説を唱えています。日蓮聖人門下はやはり折伏でなくてはいけないのではないかと考えております。「諫暁」の精神を忘れず、これからも門下連合会に携わっていただく青年僧の皆さんや、これから携わる皆さんにはそういうところも踏まえていていただきたいとお願ひいたします。

私どもの教団は、教義信条に重きを置くものですから、そういうものがあつてなかなか大同団結というところには一直線には結び付かないのですけれども、それはそれとして何か事業を起こすという時には手を携えるという事は決して間違いではないし、力が大きくなるわけですから協力をさせていただきたいと思ひます。先人の足跡をもう一回見直して理解し、それから動き出さなければならぬというのが私の今の思ひです。

### 今後の活動にたいする展望と決意

**司会** 歴史と伝統をしっかりと把握しながら現状に即応したビジョンは何であるべきか、

今のお話はそうした点で貴重なご指摘でした。これからの門連に向けた皆さんの気持ちを順番にお話いただければと思います。

### 生駒 歴史と伝統を尊重し、今生きるわれ

われが一致していかなければいけないと思ひます。当然社会状況が違ってくるので、なかなか受け容れられない部分もあるのかなというのが正直なところあります。かといって過去のことを何も知らないで、新しくするのは砂の上のお城みたいなもので簡単に崩れてしまう。ですから、「大日蓮展」のときには企画を起し、出展を希望するものをリストアップしてお願ひにいくべく門連の常任理事会で決めた。けれども実際にその宝物を持っているのは各本山であり、それぞれのお寺さんですから、理事会で決めても「何を勝手に決めているのだ」という話にもなりかねません。事実ある本山において「その話は聞いてないしすぐには出せない」。そうした問題があつたのですけれども、「大日蓮展」に比べて今回の「名宝展」では京都で行うという地理的なことや、それから京都門連がいつも密に活動されているということがあつて、同じような手順を取つた中では本山の理解も得やすく宝物も出展していただけました。それと、会場が京都でしたから、各派の青年僧侶に日帰りで博物館に詰めていただいで、観覧者の質問に答えていた

だいたり相手をさせていただきました。その中で普段一緒に行動できない門下のかたとも一緒に過ごさせていただいて話も密にできましたし、今の各宗派の青年僧も過去の歴史を全てはご存じないかも知れないけれども、現在は認知できて前向きな視点ができたと思うのです。

ですから五十周年を節目として、過去の成り立ちなどの歴史をもう一回確認することが、人と人との繋がりを強固にするのではないかと思います。強固にした段階で今度は前向きに進んでいくのですけれども、展覧会にしても何にしても、何々宗という宗派独自では会場を貸してもらえなかったのです。門下連合会という組織だから貸してくれるわけです。であるなら門連の社会に対する動き方はその辺にある、一宗一派で動くよりも門下連合会として動いた方が社会に浸透しやすいし選択肢も多い面があると思うのです。

そうした立場を一つの軸足として、今後は降誕八百年、立教開宗八百年、七百年五十年遠忌などが回ってきますから、その佳節に照準をあわせて、門連としての事業を考えていけば会活性化させることもできますし、慌てる必要もないのかなと思います。

**司会** 続けて今後の門連について法華宗門門流からどうぞ。



**竹内** やはり日蓮聖人を何より大事にということでも今までの門連が成り立っていて、以前は結構な割合で皆さんが集まって大法要とか講演とかがあつたように見受けられるのですけれども、

近年ではあまりありません。京都の門連では毎年十六本山での合同お会式など四大事業があるとお聞きしているものですから、毎年は難しくても節目に集まって合同の法要も良いのではないかなと思います。そういう合同お会式を門派越えて集まって勤修するのは非常に良いことと思います。しかし、それだけですと一般社会への訴求力はなくなってしまうので、「大日蓮展」のように信徒檀徒でなくともいろいろな人が見に来る、そういう機会を作るとするのは難しいと思いますけれども、今後も必要ではないでしょうか。

自殺に関する命の電話の活動であるとか、お金がなくて葬儀が挙げられない人に対して葬祭扶助費ぐらいの金額でどんな人にも最低限お葬式をしてあげようという活動もあると新聞で見ました。門派を超えてお題目で送ってあげたい。本当に最低限であつても葬儀を出してあげて、お題目に触れて法華の教えで送ってあげる。そういう中で布教ができてい

けるかなと思うのですが、一宗だけでは難しい。そういう世界において門連でできたらいいのではないかと思います。

**司会** 記念すべき節だけに事業をするのではなく、門連としてこまめな運動展開が必要であるというご意見、これもやはり大事な意見だと思えます。木村さんはいかがですか。

**木村** 各宗派の理事のかたと私たち編集委員との意思の疎通も不十分ですし、意識の差もあるようです。それぞれ各派の教義と歴史と伝統が違う中で最大公約的なものに絞っていくと、展覧会とかは凄いエネルギーが発揮されることだと思えます。けれども寺離れという時代ですから仏教界全体の課題でもあるかも知れませんが、折角同じお題目をお唱えする門下連合会であれば、そういうことも社会に問うていく事業展開にしていかなければと思います。宗教離れという時代に即応していく活動ができていけるような門連になつてほしいという願望があります。そのため地道な活動と、きめ細かい連絡がとれるようにすることだと思えます。

**司会** 大澤さんはいかがでしょう。

**大澤** 私はイベントや記念法要ももちろん大切ですが、各宗派それぞれ勉強をしている教義、教学などの情報を門連で共有する事が大切ではないかと思っています。それには「門

連だより」を活用していくのが一番だと思えます。私も七年間「門連だより」に携わっていますけれども、今のところ結果報告が大きなスペースをとっており、凄くもったいない感じがします。「門連だより」は各寺院に届いていると思えますけれども、確実に読まれているのでしょうか。

先ほどから青年僧の活用は大切だという意見がありますが、青年僧が門連を知っているのかどうか、私は日蓮宗の東京西部に在籍しています。青年僧が約三十人いますけれども、半分は知らないと思います。私の後輩に対する指導不足もありますけれども、これから開拓していかなければいけないと思います。諸先輩、諸先師の足跡、先ほどの御真骨奉遷問題、創価学会批判の問題も知りませんでした。それを青年僧が「こういう事があるのか。門連ってこういう活動をしていたのか」と振り返ること「門連だより」で取り上げていけば勉強になるのではないのでしょうか。

また、これからはITの時代ですから、連合会のホームページを立ち上げて情報を共有すれば、本当に異体同心でいい勉強もでき、力強くすすめられるのではないかと考えております。

**司会** 確かに情報共有は今大事な問題点ですし、やはり過去の歴史、伝統を理解するため

にも「門連だより」の発行と、IT時代ですから一目見ればわかるような工夫も大事。これもこれからの門連活動でどうしていくかという問題提議だと思います。続いて柳下さん。

**情報の共有のため「門連だより」を大いに活用すべし**

**柳下** 京都で行われた「日蓮と法華の名宝展」について思い出すことがあります。私が本山京都要法寺で給仕している時に立正大学の中尾堯先生が御挨拶に見えたのです。おそらく京都十六本山を足で歩いて回られてお願いの御挨拶だったと思うのですが、ああいうお姿を拝見して著名な大学の先生が大きな企画の中で動かされていたという事実を忘れてはいけないと思いました。やはり各宗派とても才能のある人物がいらっしゃると思うので、そういう方の御協力をこれからも頂くのは大事だと思います。

これからの時代、一宗一派ではとても太刀打ちできない問題が起こってきます。葬儀の問題であったり、お寺を取り巻く環境であったり、これから大きく変わっていきます。そういった時に門下連合会は大きい声を出しやしないのではないかと考えました。その情報交換をするために活用されていくべきものはやは

り「門連だより」だと思います。これから世間、社会に対してこういう動きをしていくという時には、まずは情報を共有して門下全体に情報を流していくということが必要だと今日感じた次第です。

**司会** 次に平田さん、編集委員としてお願いします。

**平田** 先日、随行として門連の理事会に出席させていただいて感じたのですが、門下連合会という組織は常任理事、理事がいて編集委員になつてしまい、その間を取り持つ組織がありません。例えば私は宗務院で務めているので多少宗内の動静はわかっているのですが、行動を起こさそうとした時にクッションがないという形が連合会としてまとまりづらいいのではないのでしょうか。連合会ではその部分に人材を入れていくことも必要ではないかと思いました。

今年は五十周年で記念誌を作るのですけれども、以前の『日蓮聖人門下連合会30年の歩み』が宗務院にあるのかを確認したら三冊だけあり、それぞれの寺院には配ってないということでした。それを私どもの総長に話したら、全宗門に配った方がいいのではないかとということになり、追加で注文させていただいたので、私等の宗派でも門下連合会の名前

を知らない。今日も「どこへ行くの？」と聞かれ、「門連だよりの編集です」というと「門連？」と言った調子です。やはりその存在や意義を知らせることも大事だと思います。「大日蓮展」にしろ「日蓮と法華の名宝展」にしろ主催は門下連合会なのに、そのことも知らないで参観している方もいたので、もっとアピールしていかねければいけないと思っております。

**司会** 門下連合会の存在そのものを知らない世代が増えてきたことも、われわれがはつきり情報を伝えていかねければならないことだと思います。吉本さんいかがでしょうか。

**吉本** 発足にいたるご苦心や、記念誌『日蓮聖人門下連合会30年の歩み』の発行など先輩がたの苦労は正直知りませんでした。しかし今この場にいることで過去の事を聞かせていただきわかったわけです。多くの門下の皆さんが協力しているいろいろな意見を調整して今ここに五十年の歩みができるわけです。これは大きな意義があることです。やはり過去を知らないといけない。今若い編集委員がおられますが、二十年後、三十年後に各宗派では主要なところまでいかれるわけです。『日蓮聖人門下連合会30年の歩み』を見て、わたくしたちの宗務次長の朝倉上人が編集委員をされておったのでびびくりしまして、まさか次長さんと

席を一緒にさせてもらうとは思わなかった。やはり若い人に入ってもらってこの流れを知ってもらって、そして宗門、各宗派に広めてもらいたい、それが大切ではないかと感じました。

今いる編集委員が次に入る人を教育しながらどんどん各宗派に門下連合がある事をアピールしてもらおう、それと同時に、若い人だからできることがあると思うのです。私もいろいろな仕事をやらせてもらっておりますけれども若いからできます。しかし、連合会立ち上げの時は予算もない、意見も違う中からやってこられている。だから、これからの編集委員ができないことはないと思うのです。そのためには普段から編集委員という輪を密にしておかねければいけない。全日本仏教会をたまに覗かせてもらうのですが、「次回の検討にします」で何も決まらないのです。たくさんのお坊さんがおられてたくさんの宗教学者がおられて何も進まないのです。しかし門下連合は仏教会より小さい集団ですけども、何かしようと思ったら小さいことでもできると思うのです。さきほど葬儀の件ができましたけども、やはり連合会ですることを少しずつでもやっていく必要があると思うのです。会議に出たら必ず決めて次の会議に持っていくという流れを作って来ており、活動して五十年続いているわけです。これから二十年、三十年と続けるためには、われわれ編集委員ができることをよく考えていかねければならない。よく予算予算といわれるのですが、予算がなくてもやる気があれば誰かが動くのです。自分が動かなければいかなのですけれども。今日は門連を立ち上げられた時の熱意を凄く感じました。だから今の編集委員にできない事はないと思います。「門連だより」を出す以外の事もやっていきたい。先師の意を汲んでいるわけですので、今の編集委員が何かしようと思わなければ、当時の先輩がたに申しわけないと感じました。

**司会** これからの門連のあり方を国柱会としてどのように考えておられるのかお聞かせいただきたいのですが、藤本さんからどうぞ。

**藤本** 門連のこれからのあり方として思ったことは、草の根の会みたいな感じで新たな会を取り込む活動もしていただけたらと思います。例えば「門連だより」に、活動の趣旨が合えばそうした活動を取り上げていただけたらという感じがします。それぞれの会で出版物が出ていますけれども、その会だけではなく全体として考えなければいけないというような記事ができるだけ取り上げて皆さんに周知して、情報の共有の輪を広げる活動を希望します。

司会 森山さんはどうですか。

森山 日蓮聖人門下連合会が作られた究極の目標はやはり祖廟に各宗派の区別なく全員が一丸となって日蓮聖人へお給仕することだと思えます。そして、地道な活動を続けていくというのが究極の目標達成に繋がっていくと思えます。そのためには門連理事会もありません。そのためには門連理事会もありません。すけれども、編集委員会を一つの核として青年が団結して活動していく、これを歴代に亘って続けていく事が積み重ねになっていくって、大きな動きができるようになると思えます。一つ例を挙げて要望しますと、この門連に参加している編集委員が年に一回でもいいですから、皆で祖廟に集まってお給仕をする。その中で勉強会をやって相互の協議の核としていくというのがいいかと思えます。そして日蓮聖人の教えを受け継いでいる教団をさらに取り込んでいって門下連合会の組織を大きくしていくというのも一つの目標としてやっていけたらいいかなと思っております。

司会 日本山妙法寺の木津さん、これからの門連に対してこのような動きが必要ではないかという意見をお願いします。

木津 私自身はお祖師様をお茶毘に付された場所や御両親闍とか、初めてお参りさせてもらったのがお師匠様に付いてだったので。そついつとところにお参りして、お題目を

唱えておつたら、胸がびつしよりになるくらい熱い涙が出て、ただただお祖師様があったのです。ですから、ずっと昔からお祖師様のことを今にいたるまでお守りしてきて下さった皆さんがたがおられるわけで、南無妙法蓮華経ありますがとうございませと感謝しかないと思えます。

日本山は、とにかくお題目を唱えて街頭修行をする。その中から変化の人が出てきて下さって仏舍利塔建立に繋がったことがあります。藤井日静猊下が法主の時だったと思えます。すけれども、日蓮宗の身延山に仏舍利塔を建てるという機運がありました。神田の共立講堂で日蓮宗のお上人様がた、それから日本山が出来まして、お仏舍利様の授与式があり、そこからずっと丸ノ内のビル街を撃鼓唱題して二重橋まで行って丸ノ内のオフィス街にいったことがあります。そのときは太鼓の音で大反響したのです。内輪の中だけではなくて外にも元気を与えていくことがお題目結縁になるのではと思えます。

それともうひとつ。先ほどお葬式ができない人の話がありました。キリスト教の教会ではいろいろな面で努力しています。日本山には力がないけど日蓮宗が立つたらどれ程大きなものができるか。お葬式のことでも、ぜひとも日蓮宗にお願いしたいと思えます。

司会 次に、事務局を代表して太田さん、どうぞ。



太田 昭和五十六年の七百遠忌のときに「青年の船」そして「オラトリオ日蓮」をやりましたが、どう

しても内向きだったのは否めません。しかし過日行われた京都の展覧会、それと東京国立博物館の日蓮展は社会に対して凄くピーアールできたと思うのです。電車の中吊り、ラジオ、雑誌、あらゆるところに広告が掲載され、門下連合会はこういった事業をやっている、日蓮聖人が中心だという事を広く社会に広める事ができたと思えます。

では今後何をしていくかと今ずっと考えていたのですけれども、例えば御降誕八百年が平成三十三年にございます。それに向かって門下で何を考えればいいのかと思うのですが、その間は何をやるのかと考えた時に、そんなに予算もないし、それぞれの御宗派の教義、教学があつて皆でやるのは難しい。

そうしたおりですが、法華宗本門流の二瓶総長から「良縁の集いをやっていますか」という問い合わせがあったのです。良縁の集いというのは、婿に行きたい、養子が貰いたい、そついつと結婚相談所みたいなことを日蓮宗が

やっているのですけど、その情報を二瓶総長さんが仕入れられたようで「資料を欲しい」と問い合わせがありました。その問い合わせに答えていくうちに、ふと思ったのが、意外と交流はしているも、情報交換がないのです。「その資料は日蓮宗に言えば貰えるじゃないか」とか「法華宗さんにいえばもつと凄い資料がある」とかそういった情報交換がなされてない。何も大きな難しい事だけを考えないで、まずお互いをもつとよく知っていこうということから、もう一回原点に戻って活動していくことが、こういう時代だからこそ結束する大事な時ではないかと思えます。日蓮宗では師弟教育、信行道場を三十五日間身延で行っていますけども、そういった教育問題から始めて、さまざまな問題で情報を共有できる場所があると思うのです。それが一つの門下連合会として大きな団結、結束になっていくのではないのかと今お話を聞きながら思っています。その橋を渡すのは編集委員会です。

**司会** 最後に司会者から一言申し上げます。

私は地方組織の京都門下連所属です。京都門下は京都の土壌なのでしようけれども、門下を知らない人が誰一人いないぐらいに門下組織が非常に強化されています。京都門下連合会の下には京都門下青年会という組織があつて

門下青年会が非常に力強く動いていますから、門下青年会とその上にある京都の門下連合会がやはり一致団結して動いています。だから宗派が違つても四大事業の降誕会、立教開宗会、夏期大学、お会式、それ以外の交流、情報の提供ができています。どこの地方にもそういった門下組織ができていけば、もつと縦横の連絡がいくのではないかなという気がしてならないわけです。

私の希望としてはこれからの門下の広がり、各地方で門下の組織ができ、そしてそこに門下青年会の組織ができていけば縦横素晴らしい繋がりができていくのではないかなと思つております。

本日出ましたご提案なりご指摘なりは、たんなる発言に終らせるのではなく、目に見えるかたちを作り上げていく事業を、本日はだいまから開始すべきことを確認して本日の座談会のお開きいたします。

# 京都門下連合会青年座談会

## 門連五十周年の回顧から 門青四十周年への展望

発言者

谷口真也 (日蓮宗・通妙寺修徒)

末本樹哉 (本門法華宗・妙蓮寺・堅樹院住職)

中村英司 (顕本法華宗・妙満寺・成就院住職)

谷口真生 (日蓮宗・通妙寺修徒)

佐藤泰慎 (法華宗本門流・本証寺・定性院住職)

久野晃顕 (法華宗本門流・本証寺・高俊院住職)

築瀬城諒 (法華宗本門流・本証寺・龍雲院住職)

桃井謙城 (法華宗本門流・本証寺・本行院住職)

飯田信隆 (本門法華宗・妙蓮寺・慈註院修徒)

湯原正純 (顕本法華宗・妙満寺・法光院住職)

吉本宣文 (法華宗本門流・本証寺・蓮承院住職)

座長

藤井照源 (日蓮宗京都一部事務所長・妙雲院住職)

**座長** まずは皆さんの門青との思い出に絞って話していただければと思います。その後、将来への展望が見えてくるのではないかと思います。

かつて日蓮宗の児玉さんが二十周年の記念事業をやられ、三十周年は私・藤井がやりました。このたび四十周年を迎え、総括をしておきたいと思っております。

そもそも何故門青ができたのか、と言えば、法華宗本門流・本証寺の中村宏龍さん、顕本法華宗の木村順静さん、妙蓮寺の飯田さん、松下さん。日蓮宗では風間随宏さん。花木尚道さんが主なメンバーでした。木村さんの曰く、「輪袈裟を着けた者同士が、京都の町にいなから、顔は見知っていても話したことがない、それは淋しいだろう」ということで、大公というお店とかで例会をもつて、研修旅行に行ったり、ソフトボール、バレーボール、ボウリング大会とかのレクリエーションをしたり、京門連の四大事業のお手伝いをしたり、時代とともに事業内容は変わっていったことと思いますが、門流の枠を越えた懇親の場で、楽しみがあったことが大事だと思います。

今の自分があるのも門青のおかげだと思います。

ています。ただ、日蓮宗側の僧侶の参加がすくないことが心残りでしたが、宗門で動く日蓮宗と、本山ごとに動く懇話会の皆さんでは、動員に差があるのはしかたがないことかなと思います。

**谷口** 幹事長を拝命して最初に打ち上げた、門流の枠を超えて、門連・門青独自の法要式・儀規を作れないかというのは、やはり難しいようです。かといって全門流の法用式を網羅した本が作れるかというのも、他宗のも



のには伝えてはならないという決まりがあった  
て難しいという流派もございました。まだ定  
年まで一年ありますので、何か方策を考えたい  
と思っております。

門青に入ることのメリットといえますか、  
やはり自宗の中に閉じこもってはいけません  
ないことが他宗・他派の方たちと接するうち  
に、かえって自分たちの特徴がよく分かるよ  
うになることではないかと思っております。

**末本** 門下の青年会は、毎年幹事長が交代  
されるとのこと。法華宗各派に必ず何かし  
らの役目が当たってくる決まりになっており  
ますから、当初本山の先輩方に言われたこと  
は、「まずは門青で会計なり、事務作業を練習  
しておけよ。そしたら、お山に帰ってもきちん  
と実務ができるようになるから」ということ  
でした。

昔の門青はもっとレクリエーションが主の  
「ユルい」会でしたから、青年僧の訓練の場と  
して最適だったのではないかなと思います。  
ただ最近は寺子屋などの教化活動も増え、練  
習台というには難しいようになってきました  
ね。

**中村** 門青に入らせていただいて八、九年  
になりますが、今の塔頭に入つてすぐに、最初  
はバレーボールの懇親会にメンバーが足りない  
ので出てくれないかと急遽誘われました。

その時は参加数が少なく、半分以上が妙満  
寺の若手だったと記憶しております。定光院  
に行脚をしたこともありましたが、やはり懇  
親が主体だったと思います。この五年間くら  
いに懇親の枠を超えて門連に建策をしていこ  
う、という話になったと思います。

私個人としては、唱題行脚をしたり、法務に  
習熟してきて、この門青があったか、なかった  
かで言うと、門下のかたがたに知己が得られ  
た、各お山のお上人方と知り合えた、大変あり  
がたい組織であったと思います。これを基盤  
として、日蓮門下としてまとまっていけたら  
いいのではないかと思います。これからも建  
設的な意見を、声に出して発信していける団  
体でありたいと思います。

**谷口** 門青活動の日蓮宗側の問題として、  
人材が少ないことがあると思います。法華側  
のご本山ではノルマで参加される場合もある  
ようですが、日蓮宗側も、強制的ではない方法  
でもっと門青に入ってもらえるようにしてい  
きたいと思えます。

寺子屋の担当を四年ほどさせていただいて  
感じたことは、今の子供たちにも私たちの小  
さいころと変わらない部分があること。相違  
点を言いつのるより、共通点を目を向けるこ  
とにこそ、布教・教化の可能性が見えた気が  
します。

**佐藤** 住職になって日の浅い者が何もわか  
らないまま、いろいろな行事に参加させてい  
ただきました。顔もお名前もわからない状態  
で一生懸命だったと思います。やがておなじ  
みができ、コミュニケーションがとれるよう  
になったことがありがたいと思っております。  
ここぞという時に結末の取れる団体であ  
ることが貴重な経験でありました。

**久野** 私はまだ京都に来てから二年半でござ  
います。なにもわからないまま門青の忘年  
会に諸先輩にお誘いいただき、連れていって  
いただき、はじめて皆様のお顔を拝見しまし  
た。その時にみなさん大変気さくにお声かけ  
いただき、ほっとしたのを覚えております。  
今年度会計を引き受けさせていただきましたが、  
たが、その都度みなさんに助けていただき、  
「懇親」という意味が大変ありがたい、意義の  
ある場であるな、と感じております。

**築瀬** 入会して一年程ですが、皆さんと一  
緒に楽しく遊んでおります。もう年齢が行つ  
ておりまして、間もなく退会なのですが、卒業  
してからも楽しく付き合える仲間ができたこ  
とに感謝しております。

**桃井** 私がこの会に参加させていただいて  
まだ一年ほどですが、初めの印象が、ボウリン  
グをご一緒させていただいて、大変楽しいも  
のでした。その後、助けていただくこと、勉強



させていただくことが多くて、この会の大切さを感じております。これからもこの会で勉強させていただけるよう頑張つてまいります。

**飯田** 門青に入つて感じたことですが、諸先輩方が考えてこられたレクリエーション、寺子屋の焼き芋、外での遊びなど、それら教化のノウハウが、継承されておられないのではないか、消えつつあるのではないかと、思います。年間の事業をこなすことに追われるこ

となく、いい方向にあるものは、しっかりと次の世代たちにつなげて行っていただきたいと思えます。

**湯原** 私は出身が関東の千葉でして、右も左もわからないままに、京都の本山に参りまして、平成十四年頃から入会させていただきました。お山の先輩に行脚に連れて行かれたり、バレーボールに参加したり、周りの方がこの宗派のどんなお坊さんなのか、まるで知らないままに参加していたことを懐かしく思います。

そのうち皆さんのお顔を憶えるようになりまして、やはりある種長い歴史のある、いい意味でも悪い意味でも特殊な町・京都ですから、千葉の田舎者が、門青というよりどころがあったからこそ、なじむことができたのではないかと思います。

懇親が目的であろうとは思いますが、京都に門青ありと主張していければいいと思えます。宗派の垣根を取り払うことはできませんけど、ここへ来ると同じ法華の一僧侶として安心感があり、宗派のしがらみの無い分だけ、いい情報交換や連携ができる、ぎっくばらんな雰囲気をはかして、このままの組織であつてほしいと思えます。

仏教全体を取り巻く環境が悪化する中で、各自が寺院の住職として、危機を切り開いて

いく力を獲得・発揮できる組織であつてほしいと思えます。

**吉本** 私は今年度、京門連の理事長をお引き受けする中で、やはり門青の存在はありがたいと痛感いたしました。門連の活動を支える青年僧の受け皿的な組織であると同時に、教育的でもあり、懇親的でもあり、若さゆえの柔軟さこそが、門青の重要な部分であると思えます。京門連の下支えの役目は重荷かもしませんが、これが確実に青年僧を鍛えてくれる場であると確信しております。これからも門青・門連をよろしくお願いいたします。

# 日蓮聖人門下連合会規約

## (名称)

第一条 本会は日蓮聖人門下連合会と称する。

## (事務所)

第二条 本会の事務所は東京都大田区池上二丁目三二番一五号日蓮宗務院に置く。

## (目的)

第三条 本会は日蓮聖人の理想を実現するため、祖廟を中心として門下各派及び教団並びに地方門下連合会の連絡、協力、団結を強化することを目的とする。

## (事業)

第四条 本会は前条の目的を達成するため、左の事業を行う。

- 1、祖廟護持の組織強化
- 2、教育事業の提携

## (組織)

第五条 本会は日蓮聖人門下各派及び教団並びに地方門下連合会を以つて組織する。

## (役員)

第六条 本会に左の役員を置く。

理事長	一名
理事	若干名
常任理事	若干名
監査	二名
相談役	若干名
幹事	若干名

- 3、布教の連合教化
- 4、懇談会、研究会、講演会等の開催
- 5、各種出版物の刊行
- 6、海外布教の提携及び交流
- 7、対外的な各種の運動
- 8、その他

## (役員の選出)

第七条 門下各派及び教団は三名の理事を推薦し、地方門下連合会は二名の理事を推薦し、うち一名を常任理事とする。  
理事長及び監査は理事会が推薦する。

## 第八条

幹事は理事長の指名による。  
相談役は理事経験者の中から理事会が推薦する。  
理事長は本会を代表し、理事会の議長となる。  
理事は本会の理事会を構成し、議決する。  
常任理事は本会の企画及び運営に当る。  
監査は本会の会計を監査する。  
相談役は理事会に出席し、意見をのべることができる。  
幹事は本会の庶務、会計を掌る。

(役員任期)

第九条 役員のうち、監査、相談役の任期は三年とし、再任をさまたげない。

本会の会計年度は四月一日に始まり翌年三月末日に終る。

(規約の改正)

第十三条 本会の規約改正は理事会の議決を経る。

(顧問)

第十条 顧問は各派管長職にある者が就任するほか理事会の推薦により顧問若干名を置くことができる。

第十四条 この規約は昭和三十八年六月二十七日より実施する。

附則

(会議の招集)

第十一条 理事会は理事長が招集し、必要に応じて之を開催する。  
常任理事会は理事長が招集し、隔月一回以上之を開催する。

第十五条 本会に参加しようとする各派及び教団ならびに地方門下連合会は理事会の承認をうけるものとする。  
第十六条 本会の役員は規約改正により昭和五十年二月二十四日より就任したものとする。

その他必要に応じ委員会を設けることができる。

(経費)

第十二条 本会の経費は各派、教団及び地方門下連合会の分担金並びに寄付金による。

昭和四十六年六月十四日	改正施行
昭和四十九年十一月二十七日	改正施行
昭和五十年二月二十四日	改正施行
昭和五十一年十一月二十四日	改正施行
昭和五十二年六月二十三日	改正施行
昭和六十一年五月十四日	改正施行

# 祝 門下連合会様 50 周年 南無妙法蓮華經

団参旅行・研修会などのご相談は、トップツアー全国 100 支店  
担当者が親切・丁寧にご案内を申し上げます。

## トップツアー株式会社

団参旅行センター

東京都目黒区東山 3-8-1 東急池尻大橋ビル 6 階  
電話 03-5704-3493 f a x 03-5704-9485

一枚の切符から  
国内・海外 団体参拝旅行まで  
近畿日本ツーリスト  
団体参拝実施部

**knt!**  
近畿日本ツーリスト

カタチにします。ときめき・キラメキ・おもてなし

[www.knt.co.jp](http://www.knt.co.jp)

東京  
〒101-0024  
東京都千代田区神田和泉町 1  
住友商事神田和泉町ビル 11F  
TEL 03-6891-9513 FAX 03-6891-9516

京都  
〒604-8005  
京都府京都市中京区河原町通三条上ル  
近畿日本ツーリス河原町ビル 6F  
TEL 075-255-1425 FAX 075-255-4968





## 祝 結成50周年

団体参拝をはじめ、  
ご旅行のご相談と手配は  
JTB グループに  
お任せ下さい。

ホームページ  
<http://www.jtb.co.jp/>

## 祝・日蓮聖人門下連合会結成五十周年

3月中旬頒布開始！ご予約受付中

中山浄光院日蓮宗所属記念特別限定頒布・重要文化財

### 日蓮聖人水鏡の御影

立教開宗当時の日蓮聖人のお姿に一番近いとされる本画像をお手元にご安置下さい。

頒布価格 **210,000** 円(税込・円別)

サイズ 装文 1510 mm × 巾 560 mm ・ 軸寸 620 mm

仕立 軸装裂地 外廻正絹織

一文字廻中金

軸先 水晶代用透金軸

太巻二重箱 カシュー塗箱 箱書文字復元



※写真はイメージです



お申込みは日蓮宗新聞社まで

〒146-0082 東京都大田区池上 7-23-3

TEL 03-3755-5271 FAX 03-3753-7028

# 祝 結成50周年

団参のご用命は

## 大陸旅遊

インド・ネパールはもちろん中国シルクロード・スリランカ・ミャンマー・ラオス・ベトナム  
ブータン・アンコール遺跡等へのご旅行手配もおまかせ下さい。



観光庁長官登録旅行業第1399号/日本旅行業協会正会員

**株式会社 大陸旅遊**

TEL 03-3376-2511 FAX 03-3376-5280

<http://www.tairikuryoyu.co.jp> mail: [tlc@tairikuryoyu.co.jp](mailto:tlc@tairikuryoyu.co.jp)

〒160-0023 東京都新宿区西新宿5-5-6 第二ダイヤモンドビル2階



# 日本旅行

NIPPON TRAVEL AGENCY

(株)日本旅行新宿法人営業部

営業8課 日蓮宗様担当

TEL 03-5369-3930

日蓮聖人門下連合会加盟教団所在地

- 日蓮宗宗務院  
 〒146-8544 東京都大田区池上一―三二―一五
- 法華宗（本門流）宗務院  
 〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町二―一九―一
- 顕本法華宗宗務院  
 〒606-0015 京都市左京区岩倉幡枝町九一
- 法華宗（陣門流）宗務院  
 〒170-0002 東京都豊島区巢鴨五―三五―六
- 本門佛立宗宗務本庁  
 〒602-8377 京都市上京区御前通一条上る東豎町一一〇番地
- 日蓮本宗宗務院  
 〒606-8362 京都市左京区新高倉通孫橋上ル法皇町四四八
- 法華宗（真門流）宗務庁  
 〒602-8447 京都市上京区智恵光院通り五辻上ル紋屋町三三〇
- 本門法華宗宗務院  
 〒542-0015 大阪市中央区中寺二―一―四一久成寺内
- 宗教法人国柱会  
 〒132-0024 東京都江戸川区一之江六―一九―一八
- 京都日蓮聖人門下連合会  
 〒606-8376 京都市左京区二条通川端東大菊町九六
- 日本山妙法寺大僧伽  
 〒150-0045 東京都渋谷区神泉町八一―七

日蓮聖人門下連合会機関紙編集委員

- 大澤宏明 日蓮宗  
 福島大祐 法華宗（本門流）  
 平田義生 法華宗（本門流）  
 吉本栄旭 顕本法華宗  
 小川正展 顕本法華宗  
 田邊尚志 法華宗（陣門流）  
 竹内敬雅 法華宗（陣門流）  
 指田隆行 本門佛立宗  
 前島照力 本門佛立宗  
 柳下真敬 日蓮本宗  
 堀内浩善 法華宗（真門流）  
 森田量哲 法華宗（真門流）  
 木村光正 本門法華宗  
 吉村光敬 本門法華宗  
 石山善雄 日本山妙法寺  
 牧野行暉 日本山妙法寺  
 森山真治 国柱会  
 的場春奈 国柱会  
 藤井照源 京都日蓮聖人門下連合会  
 藤本隆之 展転社  
 荒岩宏奨 展転社  
 〈事務局〉  
 太田順祥・富川大亮・関 勝道・並河顕邦（日蓮宗）

## あとがき

日蓮聖人門下連合会結成五十周年を記念し、後世に残す記念誌を発行することになった。

一口に五十年というが、門連にとっては力強い諸活動を記録する五十年で、長く感じるものであった。そして、この間に聖人の宗祖七〇〇遠忌や立教開宗七五〇、『立正安国論』奏進七五〇年など、さまざま佳節をお迎えし、その都度門連が一致協力して記念事業の円成に邁進してきた事は望外の喜びとするものである。

今から二十年前、すなわち平成二年十一月に『日蓮聖人門下連合会30年の歩み』が刊行されている。この時期は、ちょうど聖人の七〇〇遠忌をお迎えした直後という事もあり、七〇〇遠忌のおり門下全体が高揚した熱気を生々しく反映させた記録誌になっている。

三十年のうちに創刊された「門連だより」の編集に従事してきた先輩の青年僧侶たちは、各派の枠を乗り越え、一步一步着実に歩を進め、先輩・先師方の心を我が心とし、光輝ある門連の歴史を継承すべく努められた。そして、ここにその流れを継承し、現在編集委員とし

て参画している者が力を合せ「五十年の歩み」を世に送り出すことができたことは、いささか誇りとするものである。

本記録誌の誌上では、可能な限り加盟各派の意向を汲むよう配慮した。誌面の編成も各派均等に配分し、かつその誌面の内容に関しては各派の自由裁量にゆだね、それぞれの立場を述べていただいた。と共に、他の面において、「門連だより」の元編集委員と現編集委員との座談会も企画し、かなり突っ込んだ内容が現れている。七百遠忌のよりの青年結集の理想が「門連だより」の発行という実現につながっていることが再確認され、現在の問題点と、今後の方向を明示できた事は何よりであった。

また、京都門連の青年僧侶による座談会も意義ある企画であった。門下結集という点では、やはり歴史的に見ても京都の地が先行していたわけで、特に各派本山を有する立場上、連合組織の模範を示していると思われる。

結成五十周年をお迎えし、今後七十年、百年と連綿なる継続を願うことはもちろんであるが、これから五十一年の新しい門出をする上で、本記録誌に盛り込まれた多くの内容に関して、たよかった、成果があがったと手放しで喜んでばかりではいけないであろう。なぜなら門連は日蓮聖人の理想を実現することを目的と

しており、祖廟を中心とした門下各派及び地方連合会の連絡、協力、団結を強化することはもとより、対外的な立正安国の精神を宣布する組織強化と社会事業に日々とり組まなければならぬからである。

そういった共通認識を共有し、これからの門連の在り方を模索する意味で、本記録誌を各派において十二分に活用していただければ、編集委員一同、法悦を味わえるというものである。

以上、関係各位に御礼を申し上げ「あとがき」にかえる次第である。

〈非売品〉

結成五十周年記念

日蓮聖人門下連合会五十年の歩み

平成二十三年三月三十一日発行

編集者 日蓮聖人門下連合会

編集協力 機関紙編集委員会  
展転社

発行所 日蓮聖人門下連合会  
東京都大田区池上二―三二―一五  
日蓮宗宗務院内  
〇三(三七五)七二八一

印刷製本 シナノ